

荒砥宮川遺跡 荒砥宮原遺跡

昭和55年度県営圃場整備事業荒砥南部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 9 3

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

荒砥宮川遺跡 荒砥宮原遺跡正誤表

	誤	正
P180右段21行	例や口縁部における穿孔などの	削除
P180右段38行	在地的な	前時期から
P182右段8行	口縁部穿孔	削除

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第158集

荒砥宮川遺跡 荒砥宮原遺跡

昭和55年度県営圃場整備事業荒砥南部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 9 3

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

県営荒砥南部圃場整備事業は、昭和49年度から昭和56年度にかけて行われました。本事業に伴い埋蔵文化財発掘調査も、継続して行われました。前橋市二之宮町、下増田町にある荒砥宮川、荒砥宮原の両遺跡もその一つで、昭和55年度に事業対象となった一級河川宮川局部改良工事により発掘調査され、縄文時代から平安時代にいたる数多くの遺構・遺物が記録保存されました。

両遺跡については諸般の事情により調査報告書の刊行が遅れていましたが、関係者の努力により平成4年度の事業として当事業団に報告書作成業務が委託され、それが完了しましたのでここに調査報告書を上梓することにしました。

本報告書には上記の2遺跡の他に報告もれていた旧荒砥村245号墳、今井神社古墳周堀部の調査報告も行いました。

本報告書をもって県営荒砥南部圃場整備事業に伴い発掘調査された埋蔵文化財の報告書刊行は完了しました。発掘調査着手後、18年を要したわけですが、事業が完了したことは、誠に意義深いものがあります。長年にわたり発掘調査と報告書刊行に尽力した関係者の労苦と熱意を衷心より感謝し、併せて本報告書を始めとする県営荒砥南部圃場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書が、群馬県の地域史を解明する上で、十分活用されることを願い序とします。

平成5年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 **小寺弘之**

例 言

1. 本書は1980（昭和55）年度の県営農場整備事業荒砥南部地区埋蔵文化財発掘調査に伴う報告書である。
2. 遺跡の所在地は下記の通りである。

荒砥宮川遺跡（調査当初は宮川遺跡と呼称）……前橋市二之宮町字洗足1517他
荒砥宮原遺跡（調査当初は宮原遺跡と呼称）……前橋市下増田町字宮原(1952、1953、1954-3、1957
今井神社古墳……………前橋市今井町字白山東乙818他
旧荒砥村245号墳（『上毛古墳総覧』登録番号）…前橋市東大室町下猿楽乙1307他

3. 発掘調査は、群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団が群馬県農政部及び群馬県教育委員会と委託契約を締結し実施した。調査担当者及び調査期間は下記の通りである。

荒砥宮川遺跡	担当者	能登 健（群馬県教育委員会文化財保護課） 西田健彦（群馬県教育委員会文化財保護課）
	期 間	1980（昭和55）年12月1日～1981（昭和56）年2月28日
荒砥宮原遺跡	担当者	徳江秀夫（群馬県埋蔵文化財調査事業団）
	期 間	1980（昭和55）年12月1日～1981（昭和56）年2月28日
今井神社古墳	担当者	井野誠一（前橋市教育委員会）
	期 間	1980（昭和55）年12月8日～1980（昭和55）年12月15日
旧荒砥村245号墳	担当者	原田恒弘（群馬県教育委員会文化財保護課） 石塚久則（群馬県教育委員会文化財保護課）
	期 間	1976（昭和51）年2月5日～1976（昭和51）年3月22日

4. 荒砥宮川遺跡、荒砥宮原遺跡調査時の事業団組織は下記の通りである。

管理・指導 小林起久治、沢井良之助、井上唯雄、近藤平志
事務担当 国定 均、山本朋子、柳岡良宏、吉田笑子、吉田恵子、野島のぶ江、並木綾子

5. 本書作成のための整理作業は、群馬県埋蔵文化財調査事業団が群馬県教育委員会より委託を受け、1992（平成4）年4月1日から1993（平成5）3月31日まで実施した。

6. 本書作成時の事業団組織及び担当者は以下の通りである。

管理・指導 邊見長雄、近藤 功、佐藤 勉、神保侑史、斉藤俊一、市 隆之
事務担当 国定 均、笠原秀樹、須田朋子、柳岡良宏、船津 茂、高橋定義、松下 登、並木綾子、今井もと子、角田みづほ、松井美智代、塩浦ひろみ
編 集 磯貝朗子が担当し、福島恵理子（事業団嘱託員）がこれを補佐した。
文章執筆 I-1 市 隆之、II-3-(11) 網文土器 藤巻幸男、IV-5-(2) VI-2 南雲芳昭、V-3 VI-3 飯塚 誠、VII-1 黒田 晃、VII-2 杉山宏宏が分担執筆し、その他は職員がおこなった。

遺物観察表 桜岡正信（網文土器）、関口博幸（石器類）、大西雅広（陶器類）が分担執筆し、その他は職員がおこなった。

レイアウト 磯貝朗子、福島恵理子

図版作成 福島恵理子、桑原恵美子、平林照美、星野春子、高橋節子、増田政子、長沼久美子、尾田正子、戸神晴美、佐子昭子、千代谷和子（群馬県埋蔵文化財調査事業団）、株式会社 測研

遺構写真 発掘担当者

遺物写真 佐藤元彦（群馬県埋蔵文化財調査事業団 技師）

- 遺物の石材同定は飯島静雄氏（群馬地質研究会）の手をわずらわせた。
- 旧荒砥村245号墳出土の人骨・歯の鑑定は宮崎重雄氏（群馬県立大間々高校教諭）にお願いし、その結果についてはV-3-(4)に報告していただいた。
- 出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 本書の作成に当たり、下記の諸氏より御助言、御協力を戴いた。記して感謝の意を表す次第である。（敬称は省略させて載いた。五十音順。）
阿佐見牧太、飯島義雄、池上 悟、一瀬和夫、井野誠一、上野恵司、佐藤明人、鹿田雄三、須藤 宏、西田健彦、土生田純之、原田恒弘、細野雅男、前原 豊、松村永子、前橋市教育委員会、城南土地改良区








凡 例

- 荒砥宮川・荒砥宮原遺跡の調査においては、宮川河川改修工事用基準杭を準用し100m1区の調査区を設定した。今井神社古墳は図中に国家座標上の位置を記載した。
- 本書における方位記号は座標北を表す。
- 遺構及び遺物の挿図の縮尺率は各図中に表示した。他と縮尺の異なるものについては、随時その縮尺を付しておいた。
- 各竪穴住居の説明の中で記した方位は、竈のない住居では長軸の方向を、竈の付設された住居ではその付設壁に直行する軸線の方位を採用した。
また、面積の算出については、プランニメーターにより、20分の1の平面図上で3回計測したものの平均値を示した。全測できなかったものはその数値に（ ）をつけた。

- 挿図中に使用した記号は以下の通りである。

土師器（坏類その他）……● 須恵器（坏類その他）……○ 土師器（甕類）……■
須恵器（甕類）……□ 石器類……▲

- 挿図中に使用したスクリーンパターンについては以下のことを表す。

 浅間B軽石（As-B）  焼土  炭化材  漆の付着
 榛名山降下火山灰（FA）  赤色塗彩  石器の被加熱部分

- 遺物の記述については本文末の遺物観察表にまとめた。観察表の記載についてはその巻頭に凡例を記してあるので参照願いたい。
- 第1図は建設省国土地理院発行の20万分の1地形図（長野・宇都宮）、第2図・第155図は同発行の2万5千分の1地形図（大胡）、第154図及び付図1（赤城山南麓の古墳分布図）には前橋市・伊勢崎市・赤堀町発行の現形図を使用した。
- 写真図版中の遺物個々の縮尺率は不統一である。
また、遺物個々の見出しは遺構名称を以下のように略称した。
竪穴住居→住 掘立柱建物→掘 古墳→墳 井戸→井 竪穴状遺構→竪穴 土坑→土
遺構外の出土遺物→遺構外 トレンチ→T

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
挿 図 目 次	
表 目 次	
写 真 目 次	
抄 録	

I 発掘調査と遺跡の概要

1 調査に至る経緯	3
2 遺跡の位置と地形	4
3 周辺の遺跡	4

II 荒砥宮川遺跡の調査

1 調査の方法	13
2 遺跡の基本層序	13
3 調査された遺構	14
(1) 竪穴住居	14
(2) 掘立柱建物遺構	52
(3) 古 墳	53
(4) 土 坑	59
(5) 井 戸	62
(6) 道路状遺構	66
(7) 畠	67
(8) 水 田	68
(9) 溝	70
00 竪穴状遺構	80
00 遺構外の出土遺物	80

III 荒砥宮原遺跡の調査

1 調査の方法	91
2 遺跡の基本層序	91
3 調査された遺構	91
(1) 竪穴住居	92
(2) 古 墳	95
(3) 土 坑	100

(4) 溝	101
(5) 遺構外の出土遺物	103

IV 今井神社古墳の調査

1 歴史的環境	107
2 調査の方法	111
3 基本層序	111
4 各トレンチの調査の所見	112
5 出土遺物について	116
(1) 出土埴輪の分類	116
(2) 出土埴輪の様相	117
6 墳丘と主体部	149
(1) 墳丘	149
(2) 主体部	151

V 旧荒砥村245号墳の調査

1 遺跡の位置と地形	159
2 周辺の遺跡	160
3 調査された遺構	163
(1) 墳丘及び外部施設	163
(2) 内部施設	164
(3) 遺物の出土状態	170
(4) 出土人歯・骨について	171

VI 成果と問題点

1 荒砥宮川遺跡・宮原遺跡の 集落変遷について	175
2 今井神社古墳出土埴輪の位置付けと 課題	南雲 芳昭 178
3 旧荒砥村245号墳の石室構造について	183

VII 付 編

1 今井神社古墳円筒埴輪棺の観察所見	黒田 晃 187
2 伝今井神社古墳出土の鉄刀	杉山 秀宏 190

引用及び参考文献	191
遺物観察表	193
荒砥宮川遺跡	196
荒砥宮原遺跡	221

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡の位置	1	第 46 図	5 区 4 号住居・出土遺物	43
第 2 図	周辺の遺跡	5	第 47 図	5 区 4 号住居出土遺物	44
第 3 図	弥生時代後期～古墳時代前期の遺跡	7	第 48 図	5 区 5 号住居出土遺物	44
第 4 図	古墳時代中期の遺跡	7	第 49 図	5 区 5 号住居	45
第 5 図	古墳時代後期の遺跡	8	第 50 図	5 区 6 号住居	45
第 6 図	奈良・平安時代の遺跡	8	第 51 図	5 区 6 号住居出土遺物	46
第 7 図	調査区設定図	13	第 52 図	5 区 6 号住居出土遺物	47
第 8 図	基本土層	14	第 53 図	5 区 7・8 号住居	47
第 9 図	3 区 1 号住居・出土遺物	15	第 54 図	5 区 7 号住居出土遺物	48
第 10 図	3 区 1 号住居出土遺物	16	第 55 図	5 区 7 号住居出土遺物	49
第 11 図	3 区 2 号住居	16	第 56 図	5 区 7 号住居出土遺物	50
第 12 図	3 区 2 号住居出土遺物	17	第 57 図	5 区 8 号住居出土遺物	50
第 13 図	3 区 3 号住居出土遺物	17	第 58 図	6 区 1 号住居	51
第 14 図	3 区 3 号住居・出土遺物	18	第 59 図	6 区 1 号住居出土遺物	51
第 15 図	3 区 4・5・6 号住居	19	第 60 図	6 区 1 号住居出土遺物	52
第 16 図	3 区 4 号住居出土遺物	20	第 61 図	5 区 1 号掘立柱建物	53
第 17 図	3 区 4・5・6 号住居出土遺物	21	第 62 図	2 区 1 号墳	54
第 18 図	3 区 4・5・6 号住居出土遺物	22	第 63 図	2 区 1 号墳出土遺物	55
第 19 図	3 区 5・6 号住居出土遺物	23	第 64 図	2 区 2 号墳	56
第 20 図	3 区 7 号住居	23	第 65 図	3 区 1 号墳出土遺物	56
第 21 図	3 区 7 号住居出土遺物	24	第 66 図	3 区 1 号墳	57
第 22 図	3 区 8 号住居・出土遺物	25	第 67 図	3 区 2 号墳・出土遺物	58
第 23 図	3 区 9 号住居	26	第 68 図	3 区 2 号墳出土遺物	59
第 24 図	3 区 9 号住居出土遺物	27	第 69 図	4 区 1 号～5 区 2 号土坑	60
第 25 図	3 区 9 号住居出土遺物	28	第 70 図	5 区 3 号～16 号土坑	61
第 26 図	3 区 10 号住居・出土遺物	29	第 71 図	3 区 1・2 号井戸	62
第 27 図	3 区 11 号住居・出土遺物	30	第 72 図	4 区 1～5 号井戸	63
第 28 図	3 区 11 号住居出土遺物	31	第 73 図	5 区 1～6 区 2 号井戸	64
第 29 図	3 区 12 号住居・出土遺物	31	第 74 図	井戸出土遺物	65
第 30 図	3 区 13 号住居・出土遺物	32	第 75 図	5 区道路状遺構	66
第 31 図	3 区 14 号住居	32	第 76 図	5 区溝	67
第 32 図	3 区 14 号住居出土遺物	33	第 77 図	6 区水田・3～6 号溝	69
第 33 図	3 区 15 号住居出土遺物	33	第 78 図	2 区 1・2・3 号溝・出土遺物	71
第 34 図	3 区 15 号住居・出土遺物	34	第 79 図	2 区 5・6・7 号溝	72
第 35 図	3 区 16 号住居・出土遺物	35	第 80 図	3 区 1・2 号溝・出土遺物	73
第 36 図	3 区 17 号住居・出土遺物	36	第 81 図	3 区 2 号溝出土遺物	74
第 37 図	3 区 18 号住居・出土遺物	37	第 82 図	4 区 2 号溝出土遺物	74
第 38 図	4 区 1 号住居・出土遺物	38	第 83 図	4 区 1～5 号溝	75
第 39 図	4 区 1 号住居出土遺物	39	第 84 図	4 区 6・7 号溝	76
第 40 図	5 区 1 号住居出土遺物	39	第 85 図	4 区 8 号溝出土遺物	77
第 41 図	5 区 1 号住居・出土遺物	40	第 86 図	4 区 8 号溝	78
第 42 図	5 区 1 号住居出土遺物	41	第 87 図	5 区 1 号溝・6 区 1・2 号溝	79
第 43 図	5 区 2 号住居	41	第 88 図	4 区竪穴状遺構・出土遺物	80
第 44 図	5 区 2 号住居出土遺物	42	第 89 図	遺構外の出土遺物 (1)	81
第 45 図	5 区 3 号住居・出土遺物	42	第 90 図	遺構外の出土遺物 (2)	82

第91図	遺構外の出土遺物(3)	83
第92図	遺構外の出土遺物(4)	84
第93図	遺構外の出土遺物(5)	85
第94図	遺構外の出土遺物(6)	86
第95図	宮川遺跡全体図(折り込み)	87・88
第96図	荒砥宮原遺跡全体図	91
第97図	1・2号住居	92
第98図	1・2号住居出土遺物	93
第99図	3号住居	93
第100図	3号住居出土遺物	94
第101図	1号墳	95
第102図	1号墳周断断面図	96
第103図	1号墳出土遺物(1)	97
第104図	1号墳出土遺物(2)	98
第105図	2号墳	99
第106図	2号墳出土遺物	100
第107図	1号土坑	100
第108図	1・4号溝出土遺物	101
第109図	1・2号溝	102
第110図	3・4号溝	103
第111図	遺構外の出土遺物	103
第112図	調査トレンチの設定位置	111
第113図	基本土層	111
第114図	口縁部・突帯の分類基準	117
第115図	トレンチ出土円筒埴輪 (『西大室遺跡詳』2より転載)	119
第116図	墳丘出土円筒埴輪	119
第117図	1トレンチ出土円筒埴輪(1)	121
第118図	1トレンチ出土円筒埴輪(2)	122
第119図	1トレンチ出土円筒埴輪(3)	123
第120図	1トレンチ出土円筒埴輪(4)	124
第121図	1トレンチ出土円筒埴輪(5)	125
第122図	1トレンチ出土円筒埴輪(6)	126
第123図	1トレンチ出土円筒埴輪(7)	127
第124図	2トレンチ出土円筒埴輪(1)	128
第125図	2トレンチ出土円筒埴輪(2)	129
第126図	2トレンチ出土円筒埴輪(3)	130
第127図	2トレンチ出土円筒埴輪(4)	131
第128図	2トレンチ出土円筒埴輪(5)	132
第129図	3トレンチ出土円筒埴輪(1)	133
第130図	3トレンチ出土円筒埴輪(2)	134
第131図	4トレンチ出土円筒埴輪(1)	135
第132図	4トレンチ出土円筒埴輪(2)	136

第133図	4トレンチ出土円筒埴輪(3)	137
第134図	4トレンチ出土円筒埴輪(4)	138
第135図	4トレンチ出土円筒埴輪(5)	139
第136図	4トレンチ出土円筒埴輪(6)	140
第137図	5トレンチ出土円筒埴輪(1)	140
第138図	5トレンチ出土円筒埴輪(2)	141
第139図	6トレンチ出土円筒埴輪(1)	141
第140図	6トレンチ出土円筒埴輪(2)	142
第141図	9トレンチ出土円筒埴輪	142
第142図	7トレンチ出土円筒埴輪(1)	143
第143図	7トレンチ出土円筒埴輪(2)	144
第144図	7トレンチ出土円筒埴輪(3)	145
第145図	11トレンチ出土円筒埴輪(1)	145
第146図	11トレンチ出土円筒埴輪(2)	146
第147図	11トレンチ出土円筒埴輪(3)	147
第148図	11トレンチ出土円筒埴輪(4)	148
第149図	10トレンチ出土円筒埴輪	148
第150図	今井神社古墳と舟形石棺採用古墳の分布	150
第151図	後円部に露出した石室・石棺材	150
第152図	今井神社古墳墳丘・周堀復元図(折り込み)	153・154
第153図	今井神社古墳現況図(折り込み)	155・156
第154図	旧荒砥村245号墳の位置	159
第155図	旧荒砥村245号墳周辺の遺跡	160
第156図	旧荒砥村245号墳全体図	163
第157図	Aトレンチ南壁土層断面図	164
第158図	石室及び遺物出土状態	165
第159図	石室天井石及び張り方断面図	166
第160図	石室掘り方横断面図	167
第161図	石室内出土遺物(1)	168
第162図	石室内出土遺物(2)	169
第163図	出土円筒埴輪(1)	169
第164図	出土円筒埴輪(2)	170
第165図	宮川遺跡の変遷	176
第166図	石室24cm方取適合状態	183
第167図	今井神社古墳南東方向円筒埴輪出土地点	187
第168図	今井神社古墳南東方向出土円筒埴輪	188
第169図	今井神社古墳南東方向出土円筒埴輪	189
第170図	伝今井神社古墳出土鉄刀	190

付 図 1 赤城山南麓の古墳分布

付 図 2 今井神社古墳調査トレンチセクション

表 目 次

第1表	荒砥宮川・荒砥宮原遺跡周辺遺跡の概要	9
第2表	柱穴の柱間隔と規模の一覧	52
第3表	土坑一覧	59

第4表	今井神社古墳周辺遺跡の概要	109
第5表	旧荒砥村245号墳周辺遺跡の概要	161
第6表	石室規模一覧	167

第7表 出土人骨計測値一覧	171
第8表 玉器計測値一覧	172

第9表 荒砥宮川・荒砥宮原遺跡周辺遺跡の動向	175
------------------------	-----

本文中写真目次

P 68 水田面の検出作業	P119 今井神社古墳墳丘出土円筒埴輪
P 80 5区調査区南平地点縄文土器出土状況	P127 トレンチの精査
P 91 荒砥宮原遺跡全景	P164 狭道開口部、墓道状施設の状態

写真目次

荒砥宮川遺跡の調査	3	5区6号住居
PL1-1 3区1号住居	4	5区6号住居遺物出土状態
2 3区1号住居遺物出土状態	5	5区6号住居遺物出土状態
3 3区2号住居	PL7-1 6区1号住居	
4 3区3号住居	2 6区1号住居竈	
5 3区4・6・13号住居	3 5区1号独立柱建物	
PL2-1 3区4・5号住居	4 2区2号墳	
2 3区6・5・4号住居	5 3区1号井戸	
3 3区6号住居遺物出土状態	6 3区2号井戸	
4 3区6号住居遺物出土状態	7 5区道路状遺構	
5 3区7・8号住居	PL8-1 6区基本層序（沖積地）	
6 3区7号住居遺物出土状態	2 5区基本層序	
7 3区7号住居遺物出土状態	3 6区As-B下水田面	
8 3区8号住居竈	4 5区畠	
PL3-1 3区9号住居	5 6区沖積地FA堆積状況	
2 3区9号住居遺物出土状態	6 2区7号溝	
3 3区10・11・12号住居	PL9-1 4区4・3・2・1号溝	
4 3区10号住居	2 4区1号井戸、6・7号溝	
5 3区11・10号住居	3 4区5号溝	
PL4-1 3区13号住居	4 6区2・1号溝、2号井戸	
2 3区14号住居	5 4区竪穴状遺構	
3 3区15・18号住居	荒砥宮原遺跡の調査	
4 3区16号住居遺物出土状態（石包丁）	PL10-1 宮原遺跡全景	
5 3区16号住居遺物出土状態	2 1号住居	
6 3区17号住居	3 2号住居	
7 4区1号住居	4 3号住居	
8 4区1号住居遺物出土状態	5 3号住居遺物出土状態	
PL5-1 5区1号住居	PL11-1 1号墳	
2 5区1号住居竈	2 1号墳セクション	
3 5区2号住居	3 1号墳遺物出土状態	
4 5区3号住居	4 1号墳遺物出土状態	
5 5区4号住居	5 2号墳	
6 5区4号住居竈	6 2号墳セクション	
7 5区7号住居竈	7 2号墳遺物出土状態	
8 5区7号住居遺物出土状態	8 1号土坑	
PL6-1 5区5・7号住居	PL12-1 1号溝	
2 5区8号住居竈	2 1号溝Aセクション	

- 3 1号溝Bセクション
4 2号溝
5 2号溝セクション
6 4号溝
- 今井神社古墳の調査
- P L13-1 今井神社古墳遠景
2 今井神社古墳前方部より
3 今井神社古墳後部より
- P L14-1 1トレンチ
2 2トレンチ
3 3トレンチ
4 4トレンチ
- P L15-1 5トレンチ
2 6トレンチ
3 7トレンチ
4 8トレンチ
- P L16-1 9トレンチ
2 10トレンチ
3 11トレンチ
4 1トレンチセクション
5 2トレンチセクション
- P L17-1 3トレンチセクション
2 4トレンチセクション
3 5トレンチセクション
4 6トレンチセクション
5 7トレンチセクション
6 8トレンチセクション
7 10トレンチセクション
8 11トレンチセクション
- P L18-1 後円部に露出した石室・石棺材1
2 後円部に露出した石室・石棺材2
3 後円部に露出した石室・石棺材3
4 今井神社古墳南側の古墳群
- 旧荒砥村245号墳の調査
- P L19-1 遠景(西より、中央の小高い部分が245号墳)
2 天井石の検出状態
3 全景(後方は赤城山)
4 古墳近景
- P L20-1 周堀の土層セクション
2 円筒埴輪列検出状態
3 玄室から羨道
4 玄門部の天井石
5 玄室内土器出土状態
6 玄室床面断ち割り
7 石室掘り方・裏込めの状態

荒砥宮川遺跡の出土遺物

- P L21 3区1・2・3号住居出土遺物
P L22 3区4・5・6号住居出土遺物
P L23 3区6・7号住居出土遺物
P L24 3区8・9号住居出土遺物
P L25 3区9・10・11号住居出土遺物
P L26 3区12・13・14・15号住居出土遺物
P L27 3区15・16・17・18号住居
4区1号住居出土遺物
P L28 4区1号住居、5区1号住居出土遺物
P L29 5区2・3・4・5号住居出土遺物
P L30 5区5・6号住居出土遺物
P L31 5区7号住居出土遺物
P L32 5区8号住居、6区1号住居出土遺物
P L33 古墳・井戸・溝出土遺物
P L34 溝・竪穴状遺構・遺構外の出土遺物
P L35 遺構外の出土遺物
P L36 遺構外の出土遺物
P L37 遺構外の出土遺物
P L38 遺構外の出土遺物

荒砥宮原遺跡の出土遺物

- P L39 1・2・3号住居、1号墳の出土遺物
P L40 1号墳の出土遺物
P L41 1・2号墳、1・4号溝、遺構外の出土遺物

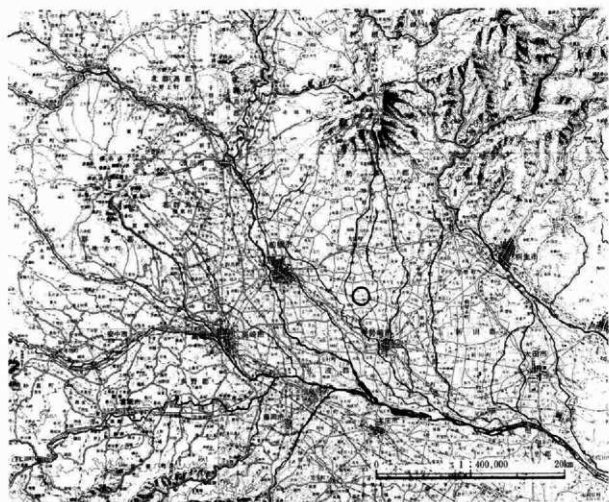
今井神社古墳の出土遺物

- P L42 1トレンチ出土埴輪
P L43 2トレンチ出土埴輪
P L44 3・4トレンチ出土埴輪
P L45 4・5トレンチ出土埴輪
P L46 6・7トレンチ出土埴輪
P L47 7・9・11トレンチ出土埴輪
P L48 埴輪の成・整形の特徴
P L49 埴輪の成・整形の特徴
P L50 埴輪の成・整形の特徴
P L51 埴輪の成・整形の特徴
P L52 埴輪の成・整形の特徴
P L53 埴輪の形状の分類(口縁・突帯)と基底部成形の特徴

旧荒砥村245号墳の出土遺物

- P L54 石室内出土遺物
P L55 出土埴輪
付属
P L56 今井神社古墳南東方向出土の円筒埴輪・伝今井神社古墳出土鉄刀

I 発掘調査と遺跡の概要



第1図 遺跡の位置

1 調査に至る経緯

前橋市東部に位置する荒砥地区は、赤城山の南麓裾野にあたり、台地上には畠、台地下には水田が広がっている田圃地帯である。周辺には国の指定史跡である荒砥三、二子山古墳や女塚遺跡等が存在し、同時に遺物を多量に散布する遺跡群が密集している地域でもある。

1975（昭和50）年に発表された「群馬県新総合計画」の中で、農用地総合整備事業の一環として圃場整備事業が位置づけられた。1974（昭和49）年に、当地区を中心とする荒砥地区において約749ヘクタールという広大な面積を対象とした圃場整備事業が開始されることがあきらかになった。このため、群馬県教育委員会では、事前に県農政部との間で埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。その結果、基本的には埋蔵文化財が存在する土地については、圃場整備事業の対象除外地域に設定することとした。しかし、事業の展開によっては除外地域に指定できない状況も想定できるため、その場合においては、工事により破壊される地域、特に計画された専水路と、低・台地の切り土を中心として発掘調査を実施することで合意をみた。

上記の調整により、1974（昭和49）年以降、圃場整備事業の進行に沿って発掘調査が大々的に行われることになった。1976・1977（昭和51・52）年は、県教育委員会によって発掘調査を実施していたが、1978（昭和53）年からは県教育委員会から委託を受けて本埋蔵文化財調査事業団が担当となり進行することとなり、以後1981（昭和56）年に至るまで続けることとなった。

今回、報告書の中に収録した遺跡群のうち、荒砥宮原遺跡・荒砥宮川遺跡は、1980（昭和55）年に発掘調査が実施された遺跡である。この年、荒砥南部圃場整備事業は、飯土井町、二之宮町、上増田町、下増田町、今井町を対象に約92ヘクタールという広大な面積を対象に実施されることになった。このた

め、発掘調査もピークを迎えることとなり、荒砥宮原・荒砥宮川両遺跡をはじめとして、荒砥二之塚遺跡、荒砥島原遺跡、荒砥天之宮遺跡、荒砥洗橋遺跡、荒砥宮西遺跡等の多数にのぼり、調査面積も12万㎡を超える広大なものとなった。

荒砥宮川遺跡は、周辺の圃場整備事業に伴い荒砥川の支流である宮川の河川改修工事に先立って調査が実施されたもので、古墳時代前期から平安時代にかけての集落跡と、畠跡及び数枚に重なった水田跡、古墳時代中頃の古墳群を検出した。また、荒砥宮原遺跡は、宮川の右岸上にある遺跡で古墳時代前期の堅穴住居跡と、古墳が検出された。

また、本報告書に収録されている今井神社古墳遺跡は、1981（昭和56）年に実施された遺跡である。調査の都合上、前橋市教育委員会に協力をお願いして実施したものである。今回あわせて整理事業を行った。

更に、荒砥南部圃場整備事業が本格化する前に一部先行して1976（昭和51）年に旧荒砥村245号墳の調査が行われている。今井神社古墳同様本報告書に収録した。

荒砥南部圃場整備事業にかかる発掘調査は1981（昭和56）年に終了したが、これに伴う整理事業については、県教育委員会と事前に協議を行っており、県教育委員会が行った発掘調査分も含めて、本事業団が整理委託事業として実施することとなった。最初に実施したのが、1978（昭和53）年の荒砥東原遺跡である。その後、1981（昭和56）年度から県教育委員会で実施した前原遺跡・上川久保遺跡等を先行して行い、順次本事業団が実施した遺跡へと移行していった。

整理事業の対象となった遺跡は、各々規模が大きく、膨大な遺構量とともに出土遺物量も大量であったため、各年度とも苦労しながら作業を進める結果となった。

今年度で荒砥南部圃場整備事業に関する整理事業はすべて終了することとなった。

2 遺跡の位置と地形

本報告書で扱う荒砥宮川・荒砥宮原遺跡および今井神社古墳は、前橋市の南東部に位置し、JR両毛線の駒形駅から東に約2km、前橋市の市街地から国道50号線を東に10km程の位置にある。

これらの遺跡は、広大な裾野を形成する赤城山南麓の端部に立地している。赤城山は黒松山(標高1,828m)を最高峰に、駒ヶ岳や鈴ヶ岳の外輪山を抱える第三紀の複合層火山である。山麓では標高500m前後に山地帯から丘陵性の台地への地形の変換点が見られ、200m以下の地域は比高差の少ない低台地となっている。また、その末端は旧利根川の崖線で区切られ、その氾濫原であった沖積地に接している。

ここで扱う遺跡の立地する赤城山南麓の端部は、山麓を流下する荒砥川、宮川、江竜川、神沢川、桂川などの中小河川や台地端部からの湧水により樹枝状の開析がすみ、台地と南北に長い沖積地とが複雑に入り組んだ地形が形成されている。

この周辺の基盤層は赤城山起源の泥流層である。地表面はローム台地の原形面、砂礫土からなる微高地のほかに沖積地に分類される。ローム台地は下部ローム以上をのせる古いもので、浅間山起源の板鼻黄色軽石層(YP)・板鼻褐色軽石層(BP)や、榛名二ツ岳起源の八崎軽石層(HP)などのテフラが堆積している。ローム台地に付随するように存在する微高地は、赤城山の山体が降雨災害などによって崩壊し、河川の運搬作用の結果、流速が衰える山麓端部に再堆積することにより形成されたと考えられている。荒砥宮川・荒砥宮原遺跡ではこの微高地上に古墳時代前期からの住居が、本遺跡の南東に位置する荒砥島原遺跡では弥生時代中期の住居や古墳時代前期の周溝墓が検出されている。また、飯土井町の飯土井二本松遺跡では微高地を形成する砂礫土層下に上部ロームの地塊と縄文時代早期の遺物が含まれていることが確認されており、この砂礫土性の微高地が完新世になってから形成されたことが明らか

かになっている。

沖積地では、平安時代末、1108(天仁元)年の浅間山の噴火と見られる浅間B軽石(As-B)、6世紀初頭の榛名二ツ岳火山灰(FA)、4世紀中葉とされる浅間C軽石(As-C)などのテフラの堆積が確認され、これらのテフラの堆積層の直下から水田跡や畠跡が検出されている。

宮川は赤城山流下する河川の一つで、荒砥宮川・荒砥宮原遺跡の1.5kmで荒砥川と合流している小河川で利根川の第3次河川として流域長5kmを測る。流域の沖積地や隣接する微高地・台地上には多くの遺跡が存在している。

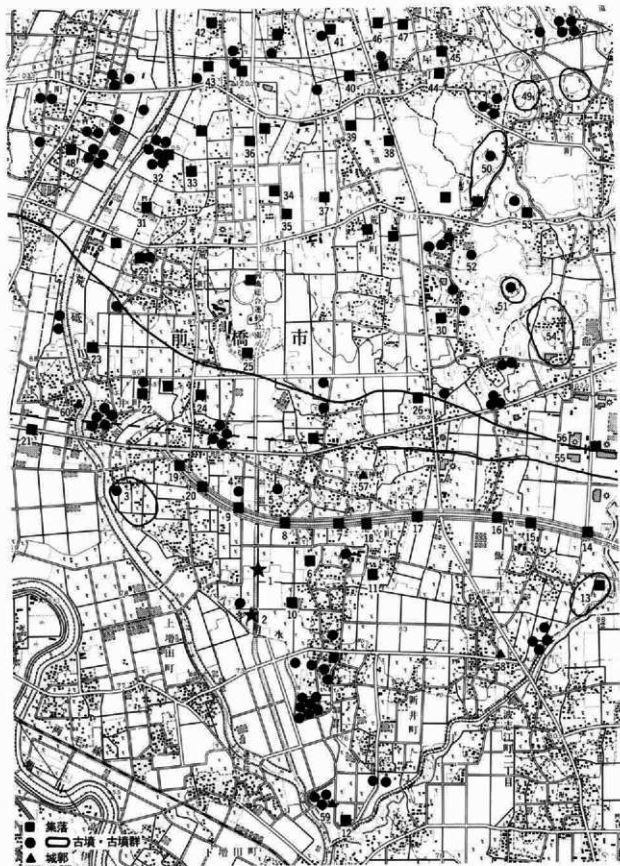
荒砥宮川遺跡は宮川右岸の、北東から伸びる舌状台地の先端に形成された微高地にあり、一部宮川に望む沖積地にかかっている。荒砥宮原遺跡は今井沼の南側より伸びる台地の先端に形成された微高地に位置している。この台地は西を荒砥川に、東を宮川の旧流路に向かって開口する、河川を伴わない沖積地によって切られている。

この台地上、北西に1.3kmの地点にはこの地域の首長墓としては初現となる今井神社古墳が存在する。今井神社古墳は南東に伸びる舌状台地が、今井沼から荒砥川に向かって開口する沖積地と荒砥川の旧流路によって侵食され、小さく西側に向かって張り出した部分に構築されており、この小丘陵は西に向かって徐々にレベルを下げている。

3 周辺の遺跡

旧石器時代 近年の大規模な圃場整備事業に伴う発掘調査によって、赤城山南麓における遺跡は飛躍的に増加している。

この地域における旧石器時代の遺跡は、近年組織的に旧石器の試掘が行われた、粕川以西の上武国道関連の遺跡において、規模は様々であるがいくつかの遺跡が確認されている。また、前橋市横俣遺跡や宮城村の市之関前田、芳ガ沢、柏倉芳見沢の各遺跡でも続々と資料を加えている。



第2図 周辺の遺跡

I 発掘調査と遺跡の概要

ここ10年ほどの調査により、石器が環状の分布を見せ出土した下鴨牛伏遺跡、荒原型彫器を伴い船底状を呈する細石刃核や台形ナイフが出土した前橋市頭無遺跡(37)、A T降灰以前の剥片やナイフや槍先形尖頭器が単独で出土する柳久保遺跡群(34)等が確認されている。また上武国道関連の廻下八幡、飯土井中央(15)、二之宮洗橋(9)、二之宮谷地(20)、今井道上・道下(19)の各遺跡では、A T降灰以前の石器群や槍先形尖頭器を伴う時期の石器群が検出されている。

縄文時代 この地域における当該期の遺跡は、前期後半と中期後半に遺跡数のピークが見られる。

草創期前半の遺跡は数が少なく、資料は断片的であり、荒砥北三木堂(22)、下鴨牛伏、飯土井中央遺跡において、窩文土器、無文土器、爪形土器、押圧縄文土器が出土している。また、1992(平成4)年度に調査された小島田八日市遺跡は荒砥北三木堂遺跡の西1.3kmに位置し、微隆起線文土器や丸彫形石斧が出土した。草創期後半になると遺跡の数は確実に増加するが、そのほとんどが包含層からの出土である。荒砥北原(23)、下鴨ヶ谷、柳久保遺跡群において燃糸文土器が出土している。

早期に入っても確認例は少なく、住居の検出は見られない。中で最もまとまった資料を出土しているのは、下鴨ヶ谷遺跡で沈線文土器、条痕文土器が多数出土している。飯土井中央遺跡では、河川氾濫層の下位より沈線文土器、条痕文土器等が出土している。前期においても早期と同様に遺跡の分布は薄く、資料は断片的であり、遺跡が地点的に集中する傾向が伺える。下鴨ヶ谷、五目牛清水田・南組、八幡林遺跡において、花積下層期の住居を検出している。

前期後半に入ると遺跡数は急増し、点々と広がる傾向を示す。諸磯段階の住居跡が多く検出されているが遺跡の規模は小規模である。丸山(42)、下鴨ヶ谷、富田、荒砥上ノ坊(26)・二之堰(13)・宮田(31)北山、上綱引が当該期の遺跡に当たる。

前期末葉～中期前半代においては遺跡の減少期と

なる。中期後半になると、再び遺跡は増加しそのピークを迎える。平坦な台地に占地する傾向があり、中・小規模集落の検出例が圧倒的である。集落は、泉沢谷津、荒砥北原、今井白山(21)、荒砥前原(12)・二之堰、飯土井二本松遺跡(14)に見られる。後期になると再び遺跡は減少する。荒砥二之堰遺跡で中期後半から後期後半にかけて集落が継続しているほかは、大道遺跡や柳久保、内堀遺跡群において後期後半の住居が単独で存在したり、遺物が少量検出されているに過ぎない。荒砥宮川遺跡においては、3区から5区にかけて加曾利B式や堀之内式の土器が検出されており、上武道路関連の遺跡においても同様の傾向が見られる。晩期になると遺跡は更に減少する。本遺跡の周辺では荒砥川と神沢川との合流点付近に八坂遺跡があり、耳飾りなど多量の遺物が採集されている。

弥生時代 荒砥地域における弥生時代の遺跡は中期後半より検出されており、荒砥北三木堂・前原(12)・島原(10)、荒口前原(29)、鶴ヶ谷遺跡群(25)がこれに当たる。この時期の遺跡は概して小規模で、沖積地に面した台地の縁辺や微高地上に立地している。今井白山遺跡では同時期の土坑が検出されている。その他、荒砥大日塚(24)、宮下、北山遺跡がある。

古墳時代 古墳時代前期になると本遺跡においても集落の形成が始まり、台地の縁辺において遺跡は急増する。二之宮千足遺跡(8)では浅間C軽石下の水田が検出されており、本遺跡をはじめ荒砥天の宮(6)・諏訪西(32)遺跡では、同時期の畠跡が検出されている。このように古墳時代に入ると生産域を維持するようになるが、小河川の流域ごとに一定の間隔をもち、乏水地帯であるこの地において、絶対量に限りのある用水を効率的に使おうとする配慮がなされていたと考えられる。この時期の墓域としては、方形周溝墓が荒砥島原・二之堰・上ノ坊遺跡で、前方後方形周溝墓が堤東(38)、中山A、東原B、阿久山古墳群(50)で検出されているが、前期古墳は見られない。この時期の遺跡を土器から見ると複雑

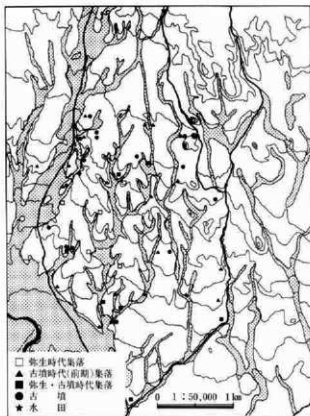
な様相を呈している。弥生時代後期の赤井戸式土器の系譜を引く縄文施文の土器や樽式土器の系譜を引く櫛描文施文の土器は、土師器と併存している。荒砥宮川遺跡においても3軒の住居でこの様な例が確認されている。土師器のみにおいても、煮沸具が東海地域西部の土器に影響を受けたS字状口縁台付甕が主体になるものと、単純口縁の台付甕が主体になるものがある。また、上縄引遺跡では北陸地域の影響を受けた土器が出土している。

これらの集落は中・後期に継続し「伝統集落」となる。前期からの伝統集落には柳久保、丸山(42)、北原、鶴ヶ谷、荒砥宮田(31)・諏訪西・島原・東原・上ノ坊遺跡がある。そして、古墳時代中期以降になると荒砥天之宮・北原、北田下(44)、下境II遺跡などで新たな集落の形成が始まり、「第1次新興集落」が成立する。

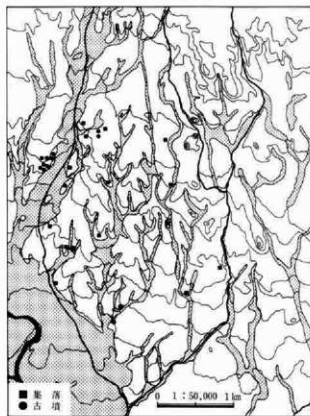
荒砥荒子(30)、梅木、丸山遺跡では、5～6世紀にかけての方形区画の堀が検出され、首長層の居宅と考えられている。1992～1993(平成3～4)年度にかけて調査された筑井八日市遺跡では一辺が160mを越える方形区画と考えられる堀の東西辺が検出されており、前出の3例と同様の首長層の居宅跡の可能性が考えられる。

5世紀の後半になり、当地域において傑出した規模を誇る前方後円墳である今井神社古墳(3)が築造される。同時期には東原5号墳、おとうか山古墳、新山3号墳などが築造されるが、いずれも径が20m前後の小円墳である。

後期になると前二子古墳に代表される前方後円墳が築造され、小地域ごとにも円墳の築造が認められる。また、西大室丸山遺跡(51)では多量の石製模造品を伴う巨石祭祀跡が、舞台遺跡(52)では帆立貝式古墳の前方部から、供献物を高坏の上にかたどった祭祀用の土器群や、石製模造品などが多数検出されている。6世紀後半から7世紀になると阿久山(50)、天神山(54)古墳群のように小古墳の群集化が進むとともに、荒砥北三木堂や荒砥北原、荒砥下押切II遺跡(27)のように1～数基の散在した状態



第3図 弥生時代後期～古墳時代前期の遺跡



第4図 古墳時代中期の遺跡

1 発掘調査と遺跡の概要

も認められるようになる。

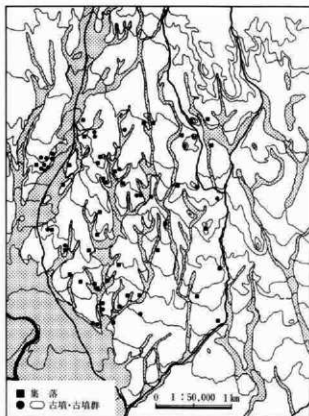
奈良・平安時代 古墳時代に出現した「第一次新開集落」は「伝統集落」化し、居住域は台地全体を覆うようになり、広範な土地を有効に利用するようになり、水田開発は更に進化したと思われる。1108(天仁元)年に降下したAs-Bで埋没した水田の検出状況から荒砥地域の沖積地の大部分が12世紀の初頭には開発されていたことが看取できる。

荒砥地域は、古代勢多郡に属しており、群馬駅と佐位駅をつなぐ東山道駅路(55)の通過ルートとなっている。今回調査した荒砥宮川・荒砥宮原遺跡ともこのルートと近接していると推定される。今井道上・道下遺跡では8世紀後半以前と推定される東西112mの二重の溝による区画があり、内側の区画に大型の掘立柱建物が検出されている。上西原遺跡(40)では、8世紀末から9世紀末の間機能したと思われる55×45mの区画の内部に礎石を有する基壇建物が検出され、瓦、瓦塔、塑像、墨書土器などの遺物が出土しており、寺院としての性格が考えられている。両遺跡から東方に0.7kmの位置にある二之宮赤城神社(57)は延喜式神名帳記載の大社である。二之宮宮下西遺跡の事例にみられるよう12~14世紀にかけて、赤城神社を中心に集落の展開が見られる。荒砥宮川遺跡では、上増田から赤城神社参道へと通じる道の旧道が検出されている。

標高96m付近には女堀(56)の遺構が残存する。女堀は12世紀の中葉、瀧名荘の再開発を目的として掘削されたとされる大農業用水である。

中世以降 中世の城郭としては大室城、元大室城、今井城(60)、赤石城(58)、新土塚城(59)などが上げられる。また、北三木堂遺跡や北山遺跡、宮下遺跡で多数の基壇や火葬跡が調査されている。また、近世の遺構としては二之宮宮東遺跡で屋敷や池が検出されたのをはじめとして多くの遺跡で井戸や溝などが確認されている。

註 用語の使用については、能登健、小島敦子「発生から平安時代の遺跡分布」『新里村の遺跡』新里村教育委員会1984の中でおこなわれた定義に従っている。



第5図 古墳時代後期の遺跡



第6図 奈良・平安時代の遺跡

第1表 荒砥宮川・荒砥宮原遺跡周辺遺跡の概要

No	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	遺跡の概要
1	荒砥宮川遺跡				●	●	●			本報告書の掲載遺跡
2	荒砥宮原遺跡				●	●	●			本報告書の掲載遺跡
3	今井神社古墳				●	●	●			本報告書の掲載遺跡
4	荒砥洗橋遺跡				●	●	●	●		古墳時代後期から平安時代に至る居住域である。墨書土器が出土する。
5	荒砥宮西遺跡				●	●	●			古墳時代後期から平安時代に至る居住域である。
6	荒砥天之宮遺跡	●	●		●	●	●			古墳時代中期から平安時代に至る居住域である。灌井の検出。A 5-C 下品。
7	二之宮宮下西遺跡				●	●	●			荒砥天之宮遺跡の北側に位置する。同一台地上にあり一遺跡として掌握できる可能性が高い。
8	二之宮千足遺跡				●	●	●			二之宮宮下西遺跡に西接する沖積地では、A 5-C 埋没水田以降 A 5-B 堆積までの7期の水田が検出された。
9	二之宮洗橋遺跡	●			●	●	●			荒砥洗橋遺跡の南側に位置し、同一の遺跡である。旧河川の埋没土中から木製品・墨書土器が出土している。
10	荒砥島原遺跡				●	●	●			弥生時代中期後半、古墳時代前期から平安時代までの住居を検出した。古墳時代前期の方形周溝墓、A 5-B 水田も含まれる。
11	荒砥青柳遺跡				●	●	●			台地内部まで居住域が拡大している。
12	荒砥前原遺跡				●	●	●			荒砥川と神沢川の合流点の台地上にある。弥生時代の住居からは東関東や東海東部の土層の影響がみられる土器が出土している。
13	荒砥二之塚遺跡				●	●	●			神沢川右岸に位置する。古墳後期の小規模な居住域の継続は短期間で、その後群衆墳が形成され墓域化している。
14	飯土井二本松遺跡				●	●	●			古墳時代前期の住居は1軒で、奈良・平安時代に居住域として展開する。
15	飯土井中央遺跡				●	●	●			古墳時代の住居は前期の2軒である。
16	飯土井上原遺跡				●	●	●			二之宮宮東遺跡と接する地点からは旧河川の流路が検出された。台地上は A 5-B 降下時には水田化されていた。
17	二之宮宮東遺跡				●	●	●			本遺跡の東側の沖積地の北縁上に位置する。F A 降下以降7期の水田が検出された。
18	二之宮宮下東遺跡				●	●	●			古墳時代中期が不明確であるが前期から平安時代まで継続して居住域であったと思われる。
19	今井通上・通下遺跡	●	●		●	●	●			古墳時代以降の居住域である。道路状遺構は平安、鎌倉、江戸の各時代のものが検出された。
20	二之宮各地遺跡	●	●		●	●	●			古墳時代後期以降居住域が継続する。水田は A 5-B 下と B 水田より下層で F A 降下後の2枚を確認した。
21	今井白山				●	●	●			古墳時代前期以降平安時代までは居住域が継続する。
22	荒砥北三木堂遺跡				●	●	●			古墳時代を中心とする居住域である。
23	荒砥北原遺跡				●	●	●			荒砥川左岸の台地上に位置する。古墳時代前期の方形周溝墓が4基検出された。
24	荒砥大日塚遺跡				●	●	●			宮川の沖積地を臨む台地上にある。3地点で調査が実施された。弥生時代後期以降居住域の継続が。
25	鶴ヶ谷遺跡群				●	●	●			宮川の沖積地を臨む古状地上にある。弥生時代以降の居住域である。
26	荒砥上ノ坊遺跡	●			●	●	●			古墳時代前期以降の居住域が展開する。奈良・平安時代には台地内部にも住居の占地は拡大する。
27	荒砥下押切遺跡				●	●	●			古墳は1基だけで存在していた。
28	荒砥中屋敷遺跡				●	●	●			沖積地を臨む台地上にあり、古墳時代前期から平安時代の居住域である。
29	荒口前原遺跡				●	●	●			弥生時代中期の住居を検出した。
30	荒砥寛子遺跡				●	●	●			古墳時代の形宅と考えられる方形区画遺構の規模は東西50m以上、南北43m以上を測る。櫓列の巡る区画内には2軒の擬穴住居がある。
31	荒砥宮田遺跡				●	●	●			荒砥川左岸の台地とそれに接する沖積地に展開する。居住域としては古墳時代前期以降平安時代に至るまで継続している。
32	荒砥諏訪西遺跡				●	●	●			微高地上に位置する。古墳時代前期以来の居住域の一部は後期になり墓域化する。微高地上でありながら平安時代に水田化された。
33	荒砥諏訪東遺跡				●	●	●			台地上の2地点から方形周溝墓を検出した。
34	柳久保遺跡群	●			●	●	●			宮川の沖積地を臨む古状地上に展開する。
35	柳久保水田遺跡				●	●	●			宮川の沖積地にあたる。
36	大久保遺跡				●	●	●			宮川左岸の台地上にあり古墳時代以降居住域が継続している。
37	堀無遺跡				●	●	●			古墳後期以降居住域となる。
38	堤東遺跡				●	●	●			古墳時代前期に築造された3基の方形周溝墓のうち1基は全長25m前方後方形を呈する。
39	川籠皆戸遺跡				●	●	●			平安時代の住居を検出している。北側の上下部遺跡と同一台地上にあり遺構の内容から同一遺跡の可能性が高い。

I 発掘調査と遺跡の概要

No.	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	遺跡の概要
40	上西原遺跡				●	●				奈良時代の方形区画遺構とその内区に基壇を有する建物遺構を検出した。布目瓦、瓦葺片、瓦葺などの遺物を出土した。
41	向原遺跡				●		●			宮川の沖積地を臨む台地上に位置する。
42	丸山遺跡				●					荒砥川左岸に位置する。居宅と考えられる方形区画遺構は36×29mの規模で内部に古墳時代中期の竪穴住居6軒が築造されていた。
43	北原遺跡				●		●			丸山遺跡に南接する。検出された住居は古墳時代の各期のものが主体である。
44	北田下遺跡				●		●			西側に沖積地を臨む。平安時代を中心としている。
45	中畑遺跡				●		●			住居を2軒検出した。
46	村主遺跡				●	●	●			古墳後期からの継続である。
47	中山B遺跡				●	●	●			狭小な沖積地をはさみ村主遺跡と対峙する。
48	宮下遺跡	●			●	●	●			荒砥川右岸の台地上に展開する。弥生時代後期以降の居住域である。一部は古墳後期に基壇になっている。
49	伊勢山古墳群				●					伊勢山古墳は横穴式石室を主体部にもつ前方後円墳である。
50	阿久山古墳群				●					丘陵頂部に全長40mの前方後円墳、阿久山古墳がある。頂部から南斜面にかけては6～7世紀の円墳が2基、北斜面には埴輪墓が存在した。
51	西大室丸山遺跡				●					古墳3基と巨石祭祀遺構を検出。祭祀遺構からは多数の石製模造品が出土している。
52	舞台遺跡				●					古墳3基を調査。1号墳から供献物を形どった高坏や石製模造品が出土する。
53	富士山I遺跡				●		●	●		1号墳は径38mの円墳で羨門や玄門などその一部に切石を採用した横穴式石室を主体部にもつ。周辺で古墳から平安時代に至る住居32軒を検出する。
54	天神山古墳群				●					南側斜面を中心に6～7世紀の横穴式石室を有する円墳30基ほどが調査される。
55	東山道駅路					●				群馬と佐位の駅を結ぶ間が荒砥地域を通過していると思われる。金坂清則氏の所見を地図上に復元した。
56	女堀						●			前橋市上泉町付近の旧利根川を取水点として終点の東村固定まで幅15～20m、深さ3～7mで開削が計画されたが未完成に終わっている。
57	二之宮赤城神社						●	●	●	創建は平安時代にさかのぼると考えられている。社域をめぐる堀の残り。境内には塔の芯礎とそれを取り巻く巻石の敷石がある。
58	赤石城						●	●		高さ4mの土塁をめぐらせた本丸とその西側に腰曲輪をもっていた。
59	新土原城						●	●		東西150m、南北200mの規模をもち本丸、二の丸、三の丸が存在した。
60	今井城						●	●		荒砥川右岸に位置し、その支流との間に構築されている。

II 荒砥宮川遺跡の調査

1 調査の方法

本遺跡の調査は例言で前述の通り河川改修事業に伴うものである。新沓路地域では、事前の分布調査において遺物の分布が認められた。このことから対象地域で大型掘削重機による試掘調査を実施した結果、黄色砂壌土の面で、多くの住居跡や古墳の周堀などが検出された。

上記の試掘調査の結果から、幅20m、長さ400mにわたる調査対象地で、灰褐色の耕作土約50cmを大型掘削重機により全面的な除去を行った。また、対象区域外に延びる住居跡については、完全な記録保存を目的として拡張調査を行った。

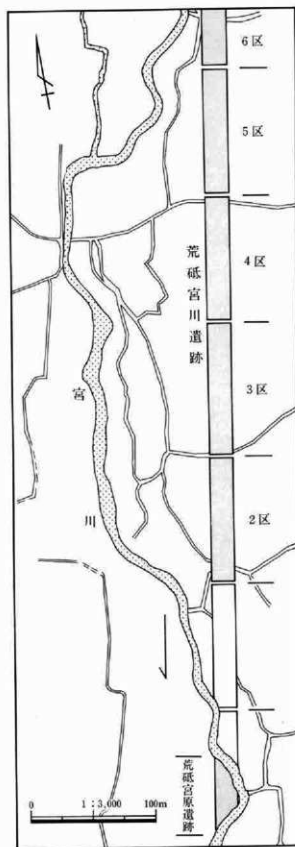
遺構の測量にあたっては、工事中センター杭を使用し、Na1,300より100m 1区として1～6区の調査区を設定した。工事中センター杭は座標北に対し約1°東に振れている。

2 遺跡の基本層序

調査区域は大半がロームの2次堆積による砂礫性土の微高地であるが、最北の6区では宮川によって形成された沖積地に当たる。それぞれの土層は以下の通りである。

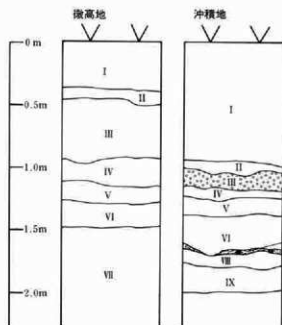
微高地 耕作による擾乱土は40～50cmほど堆積していた。その下に約10cmの黒色土の堆積があり、その下層にはローム2次堆積の黄色砂壌土が40～50cm程堆積しており、遺構の多くはこの面で確認された。

沖積地 改修前の地目は水田であった。表土層から約1mで浅間B軽石層(A s-B)に達する。A s-Bの堆積は約10cmで、その下の水田耕作土は約10cmである。下層の試掘調査において、榛名ニッ岳火山灰(FA)や浅間C軽石(A s-C)の堆積が認められた。



第7図 調査区設定図

II 荒砥宮川遺跡の調査



第8図 基本土層

〈微高地〉

- I. 灰褐色砂土層 下部になるにしたがい黒色味増す。
- II. 黒褐色土層 土層が漸移的に黒くなるもので、As-Cを多く含む。
- III. 黒色土 As-Cを多く含む。
- IV. 黄色砂礫土層 管状の鉄分沈着を見る。
- V. 灰黑色土層 田層が陥状に入り込んだ層。V層との遷移層である。
- VI. 黒色土層 粘性が強い。
- VII. 黒色土 軽石小粒を多量に含む。ガラガラしている。ベースは粘性に富む。
- VIII. 黄色砂礫層。

〈沖積地〉

- I. 灰褐色砂土層
- II. I層より粒子大。鉄分が沈着して赤褐色化している。
- III. 浅間B軽石層 上部には小豆色の火山灰があり、軽石層中にはコニットが見られる。
- IV. 黒色粘質土 水田耕作土である。
- V. 黒色粘質土 V・VI層は漸移的変化で、ともに鉄分の管状沈着がよく見られる。
- VI. 灰色粘質土 VI層以下には、二ツ岳火山灰（FA）がブロック状に入っている。
- VII. 浅間C軽石層 上半は黒色粘質化しており、FA下水田耕作土（As-C）なる。
- VIII. 黒灰色粘質土層 As-C下水田耕作土？
- IX. 灰褐色粘土層 Ⅷ層から漸移的に移行する。

3 調査された遺構

今回の調査において古墳時代から奈良・平安時代にかけての遺構が確認された。調査面積は約8,000㎡である。

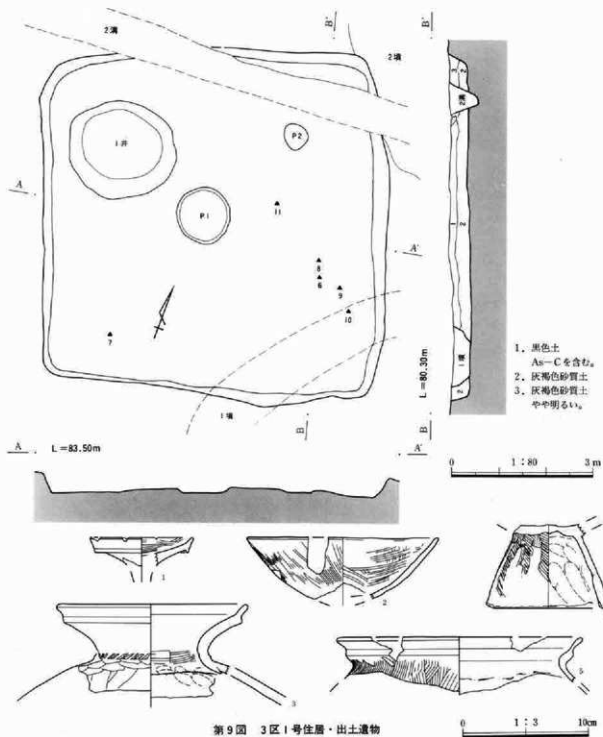
竪穴住居は古墳時代前期から奈良時代、平安時代の各期に渡り28軒である。この他古墳4基、掘立柱建物跡1棟、土坑26基、井戸13基、溝23条が検出された。2・3区においては、古墳時代前期集落の上に古墳時代後期の古墳が形成されており、土地利用の変遷が窺える。また、5区南端では、両側に2本の溝を伴った道路状の遺構が検出されている。溝の埋没土には、As-Bが濃密に含まれており、平安時代の末葉近くには、使用されていたと考えられる。同じく5区の中央部にはAs-C下の高跡と思われる遺構が確認された。

6区の沖積地においてはAs-B下に水田耕作面が確認された。その下層にはFA下の畦畔跡もトレンチにて確認されており、古墳時代から当地域において稲作が行われていたことがわかる。

なお、遺構に直接伴わない遺物として、縄文中期から後期にかけての土器片が多数検出されている。特に5区の南半のピット群において濃密である。2・3区の古墳の検出された付近では、2次調整B種横刷毛を施す埴輪片が検出されている。宮川遺跡で検出された古墳に伴うとは考え難く、遺跡の周囲では2次調整B種横刷毛を持つ埴輪を伴う段階から古墳の造営が行われたと考えたい。また、3～4区にかけては、中世の常滑製の陶器が出土している。

(1) 竪穴住居

調査された28軒の竪穴住居の内訳は、古墳時代前期15軒、古墳時代中～後期9軒、奈良時代1軒、平安時代3軒である。古墳時代前期の住居は概して規模が大きく遺跡全域に分布している。古墳時代中期～後期にかけては5区に分布が集中している。また、奈良・平安時代の住居は4軒とも3区から検出されている。



第9図 3区1号住居・出土遺物

3区1号住居 (P1・21)

形状 やや南東隅が突出する正方形を呈するが、1号墳との重複の影響と思われる。規模は7.4×7.6mで、残存深度は30～48cmを測る。

面積 51.3㎡ **方位** N-19°-W

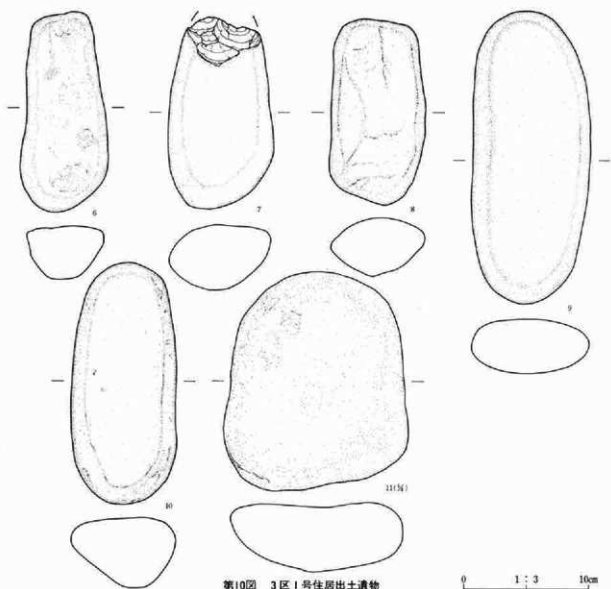
埋没土 灰褐色の砂質土を主体としている。上層に

はAs-Cの混入する黒色土が堆積している。

遺物 土器は全て埋没土中からの出土である。台石(11)は住居のほぼ中央から、こも編み石(6・8・9・10)は東壁寄りから出土している。(観、P196)

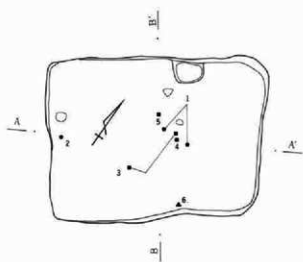
備考 1・2号墳、1号井戸、2号溝と重複しており、これらは全て本住居より後出するものである。

II 荒砥宮川遺跡の調査



第10図 3区1号住居出土遺物

0 1 2 10cm



第11図 3区2号住居



0 1 2 80 60m

3区2号住居 (P L 1・21)

形状 東西に長軸を有する矩形である。南壁は東半が彎曲して入り込んでいる。規模は、4.3×3.5m、残存深度は4～14cmを測る。

面積 15.8㎡

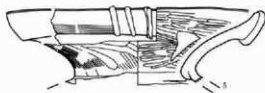
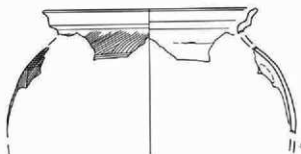
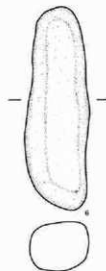
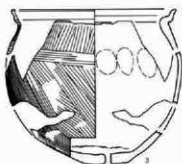
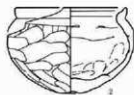
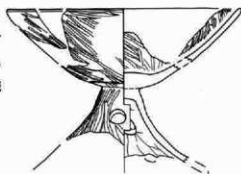
方位 N-36°-E

埋没土 褐色の砂質土が堆積している。

遺物 攪乱の影響があり、遺物の出土は住居の中央に集中している。

(観、P 196・197)

備考 2号墳と重複しているが、本住居より後出するものである。また、住居の東北隅と南西側は攪乱により床面を検出することはできなかった。



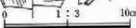
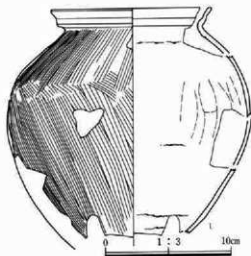
第12図 3区2号住居出土遺物

3区3号住居 (P L 1・21)

形状 東西に長軸を有する矩形である。西壁は彎曲し張り出している。規模は、7.5×6.1m、残存深度は22～40cmを測る。

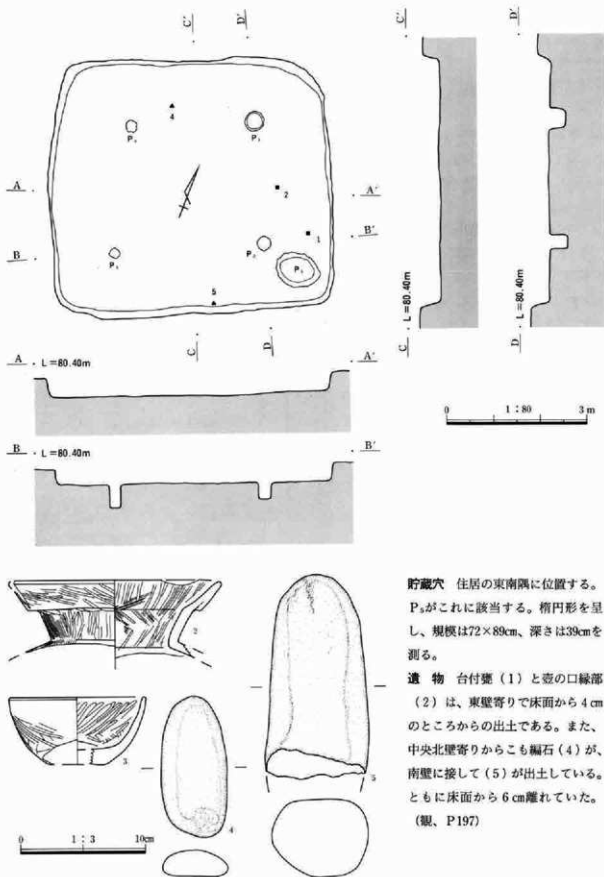
面積 48.2㎡ **方位** N-23.5°-E

柱穴 P₁～P₄が主柱穴と思われる。4本の心芯間を結んだ形状はP₃のやや突出する台形で、その距離はP₁～P₂: 2.58m、P₂～P₃: 3.2m、P₃～P₄: 2.78m、P₄～P₁: 2.64mを測る。それぞれの規模(短径×長径×深さ)はP₁: 41×42×33cm、P₂: 27×31×35cm、P₃: 20×22×46cm、P₄: 22×26×32cmである。



第13図 3区3号住居出土遺物

II 荒砥宮川遺跡の調査

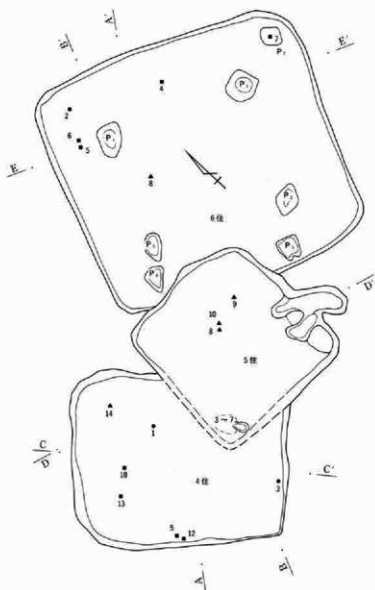


貯蔵穴 住居の東南隅に位置する。
P₆がこれに該当する。楕円形を呈し、
規模は72×89cm、深さは39cmを測る。

遺物 台付壺(1)と壺の口縁部(2)は、東壁寄り
で床面から4cmのところからの出土である。また、
中央北壁寄りからも編石(4)が、南壁に接して(5)が
出土している。ともに床面から6cm離れていた。
(観、P197)

第14図 3区3号住居・出土遺物

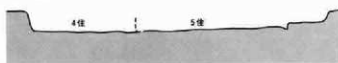
3 調査された遺構



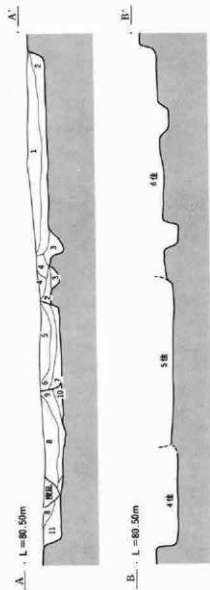
C · L = 80.50m



D · L = 80.50m



E · L = 80.50m

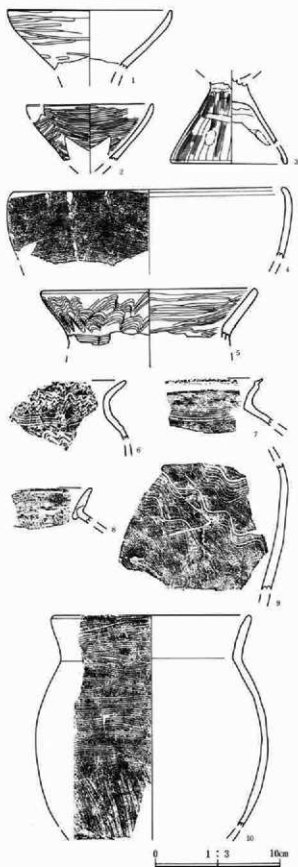


- | | | |
|------------|-----------|------|
| 1. 灰褐色砂質土 | As-Cを含む。 | } 6住 |
| 2. 灰褐色砂質土 | As-Cを含む。 | |
| 3. 灰褐色砂質土 | やや黒色味が強い。 | |
| 4. 灰色砂質土 | As-Cを含む。 | } 5住 |
| 5. 灰褐色砂質土 | As-Cを含む。 | |
| 6. 黒色土 | As-Cを含む。 | } 4住 |
| 7. 灰褐色砂質土 | | |
| 8. 灰褐色砂質土 | | |
| 9. 黒色土 | | |
| 10. 黒褐色砂質土 | | |
| 11. 灰色砂質土 | | |

0 1 : 80 3m

第15図 3区4・5・6号住居

II 荒砥宮川遺跡の調査



第16図 3区4号住居出土遺物

3区4号住居 (P L 1・2・22)

形状 東西に長軸を有する矩形である。東北隅は5号住居との重複により削平されている。規模は、 $4.8 \times 3.9\text{m}$ 、残存深度は30~47cmを測る。

面積 (16.9 m^2) **方位** N-45°-W

埋没土 全体的に灰褐色の砂質土が堆積している。中位にはAs-Cの混入する黒色土が堆積している。

遺物 南西壁際の床面上3cmのところから甕(5・12)が、住居中央西よりの床面上9cmで甕(10・13)が出土している。また、埋没土からの破片は乱れた波状文を施した甕が多い。(観、P197・198)

備考 5号住居と重複するが、本住居よりも後出するものである。本住居の北壁と6号住居の南壁との距離は1m余りで、両住居は極めて近接している。

3区5号住居 (P L 2・22)

形状 南北に長軸を有するが、ほぼ正方形に近い形状を呈する。南西隅を4号住居と、東北側を6号住居と重複し、それぞれの埋没土を掘り込み構築しており、セクションでの確認を行った。規模は、 $3.45 \times 3.66\text{m}$ 、残存深度は35~47cmを測る。

面積 (11.7 m^2) **方位** N-89°-E

埋没土 全体的に灰褐色の砂質土が堆積しており、中位には軽石の混入する黒色土が堆積している。

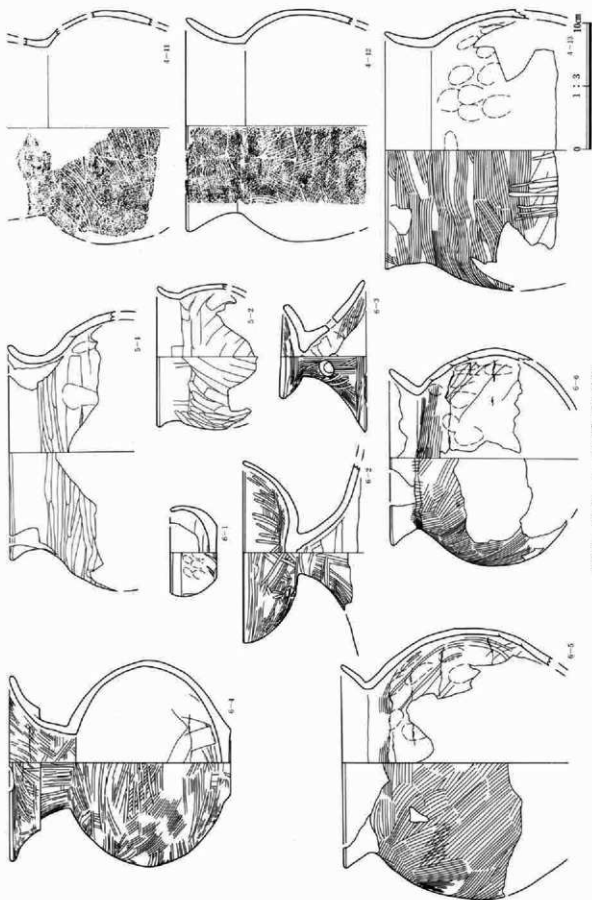
竈 東壁のやや南寄りに位置する。燃焼部は住居内にあり、全体に赤化が顕著であった。ロームを材料に左右の袖を構築している。煙道部は燃焼部の中心から南に傾きながら伸びている。焚口部の幅は30cm、煙道部の長さは約80cmを測った。

貯蔵穴 住居南東隅、竈の左側に位置している。 $88 \times 102\text{cm}$ の楕円形を呈し、床面から30cm掘り込んでいる。

遺物 甕(1)と小型甕(2)は埋没土中からの出土である。こも編石(3~7)は住居南西隅から、(8~10)は住居中央部からまとめて出土している。

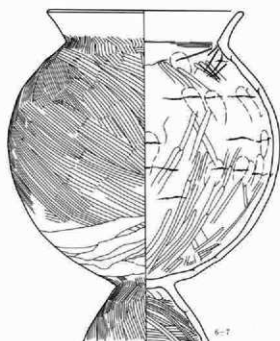
(観、P198・199)

備考 4・6号住居と重複するが、両住居とも本住居に先行するものである。



第17図 3区4・5・6号住居出土遺物

II 荒砥宮川遺跡の調査



3区6号住居 (P L 1・2・22・23)

形状 ほぼ正方形を呈するが、北壁に比べ南壁はやや短くなっている。規模は5.5×5.8mで、残存深度は、20~37cmを測る。

面積 30.5㎡ 方位 N-62°-W

埋没土 灰褐色の砂質土が堆積している。

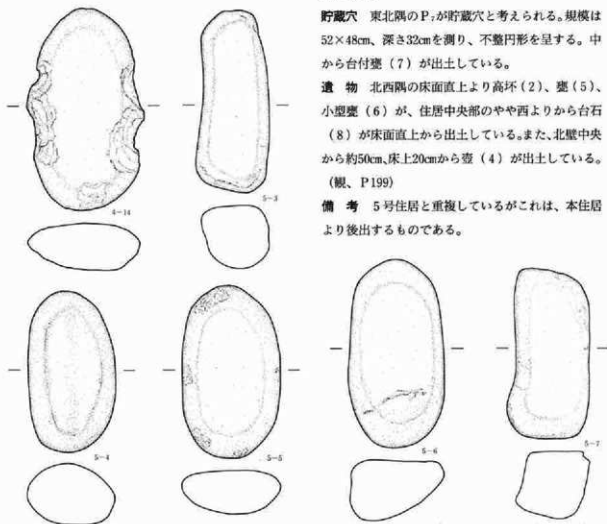
柱穴 P₁~P₄が主柱穴と思われる。P₂~P₄は楕円形を呈している。掘削深度は19~32cmとやや浅目である。各柱穴間の心芯の距離と規模は以下のとおりである。その距離はP₁~P₂:2.60m、P₂~P₃:3.09m、P₃~P₄:2.46m、P₄~P₁:3.07mを測った。規模は(短径×長径×深さ)P₁:64×73×27cm、P₂:48×50×19cm、P₃:37×62×32cm、P₄:49×70×22cm、P₅:43×44×13cm、P₆:41×59×20cmである。

貯蔵穴 東北隅のP₇が貯蔵穴と考えられる。規模は52×48cm、深さ32cmを測り、不整形形を呈する。中から台付甕(7)が出土している。

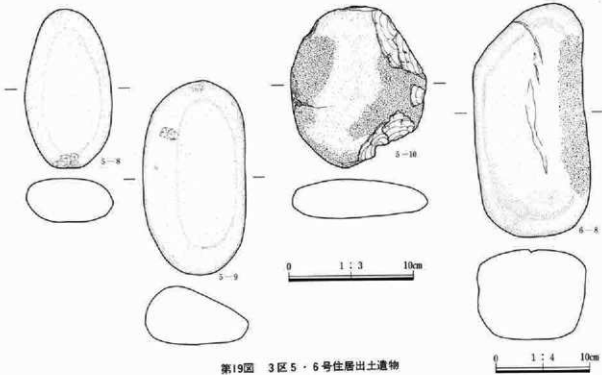
遺物 北西隅の床面直上より高坏(2)、甕(5)、小型甕(6)が、住居中央部のやや西よりから台石(8)が床面直上から出土している。また、北壁中央から約50cm、床上20cmから壺(4)が出土している。

(概、P199)

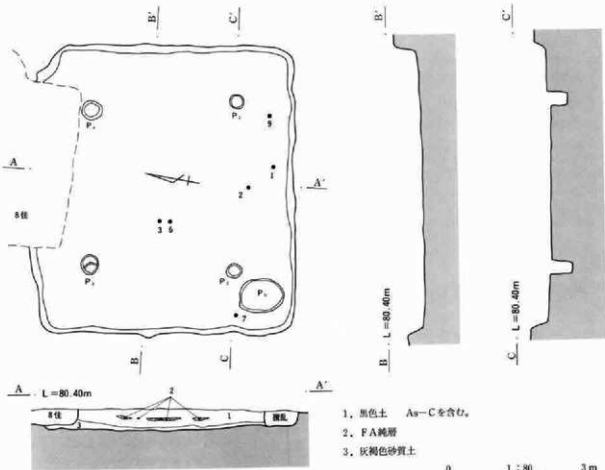
備考 5号住居と重複しているがこれは、本住居より後出するものである。



第18図 3区4・5・6号住居出土遺物



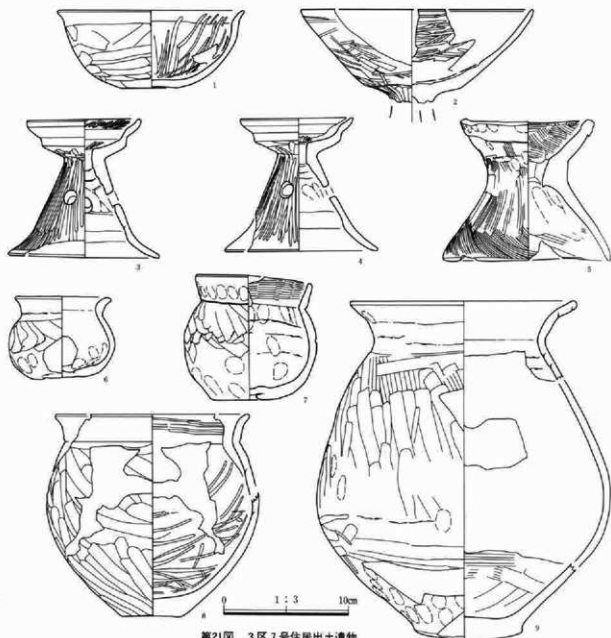
第19図 3区5・6号住層出土遺物



第20図 3区7号住層

- 1, 黒色土 As-Cを含む。
- 2, FA純層
- 3, 灰褐色砂質土

II 荒砥宮川遺跡の調査



第21図 3区7号住居出土遺物

3区7号住居 (PL 2・23)

形状 東西に長軸をとるが、ほぼ正方形を呈する。北壁は8号住居との重複によりやや彎曲している。規模は、5.7×6.2mで残存深度は23~45cmを測る。
面積 34.3m² **方位** N-83°-W
埋没土 As-Cの混入する黒色土を主体としている。中層にはFAの純層がレンズ状に堆積しており、下層には灰褐色の砂質土が堆積している。
柱穴 P₁~P₆が主柱穴と思われる。径は30~45cmであり、掘削深度は30~46cmである。

貯蔵穴 南西隅のP₆が貯蔵穴に当たると思われる。楕円形を呈し、規模は74×94cm、深さは26cmを測る。
遺物 P₆際の床面直上より埴(7)が出土している。また住居中央部より器台(3)が南壁際で鉢(1)高坏(2)、甕(9)が出土している。これらは、住居廃棄後に投げ込まれたものと思われる。(観、P 199・200)
備考 8号住居と重複するが、本住居より後出するものである。

3区8号住居 (P L 2・24)

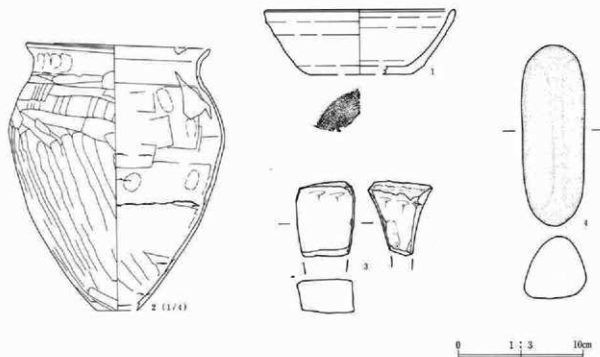
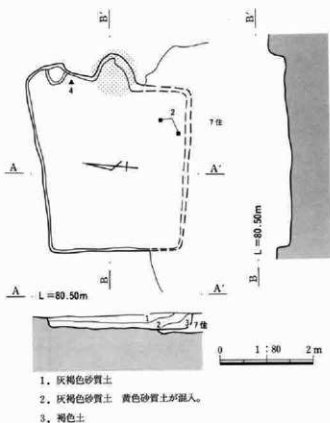
形状 東北壁が突出しているが、東西に長軸を有する矩形である。南壁は7号住居と重複しており、セクションでの確認にとどまった。規模は4.0×3.6m、残存深度は12~30cmである。

面積 (12.7m²) **方位** N-77°-E
埋没土 灰褐色の砂質土を主体としている。

竈 7号住居と重複するため、東南の角は推定であるが、東壁のほぼ中央部に位置する。燃焼部は周壁の外に造られており、その規模は長さ42cm、幅33cmである。竈周辺には焼土が散見された。

遺物 南壁際、床面から5cmで罌(2)が出土している。また、東壁際よりこも礫石(4)が、埋没土中より須恵器環(1)・砥石(3)が出土している。(観、P200)

備考 7号住居と重複するが、本住居に先行するものである。



第22図 3区8号住居・出土遺物

II 荒砥宮川遺跡の調査

3区9号住居 (PL 3・24・25)

形状 一辺が8.2mの正方形を呈する。北壁が崩落によりやや斜めに落ち込むが、その他はほぼ直線的に掘り込まれている。

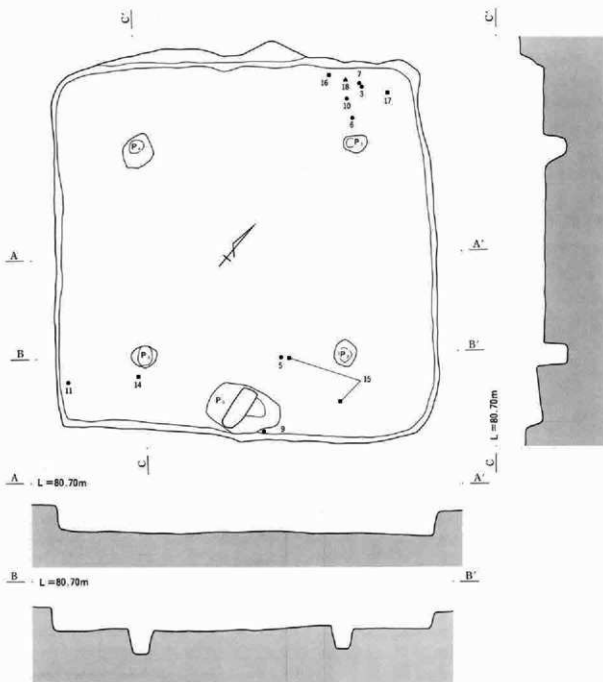
面積 65.0㎡ **方位** N-49°-E

柱穴 住居の対角線上に位置するP₁~P₄が主柱穴と思われる。心芯間の距離はP₁~P₂:2.23m、P₂~P₃:2.15m、P₃~P₄:2.25m、P₄~P₁:2.

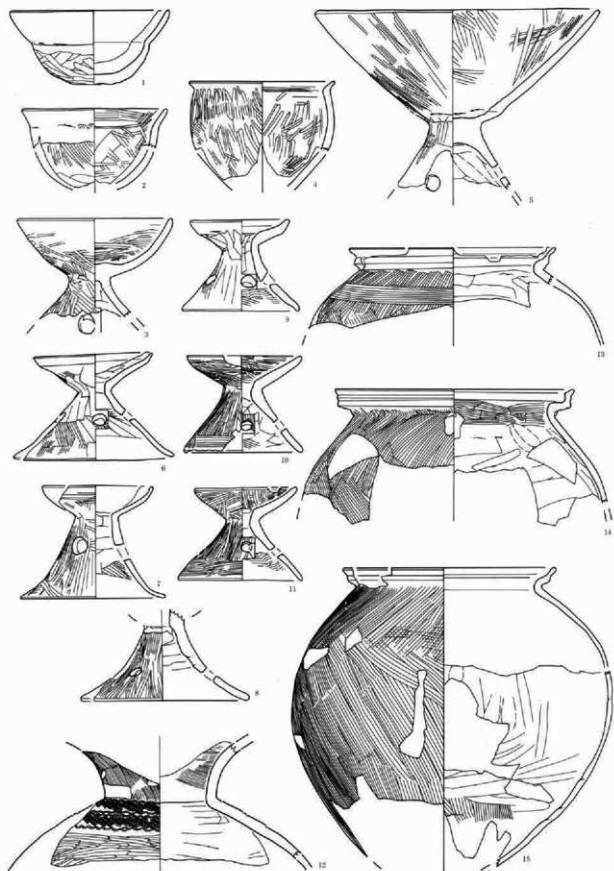
3mであり、それぞれの規模(短径×長径×深さ)は、P₁:36×49×41cm、P₂:46×55×53cm、P₃:54×56×47cm、P₄:66×69×47cmである。

遺物 東北隅の床面より高坏(3)、器台(6・7・10)、台付甕(16・17)が集中して出土している。他に床面からの出土は南西隅の器台(11)南壁中央部の器台(9)、P₂付近の台付甕(15)がある。

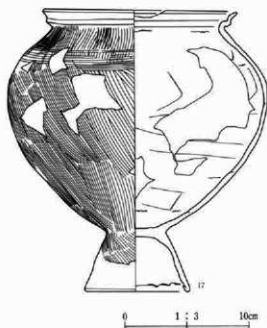
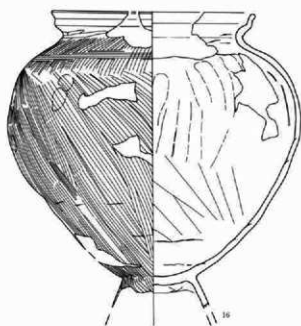
(観、P200~202)



第23図 3区9号住居



第24図 3区9号住居出土遺物



3区10号住居 (PL 3・25)

形状 正方形を基調とするが、やや東西方向が長くなっている。規模は4.3×4.7m、残存深度は13~35cmを測る。

面積 19.3m² **方位** N-51°-E

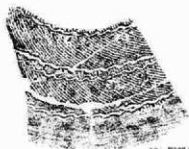
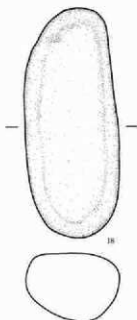
埋没土 黒灰色の砂質土が堆積している。

柱穴 P₁~P₄が主柱穴に当たる。南側のP₁・P₃間に比べ北側のP₂・P₄間が開き、柱穴を結んだ形状は台形を呈する。各柱穴の心芯間の距離はP₁~P₂:1.26m、P₂~P₃:2.01m、P₃~P₄:1.9m、P₄~P₁:1.82mとなっており、それぞれの規模(短径×長径×深さ)は、P₁:29×33×19cm、P₂:30×31×44cm、P₃:63×65×47cm、P₄:43×44×20cmを測る。

竈 東壁の南寄りに位置する。燃焼部は周壁の外に造作され、その規模は長さ46cm、幅36cmである。燃焼部の中央には角閃石安山岩の支柱石が検出された。また、焼土中より壱破片が検出されている。

遺物 床面直上からの遺物はないが、竈周辺より坏(3)が床上14cm、甕(4・5)がそれぞれ床上4cm、8cmで検出されている。また、P₁の周囲よりこも礫石が出土している。(観、P202)

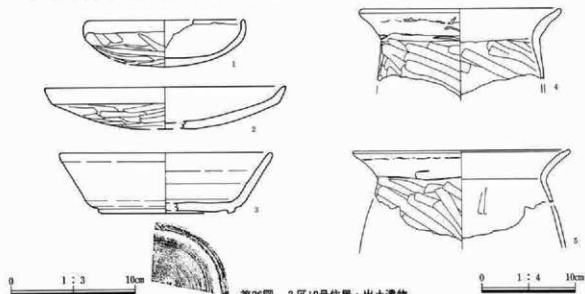
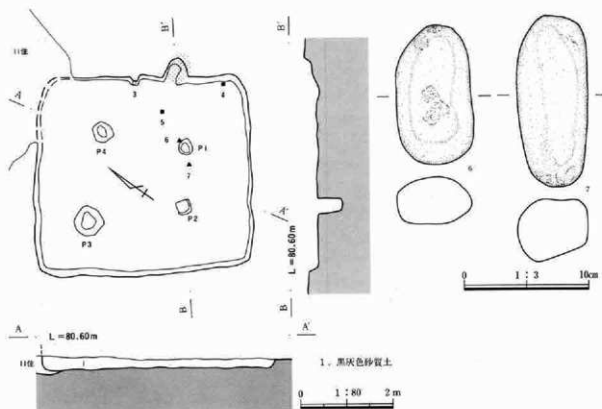
備考 北側で11号住居と重複するがこれは、本住居に先行するものである。



12 断面文様

第25図 3区9号住居出土遺物

3 調査された遺構



第26図 3区10号住居・出土遺物

3区11号住居 (P 3・25)

形状 正方形を基調としているが、南北に長軸を持つ。南東隅を10号住居と、北西隅を12号住居と重複し確認することはできなかった。規模は5.7×5.9mで、残存深度は31~44cmを測る。

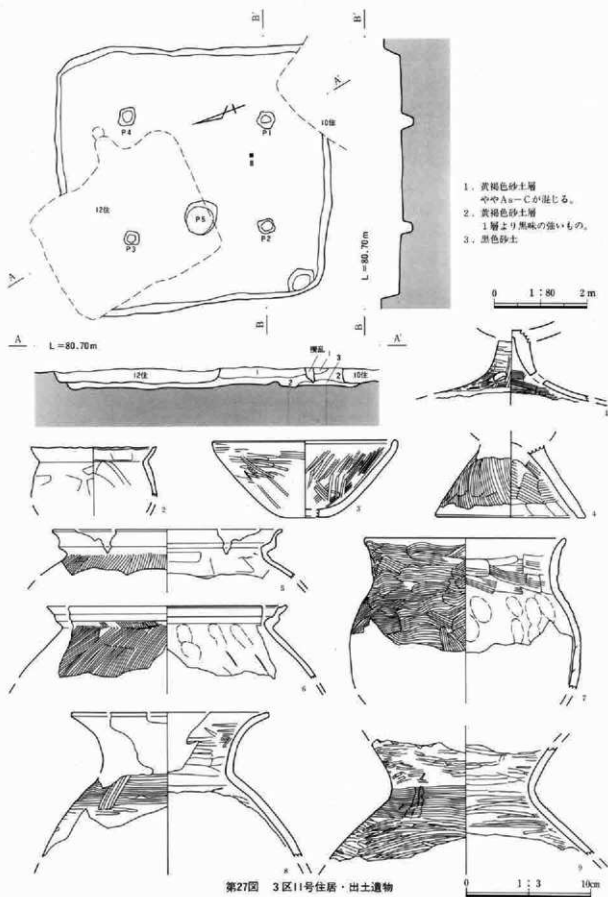
面積 (31.6m²) **方位** N-15°-E

埋没土 砂質土が堆積しており、上層はAs-Cの少

量混入する黄褐色で、床面近くは黒色を呈する。

柱穴 P₁~P₄の支柱穴を確認でき、各柱穴の心芯間を結んだ形状は、住居の外形とほぼ相似形であり、その距離はP₁~P₂: 2.26m、P₂~P₃: 2.9m、P₃~P₄: 2.52m、P₄~P₁: 3.0mである。またそれぞれの規模(径×深さ)は、P₁: 37×20cm、P₂: 33×23cm、P₃: 30×15cm、P₄: 36×26cmを測る。

II 荒砥宮川遺跡の調査



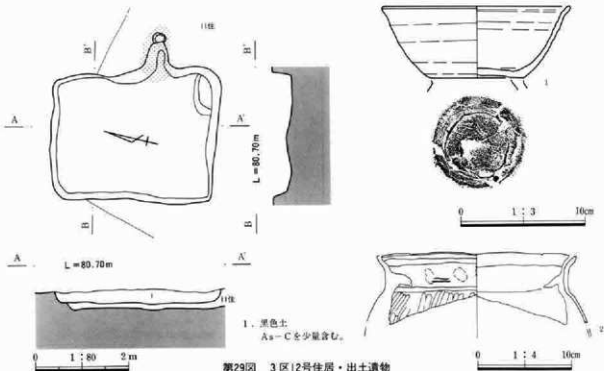
炉 P₈が炉の痕跡かと思われる。やや東西に長い楕円形を呈する。規模は68×79cmで、16cm掘り込まれている。

遺物 実測可能な土器は埋没土中の遺物を含め10点あった。住居中央南寄りから壺(8)が床上5cmで出土しており、壺(10)は南壁際の床下からの出土である。(観、P202・203)

備考 10号住居、12号住居と重複するが、両住居とも本住居より後出するものである。



第28図 3区11号住居出土遺物



第29図 3区12号住居・出土遺物

3区12号住居 (P L 3・26)

形状 南北に長軸を有する矩形を呈する。規模は2.9×3.6mで、残存深度は33~42cmを測る。

面積 10.1m² **方位** N-74°-E

埋没土 As-Cの少量混入する黒色土が堆積している。

竈 東壁中央部やや南寄りに位置する。燃焼部は周壁の外側に造られており、その規模は長さ54cm、幅28cmである。煙道部は壁外に66cm程伸び、径18×

24cmの楕円形を呈する煙出し孔が検出された。

貯蔵穴 竈右側の南東隅に楕円形の緩やかな落ち込みが見られる。床面との比高差は12~15cmであり、貯蔵穴の可能性が考えられる。

遺物 埋没土中より高台付碗(1)、壺(2)が出土している。(観、P203)

備考 11号住居と重複するがこれは、本住居に先行するものである。

II 荒砥宮川遺跡の調査

3区13号住居 (P L 1・4・26)

形状 西壁に比べ東壁がやや長くなる台形を呈する。周壁は直角に近く掘り込まれているが、南東隅では崩落により鈍角になっている。規模は3.8×4.1mで、残存深度は32~56cmを測る。

面積 14.0㎡

方位 N-5°-E

埋没土 床面上にはAs-Cの混入する黒色土が堆積し、上層は褐色土を主体に堆積していた。

遺物 全て埋没土からの出土で、実測可能な点数は5点であった。(観、P 203・204)



第30図 3区13号住居・出土遺物

0 1:3 10cm

3区14号住居 (P L 4・26)

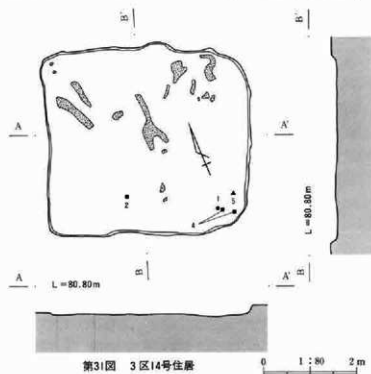
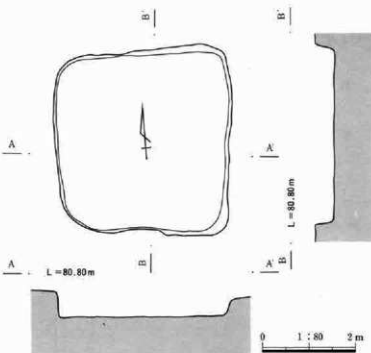
形状 正方形を基調とし、東北隅と南西隅はやや丸みを帯びている。規模は南北4.2m、東西4.3mで、残存深度は2~18cmを測る。

面積 16.8㎡

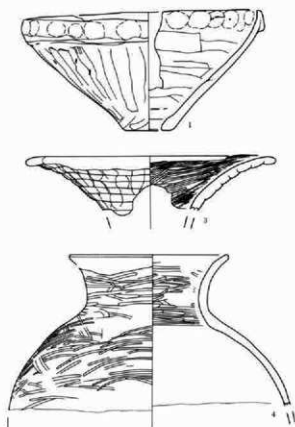
方位 N-72°-W

遺物 埋没土からの出土遺物を含め、実測可能な点数は5点であった。南西隅には瓶(1)、壺(4)、台石(5)が集中していた。住居中央南よりから甕(2)が出土している。(観、P 204)

備考 床面北半から炭化材が出土している。状態の良好なものは、住居中央部より放射状に広がっており、火災により焼け落ちた屋根材と考えられる。



第31図 3区14号住居



第32図 3区14号住居出土遺物

3区15号住居 (P L 4・26・27)

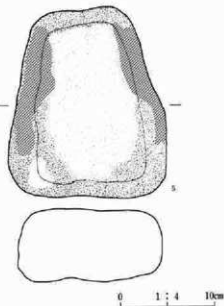
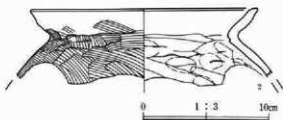
形状 東西に長軸を有する矩形である。北西隅から西壁のほとんどが18号住居との重複により削平されている。また、南西隅は入り込んでいる。規模は南北5.2m、東西5.7mで、残存深度は19～54cmを測る。

面積 (28.1㎡) **方位** N-84°-W

埋没土 As-Cを含む褐色土を主体とする。全体的にAs-Cが混入している。

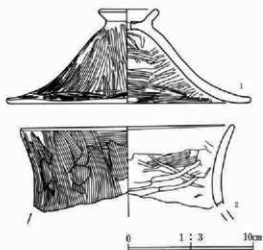
柱穴 $P_1 \sim P_4$ の4本が確認された。円形および楕円形を呈するが、 P_3 のみが矩形である。各心芯間を結んだ形状は住居とほぼ相似形を呈しており、その距離は $P_1 \sim P_2$: 2.1m、 $P_2 \sim P_3$: 1.2m、 $P_3 \sim P_4$: 2.1m、 $P_4 \sim P_1$: 1.5mである。各柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、 P_1 : 32×33×22cm、 P_2 : 50×62×14cm、 P_3 : 42×58×10cm、 P_4 : 33×42×28cmである。

貯蔵穴 北東隅の P_3 が貯蔵穴に当たるかと思われる。規模は径40×48cm、深さ26cmである。



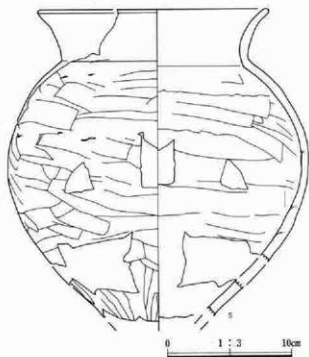
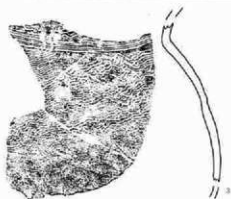
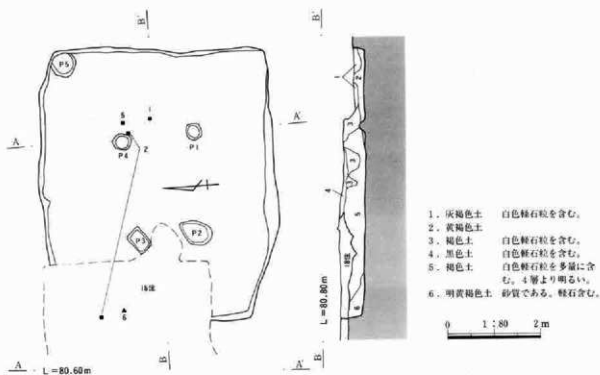
遺物 住居中央北東よりの P_4 の周囲に集中している。壺(2)は床面近くから、蓋(1)、壺(5)は、それぞれ床上21・23cmからの出土である。また、住居の西壁付近より石包丁(6)が完形で出土している。(観、P204・205)

備考 18号住居と重複し、本住居よりも後出するものである。



第33図 3区15号住居出土遺物

II 荒砥宮川遺跡の調査



第34図 3区15号住居・出土遺物

3区16号住居 (P L 4・27)

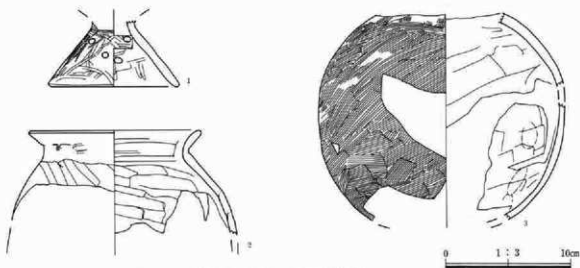
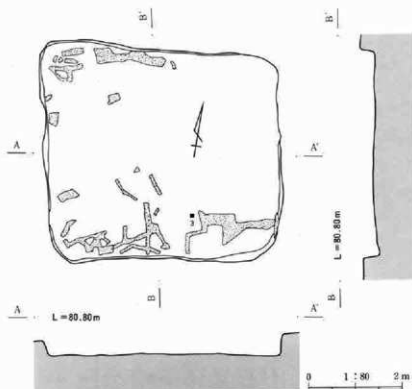
形状 正方形を基調としているが、北西隅がやや突出している。周壁はほぼ直角に掘り込まれている。規模は南北4.7m、東西5.1mで、残存深度は21~45cmを測る。

面積 22.3㎡

方位 N-80°-E

遺物 実測可能な個体数は、埋没土からのものを含めても3点であった。罫(3)は住居中央部南寄りで床上8cmからの出土である。(観、P205)

備考 南壁際から北西隅にかけて床面から、炭化材が多量に出土しており焼失住居と思われる。



第35図 3区16号住居・出土遺物

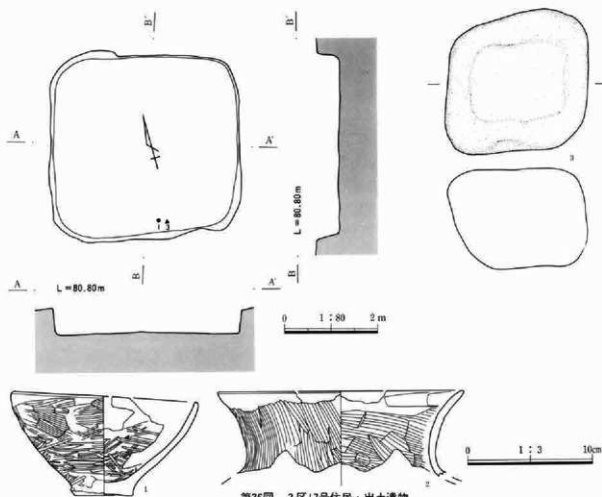
3区17号住居 (P L 4・27)

形状 正方形を基調とし、四隅はやや丸みを帯びており、周壁はほぼ直角に掘り込まれている。規模は南北4.2m、東西4.0mで、残存深度は43~58cmを測る。

面積 15.3㎡ **方位** N-14°-E

遺物 実測可能な個体は、埋没土からのものを含め3点であった。南壁の中央部床から4cm離れて鉢(1)が、2cm離れて磨石(3)が出土している。(観、P205)

II 荒砥宮川遺跡の調査



第36図 3区17号住居・出土遺物

3区18号住居 (P L4・27)

形状 東西に長軸を有する矩形を呈している。周壁はほぼ直角に掘り込まれている。規模は東西4.8m、南北3.6mで、残存深度は11~18cmを測る。

面積 16.8m² **方位** N-89°-E

埋没土 白色軽石を含む黒色土を主体としている。

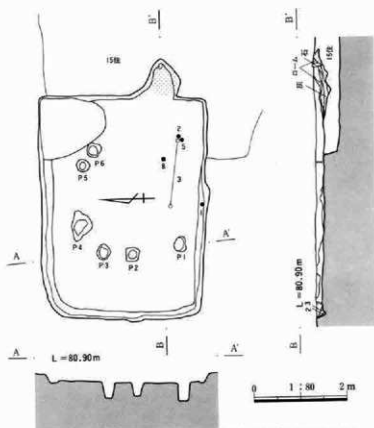
柱穴 柱穴としてP₁~P₆の6本が確認された。南壁から北東隅にかけて住居を円形に半周している。各柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P₁:23×31×38cm、P₂:26×30×30cm、P₃:28×33×33cm、P₄:45×62×50cm、P₅:26×27×15cm、P₆:26×30×11cmである。

周溝 南壁中央部より北東隅まで確認された。幅は10~14cmで、深さは3~5cmであった。

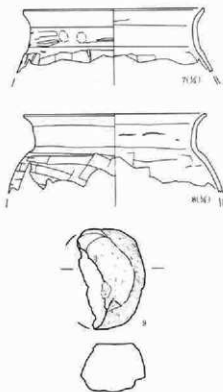
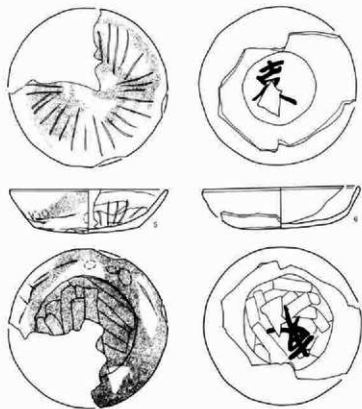
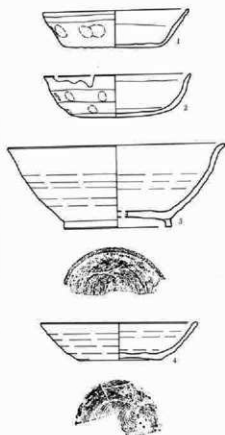
竈 東壁やや南寄りに設置されている。燃焼部を周壁の外に持ち、幅52cm、長さ64cmである。奥壁近くに支柱石が立てられていた。周囲には焼土が散見される。

遺物 住居南東隅に集中する。土師器環(2・5)、須恵器高台付椀(3)、甕(8)は床面直上からの出土である。また、土師器環(1)は南壁中央部床面より出土している。前出の環(5)は内面に放射状の線刻が施され、内面には漆が塗られている。埋没土からの環(6)には身込みと底部に「東」の墨書が施されていた。(観、P205・206)

備考 15号住居と重複するがこれは、本住居に先行するものである。



1. 黒色土 白色軽石粒を含む。 2. 黄褐色土 粒子細かく若干粘性あり。
 3. 褐色土 2層よりも厚味をおびている。



第37図 3区18号住居・出土遺物

0 1:3 10cm

II 荒砥宮川遺跡の調査

4区1号住居 (PL 4・27・28)

形状 南北に長軸を有する矩形を呈する南壁は東西の隅やや丸みを帯びている。周壁はほぼ直角に掘り込まれている。規模は東西3.9m、南北4.9mで残存深度は19~34cmを測る。

面積 17.5㎡ **方位** N-37°-W

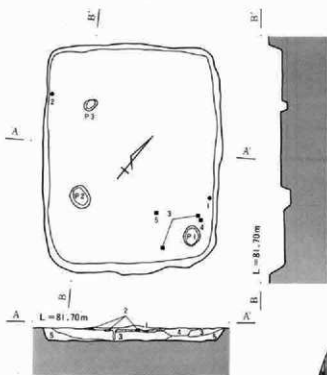
埋没土 軽石 (As-Cか) の混入する黒色土、褐色土を主体として堆積しており、上層にFAが約4cmの厚さで堆積している。

柱穴 P₂・P₃の2本が柱穴と思われる。2つの心

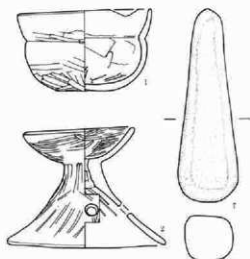
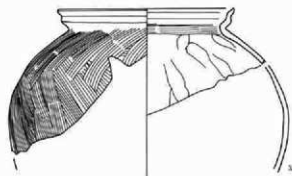
芯間を結んだ距離は2.2mで、南北壁とほぼ平行である。規模 (短径×長径×深さ) は、P₂: 42×50×22cm、P₃: 20×26×15cmを測る。

貯蔵穴 南東隅のP₁が貯蔵穴と思われ、周囲の床面近くから遺物が出土している。規模 (短径×長径×深さ) は、35×42×22cmである。

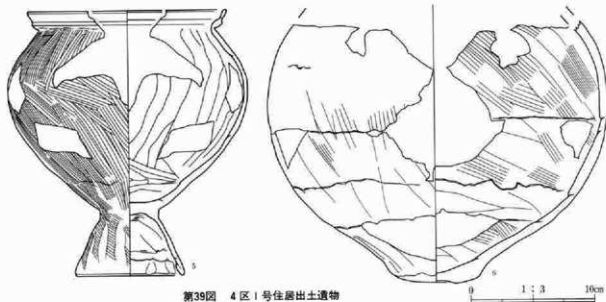
遺物 南東隅のP₁の周囲より台付甕 (3・4)、埴 (1) が床面直上から出土している。また、西壁際10cmからは、墨台 (2) が出土している。(観、P206)



1. 褐色土 小粒のAs-Cを含む。
 2. 微褐色土 FA層
 3. 黒色土 大粒の軽石を含む。 4. 褐色土 大粒の軽石を含む。
 5. 明褐色土 小粒の軽石を含む。



第38図 4区1号住居・出土遺物



第39図 4区1号住居出土遺物

5区1号住居 (PL5・28)

形状 東西辺がやや長くなるが、正方形を基調としており、周壁はほぼ直角に掘り込まれている。規模は東西7.1m、南北6.9mで、残存深度は48~63cmを誇る。

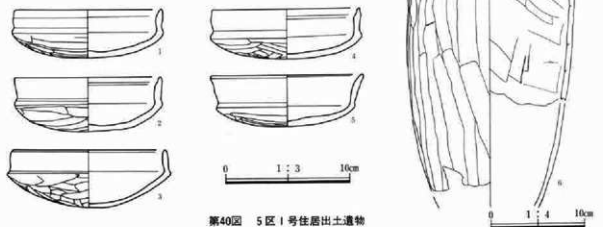
面積 46.2㎡ **方位** N-31°-E

柱穴 $P_1 \sim P_4$ の4本が確認された。それぞれの心芯間を結んだ形状は住居とほぼ相似形を呈している。その距離は $P_1 \sim P_2$:4.06m、 $P_2 \sim P_3$:4.58m、 $P_3 \sim P_4$:3.16m、 $P_4 \sim P_1$:4.24mで、それぞれの規模(短径×長径×深さ)は P_1 :50×59×40cm、 P_2 :58×63×34cm、 P_3 :58×66×26cm、 P_4 :59×67×58cmである。また、 P_1 内から甕(6)が出土し

ている。

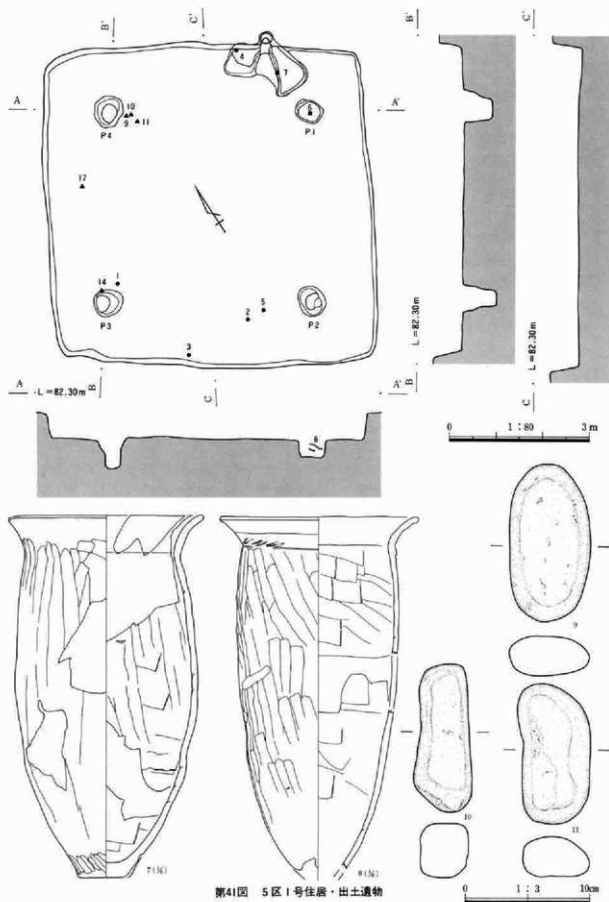
竈 北壁の中央やや東寄りに設置されている。燃焼部を周壁の内側に持ち、左右の袖が扇形に開くように残っている。燃焼部は幅44cm、長さ90cmを測る。また、燃焼部から煙道部にかけて比高差は56cmで、壁に接するように煙出し穴が設けられている。

遺物 竈の右袖より甕(7)が出土しており、袖材に使用したと思われる。住居中央部やや南寄り



第40図 5区1号住居出土遺物

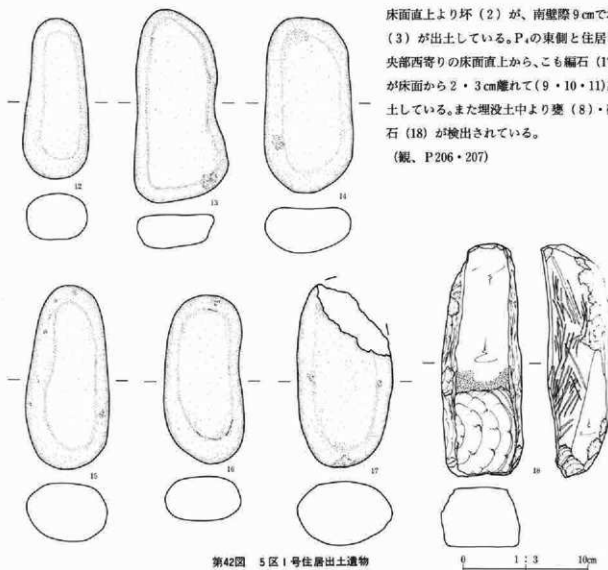
II 荒砥宮川遺跡の調査



第41図 5区1号住居・出土遺物

床面直上より坏(2)が、南壁際9cmで坏(3)が出土している。P₄の東側と住居中央部西寄りの床面直上から、こも編石(17)が床面から2・3cm離れて(9・10・11)出土している。また埋没土中より壘(8)・砥石(18)が検出されている。

(観、P206・207)



第42図 5区1号住居出土遺物

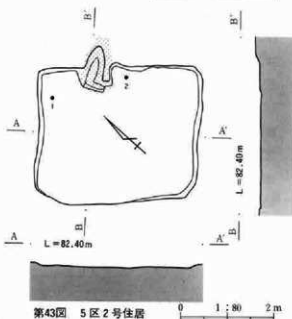
5区2号住居 (P L5・29)

形状 東西に長軸を有する矩形を呈する。南西隅はやや丸みを帯びている。周壁は削平が進み残存の状態は悪い。規模は東西3.5m、南北2.9mで、残存深度は2~10cmを測る。

面積 10.3m² **方位** N-49°-E

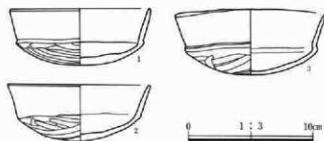
竈 北壁中央部やや西寄りに造られている。燃焼部は壁の内から外にかけて掘り込まれており、規模は幅18cm、長さ62cmである。左右の袖が周壁内側に残存している。

遺物 実測可能な個体数は埋没土からのものを含めて3点である。坏(1)が西壁寄りの床上5cmから、(2)が竈の右側床面直上より出土している。(観、P207・208)

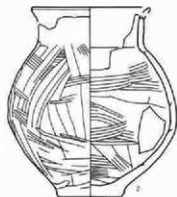
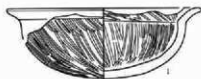
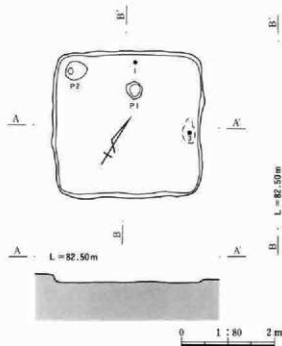


第43図 5区2号住居

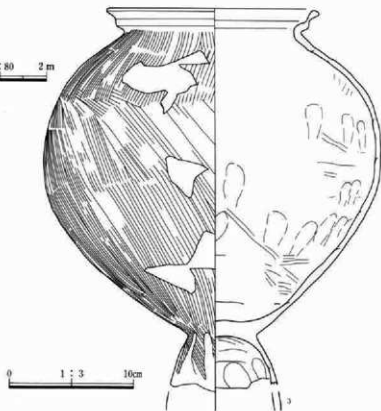
II 荒砥宮川遺跡の調査



第44図 5区2号住居出土遺物



5区3号住居 (P L 5・29)
形状 正方形を基調としている。周壁はほぼ直角に掘り込まれている。規模は南北3.1m、東西3.3mで、残存深度は8~21cmを測る。
面積 9.8㎡
方位 N-60°-E
柱穴 住居中央部北よりのP₁に柱穴の可能性が考えられる。規模(短径×長径×深さ)は、34×39×26cmである。
貯蔵穴 北西隅のP₂に貯蔵穴の可能性が考えられる。円形を呈し、規模は40×43×73cmである。
遺物 実測可能な個体数は3点であった。北壁際中央部から坏(1)が、東壁際中央部から台付甕(3)がそれぞれ床面直上より出土している。(観、P 208)
備考 床面は特段踏み固められたような部分は観察できなかった。炉は焼土の形成が少なかったためか検出できなかった。



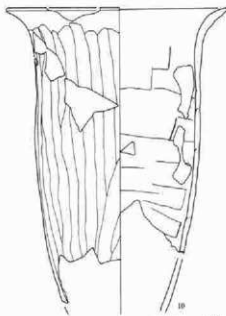
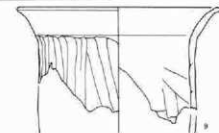
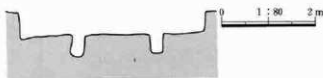
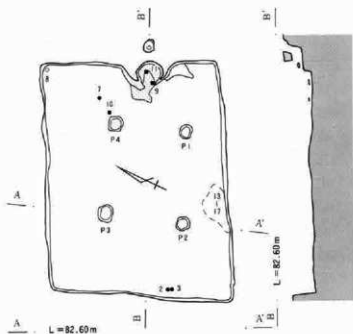
第45図 5区3号住居・出土遺物

5区4号住居 (P L 5・29)

形状 東西に長軸を有する矩形を呈し、南西隅がやや突出している。周壁はほぼ直角に掘り込まれている。規模は南北4.0m、東西4.9mで、残存深度は42~62cmを測る。
面積 19.5m² **方位** N-63°-E
柱穴 P₁~P₄の4本が確認できた。それぞれの心芯間を結んだ形状は、住居とほぼ相似形であるが、長軸が東に振れている。柱穴間の距離はP₁~P₂:1.94m、P₂~P₃:1.64m、P₃~P₄:1.9m、P₄~P₁:1.54mで、それぞれの規模(短径×長径×深さ)は、P₁:26×30×51cm、P₂:28×29×48cm、P₃:32×37×54cm、P₄:31×32×52cmを測る。

竈 東壁の中央部に設置されている。燃焼部は周壁の内側に造られており、規模は幅24cm、長さ64cmである。周壁の外側26cmのところに燃出し穴が設けられており、燃焼部との比高差は約50cmである。

遺物 竈内より甕(9・11)が出土しており、P₄の東側より環(7)、甕(10)が出土している。また、南壁際中央部からこも編石(13~17)がほぼ床面直上に集中して出土している。(観、P208・209)

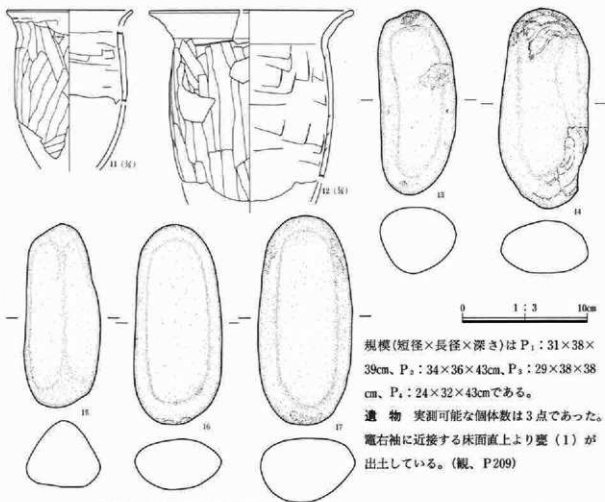


0 1:3 10cm

第46図 5区4号住居・出土遺物

0 1:4 10cm

II 荒砥宮川遺跡の調査



第47図 5区4号住居出土遺物

5区5号住居 (PL 6・29・30)

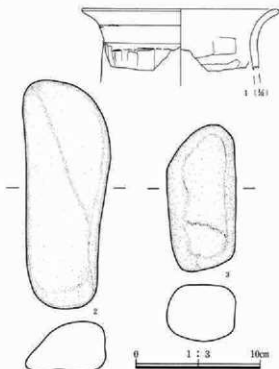
形状 南北に長軸を有する矩形を呈し、周壁はほぼ直角に掘り込まれている。規模は東西4.8m、南北5.5mで、残存深度は36~53cmを測る。

面積 25.5m² **方位** N-54°-E

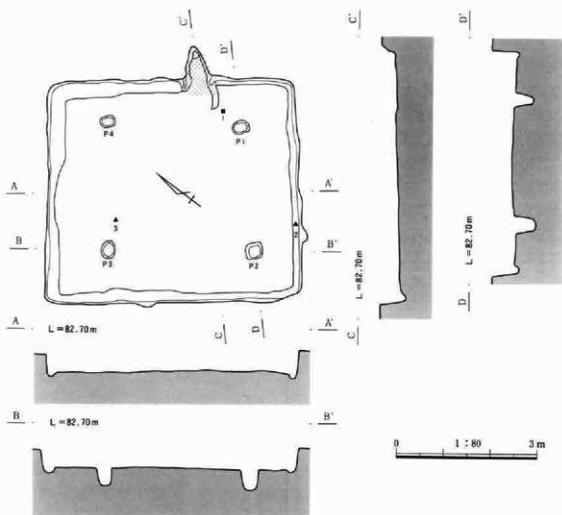
周溝 周壁を一周しており、南側に比べ北側はやや幅が広がっている。幅は8~36cm、深さは2~12cmを測る。

竈 東側の中央やや南寄りに位置する。燃焼部は周壁を掘り込む。住居内に右袖の一部が残存していた。

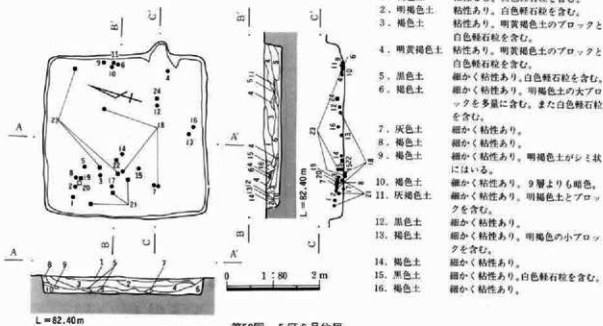
柱穴 P₁~P₄の4本を確認することができた。それぞれの心志間を結んだ形状は、住居との相似形を基本とし、P₁がやや内側に入る台形を呈している。その距離はP₁~P₂:2.68m、P₂~P₃:3.12m、P₃~P₄:2.72m、P₄~P₁:2.9mを測り、それぞれの



第48図 5区5号住居出土遺物



第49図 5区5号住居



第50図 5区6号住居

1. 褐色土 粘性なし。白色軽石粒を含む。
2. 明褐色土 粘性あり。白色軽石粒を含む。
3. 褐色土 粘性あり。明黄褐色土のブロックと白色軽石粒を含む。
4. 明黄褐色土 粘性あり。明黄褐色土のブロックと白色軽石粒を含む。
5. 黒色土 細かく粘性あり。白色軽石粒を含む。
6. 褐色土 細かく粘性あり。明褐色土の大ブロックを多量に含む。また白色軽石粒を含む。
7. 灰色土 細かく粘性あり。
8. 褐色土 細かく粘性あり。
9. 褐色土 細かく粘性あり。明褐色土がシミ状にはいる。
10. 褐色土 細かく粘性あり。9層よりも褐色。
11. 灰褐色土 細かく粘性あり。明褐色土とブロックを含む。
12. 黒色土 細かく粘性あり。
13. 褐色土 細かく粘性あり。明褐色土の小ブロックを含む。
14. 褐色土 細かく粘性あり。
15. 黒色土 細かく粘性あり。白色軽石粒を含む。
16. 褐色土 細かく粘性あり。

II 荒砥宮川遺跡の調査

5区6号住居 (P L 6・30)

形状 一辺が3.5mの正方形を呈する。周壁はほぼ直角に掘り込まれている。残存深度は30~40cmを測る。

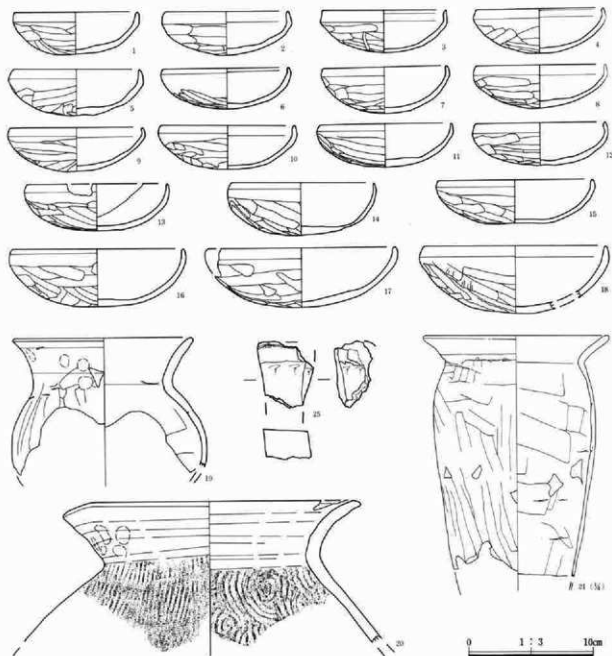
面積 11.0㎡ **方位** N-70°-E

埋没土 白色軽石を含む褐色土を主体に堆積している。全体的に粒子は細かく粘性を帯びる。

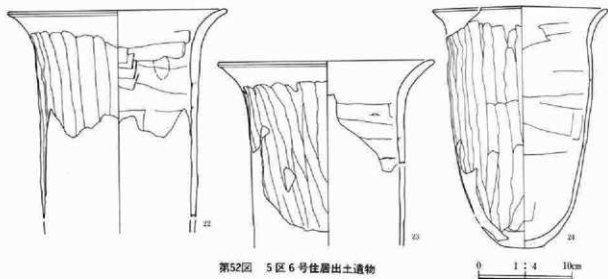
竈 東壁中央部やや南寄りに設置されている。

燃焼部は周壁の外に掘り込まれ、規模は幅40cm、長さ46cmである。右袖付近の床面直上より環(4)が出土している。

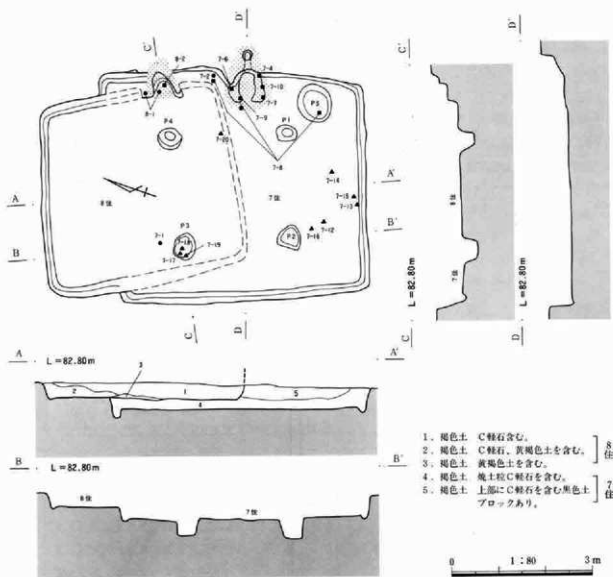
遺物 東壁際中央部と住居北西側に集中して出土している。これらのうち床面直上からの出土は、環(4・6・10・11・15・17・18)と甕(23)がある。また、北西隅床上16cmから須恵器甕口縁部(20)と、埋没土中より砥石(25)の出土がある。(観、P 209~211)



第51図 5区6号住居出土遺物



第52図 5区6号住居出土遺物



第53図 5区7・8号住居

II 荒砥宮川遺跡の調査

5区7号住居 (P L 5・6・31)

形状 南北に長軸を有する矩形を基本とするが、南壁に比べ北壁はやや長くなり、台形状を呈している。周壁はほぼ直角に掘り込まれている。規模は東西5.0m、南北5.7m (推定) で、残存深度は38~58cmを測る。

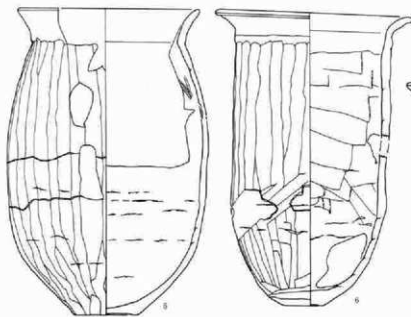
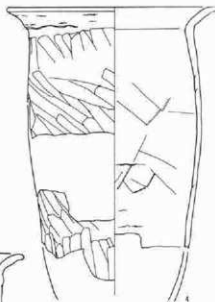
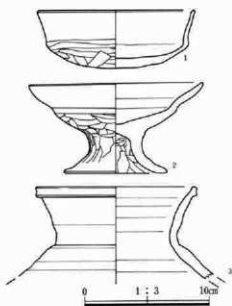
面積 27.4m² **方位** N-69°-E

埋没土 褐色土が堆積し、As-Cを含んでいる。

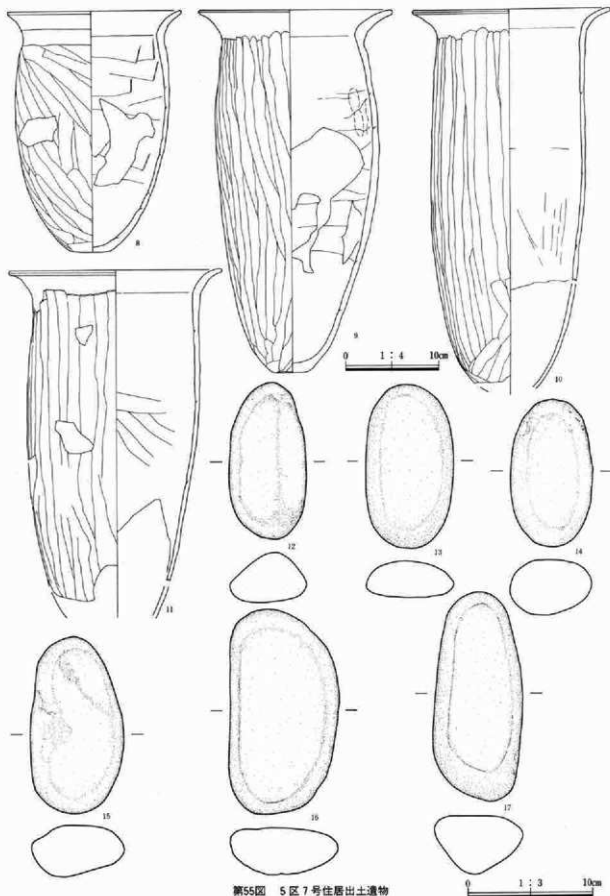
周溝 住居をほぼ全周している。幅7~12cm、深さ2~7cmである。

柱穴 4本の柱穴を確認できた。4本の心芯間を結んだ形状は住居とほぼ相似形を呈しており、その距離は、P₁~P₂: 2.18m、P₂~P₃: 2.3m、P₃~P₄: 2.32m、P₄~P₁: 2.54mである。それぞれの規模(短径×長径×深さ)は、P₁: 37×43×35cm、P₂: 50×44cm、P₃: 44×55×15cm、P₄: 48×50×32cmを測る。また、北西のP₃内からも編石(17)と台石(18・19)の3点が出土している。

竈 東壁中央部に設置されている。燃焼部は周壁の内側に掘り込まれており、幅34cm、長さ62cmである。煙道部は燃焼部と約10cmの比高差を持ち、周壁から30cmのところ掘り込まれた煙出し穴に続い

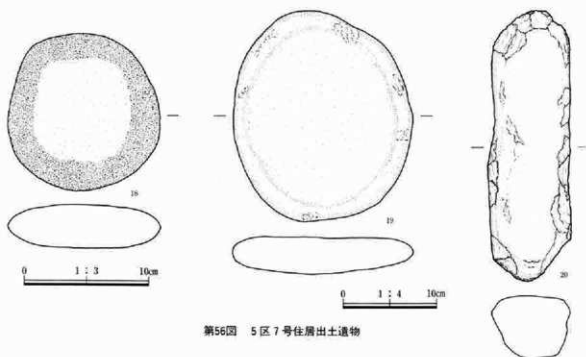


第54図 5区7号住居出土土物



第55図 5区7号住居出土遺物

II 荒砥宮川遺跡の調査



第56図 5区7号住居出土遺物

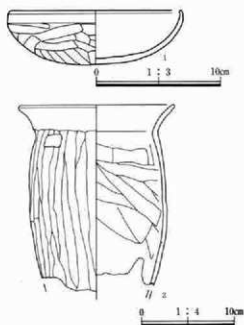
ている。また、右袖からは甕(4・7・10)が、左袖からは甕(6・8・9)が出土している。

貯蔵穴 南東隅のP₃が貯蔵穴と思われる。円形を呈しており、規模は72×76×32cmを測る。甕(8)は甕左袖付近から検出された破片2点と接合している。

遺物 前出の甕付近とP₃からの遺物のほか、床面

直上からの出土は、P₂の北側から環(1)が、甕左袖外側から高環(2)が、住居南寄りからも編石(12・14)、中央部より砥石(20)が出土している。(観、P211・212)

備考 8号住居と重複するが、本住居より後出するものである。



第57図 5区8号住居出土遺物

5区8号住居 (P L 6・32)

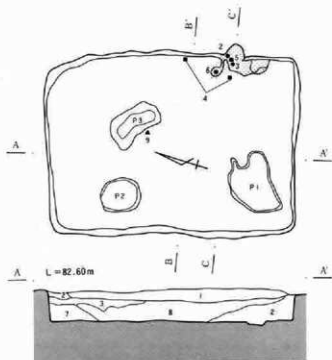
形状 7号住居との重複により、約1/3を削平されているが、一辺4.2mの正方形を基調としていると思われる。残存深度は26~32cmを測る。

面積 (17.2㎡) **方位** N-66'-E
埋没土 As-Cの混入する褐色土が堆積している。

竈 東壁中央部の南寄りに設置されている。燃焼部は周壁の外側に掘り込まれ、幅50cm、長さ38cmである。燃焼部の奥壁付近から環(1)と甕(2)が出土してしている。

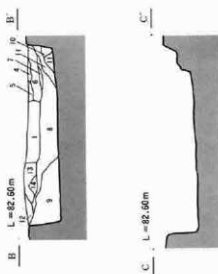
遺物 実測可能な遺物は、前出の甕からの出土のみである。(観、P212)

備考 7号住居と重複するが、これは本住居に先行するものである。



1. 褐色土 粗粒でサラサラしている。
2. 明褐色土 細粒で粘性あり。灰褐色粘質土ブロックを含む。
3. 暗褐色土 細粒で粘性あり。2層より大粒の灰褐色粘質土を含む。棕色の焼土粒を含む。
4. 灰褐色土 粗粒でしまりあり。白色の軽石粒を含む。
5. 褐色土 細粒で粘性あり。明褐色土と焼土のブロックを含む。
6. 褐色土 細粒で粘性あり。明褐色土、焼土のブロックと白色軽石粒を含む。

7. 暗褐色土 細粒で粘性あり。明褐色土の大ブロックと白色軽石粒を含む。
8. 明褐色土 細粒で粘性あり。明褐色ブロックと白色軽石粒含む。
9. 暗褐色土 粗粒で粘性あり。暗褐色ブロックと白色軽石粒含む。
10. 灰褐色土 粗粒で粘性あり。
11. 黒色土
12. 褐色土 粗粒でサラサラしている。焼土を若干含む。
13. 褐色土 粗粒で固くしまっている。焼土、白色軽石粒を多く含む。
14. 褐色土 粗粒で粘性あり。焼土、明褐色土、白色軽石粒を含む。



0 1:80 3m

第58図 6区1号住居

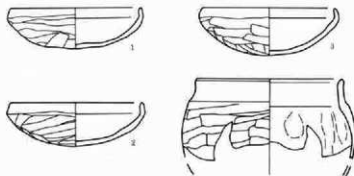
6区1号住居 (P L 7・32)

形状 南北に長軸を有する矩形を呈する。北東隅から東壁にかけてやや丸みを持つ。周壁はほぼ直角に掘り込まれている。規模は南北5.6m、東西3.9mで、残存深度は31~48cmを測る。

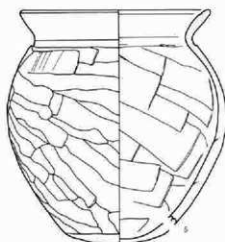
面積 20.5㎡ **方位** N-70°-E

埋没土 粒子の細かい褐色土を主体として堆積している。

柱穴 北西隅のP₂に柱穴の可能性が考えられる。

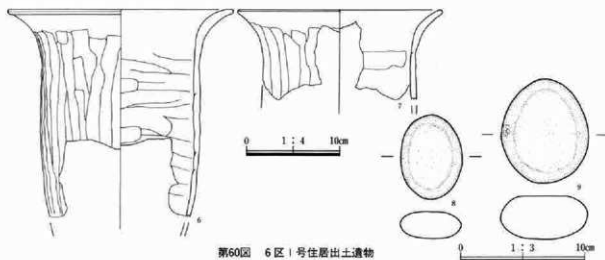


第59図 6区1号住居出土遺物



0 1:3 10cm

II 荒砥宮川遺跡の調査



70×85cmの楕円形を呈しており、深さは15cmである。

竈 東壁の南東隅寄りに設置されている。燃焼部は周壁の外側に掘り込まれ、周囲には焼土が散見される。左側袖部の先端部には補強材として壺(6)

を倒立して置いていた。燃焼部の規模は幅44cm、長さ38cmを測る。

遺物 竈周辺より坏(2・3)、壺(4・5)が出土している。(観、P212)

(2) 掘立柱建物遺構

掘立柱建物を検出した5区北半部では、多数のピットが検出されている。本遺構はこのピット集中域の北東隅に位置しており、掘立柱建物群は調査区域の西側に伸びるものと思われる。また、この地点の南では浅間C経石下の畠跡が検出されているほか、ピット群周辺では古墳時代前期から7世紀にかけての竪穴住居跡が検出されている。

5区1号掘立柱建物(P17)

形状 棟方向は東西と考えられ、方位はN-71°-Eである。構造は桁行1間、梁行1間であり、4隅の柱の中央部に床を支えるための東柱を2本ずつ立てていたと考えられる。規模は桁行が南辺で5.2m、梁行が西辺で5.25mで、面積は27.3m²を測る。柱穴の掘り方は円形で柱痕は確認できなかった。

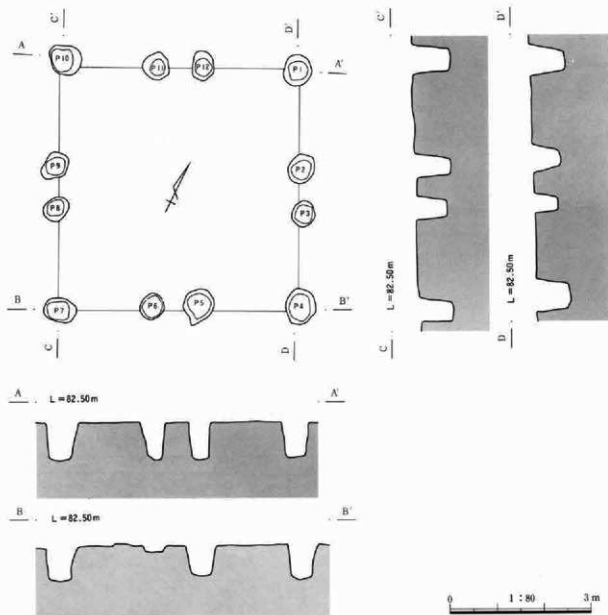
遺物 検出することはできなかった。

備考 前述のように掘立柱建物群と考えられるピット群の周辺から、古墳時代前期から7世紀にかけての竪穴住居跡が存在している。調査範囲が狭く

限られてはいるが、いくらかの空間において検出されているのは7世紀代の所産と考えられる住居であり、掘立柱建物群の所産年代も7世紀代の可能性が濃厚である。

第2表 柱穴の柱間間隔と規模の一覧

柱間間隔 (m)	番号	柱穴の規模(m)			
		短径	長径	深さ	
P1~P2	2.12	P1	0.59	0.67	0.75
P2~P3	0.93	P2	0.53	0.67	0.50
P3~P4	1.88	P3	0.50	0.55	0.57
P4~P5	2.21	P4	0.65	0.75	0.80
P5~P6	0.98	P5	0.66	0.75	0.64
P6~P7	2.03	P6	0.53	0.55	0.13
P7~P8	2.13	P7	0.50	0.67	0.72
P8~P9	0.88	P8	0.47	0.57	0.64
P9~P10	2.24	P9	0.54	0.65	0.72
P10~P11	1.97	P10	0.65	0.73	0.80
P11~P12	0.97	P11	0.37	0.60	0.79
P12~P1	2.05	P12	0.47	0.62	0.79

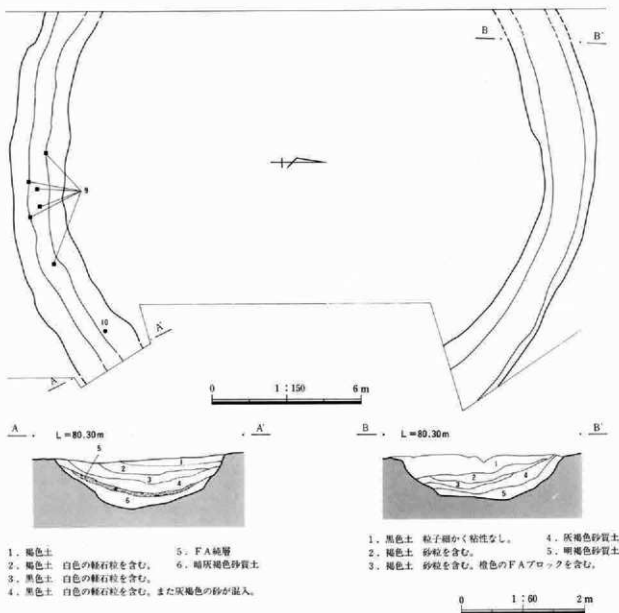


第61図 5区1号独立柱建物

(3) 古 墳

宮川遺跡において古墳は2・3区から4基が検出されている。これらの古墳は、東から伸びる台地西端の砂壤土性微高地上に位置しており、4基はそれぞれの周堀が接するほどに近接して構築されている。明確に伴出すると解る遺物は、2区1号墳のみであり、他の古墳からも数点が検出されているが、断片的な資料に過ぎない。このことの要因については、周堀埋

没土にF Aが堆積していること、出土遺物の様相から得られる年代から見て5世紀後半代の築造であると思われる。この時期の古墳は築造当初より低墳丘であったこと、埴輪等の遺物の絶対量が少なかったことが考えられる。また、2～3区においては遺構外より2次B種横刷毛が施された埴輪片が出土しており、周辺において荒砥宮原遺跡で検出された古墳と前後する時期に初期群集墳が形成されたことが想定される。



第62図 2区1号墳

2区1号墳 (P L33)

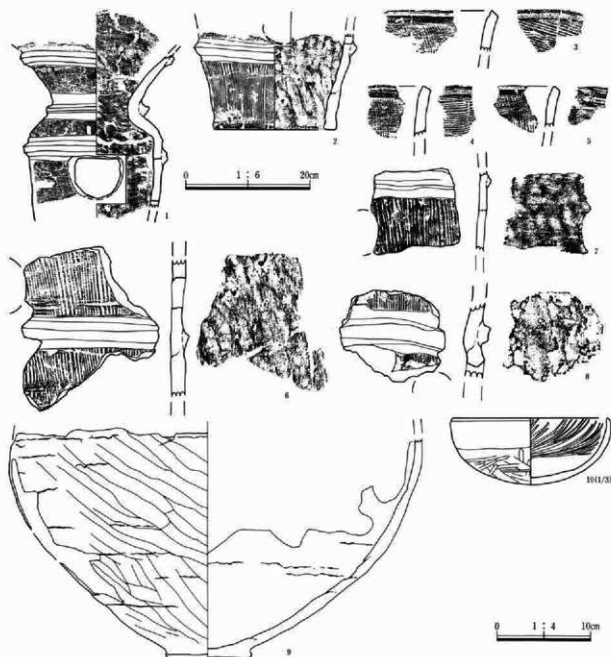
墳丘 東西の堀は調査範囲外になっており確認できなかった。南北長18.9m、東西長17.8m (推定)の円墳である。盛り土は完全に削平されており、墳丘の高さは不明である。

周堀 北側堀の上幅は2.4~2.1m、下幅は1.4~1.0m、深さは0.8~0.6mである。南側堀の上幅は2.4~2.1m、下幅は0.9~0.7m、深さ0.8~0.6mである。埋没土中の地山から15~25cm上層にFA純層が堆積しており、古墳築造後いくつかの時間が経過し

た後、FAの降灰があったことがわかる。

主体部 削平が進み確認できなかったが、埋没土中のFAの堆積状態、出土遺物の様相を考え合わせると竪穴系の主体部が想定される。

遺物 南側周堀より環 (10)、壺胴下半部 (9) が出土している。この壺は、FA上面からの出土と考えられる。朝顔形埴輪 (1) は北側周堀からの出土である。また、その他の埴輪も周堀埋没土からの出土である。(観、P213)



第63図 2区1号墳出土遺物

2区2号墳 (P L7)

墳丘 径8.6mの円墳であると想定できる。調査範囲外になるため東半分は確認できなかった。

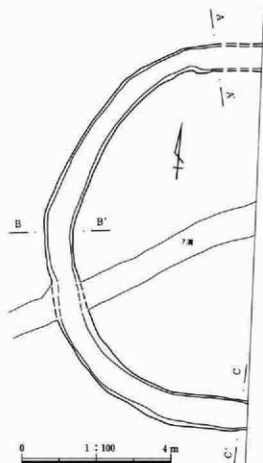
周堀 断面形状は袋状を呈しており、直角に近く掘り込まれている。上幅は0.84~0.73m、下幅は0.74~0.57m、深さは0.21~0.27mである。埋没土は

灰褐色の砂質土であり、S字状口縁台付甕の破片や土師器甕破片が少量検出された。

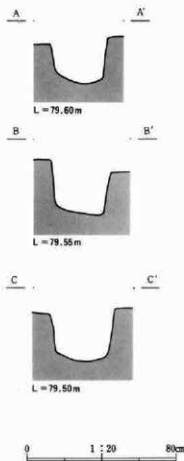
主体部 削平が進み確認することはできなかった。

遺物 前述のように、周堀埋没土中から土器片が数点検出されたが、実測個体はない。

II 荒砥宮川遺跡の調査



第64図 2区2号墳



3区1号墳 (P.L.33)

墳丘 径約10mの円墳であると推定できるが、墳丘は削平が進み、完全に平夷されている。

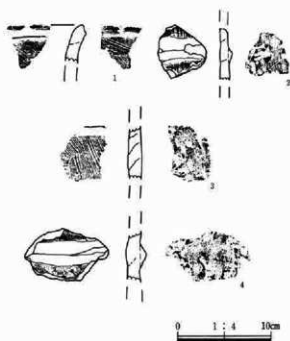
周堀 北西側の周堀は、1号住居と調査区の都合で確認することはできなかった。また、南側周堀の一部は切れ、墳丘の周囲を全周していなかったようである。上幅0.96~0.6m、下幅0.6~0.48m、深さは0.29~0.2mである。1号住居との重複部分の堀没土中では、下層にAs-Cを含む砂質土が堆積し、上層でFAの純層が確認された。

主体部 完全に平夷されており、主体部を確認することはできなかった。

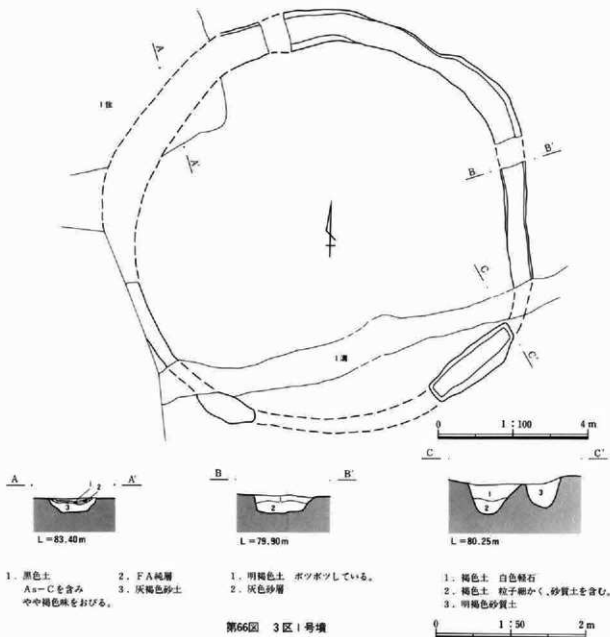
遺物 北側周堀より円筒埴輪片数点が出土しているが、本墳に直接伴うかどうか判断できない。

(観、P.213)

備考 3区1号住居、1号溝と重複する。1号住居は本墳に先行し、1号溝は後出するものである。



第65図 3区1号墳出土遺物



3区2号墳 (PL33)

墳丘 南北長12.8m、東西長12.6mの円墳である。

耕作 による削平が進み、盛り土は確認できなかった。

周堀 北西側堀の一部が、調査区の都合で確認することができなかった。南側周堀に比べ、北側周堀の幅は広がっている。上幅は2.08～0.83m、下幅は0.98～0.97m、深さ0.57～0.23mを測る。埋没土中の中位にFAが堆積している。その下層は明黄褐色の砂質土である。

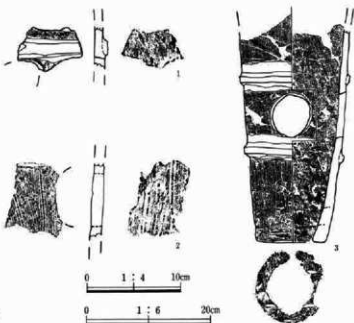
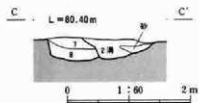
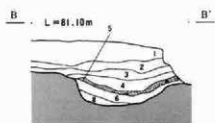
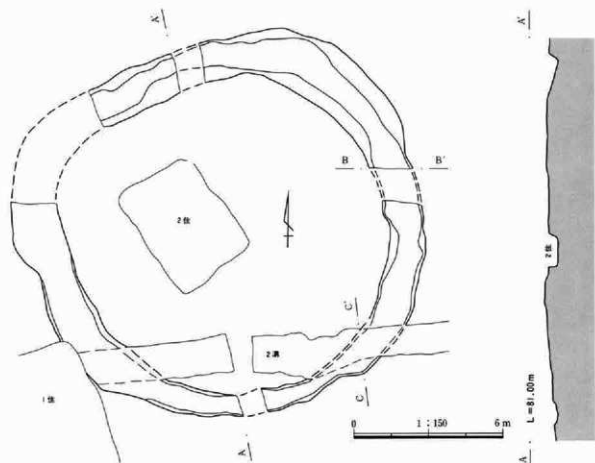
主体部 完全に平夷されており、確認することはできなかった。埋没土中のFAの堆積状態により、豎

穴系の主体部が想定できる。

遺物 実測個体は円筒埴輪3点、土師器環・壺各1点がある。この内環(4)は、東側周堀のFA上面からの出土である。円筒埴輪(3)は、2条の突帯を持ち、第2段に円形の透孔を有する。口縁部下半は弱く外反し、突帯の断面形状は三角形を呈する。(観、P214)

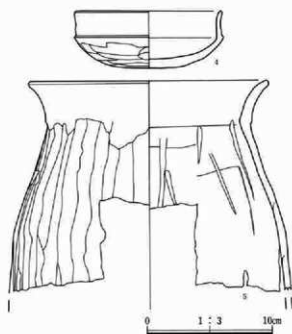
備考 3区1・2号住居、2号溝と重複する。住居跡は本墳に先行するものであり、2号溝は後出するものである。

II 荒砥宮川遺跡の調査



- | | |
|-----------|-------------------|
| 1. 褐色土 | 耕作土層 |
| 2. 明褐色土 | |
| 3. 黒色土 | 白色軽石を含む。 |
| 4. 黒色土 | 白色軽石を含む。(3層より明るい) |
| 5. F A純層 | |
| 6. 黒色土 | 白色軽石粒を含む。 |
| 7. 褐色土 | 下部にF A純層 |
| 8. 明褐色砂質土 | |

第67図 3区2号墳・出土遺物



第68図 3区2号墳出土遺物

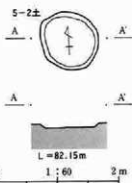
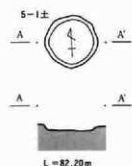
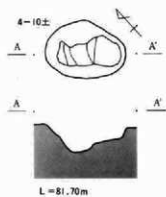
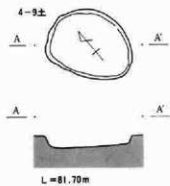
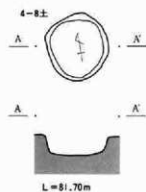
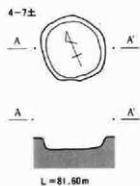
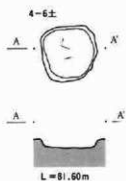
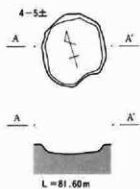
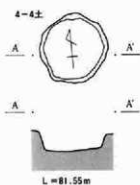
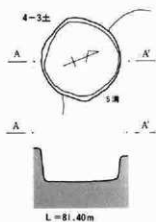
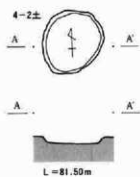
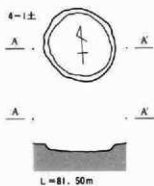
(4) 土 坑

調査区全体で26基の土坑を検出・調査を行った。分布には偏りが見られ、主に4区中央部と、5区に集中している。形状は円形のものほとんどであり、4区9・10号土坑が楕円形、5区7号土坑が長方形、5区16号土坑が隅丸矩形を呈している。また、5区11号土坑は調査区外に伸び溝状を呈する可能性がある。他遺構との重複関係は、4区3号土坑が4区5号溝と重複しているのみで、住居との重複は見られない。4区中央部の土坑群は住居の分布域からも外れている。遺物の出土は全て埋没土からであり、構築時期を示すものはない。2区の土坑は周囲の溝と同様に、近世遺構の耕作によるものと思われ、B種横刷毛を施す円筒埴輪片が出土しているが、遺構に伴うものではなく、この地域を墓域とする初期群集墳からの流れ込みであると思われる。

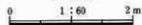
第3表 土坑一覧

番 号	形 状	規 模 (m)	残 存 壁 高 (m)
		短径×長径	
4-1	円 形	1.13×1.15	0.11
4-2	円 形	0.98×1.02	0.12
4-3	円 形	1.26×1.30	0.53
4-4	円 形	1.11×1.12	0.27
4-5	円 形	1.00×1.17	0.16
4-6	円 形	0.88×0.92	0.14
4-7	円 形	1.05	0.17
4-8	円 形	1.02×1.09	0.31
4-9	楕円形	1.10×1.40	0.17
4-10	楕円形	0.90×1.30	0.42
5-1	円 形	0.85	0.10
5-2	円 形	0.94	0.09
5-3	円 形	1.05	0.12
5-4	円 形	1.10	0.18
5-5	円 形	1.06	0.10
5-6	円 形	0.98	0.08
5-7	長 方 形	0.78×1.8	0.34
5-8	不 整 形	0.72×1.1	0.15
5-9	円 形	1.06	0.18
5-10	円 形	1.10×1.18	0.12
5-11	不 整 形	0.90×1.50	0.14
5-12	楕円形	0.88×1.05	0.15
5-13	円 形	1.04×1.10	0.07
5-14	円 形	1.12	0.18
5-15	円 形	1.04	0.34
5-16	隅丸矩形	1.13×1.32	0.14

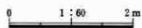
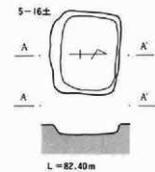
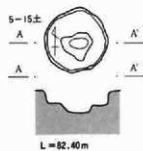
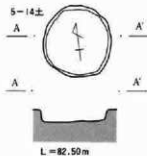
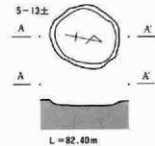
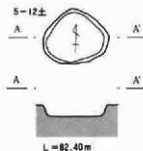
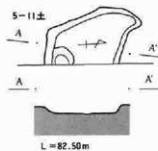
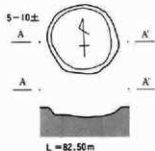
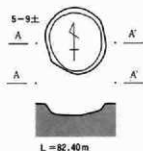
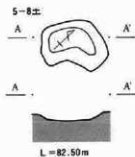
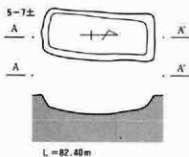
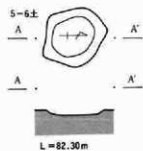
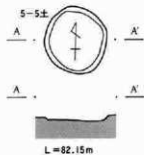
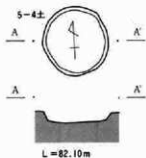
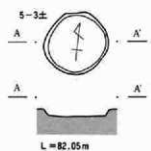
II 荒砥宮川遺跡の調査



第69回 4区1号~5区2号土坑



3 調査された遺構



第70図 5区3号~16号土坑

II 荒砥宮川遺跡の調査

(5) 井 戸

調査区全体で13基が検出・調査された。3区で2基、4区で5基、5区で4基、6区で2基が検出された。円形を呈するものがほとんどで、3区2号井戸のみが不整形円形を呈している。規模は、3・4区のものに対して5・6区のは小規模である。

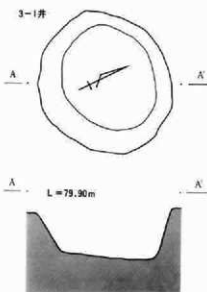
他遺構との重複関係を見ると、4区の井戸は中央部の土坑群の分布域とその範囲を同様にしてている。また、5区では6～7世紀にかけての住居と分布域を同じくしており、同時期に機能していた可能性が考えられる。

出土遺物は少ないが、3区2号井戸からは中世の常滑壺口縁部が2点出土している。5区4号井戸からは坏、甕の出土がある。

なお、近接する二之宮谷地遺跡、荒砥天の宮遺跡からは、灌溉のための溜井が検出されているが、本遺跡からは検出されなかった。

3区1号井戸(P L 7・33)

形 状 規模2.16×2.22m、深さ0.75mの円形を呈



する。断面形状は漏斗状で、崩落のためか南壁は緩傾斜になっている。

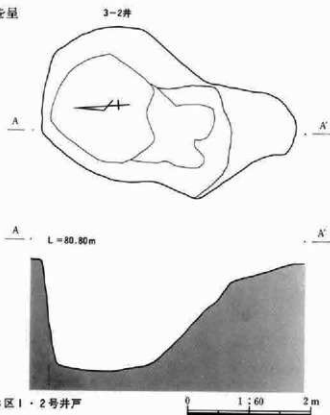
遺 物 出土遺物は全て埋没土中からで、実測個体は砥石1点である。このほか、古墳時代土器片、円筒埴輪片が見られる。(観、P214)

備 考 1号住居内に位置している。新旧関係は本遺構が住居に後出する可能性がある。

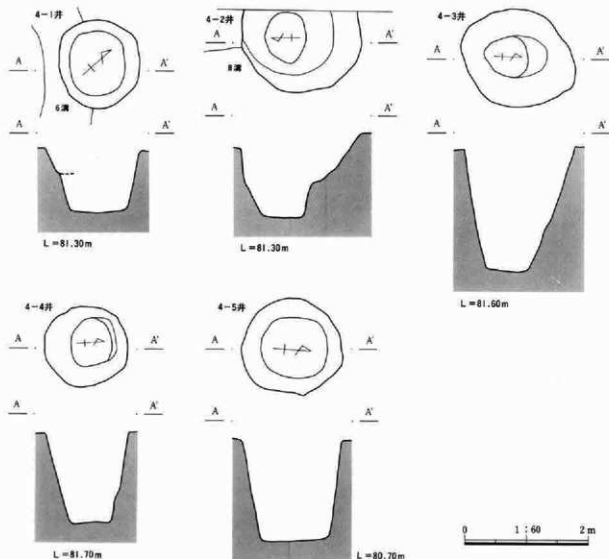
3区2号井戸(P L 7・33)

形 状 東西2.47m、南北4.1mの楕円形を呈する。断面形状は漏斗状と思われるが、南壁が緩傾斜になっている。これは、壁土の崩落によるものか何らかの施設があったのかは、現状からは判断できなかった。

遺 物 実測個体は常滑壺口縁部2点と砥石1点、打製石斧1点の計4点である。常滑壺は2点とも13世紀後半から14世紀前半の年代が与えられる。この他埋没土中より土師器、須恵器破片が数点出土しており、軟質陶器鉢片も3点出土している。(観、P214)



第71図 3区1・2号井戸



第72図 4区1～5号井戸

4区1号井戸 (PL9)

形状 確認面での平面形態は径1.4mの円形を呈する。井筒は漏斗状に1.02m掘り込まれ、底面は平坦である。

備考 6号溝と重複している。新旧関係、構築時期は明確ではない。

4区2号井戸

形状 調査区東端に位置し、1/2の検出であるが、平面形態は径1.9m程度の円形を呈すると思われる。断面は漏斗状に1.36m掘り込まれ、底面は平坦である。南壁は崩落のためか上半部の傾斜が緩くなって

いる。

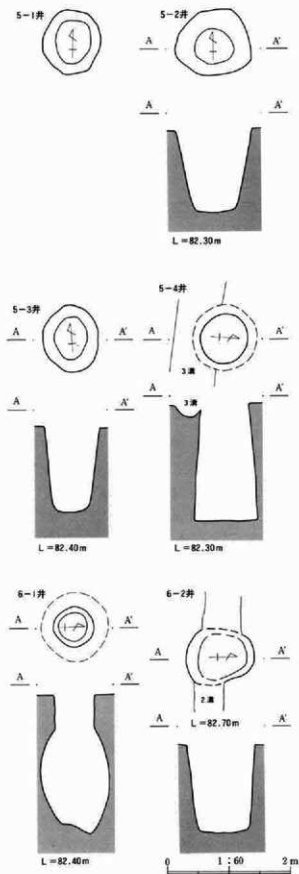
備考 8号溝と重複している。新旧関係、構築時期は明確でない。

4区3号井戸

形状 平面形態は径1.54×1.8mの円形を呈する。井筒の断面は漏斗状に掘り込まれ、深さは2mを測る。底面は平坦である。

遺物 埋没土中から縄文時代後期の土器片6点が出土しているが、本遺構に直接伴うものではないと思われる。

II 荒砥宮川遺跡の調査



第73図 5区1～6区2号井戸

4区4号井戸

形状 平面形態は径1.35mの円形を呈する。断面は漏斗状に掘り込まれ、深さ1.44mを測る。底面は平坦である。

遺物 埋没土中より縄文時代後期土器片6点、土師器甕片2点、滌美系大甕・軟質陶器鉢片各1点が出土している。

4区5号井戸

形状 確認面の平面形態は径1.63mの円形を呈する。井筒はやや傾斜をもつが直角に近く掘り込まれており、深さ1.63mを測る。

5区1号井戸

形状 5区南半の縄文土器片の散布域中にある。平面形態は径0.94×1.03mの円形を呈している。

遺物 埋没土中から縄文時代後期土器片8点が検出された。

5区2号井戸

形状 1号掘立柱建物東側に隣接して位置する。平面形態は径1.07×1.21mの円形を呈している。井筒の断面は漏斗状に掘り込まれており、深さ1.34mを測る。底面は平坦である。

遺物 遺構の構築時期を決定する遺物は検出されなかったが、埋没土中より土師器甕3点、甕4点が出土している。

5区3号井戸

形状 4号住居北側に隣接して位置している。平面形態は0.88×1.09mの円形を呈する。井筒の断面は直角に近く掘り込まれ、袋状を呈す。掘削深度は1.34mを測る。

遺物 埋没土中より瀬之内式土器片が1点出土したのみである。

5区4号井戸 (P L 33)

形状 5区の北端に位置している。確認面での平面形態は0.5mの円形を呈する。井筒は下部に向かうほど広がりを見せる袋状になっている。底面は平坦で、0.7mの円形である。

遺物 実測個体は土師器坏(1)、甕(2)の2点である。その他に土師器坏片11点、甕片6点、縄文時代後期土器片1点が出土している。(観、P214)

備考 3号溝と重複している。

6区1号井戸

形状 確認面での平面形態は径0.43mの円形を呈

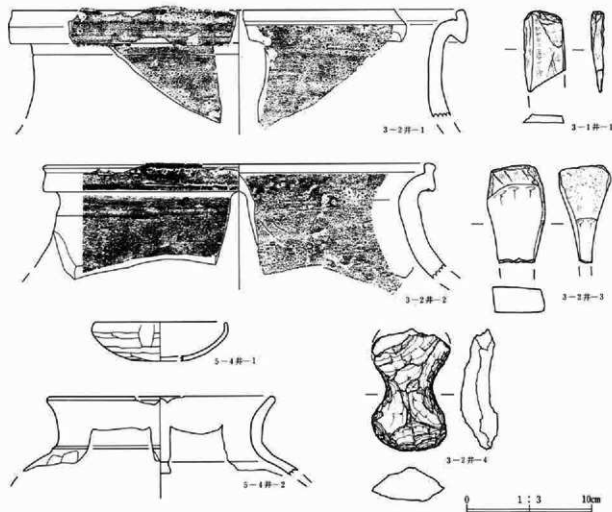
し、深さは1.48mである。壁面は確認面から約40cmで崩落によりオーバーハングしており、最大径は0.73mをはかる。下層の灰白色砂土層を掘り抜き、その下の粗砂層が湧水位になっていると思われる。

遺物 渥美系大塚口縁部片1点、土師器坏片3点、剥片3点が埋没土より出土している。

6区2号井戸 (P L 9)

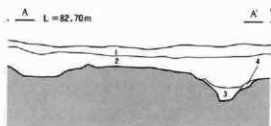
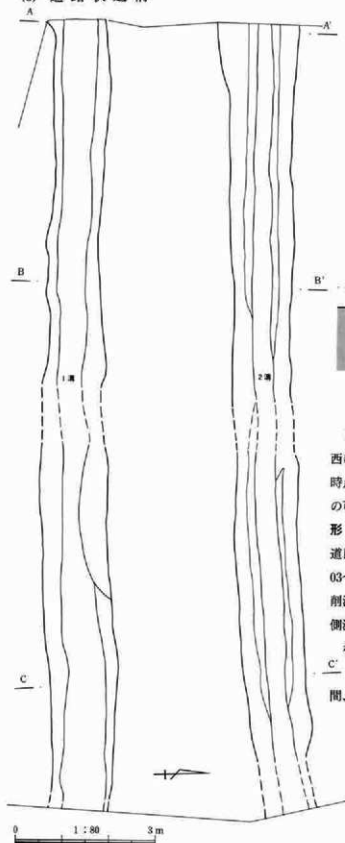
形状 確認面での平面形態は0.82×1.1mの円形を呈する。井筒はほぼ直角に掘り込まれ袋状である。掘削深度は1.4mを測る。

備考 2号溝と重複している。

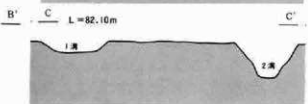


第74図 井戸出土遺物

(6) 道路状遺構



1. 耕作土
2. 黒褐色砂土層 Aa-B, ニツ岳礫石を多く含む。
3. 粘質土と砂粒がラミナ状に堆積する。
4. 3層と地山のシルト層との混土層。



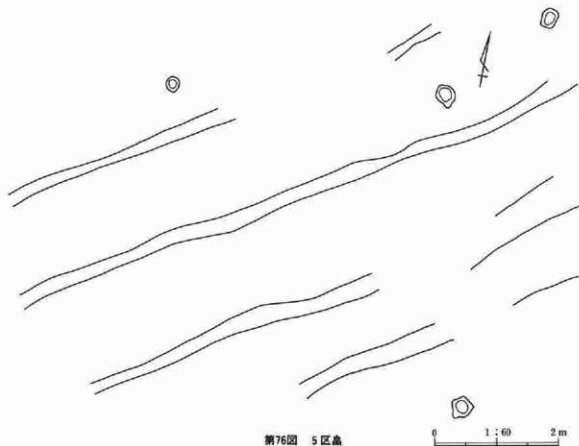
5区道路状遺構 (P L 7)

5区南端に位置し、調査時点で使用されていた東西に調査区を横断する道路の下から検出され、調査時点では溝として扱われていたが、地図等から道路の可能性が高いとして、道路状遺構とした。

形状 道路部分の両側に側溝を持つものである。道路部分の幅は2.45~2.9m、南側溝の上幅は1.03~1.45m、北側溝の上幅は1.17~1.36mを測る。掘削深度は、南側溝で19~38cm、北側溝は50~84cmで南側溝に比べ深く、東西の比高差はほとんど認められない。北側溝の断面は「薬研堀」状を呈する。この規模から考えると、構築当時は道路部分を1.5間、側溝を含めた幅は3間であったと考えられる。

備考 調査時点での使用されていた道路は、今井町の今井神社より南東方向に向かい、宮川を越えた地点で東進し、二之宮赤城神社の参道へと続いている。調査で検出された道路状遺構はこの道路の旧道と考えられる。またこの道路の今井神社から宮川までの部分は今井町と下増田町との町境になっている。

第75図 5区道路状遺構



第76図 5区畠

(7) 畠 (PL 8)

畠は5区のほぼ中央部で検出された。ここは、東から伸びる微高地の西端に位置し、調査時点での地目は菜園であった。

黄色砂壤土を確認面とし、耕作列はAs-Cを多量に含む黒色土(黒く汚れたC軽石)により帯状に覆われていたことによって確認できた。この帯状の溝は畝間であり、畠の形状は広畝になる。また、検出された畝間の溝は深さ1~3cmの浅いもので、痕跡程度の皿状の断面を呈していた。耕作列は4条ほど検出されており、南から第1溝として扱う。

耕作列は調査区のセンターライン付近から東に向かい、N-58°-Eの方向に延びており、全て調査区域外へと続いている。第1溝は5.02mにわたり確認された。溝の幅は15cmほどで、西端がやや北に曲がっている。第2溝は8.2mが検出された。溝の幅は10~52cmであり、東半で南に小さく彎曲している。

第1溝との間隔は約95cmである。第3溝は、4条の中で確認された長さが最も長く9.48mであった。第2溝と同様に東半でやや南に彎曲し、第2溝との間隔は1.4m前後である。第4溝は7.4mが検出された。第3溝との間隔は1.4m前後である。4条のうち第1・2・4溝はそれぞれ東から1/3ほどのところで途切れているが、これは地形が高かったため残存状態が悪くなったと考えられる。また、畝跡などの耕作痕は検出できなかった。

また、本遺跡の発掘区の東側約100mの地点に接する荒砥天之宮遺跡G区でも同様の土で埋没した畠跡が検出されている。両者の遺跡は同一台地にある。畝の走行に違いはあるが、同一耕地面と考えられる。畠の年代については不確定な部分を含むが、恐らく4世紀代のものと考えている。畠の畝を覆うAs-Cは4世紀中頃の降下と考えられているが、本遺跡を始めとして赤城南麓には「C混じり黒色土」と通称されている土壌がある。この土はAs-Cを多量に含

II 荒砥宮川遺跡の調査

んだ黒色土であり、軽石の年代観から4世紀の生成物と考えられることがある。確かに、この土壌は軽石堆積後にスキが繁殖して生成されるものであることから、4世紀中頃以降のものと考えられる。しかし、流動性に富むことから6世紀や10世紀の住居を覆う事例もあることなどから、鍍層として使用するのは危険である(能登 健氏のご教示による)。しかし、本遺跡で鳥を覆う軽石は黒く汚れてはいるが極めて純層に近いものである点で、一次堆積したC軽石がその地点で腐食物によって黒色化したものと考えられる。この推測によれば、鳥の耕作年代は軽石降下のあった4世紀中頃ということになる。

(8) 水田 (PL 8)

調査区域北端の6区、宮川の流下によって形成された沖積地内の約487.5m²の範囲内に6面が検出された。発掘調査時点での地目は水田であり、南側の微高地との比高は60~100cmである。表土から45~50cmで厚さ7~16cmのAs-Bの純層が確認された。上部には小豆色の火山灰層も確認されていることから純層と判断した。

確認された部分では、東から西に向かい傾斜しており、雨水等によって宮川に向かって形成された沖積地の東端であったと思われる。そのため水田の形状は一定ではなく、地形に即した形で造られている。

また、沖積地と微高地との境には、等高線に沿っ

た溝が4条ほど掘削されており、調査時点でも微高地と沖積地との境には現在の用水路が引かれていたことから、これらの溝は水田用水と考えられる。なお、6区1・2号溝は東側の微高地から配置されているが、この方向には溜井が想定(土地改良工事により検出されたが未調査のまま破壊された)されており、溜井灌漑による給水が考えられよう。このことを考えると、北側の宮川からの給水と考えられる6区3~6号溝と、東側からの給水と考えられる6区1・2号溝の間に給水方法の転換があったことになる。6区3~6号溝は現代の用水路と一致することをみると、それ以前に溜井灌漑があって、その後河川灌漑に変化したことを物語っている。

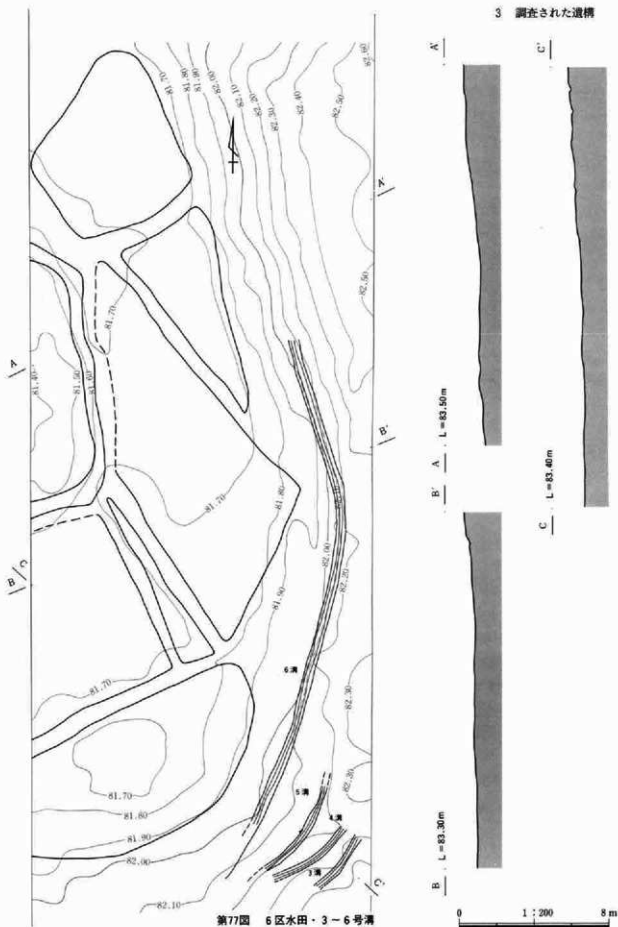
確認された限りでは、畦畔は北西から南東方向へを基準とし、南北方向の畦畔は地形の制約を受けたものと思われる。畦畔の形状はしっかりしており、幅は小畦畔で65~100cm、大畦畔で110~160cm、高さは5~10cmである。

As-B層の下の水田耕作土は、黒色粘質土が5~10cm程の厚さで堆積しており、水田面は浅いくぼみが多数見られた。なお、As-B下水田の調査後に下層に土層観察用のビットを掘った結果、さらにF A層が確認された。このF A層直下には畦畔状の高まりが見られ、ここにも水田が想定された。しかし、調査工程上の問題から全面的な調査をすることができなかった。



水田面の検出作業

3 調査された遺構



第77図 6区水田・3-6号溝

II 荒砥宮川遺跡の調査

(9) 溝

調査区全体で23条の溝が検出されている。その各区の内訳は、2区が6条(4号溝は欠番)、3区が2条、4区が8条、5区が1条、6区が6条である。埋没土や底面の観察などから、流水のあった痕跡は認められなかった。

2区南半の1～6号溝は4号溝を除いて走行方向を同様にし、調査前の農道の走行方向とも同じである。また、4号溝埋没土は耕作土に近い粘性のない褐色土が堆積しており、6条とも近世以降の耕作に伴うものと考えられる。

微高地上の2区7号溝から6区2号溝は東西の走行である。沖積地の6区3～6号溝は等高線に沿って掘削されており、水田耕作に伴い数回の掘削が行われたことが窺える。

出土遺物は全ての溝において埋没土中からであるが、機能していた時期を示す遺物としては、3区1号溝の宋銭と3区2号溝からのかわらけの出土がある。

2区1号溝

形状 遺跡の南端を北西から南東に弧を描きながら走行している。全長4.1mであり、調査区外に伸びると思われる。

遺物 土師器破片2点、円筒埴輪破片1点が埋没土中より出土している。

2区2号溝 (P L33)

形状 長さ3.1mを検出した。調査区外北西方向に直進して伸びるものである。残存深度は浅い。

遺物 埋没土中から土師器破片10点、円筒埴輪7点が出土しているうち、2点を実測個体として取り上げた。(観、P215)

2区3号溝

形状 調査区西端より弱く蛇行しながら走行する。断面は直線的に掘削され、長さは5.2mであり、調査区外に伸びるものである。

2区5号溝

形状 調査区内を北西から南東に斜めに横断している。長さ14.5mが検出されたが、調査区外に伸びるものと思われる。

遺物 実測個体はなく、埋没土中より土師器破片10点、円筒埴輪破片2点が出土している。

備考 2区5号土坑、4号溝と重複している。

2区6号溝

形状 北側の落ち込みと、南側の1号土坑との間を直線的に走行している。検出された長さは、3.12mである。

遺物 埋没土中より土師器破片3点、円筒埴輪破片1点が出土している。実測個体はない。

備考 2区1号土坑と重複している。

2区7号溝 (P L8)

形状 調査区を東西方向に横断している。検出された長さは20.5mであり、東西の調査区外に続いており、走行はN-69°-Eである。

遺物 埋没土中より、土師器破片40点、円筒埴輪破片41点、灰軸陶器破片1点が出土している。

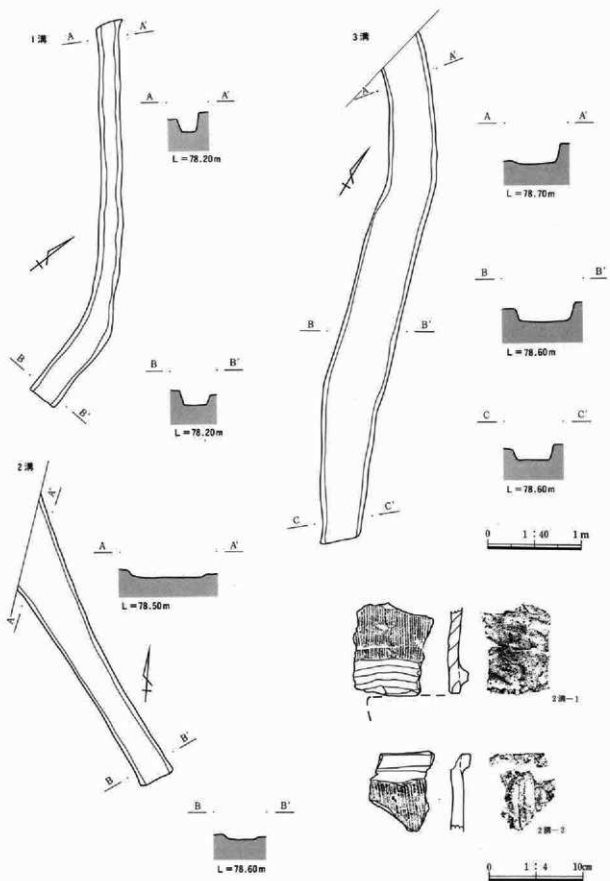
備考 2区7号溝から3区2号溝までは走行方向がほぼ同様である。2区2号溝と重複するが古墳が溝に先行するものと思われる。

3区1号溝 (P L33)

形状 調査区を東西方向に横断している。検出された長さは13.1mで、遺構は東西とも調査区外に続いている。幅はほぼ一定であるが、1号溝との重複箇所では拡張している。走行はN-74°-Eである。

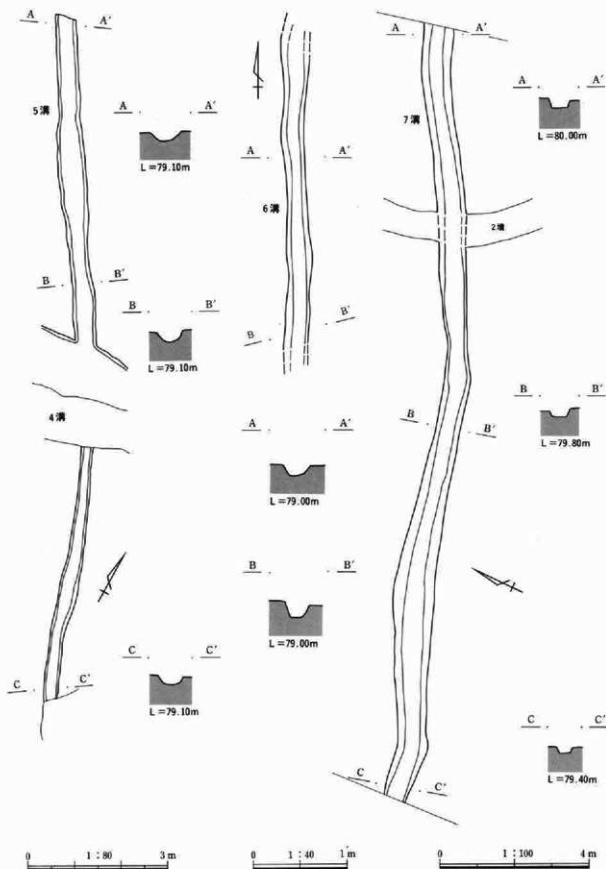
遺物 実測個体は、北宋銭である聖元元寶1点である。その他に埋没土中よりかわらけ・常滑壺破片・砥石破片が各1点、須恵器壺破片2点、土師器破片30点、円筒埴輪破片11点が出土している。(観、P215)

備考 3区1号溝と重複するが古墳が本遺構に先行するものと思われる。

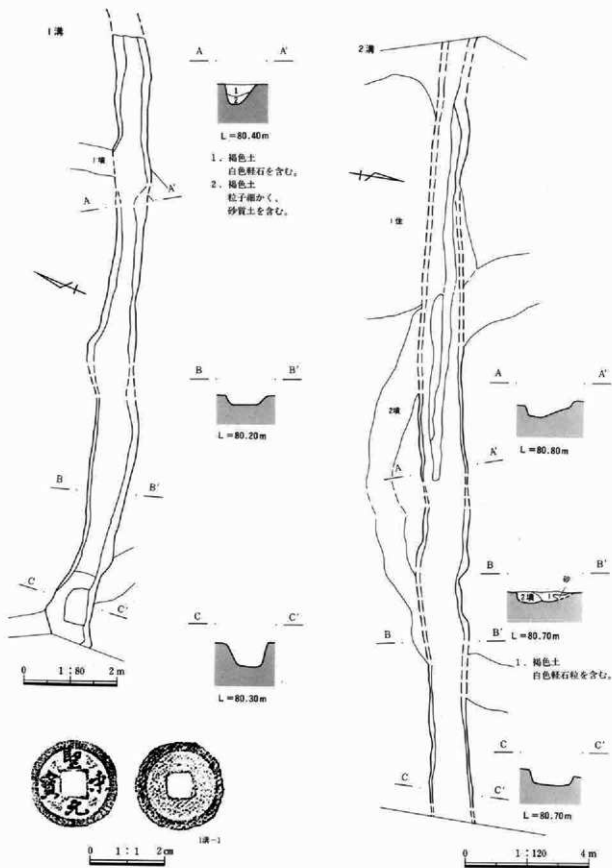


第78図 2区1・2・3号溝・出土遺物

II 荒砥宮川遺跡の調査



第79図 2区5・6・7号溝



第80図 3区1・2号溝・出土遺物

II 荒砥宮川遺跡の調査

3区2号溝 (PL33)

形状 調査区を東西方向に横断している。検出された長さは24.2mで、遺構は東西とも調査区外に伸びている。走行はN-82°-Eである。

遺物 実測個体はかわらけ(1)の1点のみである。その他に青磁破片1点、須恵器甕破片2点、S字状口縁台付壺破片19点、土師器破片80点が出土している。(観、P215)

備考 1号住居、2号墳と重複し、本遺構

に先行するものである。第81図 3区2号溝出土遺物



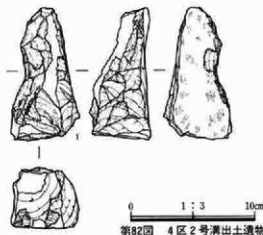
4区1号溝 (PL9)

形状 調査区東端を外縁として、緩い弧を描きながら東西方向に走行する。検出された長さは10.8mで、幅は東から徐々に広くなり0.96~1.82mを測る。確認面からの掘削深度は浅く、上端と下端の区別は困難である。

遺物 実測個体はなく、埋設土中より縄文時代後期土器破片10点、S字状口縁台付壺破片1点、須恵器破片1点、土師器破片3点が出土している。

4区2号溝 (PL9・34)

形状 南側に隣接する1号溝に沿い、北に膨らむ弧を描きながら東西に走行している。検出された長さは10.3mで、調査区の西に続いている。溝幅はほ



第82図 4区2号溝出土遺物

ぼ一定で32cm前後である。

遺物 実測個体は砥石(1)の1点のみである。砥石はスタンプ形石器からの転用である。(観、P215)

4区3号溝 (PL9)

形状 調査区を東西方向に横断している。検出された長さは11.8mで、東西の調査区外に続いている。走行はN-85°-Eであり、溝幅は66~82cmで掘削深度は34~65cmを測る。

備考 4溝と平行に走行している。

4区4号溝 (PL9)

形状 3号溝と平行に、調査区を走行している。検出された長さは11.9mで、東西の調査区外に続いている。溝幅は30~50cmを測り、東に比べ西が拡張している。掘削深度は5~17cmを測る。

4区5号溝 (PL9)

形状 3・4溝と同様に東西に調査区を横断している。溝は東西の調査区外に伸びており、検出された長さは11.1mである。断面の形状は「葉研翹」状を呈し、東端では形が崩れ南側がテラス状になっている。

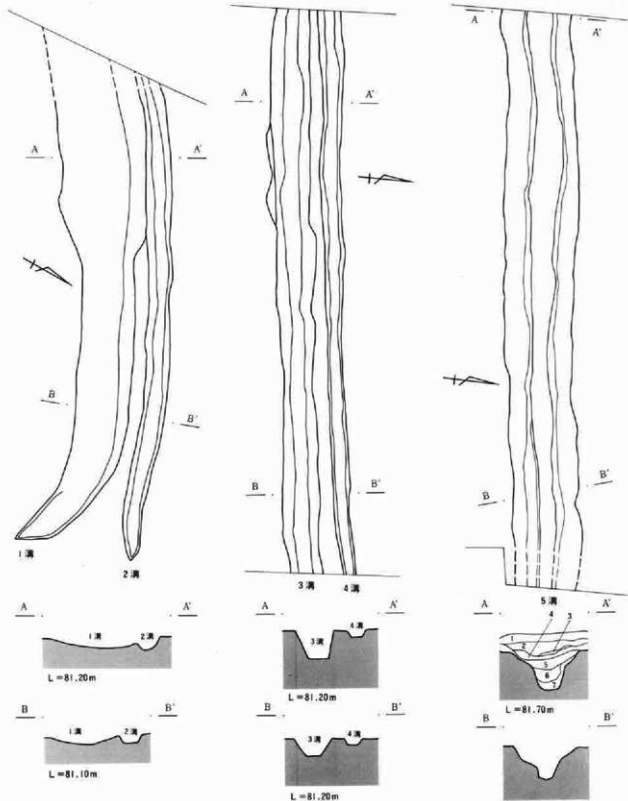
遺物 実測可能な個体は検出されなかった。埋設土からは縄文時代後期土器破片2点、土師器壺破片1点、渥美または常滑甕片1点が検出されている。

備考 断面の形状から掘削時期は中世の可能性が考えられる。

4区6号溝 (PL9)

形状 調査区を北西から南東に緩やかな弧を描きながら横断する。調査区外に遺構は伸び、走行はN-50°-Wである。幅は0.82~1.22mを測り、掘削深度は28~34cmである。埋設土は東で褐色の砂質土及び褐色土が、西よりでは白色軽石の混入する灰褐色土が堆積している。

遺物 S字状口縁台付壺破片1点、土師器壺破片2点が埋設土中より検出されている。



5 溝埋没土層

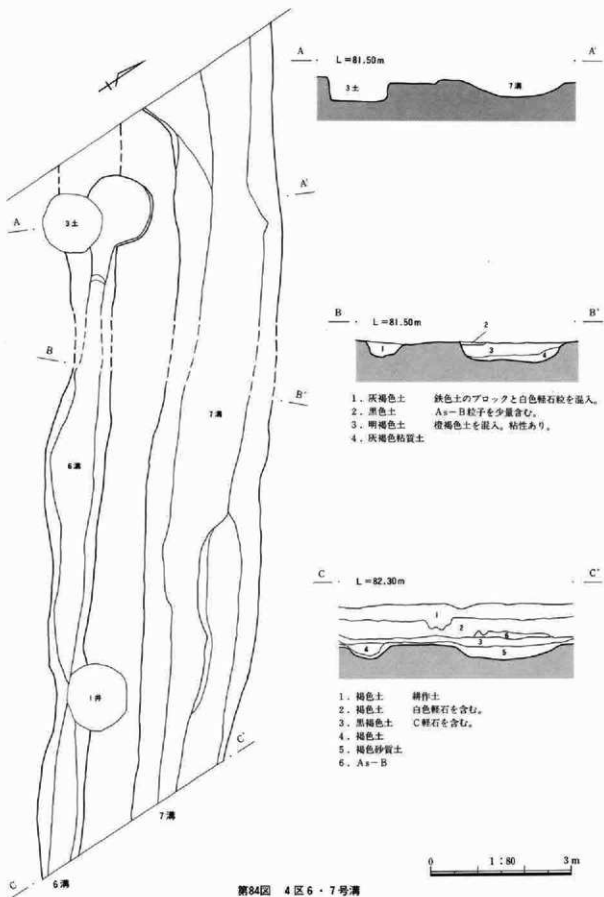
- 1. 褐色土 耕作土粒子細く、サラサラしている。
- 2. 褐色土
- 3. 褐色土 As-Bが少量に混入。

- 4. 灰褐色土 粒子細かくしまっている。軽石を若干含む。
- 5. 灰褐色土 粒子細かくしまっている。
- 6. 褐色土 灰褐色土の小ブロックを含む。
- 7. 黄褐色土 粒子は非常に細かくしまっている。

第83図 4区1-5号溝

0 1:80 2m

II 荒砥宮川遺跡の調査



第84図 4区6・7号溝

備考 断面C—C'の観察により6号溝の覆土上に浅間B軽石の堆積層が認められる。このことにより、6号溝の掘削時期は浅間B軽石降下に先行することが分かる。3号土坑、1号井戸と重複している。

4区7号溝 (P L 9)

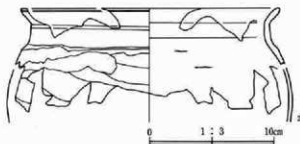
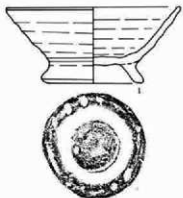
形状 6号溝の北側に6号溝と平行するように位置している。溝幅は1.86~3.02mで、掘削深度は26~36cmを測る。遺構は調査区外に伸びており、検出された長さは16.4mである。走行はN-53°-Wである。埋没土は東側で褐色の砂質土が、西寄りで明褐色土と褐色の粘質土が堆積している。

遺物 実測可能な個体は検出されなかったが、埋没土中より縄文時代後期土器片2点、S字状口縁台付甕破片1点、土師器坏破片1点が検出されている。

備考 東側断面の観察により、覆土上面にAs-Bが堆積している。7号溝の掘削時期はAs-Bに先行するものである。

4区8号溝 (P L 33・34)

形状 調査区を北西から南東方向に、緩やかな弧



第85図 4区8号溝出土遺物

を描きながら横断している。溝幅は4.1~4.8mを測り、確認面からの掘削深度は15~53cmである。走行はN-53°-Wで東西の比高差は24cmである。

遺物 実測個体は須恵器高台付椀(1)、土師器甕(2)の2点である。その他に埋没土中から堀之内式土器破片25点、S字口縁台付甕破片3点、土師器破片14点、須恵器破片1点、灰陶陶器碗破片1点が検出されている。(観、P215)

備考 2号井戸と重複している。走行方向は6・7号溝とほぼ同じである。

5区3号溝

形状 調査区を東西に横断している。溝幅は38~49cmで、残存深度は10~24cmを測る。検出された長さは11.7mで、遺構は調査区外に続いている。走行はN-85°-Wである。

遺物 実測可能な個体は検出されなかった。埋没土中より土師器破片が2点検出されている。

備考 7号住居、4号井戸と重複している。

6区1号溝 (P L 9)

形状 調査区の中央部を外縁とし、東西方向の溝である。外縁から1.6mで126°東に折れ、東側は調査区外に伸びている。検出された長さは7.8mで、溝幅は56~86cm、確認面からの残存深度は4~16cmを測る。走行はN-89°-Wである。

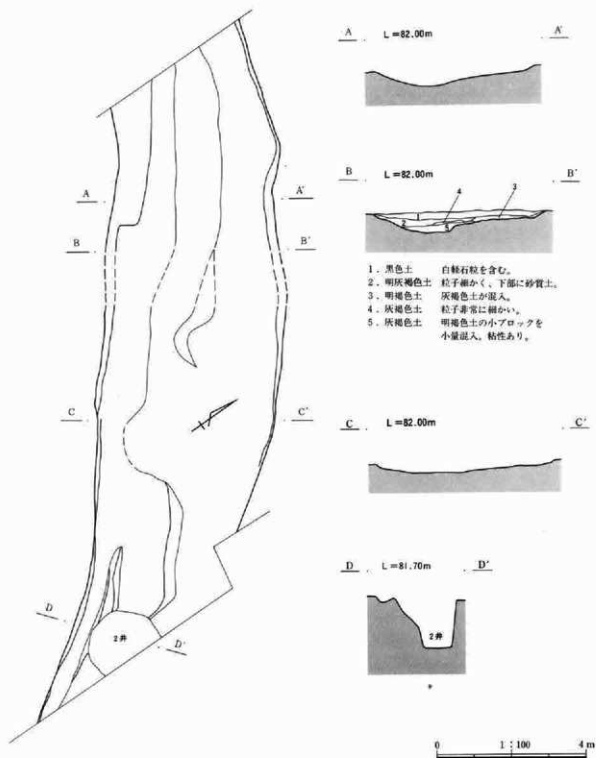
遺物 実測可能な個体は検出されなかった。埋没土中から堀之内式土器破片6点、土師器破片3点、灰陶陶器破片1点が検出されている。

6区2号溝 (P L 9)

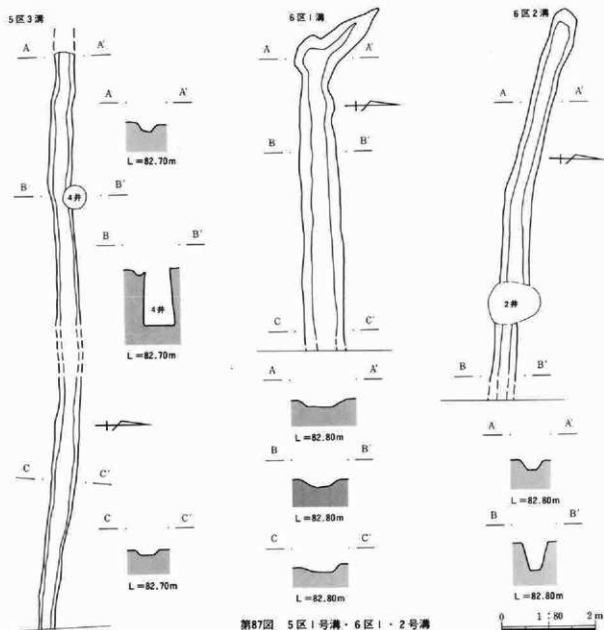
形状 微高地と沖積地との境に掘削され、調査区の中央部を外縁とし、緩やかに弧を描いて東西に横断する溝である。溝幅は45~58cm、確認面からの残存深度は20~68cmを測る。

備考 2号井戸と重複しているが、新旧関係は不明である。6区1・2号溝については、東側調査区外において掘井が確認されており、1・2溝の北に

II 荒砥宮川遺跡の調査



第86図 4区8号溝



第87図 5区1号溝・6区1・2号溝

開かれているAs-B水田への給水が想定される。

その後の水田耕作に伴い、数回の掘削が繰り返し行われたものと考えられる。

6区3～6号溝

形状 6区の沖積地に位置し、等高線に沿って南北方向に緩やかに弧を描いて掘削されている。幅はそれぞれ50cm程度であり、検出された長さは最も長い6号溝で26.5mであった。

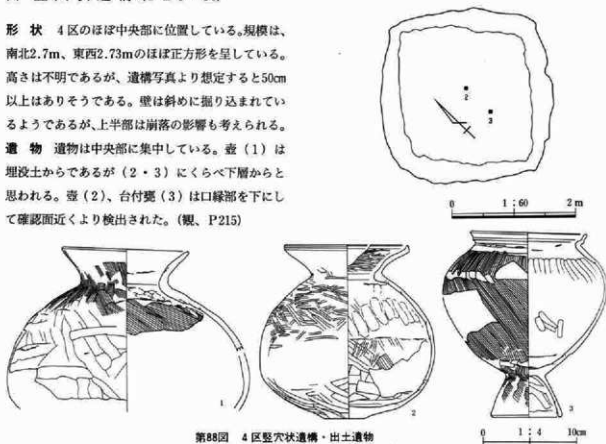
備考 調査時点でも本遺構の上には水路が掘削されていた。西にはAs-B下水田が位置しているが、これらの溝はこの時期の水田に伴うものではなく、

II 荒砥宮川遺跡の調査

⑩ 竪穴状遺構 (PL9・34)

形状 4区のほぼ中央部に位置している。規模は、南北2.7m、東西2.73mのほぼ正方形を呈している。高さは不明であるが、遺構写真より想定すると50cm以上はありそうである。壁は斜めに掘り込まれているようであるが、上半部は崩落の影響も考えられる。

遺物 遺物は中央部に集中している。壺(1)は埋設土からであるが(2・3)にくらべ下層からと思われる。壺(2)、台付甕(3)は口縁部を下にして確認面近くより検出された。(観、P215)



第88図 4区竪穴状遺構・出土遺物

⑪ 遺構外の出土遺物 (PL34~38)

遺構外からは縄文時代後期から中世にわたる遺物が出土しており、そのなかから主なものについて図化した。

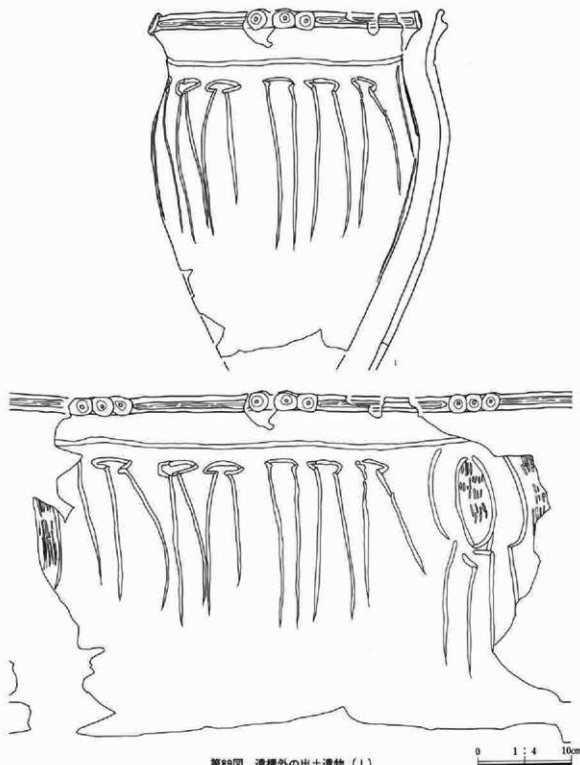
縄文時代では後期前半期の堀之内Ⅰ式土器が大半で、他に加曾利B2式土器(第93図74~76)が若干出土している。これらの土器は3区から5区にかけて散在した状態で出土した。遺構の存在を示唆するような出土状態は認められなかったが、ほぼ完形に復元した第89図1は一括状態で確認されており、埋設土器であった可能性が高い。この土器も含めて、本遺跡出土の堀之内Ⅰ式土器は前段階の称名寺Ⅱ式土器の特徴を色濃くとどめるものが多く、堀之内Ⅰ式のなかでも古い様相に比定されよう。ただし、第93図67~69は新しい様相の一群である。

ところで、本遺跡の北西対岸に位置する二之宮洗

橋遺跡も、本遺跡と同様の砂壤土を原形面とする微高地上に立地する遺跡である。ここでは1987(昭和62)年に実施された上武道路建設に伴う発掘調査の際、砂壤土下についても一部確認調査が行われ、砂壤土下黒色土中より縄文時代の剥片数点が出土した。残念ながら土器の出土は認められなかったが、砂壤土直下のC14年代測定では5890±110y. B.P.の



5区調査区南半地点縄文土器出土状況



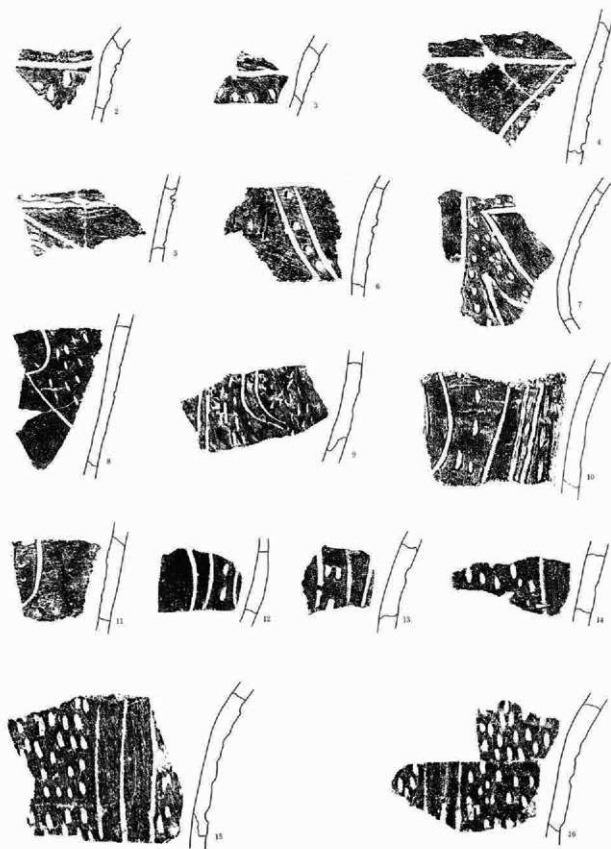
第89図 遺構外の出土遺物(1)

年代が得られている。そして、砂壌土上面では本遺跡と同様に縄文時代後期前半の土器が出土している。

また、本遺跡の北側に接する二之宮千足遺跡では、

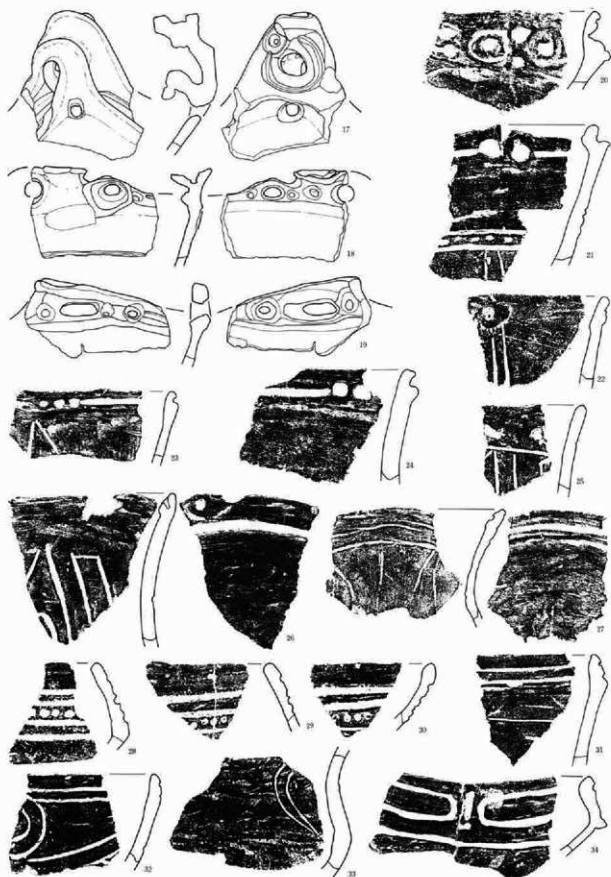
東側の谷地内に砂壌土を伴う二次堆積ロームの堆積が確認され、その下位からは早期終末の条痕文系土器が、上位からは中期終末の加曾利E4式土器、および後期前半の壱之内I式土器が出土している。

II 荒砥宮川遺跡の調査



第90図 遺構外の出土遺物(2)

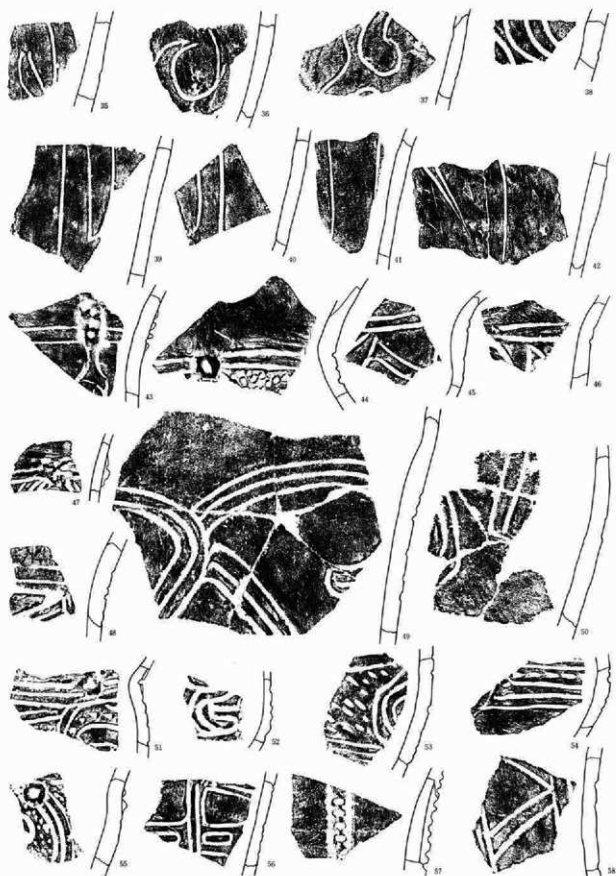
0 1:3 10cm



第91図 遺構外の出土遺物(3)

0 1:3 10cm

II 荒砥宮川遺跡の調査



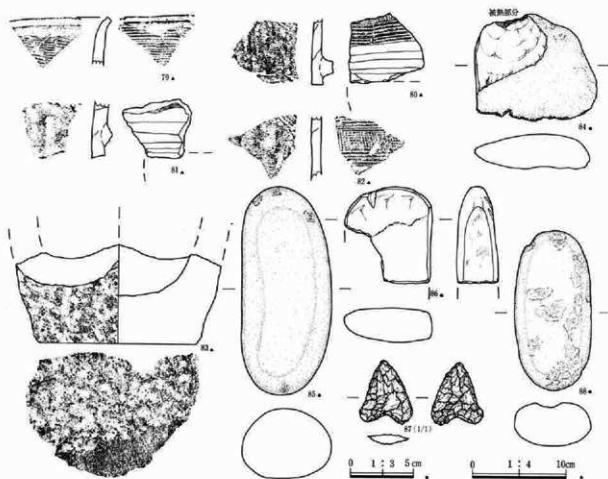
第92図 遺構外の出土遺物(4)



第93回 遺構外の出土遺物 (5)

0 1 : 3 10cm

II 荒砥宮川遺跡の調査



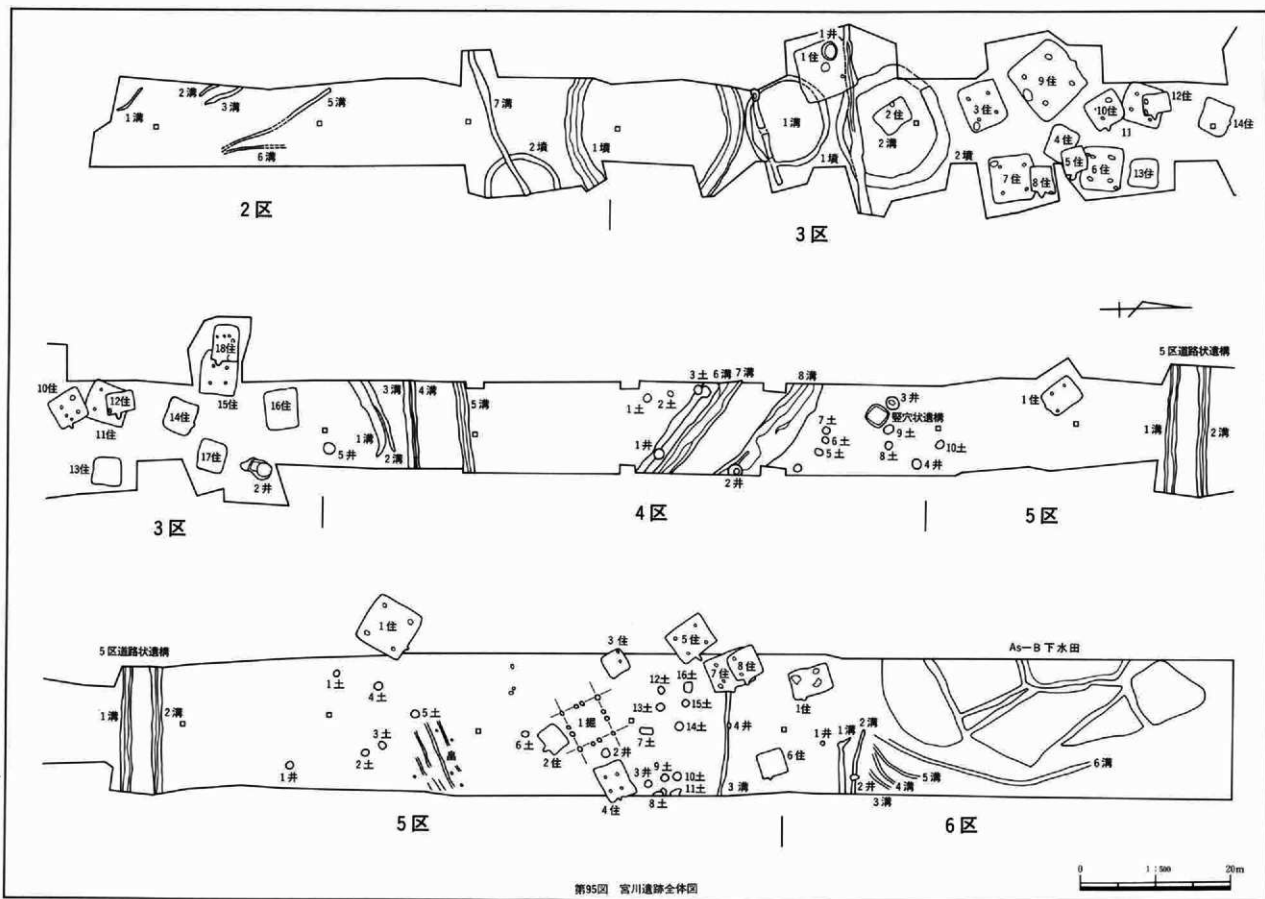
第94図 遺構外の出土遺物(6)

以上の各遺跡の調査結果を総合すると、今から約6000年前(縄文時代早期終末頃)に赤城山の山体崩壊があり、宮川下流域に流れついた砂壤土質の崩壊土が微高地を形成した。そして、縄文時代後期初頭以降はこの微高地も安定し、生活の舞台に加わったものと考えられる。本遺跡ではその後4世紀代には集落が形成されることになる。

第94図79・80・82の円筒埴輪片は、2次調整のB種横刷毛を施すものである。第94図81を含めた4点とも硬質に焼き上げられ、同図80の突帯の断面形は方形で突出度も高い。

本遺跡において2～3区にかけて4基の古墳が調査されている。これらの古墳は4基とも互いの周囲が接するほど間隙なく密集しており、4基のうち2区1号墳、3区1・2号墳では埋没土下層にFAが純

層堆積している。また、2区1号墳、3区2号墳出土の土器の所産年代は5世紀末葉と考えられる。遺構外から出土した円筒埴輪片と本遺跡において調査された古墳とは所産年代に開きは見られない。宮川の左岸、本遺跡の下流部に位置する荒砥宮原遺跡においても、本遺跡とほぼ同時期と考えられる古墳が2基検出されている。これらのことより、本遺跡周辺では5世紀後半代には古墳の築造が開始され、初期群集墳を形成したと考えられる。(観、P 216～220)



第95回 宮川遺跡全体図

III 荒砥宮原遺跡の調査

1 調査の方法

本遺跡の調査は、前項の荒砥宮川遺跡と同様、一級河川宮川の河川改修事業に伴うものである。遺跡は、宮川の右岸、荒砥宮川遺跡の調査区南端から約150m南寄りに位置している。新流路掘削予定地域における分布・試掘調査の結果、古墳時代前期からの遺跡であることが確認された。

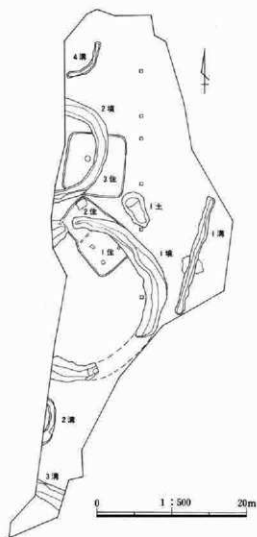
調査対象地となる953㎡において、褐色の耕作土20～30cmを、大型掘削機械による全面的な除去、人力による遺構確認、調査を行った。

2 遺跡の基本層序

調査時点での地目は桑園と畑であった。表土となる耕作土は、細砂質からなる暗褐色土であり約30cm堆積している。以下は砂質灰白色の小ブロックを含む、暗褐色の地山となり、遺構の確認面になっている。

3 調査された遺構

荒砥宮原遺跡は北西方向から伸びる低台地の東縁辺に位置している。今回の調査では古墳時代前期の竪穴住居跡3軒、中期後半の古墳2基、時期不明の土坑1基、溝4条を検出した。今回は調査対象地が狭く、その成果から遺跡の実態を正確に把握することは困難であるが、古墳時代前期の住居を壊して古墳が造られている点が特徴的である。周囲の畑中では古墳の残跡や埴輪の分布が確認できる。このことは、農耕集落が変遷する過程で、古墳時代の中頃から後半の時期にこの遺跡の周辺が居住域から墓域に移行していったことを示していると考えられる。これに対し、同一台地上には、上武道路の建設に伴い発掘調査された二之宮洗橋遺跡・二之宮谷地遺跡・今井道上下道遺跡、圃場整備事業に伴い発掘調査された荒砥洗橋遺跡があり、古墳時代から奈良・平安



第96図 荒砥宮原遺跡全体図

時代にかけて継続する集落や、古墳時代・平安時代の水田が検出されている。集落が立地を異にして台地全面に展開した結果であろう。



荒砥宮原遺跡全景（北から）

III 荒砥宮原遺跡の調査

(1) 竪穴住居

古墳時代前期の竪穴住居3軒を検出することができた。後出する古墳により破壊されていること、耕作が遺構面まで及んでいることにより、遺構の残存高は浅く、検出された遺物も少ない。

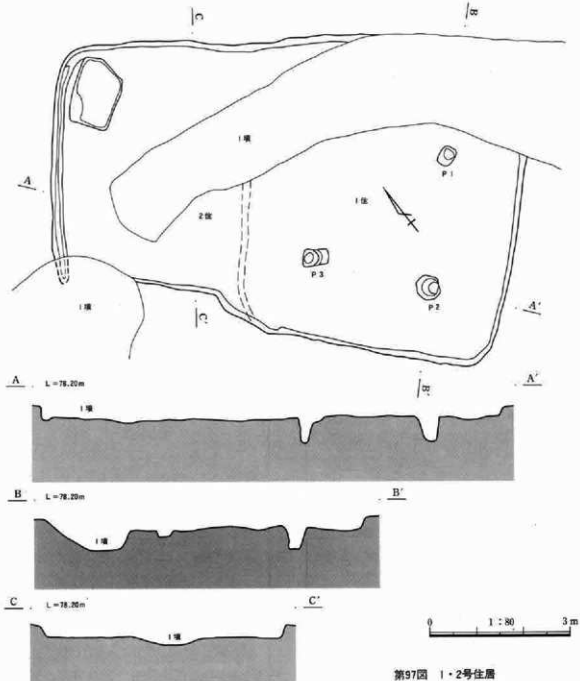
1・2号住居 (P L 10・39)

形状 両住居とも矩形を基本としている。1号住

居は2号住居・1号墳との重複により東・南壁と北壁の一部が検出されたのみである。2号住居は同じく重複により北・西壁と南壁の一部を検出したにとどまった。1号住居の規模は、推定で南北6.22m×東西5.92mで、2号住居は南北5.28m×東西4.0m(残存)であった。残存壁高は、1号住居が19~30cm、2号住居が17~27cmである。

面積 1号住居 (36.4㎡)

2号住居 (23.1㎡)



第97図 1・2号住居

方位 1号住居 N-53°-E

2号住居 N-40°-E

埋没土 両住居とも耕作痕が多く入っていた。全体的に暗褐色土が堆積しており、部分的に白色軽石の混入が見られた。

柱穴 1号住居より3基が検出された。心芯間を結んだ形状は、住居と相似形を呈すると思われる。心芯間の距離は $P_1 \sim P_2$: 2.82m、 $P_2 \sim P_3$: 2.7mであり、規模(短径×長径×深さ)は、 P_1 : 36×42×16cm、 P_2 : 49×54×47cm、 P_3 : 36×52×51cmを測った。また、 $P_2 \cdot P_3$ の掘り方の上端での形状は長方形を呈している。

周溝 2号住居の西壁際で4.6mにわたり確認された。幅は6~10cm、深さ1~5cmであった。

遺物 出土遺物は全て埋没土からであり、実測可能な個体は3点であった。(観、P221)

備考 1・2号住居は出土遺物に時期の差が明瞭

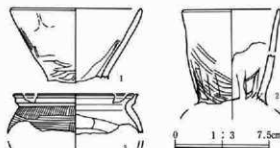
につかず、どちらが先行するものか判断できなかった。1号墳は両住居に後出するものである。

3号住居 (P L 10・39)

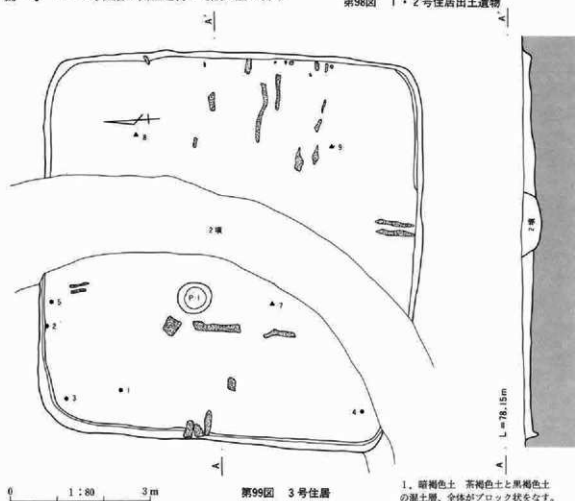
形状 矩形を基調としているが、東西がやや長くなる。規模は、南北8.1m、東西8.22mであり、残存深度は21~50cmである。

面積 63.8m² 方位 N-88°-W

埋没土 暗褐色土を主体に堆積しており、黒褐色



第98図 1・2号住居出土遺物



第99図 3号住居

1. 暗褐色土 茶褐色土と黒褐色土の混土层、全体がブロック状をなす。

III 荒砥宮原遺跡の調査

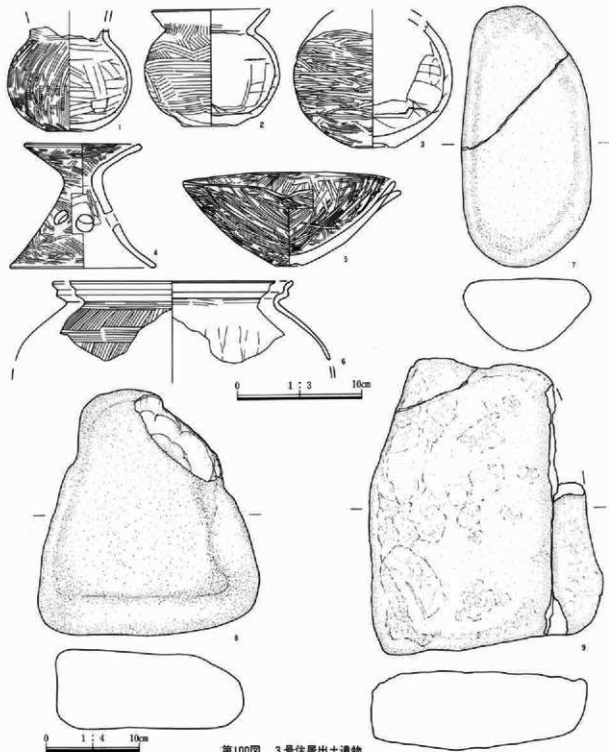
土・茶褐色土がブロック状に混入している。

周溝 南東隅の一部と西壁から北西隅にかけて検出された。幅は2～5cm、深さ1～5cmである。

遺物 実測可能な個体は9点であった。そのうち床面からの出土は、西壁際から埴(1)北壁際から埴(2)、片口鉢(5)、北西隅から埴(3)があり、

住居中央部より砥石(7)、中央部東寄りから台石(8・9)が出土している。(観、P221)

備考 住居床面より炭化材が多量に検出されており、焼失家屋と考えられる。また、本住居は重複する2号墳に先行するものである。



第100図 3号住居出土遺物

(2) 古墳

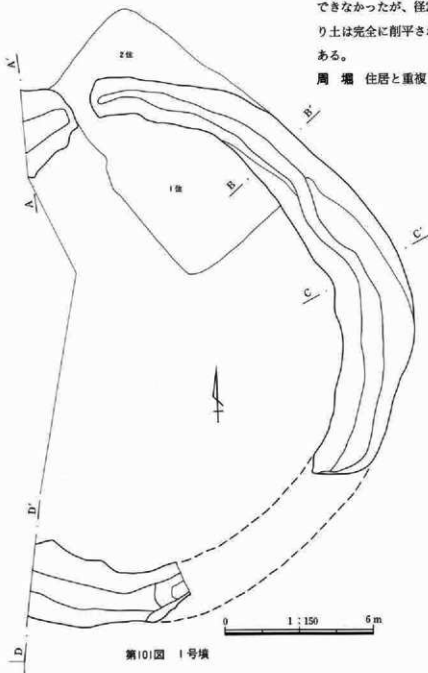
本遺跡で検出・調査された2基の古墳は、西側から延びる低台地上に位置している。同一台地上の北西約900mには、全長71mの前方後円墳である今井神社古墳がある。今井神社古墳周辺では、1935（昭和10）年の『上毛古墳総覧』によると、27基の小円墳が群在しており、今井神社古墳群を形成していた。翌1981（昭和56）年度の園場整備事業に伴い調査さ

れた今井神社古墳群では、保存された2基の古墳を除いて、削平される3基の古墳の調査が行われ、横穴式石室を有する古墳であることが確認された。本遺跡と同じく宮川河川改修に伴い発掘調査の行われた荒砥宮川遺跡においても、本遺跡とほぼ同時期と考えられる4基の古墳が検出されている。

1号墳（P L 11・39～41）

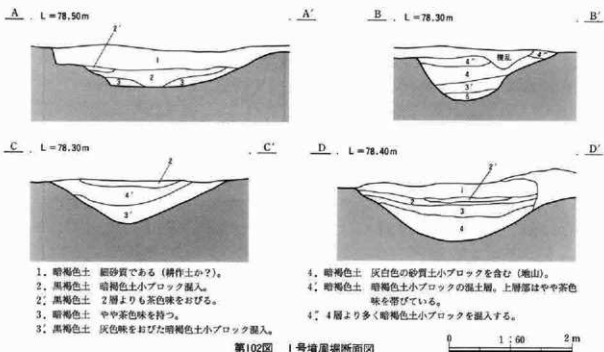
墳丘 西側の周堀は調査範囲外になっており確認できなかったが、径24m程の円墳と推定できる。盛り土は完全に削平されており、墳丘の高さは不明である。

周堀 住居と重複している部分においては、堀の



第101図 1号墳

III 荒砥宮原遺跡の調査



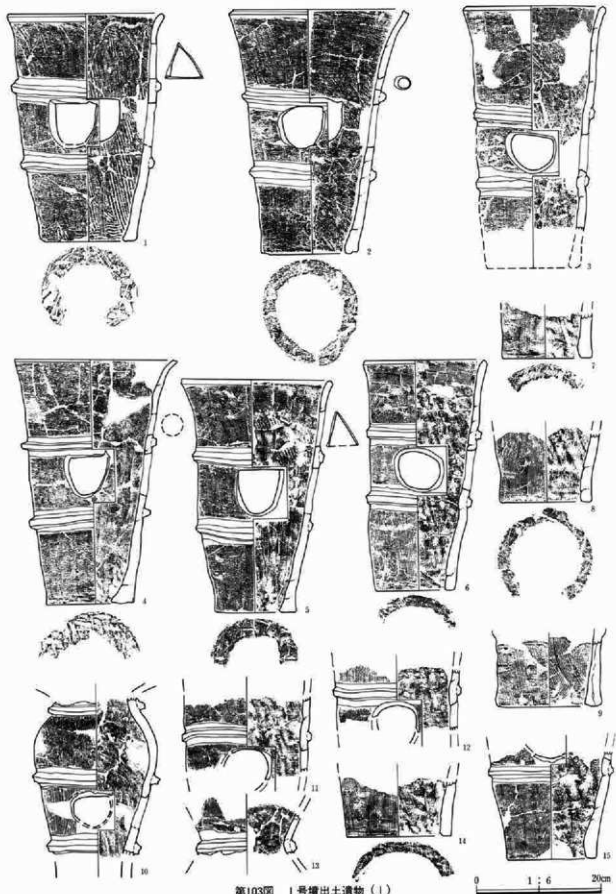
上端を確認することはできなかった。確認された部分での上幅は1.5~3.1m、下幅は0.35~0.92mで、深さ42~80cmであった。断面形状は緩やかなV字状を呈する。埋没土は暗褐色土・黒褐色土を主体に堆積していた。

遺物 円筒形埴輪が多数検出されている。そのほとんどが突帯2条であると思われる。全体の形態は、底径15cm前後で口径が25~30cmの口縁に向けて開くもの(1・2・4・5・8・9・14・15)と、底径10cm前後で口径が20~25cm程度で直線的なもの(3・6・7)の2種類が最低でも確認される。透孔は2段目に1対の円形または半円形を持ち、3段目の片側に小円形(2・4・17)または三角形(1・5)の透孔を持つものが見られる。3段目に透孔を持つものは、口縁部に向かって開く形態のものである。各部の特徴を見ると、口縁部については直線的なものと同外反をするものの2種類があり、それぞれ全体形態の開きぎみのもの、直線的なものと同致する。突帯の断面形状は比較的しっかりした台形を呈する。外面調整は1次炭刷毛のみで、2次調整を省略する。内面は縦位または斜縦位に撫で上げた後に、口縁部付近のみに横位の刷毛目を施しているが、

(1)のみは縦位の粗い刷毛目を内面全体に施している。また、(3・6)には3段目外面に半円形の瘤状の線刻が確認されたが、内面の線刻は見られない。底部の特徴は、底面に棒(管)状圧痕を残すものが多く、(1)では内面調整前の横位の平行な沈線が下端部に残っていた。朝顔形埴輪(10・13・23・25)は肩部の張りがやや弱く、底部に向けて径が小さくなるようである。頸部以上も比較的広がらずに開くと思われる。

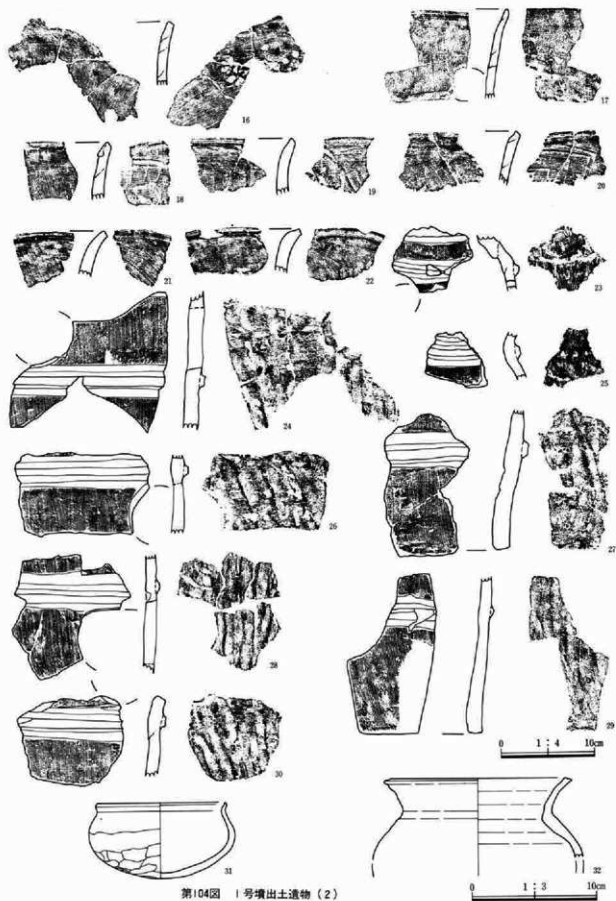
このほかに周堀埋没土中より土師器環(31)、須恵器壺(32)が検出されている。(観、P222~224)

備考 本墳は、重複する1・2号住居に後出するものである。また、本墳の築造は、周堀からの出土土器・埴輪の年代観から5世紀後半から6世紀初頭と想定されるが、周堀の埋没土中にFAの明瞭な堆積は確認されなかった。

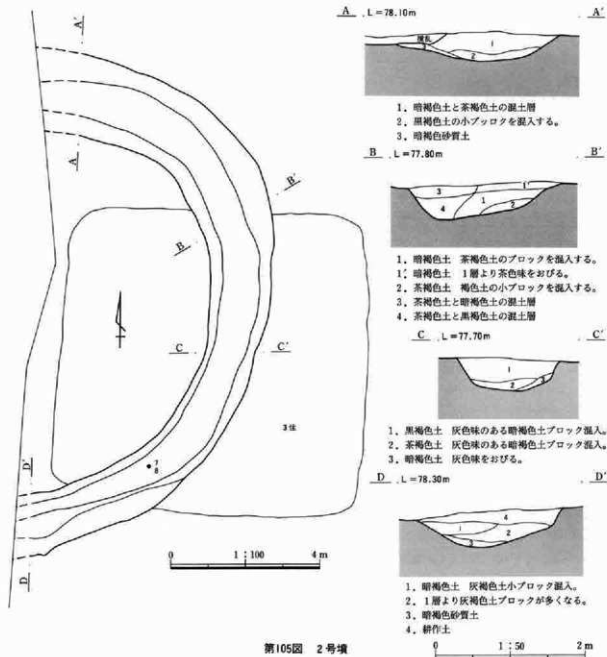


第103図 1号墳出土遺物(1)

III 荒砥宮原遺跡の調査



第104図 1号墳出土土物(2)



2号墳 (P L11・41)

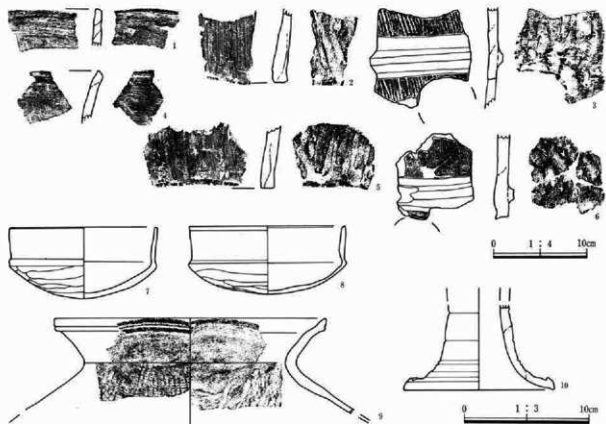
墳丘 1号墳と同様、西側の周堀は調査範囲外になっており確認できなかったが、径約9.2mの円墳と思われる。墳丘の盛り土は完全に削平されており、墳丘の高さは不明である。

周堀 住居と重複している部分での上端は狭くなっている。確認面での上幅は1.9~2.1m、下幅は0.47~0.98mで、残存深度は45~74cmであった。埋没土は最下層に暗褐色の砂質土が堆積しており、灰

褐色土を主体としている。

遺物 出土位置の確認されている遺物は、周堀南東側から出土している土師器環(7・8)の2点のみである。また、埋没土中より須恵器高坏脚部(10)、壺口縁部(9)が出土している。周堀内および3号住居の埋没土中より出土した円筒埴輪片は12点であり、本墳の伴うものである可能性は小さいと思われる。(観、P224・225)

III 荒紙宮原遺跡の調査



第106図 2号墳出土遺物

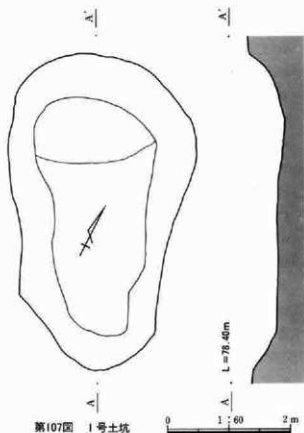
備考 3号住居と重複し、本墳に先行するものである。また、B・Cセクションの第2層、Dセクションの第3層でみられたやや黄味をおびた暗褐色土のブロックはFAのブロックである可能性があるが、断定するに至らなかった。

(3) 土 坑

1号土坑 (P L 11)

形状 調査区の中央部やや北より、工事施工図のセンターライン上に位置する。南北に長い楕円形を呈しており、底面は北側がやや窪むほかは平坦である。規模は、長径5.1m×短径3.0mで、残存深度は34～52cmを測る。

埋没土 黒色味の強い暗褐色土と、灰褐色土の小ブロックとの混土層が埋没していた。下層の壁際では灰褐色土ブロックの混入が多く見られた。



第107図 1号土坑

(4) 溝

本遺跡においては4条の溝が検出されている。4条とも土層観察において、水の流れた形跡はない。また、2・4号溝においては形状が弧をなしており、古墳の周堀である可能性を残している。

1号溝 (P L 12・41)

形状 遺跡の中央部、台地の先端を南北に横断する直線的な溝である。検出された長さは16mであるが、北側は調査区外へと続いている。溝の上幅は1.05~1.2m、下幅は33~50cmであり、深さは60~80cmである。底面のレベルは南へ徐々に低くなっており、南北の比高は12cmである。

埋没土 細砂質の土が堆積している。黒褐色、暗褐色を呈し、斑状に混入している。

遺物 実測個体は、埋没土中より検出した土師器環(1)の1点のみである。また、埋没土中より縄文時代後期土器片1点、S字口縁台付壺片5点、土師器片13点、円筒埴輪片1点が出土している。(観、P 225)

2号溝 (P L 12)

形状 調査区内の南側、西端を弧を描きながら南北に走行している。検出された長さは約6.4mで調査区外へと延びている。上幅で0.77~1.2m、下幅で0.4~1.0mであり、弧を描いている頂点部分が上下とも最も狭くなっている。残存する深さは浅く16~20cmである。

埋没土 茶褐色砂質土の地山を掘り込んでおり、暗褐色土・茶褐色土が埋没していた。

遺物 埋没土中より土器破片が数点検出されている。内訳は縄文時代後期土器片2点、S字口縁台付壺片2点、土師器片6点である。

備考 調査時点では溝として処理したが、古墳の周堀である可能性が考えられる。古墳と考えた場合、径4m前後の円墳が想定できる。

3号溝

形状 調査区の南端を東西に走行している。走行は直線的であり、上幅は西端に比べ東端の開く撥形を呈しており、上幅で2.02~2.48m、下幅で0.8~1.21mを測る。深さは44~50cmで、東西の比高は8cmである。

4号溝 (P L 12・41)

形状 調査区の北端を、南側に膨れる弧を呈し、南西から北東に走行している。調査区内において溝は完結していると思われるが、走行の延長線上に続く溝が存在する可能性もある。規模は、上幅で53~96cm、下幅で35~47cm、深さは14~34cmである。

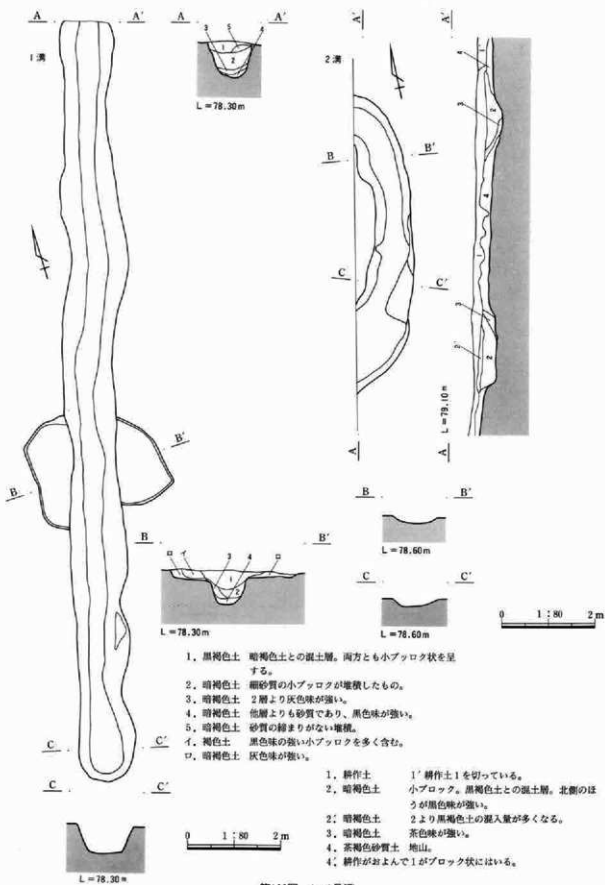
埋没土 灰褐色の細砂土を含む暗褐色土が堆積している。

遺物 実測個体は、埋没土中より出土した土師器環(1・2)の2点である。その他、土師器環片3点、黒曜石剥片3点を検出している。(観、P 225)



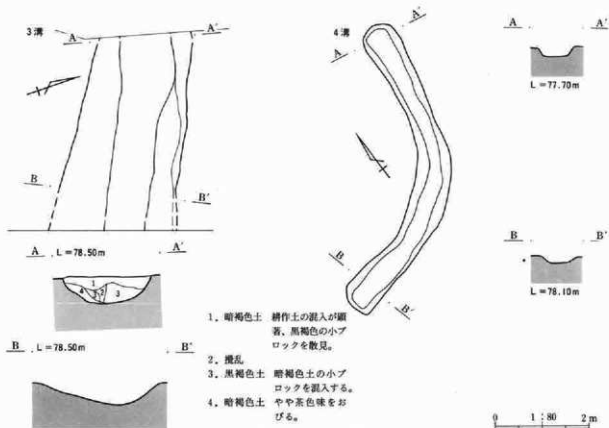
第108図 1・4号溝出土遺物

III 荒砥宮原遺跡の調査



第109図 1・2号溝

3 調査された遺跡



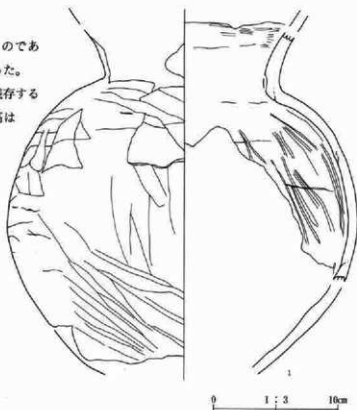
第110図 3・4号溝

(5) 遺構外の出土遺物 (P L41)

本遺物は調査区の精査中に検出されたものである。周囲に遺構を確認することはできなかった。

器種は土師器の壺である。胴部を中心に残存するが口縁部の先端と底部周辺は欠損する。残高は27.0cmである。口縁部は屈曲後反し立ち上がる。球形を呈する胴部は中位やや上に最大径を有し、28cmを復元する。平底の底部が続くものと想定される。

口縁部は内外面に横撫でを施す。胴部の外面荒削り、寛撫で後、棒状工具により斜方向の磨きが施されている。全面に施されたものとおもわれるが、現状では下半に顕著である。内面もていねいな撫でを施した後棒状工具による磨きを重ねている。(観、P225)



第111図 遺構外の出土遺物

IV 今井神社古墳の調査

1 歴史的環境

今井神社古墳は赤砥山南麓末端の台地縁辺に位置する古墳である。西側は南流する荒砥川を挟み広瀬川低地帯が広がっている。また、北側は今井沼近くに谷頭をもち北東方向に延びる開析谷により隔されている。

「上毛古墳総覧」によると今井神社古墳周辺には本古墳を含む22基の古墳が確認されている。現在はそれの中の3・4基が著しく改変を受けた状態で残されているだけであるが、「総覧」の記載内容に基づいてその位置を復元すると今井神社古墳の東側から南側にかけた南北約350m、東西約200mの範囲にわたり古墳群が形成されていたと考えられる。また、今井神社古墳以外は円墳であったと推察される。

これらの古墳群のうち、旧荒砥村312号墳(今井A号墳)・313号墳(今井B号墳)は、1949(昭和24)年に群馬大学による調査が実施された。また、1981(昭和56)年には当事業団が307号墳(今井神社古墳群3号墳、径約19~20m)・312号墳(今井神社古墳群2号墳、今井A号墳と同一、径約32m)・316号墳(今井神社古墳群1号墳、径約40m)の調査を実施した。この中で312号墳は6世紀中頃の築造である。307号墳は横穴式石室の裏込めに角閃石安山岩が使用されており、6世紀中頃以降の築造と考えられる。これに対し313号は壑穴系小石櫛を主体部に有していた。

ここでは付図1で扱った範囲、旧荒砥村とその周辺地域(ここでは仮に荒砥地域と呼称する)における5世紀を中心とした古墳にふれてみたい。

本地域における古墳時代前期の集落は、荒砥島原遺跡や荒砥上ノ坊遺跡をはじめ多数の遺跡で調査されている。そして、これらの遺跡の大半には方形周溝墓群が付随している。中には堤東遺跡や中山A遺跡のように前方後方形周溝墓が混在する事例もある。墳墓にみられる形相差については集落内に多様な階層差が生じてきたことの現れとされている。

ところで荒砥地域における方形周溝墓の調査事例は、26遺跡に及ぶのかかわらず本地域には前期古墳が確認されておらず、今後も大型古墳が発見される可能性は少ないものと考えられる。このような地域特性は、本地域が可耕地を多く要しながらも全域が欠水性であり、大規模な水田経営が困難であったことにより、他に卓越した勢力が結実することが阻害されたことによるものであろうか。

近接する前期古墳としては今井神社古墳から西方約4kmに全長129mの前方後円墳前橋天神山古墳、あるいはこれと前後する時期の築造とされる全長130mの前方後方墳前橋八幡山古墳がある。また、南東5kmに位置する伊勢崎市華蔵寺裏山古墳は全長約40mの前方後方墳とされるが、その実態には不明な点が多い。

方形周溝墓群の形成はそのほとんどが4世紀のなかで終焉を迎えていると考えられるが、本地域においては5世紀前半になっても古墳の築造が顕著にみられない。5世紀の大型古墳としては、今井神社古墳から南東3.75kmに位置する御富士山古墳がある。全長125mの前方後円墳で、有黒斑、外面調整に2次調整B種横刷毛を施す円筒埴輪の特徴から5世紀の中葉あるいはこれをやや滞る時期の築造と考えられる。畿内と同型の長形形石棺の存在はこの古墳の被葬者が周辺地域に与えた影響力の大きさを推量するに充分たるものがある。

また、東北東5.8kmにある赤堀茶臼山古墳は全長59mの帆立貝式古墳である。墳頂部に樹立された8棟の家形埴輪をはじめ腰掛、高坏、蓋、甲冑、鶏などの形象埴輪が出土しているが、人物埴輪は確認されていない。2基ある木炭櫛のうち、北棺の副葬品に三角板革綴短甲が含まれる点や円筒埴輪到有黒斑、外面調整に2次調整B種横刷毛を施す資料が存在することなどから御富士山古墳と前後する時期の築造と推測される。

5世紀中頃から後半にかけて西大室町に舞台1号墳が築造される。全長42mの帆立貝式古墳で、造出部から埋納された石製模造品、鉄製模造品や供献用

IV 今井神社古墳の調査

の土師器が検出された。埴輪では鳥・家・盾・蓋・人物等の形象埴輪の出土が少量確認されている。円筒埴輪は4条突帯で外面調整は縦刷毛が主体であるが、これに横刷毛の資料が少量混在している。

舞台1号墳が築造されたのと前後するこの時期に荒砥地域の各所で小円墳の築造が活発化する。いわゆる初期群集墳の形成開始である。以下それらを列举すると前章報告の荒砥宮川遺跡(円墳4基調査)、荒砥宮原遺跡(円墳2基)、泉沢町新山遺跡3号墳(円墳)、富田町東原古墳群(円墳5基)、大胡町茂木・上ノ山古墳群(円墳5基、墳丘を持たない堅穴系石椁墓、土墳墓)、笈井町笈井八日市遺跡(円墳1基)、西大室町七ツ石古墳群1号墳(円墳)、西大室町上縄引遺跡(円墳3基、もう3基も同時期の可能性がある。埴輪棺2基)、粕川村三騎堂古墳群(円墳4基)をあげることができる。

これらの古墳群はいずれもその全容を把握できたものはないが次のような点に共通性を見いだすことができる。規模は東原古墳群の中におとく山古墳や6号墳のように直径30m前後の中規模古墳を含む事例があるがその他の古墳群は10~20mの小規模古墳が主体である。内部主体は大多数が削平されていたが東原11号墳や上縄引遺跡7号墳で堅穴系小石椁を検出した。茂木・上ノ山古墳群では一墳多葬の事例が認められる。形象埴輪は東原古墳群で家・馬・人物が出土している他はほとんど見られない。円筒埴輪は、無黒斑の二条突帯、三段構成の小型品が主体で、東原古墳群6号墳や上縄引遺跡埴輪棺IIにみられた三条突帯・四段構成の例は客体的な存在である。また、外面調整は一次縦刷毛が主体的で、横刷毛は新山3号墳、東原古墳群6号墳、上縄引遺跡埴輪棺IIで認められただけである。透孔は半円形と円形の二者がみられる。

前述した首長墓の変遷を経て今井神社古墳は築造されたものと考えられる。荒砥地域ではじめて築造された本格的かつ定型化した前方後円墳である。他に同時期の前方後円墳はなく、全長70mを越える墳丘は荒砥宮川遺跡をはじめとした他の小円墳とは全

く隔絶した規模・内容を誇っている。

この突如ともいえる今井神社古墳の出現は、群馬町保渡田古墳群の推移にその共通性を伺わせるものがある。現時点では具体的に証明する材料が得られないが、その直接的背景には保渡田地域でみられたような自然河川の流路変更を伴うような大規模灌漑の整備による農耕地の開発による生産基盤の拡大があったものと考えられる。

また、開発は今井神社古墳の直接領域だけに限らず荒砥地域の各所で多様な形の開発行為が実践され、これまでの生産実績を大きく凌ぐ成果が得られたものと思われる。これは荒砥地域の初期群集墳の形成の開始時期が今井神社古墳の築造年代とほぼ同時期あるいはこれにやや遅れた時期であることという事実やその波及が急速かつ広範囲に及ぶことから想定されるものである。今井神社古墳の出現は本地域においてこれまで継続していた政治的・経済的体制から一歩進展した地域構造が作り出されたことの結果といえよう。

今井神社古墳以後、本古墳周辺にはこの古墳の系譜を直接引くような大型古墳の築造は見られず、6世紀になると桃ノ木川の上流、北西3.9kmの位置に正円寺古墳が、東北東4.8kmに前二子古墳が築造される。特に前二子古墳はその後近接して中二子古墳、後二子古墳と100m級の大型古墳が築造され大室古墳群の中核を形成する。荒砥地域全域をみてもこれらに比肩する古墳はみられず、6世紀を通じて大室3古墳の被葬者が本地域の支配構造の頂点に位置し、政治的・経済的に主導的な立場を堅持していたものと考えられる。

今井神社古墳を取り巻く周辺地域の古墳の動向について概観してみた。今井神社古墳の出現の契機については集落遺跡の調査成果の検討を進めるなかでその社会的背景がより鮮明になってくると考えられる。また、地域の古墳についての詳細な分析により、5世紀前半の墳墓築造の空白期間に対する実態にもせまることが可能になると考えられる。

第4表 今井神社古墳周辺遺跡の概要

番号	名称	所在地	概 要	備 考
A	今井神社古墳群	前橋市今井町 白山東	本報告の今井神社古墳を含めた27基の古墳群が形成され、うち3基が調査される。2号墳は角閃石安山岩削石積の横穴式石室で、弓矢い武装牙子像をはじめとした形象埴輪を出土している。	
B	伊勢山古墳群	前橋市西大室町 伊勢山	伊勢山古墳をはじめ6～7世紀の古墳16基、平安住居12軒、平安井戸状遺構1（須原磁器片量出土）を調査する。	
C	七ツ石古墳群	前橋市西大室町 七ツ石	旧寛政邸9号・72号・73号などの横穴式石室を有する6～7世紀の円墳とともに彫穴系小石塚の検出も知られる。	
D	阿久山古墳群	前橋市下大室町	阿久山古墳は全長40mの横穴式石室をもつ前方後円墳である。周辺には円墳が群集。「上毛古墳総覧」には6基が記載されている。	
E	天神山古墳群	前橋市西大室町 東天神、天神	「上毛古墳総覧」には60基が記載されるが、丘陵南側斜面を中心に帆立貝式古墳1基を含む、30基ほどを調査する。6～7世紀が主体で、小石塚も検出している。	
F	多田山・田内井古墳群	佐波郡赤堀町 今井	多田山丘陵の東南斜面、古墳時代後期の円墳が集中し、「上毛古墳総覧」記載の赤堀町分で20基を数える。多田山2基（7世紀初頭）・田内井7基（7世紀前半～後・円墳・横穴式石室）調査。	
G	向井古墳群	佐波郡赤堀町 下軸字向井	桂川の左岸に位置する。下軸向井遺跡に接する。内1基（円墳・横穴式石室）が調査されている。	
H	石山・片田古墳群	佐波郡赤堀町 下軸・前橋市東大室町	石山丘陵の全域にわたる。「上毛古墳総覧」に71基記載。石山南古墳：円墳 横穴式石室 埴輪馬出土・栗塚古墳群：内、円墳 横穴式石室 7世紀末、極小の彫穴系小石塚 6世紀末～7世紀初頭等調査。	
I	宮貝戸古墳群	伊勢崎市波志江町	神沢川左岸、波志江沼西の小丘陵状。「波志江今宮遺跡」の8基を含む13基を調査。総寛三郎村74号墳：小円墳 横穴式向型石室 大刀・耳環等出土 7世紀後半頃。別称 波志江沼西古墳群・今宮古墳群	
J	二之塚古墳群	前橋市飯土井町	神沢川右岸に位置する。古墳時代後期に小規模な展開をみせる居住域は、その後群集墳が形成され、短期間で基域化している。	
K	八幡林古墳群	佐波郡赤堀町 堀下	田代川右岸に位置する高さ7mの独立丘の南側斜面に位置する。6世紀初頭～7世紀前半構築の4基の横穴式石室の円墳を調査。墳丘下に縄文時代前期住居を4軒検出。	
L	洲山古墳群	佐波郡赤堀町 五日牛	洲山の小丘及びその斜面に分布。「上毛古墳総覧」に21基記載。内8基以上が調査。	
M	蟹沼東古墳群	伊勢崎市波志江町	西桂川左岸の低独立丘（六丈台）上に築かれた古墳群。地蔵山古墳群の西側500mに位置する。約80基が確認され、内60基の古墳を調査。6～7世紀前半の構築で、主体部に横穴式石室を有する。他、縄文時代後期穴式、方形周溝墓6基、溝1条検出。	間之山古墳群を含む
N	地蔵山古墳群	佐波郡赤堀町 五日牛	赤堀町の最南端赤地山の残丘上に位置する。地蔵山古墳を中心に昭和26・27年に調査された遠藤山古墳・栗手塚古墳等、5～8世紀にいたる55基が群集する。	
1	今井神社古墳	前橋市今井町 白山東	本報告書掲載の前方後円墳である。	
2	笈井八日市遺跡	前橋市笈井町 小島田町	「上毛古墳総覧」には前方後円墳を含む20基ほどが知られる。5世紀後半築造の円墳を調査する。また、東西200mほどの規模の居館跡が存在する可能性が指摘されている。	小島田八日市遺跡と同一遺跡
3	荒砥諏訪西遺跡	前橋市荒口町 諏訪西	荒砥川左岸の高地上から古墳住居7軒、古墳5基、奈良平安住居2軒、地下式土壇を検出する。	
4	柳久保遺跡	前橋市荒子町 柳久保	縄文土壇2、古墳～平安住居46軒、掘立11、横穴式石室を主体部に有する古墳4基を調査している。	
5	新山遺跡	前橋市泉沢町 新山	古墳3基を調査し、内1基からは2次調整B種横刺毛の埴輪が出土している。方形周溝墓2基。	
6	丸山遺跡	前橋市泉沢町 丸山	縄文住居1軒、古墳住居67軒、円形周溝墓を検出する。古墳時代の居宅とされる中部の方形区画は東西32m、南北25mの規模で、内区に櫛列を伴い、彫穴住居が検出されている。	
7	小幡岡遺跡	前橋市西大室町 小幡岡	古墳住居1軒、古墳4基（横穴式石室を持つ）、方形周溝墓1基、炭焼窯2基を検出する。	
8	小幡岡6号墳	前橋市西大室町 小幡岡	径30mの円墳で主体部に輝石安山岩と角閃石安山岩の横穴式石室を有する。開口部には竈庭も設置され、当該地域の終末期古墳の好資料である。	
9	大幡岡遺跡	前橋市西大室町 大幡岡	古墳住居10軒、古墳2基（内2号墳は全長48mの帆立貝式古墳で、横穴式石室を有する）。	
10	水口山遺跡	前橋市西大室町 水口山	古墳11基（内1基は帆立貝式古墳、主体部は削平されて不明）、方形周溝墓2基、炭焼窯1基。	

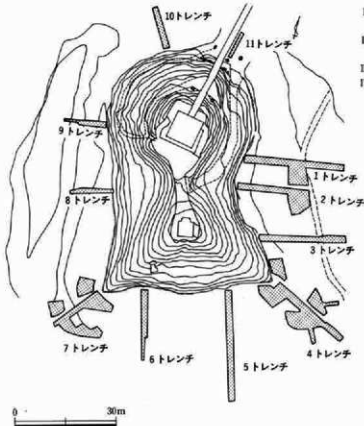
IV 今井神社古墳の調査

番号	名称	所在地	概 要	備 考
11	伊勢山古墳	前橋市西大室町 伊勢山	全長67m、片袖型横穴式石室を主体部にもつ前方後円墳で、周囲のトレンチ調査では埴輪の出土がみられなかった。	
12	中島遺跡	前橋市西大室町	古墳住居17軒、古墳8基(竪穴系小石塚、横穴式石室の2種あり)、掘立1棟。	
13	富士山1遺跡1号古墳	前橋市西大室町 阿久山	径38m、三段築成の円墳で、主体部は横門、支門部に切石を用いた横穴式石室である。周辺から古墳～平安住居32軒、近世塚1基、溝4条を検出する。	
14	舞台西遺跡	前橋市荒子町 舞台西	古墳4基(内1基は帆立貝式古墳)、埴輪円筒埴1基、埴輪1基を検出する。	
15	地田東遺跡	前橋市西大室町 地田東	奈良住居2軒、古墳3基、方形周溝墓2基を検出する。	
16	舞台遺跡	前橋市荒子町 舞台	古墳3基(帆立貝式古墳1基)を検出する。	
17	舞台1号墳	前橋市荒子町 舞台	全長42mの帆立貝式古墳で、前方部の埴輪土坑から下駄、刀子、鎌などの農機具、玉類など多量多量の埴石製模造品を出土した。	
18	西大室丸山遺跡	前橋市西大室町 丸山	横穴式石室を有する円墳3基と、てくね土器、須恵器、石製模造品多数を伴出する巨石敷紀遺構が検出された。	
19	寛成荒子遺跡	前橋市荒子町	古墳時代居宅、古墳住居14軒、奈良住居1軒、平安住居5軒を検出する。	
20	上綱引遺跡	前橋市西大室町 上綱引	古墳住居1軒、周溝墓12基、古墳9基、埴輪円筒埴2基を検出する。古墳は竪穴系小石塚を有する5世紀後半を前後するものと、横穴式石室を有する7世紀代築造のものに大別される。	
21	後・小二子古墳	前橋市西大室町 内堀・前橋市西大室町下諏訪	後二子古墳は全長82mの前方後円墳で、両袖型横穴式石室を有する。明治年間発掘で耳環、直刀、刀子、鉄鎌、馬具、土師器高杯、須恵器磁甕など多数の遺物が出土している。小二子古墳は全長30mの小型前方後円墳である。	
22	中二子古墳	前橋市東大室町 五科	全長85mの前方後円墳で横穴式石室を有すると推定される。	
23	前二子古墳	前橋市西大室町 二子山	全長95mの前方後円墳である。異型横穴式石室からは「字形横板や船形青冨などの馬具、磨台、埴輪、高杯などの須恵器等が出土。6世紀前半の築造と考えられる。	
24	内堀遺跡	前橋市西大室町 内堀	M-1号墳(田原塚村57号墳)は全長35.2mの帆立貝式古墳で横穴式石室を主体部に有する。大刀、盾などの器財、家、馬、盾持ち人、男女人物など多数の形象埴輪を出土した。	
25	梅木遺跡	前橋市西大室町 梅木	弥生住居2軒、古墳住居50軒、奈良住居2軒、平安住居16軒を検出する。古墳時代居宅と考えられる方形区画は南辺65mを中心に検出され、内区に柱穴列を伴い、埋没土中にF Aの地積が認められる。	
26	赤堀茶白山古墳	佐波郡赤堀町 今井	全長45mの帆立貝式古墳である。主体部は木炭層で、神帳、内行花文鏡、石製模造品、鉄製品などが出土した。墳丘上には家形埴輪をはじめとした形象埴輪が樹立されていた。5世紀中頃の築造と考えられている。	
27	祝宮古墳	伊勢崎市波志江町	波志江沼東側の舌状台地のほぼ中央に位置する独立墳。直径3mの円墳。2重の周堀、墓石をもつ。角四石安山岩削石積の横穴式両袖型石室を有し、石室下に1mの版築を施す。7世紀末～8世紀初頭築造と考えられる。	
28	五日牛清水田遺跡	佐波郡赤堀町 五日牛	新川右岸に位置する。微高地上では縄文時代前期から奈良時代に及ぶ55軒の住居と前方後円墳1基・祭祀跡等を、沖積地では古墳～平安時代の畠・水田跡、中近世の掘立・井戸・墓塚を調査。	
29	波志江伊勢山古墳	伊勢崎市波志江町	波志江下流の南200m、旧三藤村71号墳で横穴式石室を有する円墳である。	
30	正円寺古墳	前橋市堀之下町 二子塚	横木川右岸段丘上に位置する。全長64.5mの前方後円墳で、両袖型横穴式石室を有する。くびれ部鞍部からは竪穴系小石塚が検出された。6世紀前半の築造と考えられる。	

2 調査の方法

今井神社古墳は荒砥川流域における最大級の前方後円墳であり、後円墳頂に今井神社が祭られていることにより今井神社古墳と呼ばれている。本古墳の周堀調査は、1980（昭和55）年度の荒砥南部県営圃場整備事業に伴い行われた。同事業によって新設道路の設置される部分を中心として、トレンチによる周堀範囲の確定と、周堤・外堀の有無を確認することを主たる目的として行われた。

道路の新設される墳丘東側のくびれ部より東に延びるトレンチを1トレンチとして調査区を設定し、右回りで算用数字を振り、後円部北側神社参道脇の11トレンチまでの調査を行った。調査面積の総計は665㎡で、そのうちの457㎡が周堀内の調査にあてられた。周堀の総面積を約3045㎡と仮定すると調査対象面積は全体の約15%に相当する。



第112図 調査トレンチの設定位置

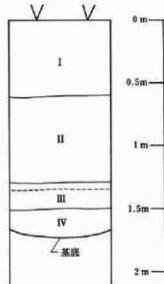
調査は、設置したトレンチ内表土の大型掘削機械による除去、人力による精査を行った。周堀の埋没土中から多数の円筒埴輪片が検出された。その数量は遺物収納パン箱18箱である。

また、今年度整理事業の一環として墳丘の現形測量（第153図）と、周堀内外の任意の6地点において埋没土中のテフラの有無を確認するための、人力によるボーリング調査を行った。

3 基本層序

今井神社古墳は、赤城山南麓末端の横積台地上に築造され、周堀の基底はロームあるいは明黄褐色のシルト層に達している。また、後述するよう埋没過程において改変を受けた部分が多く認められる。そのため、埋没土あるいは覆土の堆積状況は各トレンチで個々の相違がみられるものの、基本的には以下の4層に分層してとらえることができる。

- I. 表土 耕作土、調査前の地目は菜園あるいは菜園であった。
- II. 黒褐色土 上層は砂質でAs-Bを混入する。この層から多数の埴輪片が出土する。
- III. As-B 上層に小豆色の火山灰が堆積する。
- IV. 黒褐色土 粘性に富む。下層は黒味が薄れ、暗褐色になる。



第113図 基本土層

4 各トレンチの調査の所見

(1) 1 トレンチ (P L14・16・42)

形状 後円部の東側、くびれ部付近より東に延びるトレンチである。新設道路部分にあたり、周堀の立ち上がりと、周堤及び外堀の有無を確認することを目的として、29.5mが調査された。

確認された周堀の規模は、上幅で15.62m、下幅で3.93m、残存する深さは1.7mである。周堀の堀込みは緩やかであり、傾斜角は内側で14°、外側の立ち上がりで25°である。しかし、内側については、約1mまでが既に削平されており、墳丘裾部が調査時点ですべてに崩されていた。墳丘の傾斜を考慮するとかなり深い堀であったと思われる。

西側のトレンチ基点より約3mでやや傾斜が緩み平坦な面になる。そして14m付近でまた傾斜角を増し、15m付近で再び傾斜が緩み17mで周堀の外縁となる。12~14mの平坦面については、12~13mにかけてA s-B降下以降に掘削された溝があり、周堀本来の形状であるか、この溝の影響下にあるものかは不明である。

周堀外縁の立ち上がりから東側に10m以上トレンチを延ばしているが、ロームが平坦に続いており、周堤や外堀の存在は確認できなかった。

埋没土 調査時点での地表面より約50cm下にAs-Bを含む砂質黒色土が30~40cmほど堆積しており、その下には小豆色の火山灰を伴うA s-Bの純層が確認された。さらに黒色土が底面近くで約5~10cm、傾斜面で10~20cm堆積しロームの地山に達する。表上下の黒色土では鉄分の沈着がみられ、A s-Bの降下以降、堀に滯水していたかあるいは極めて湿潤な状況にあったと思われる。また、A s-B純層上の黒色土中より円筒堆積物が多数確認されている。(第117~123図)

(2) 2 トレンチ (P L14・16・43)

形状 くびれ部より周堀の規模を確認することを目的として設定した、東に延びるトレンチである。検出された周堀は皿状に掘り込まれており、規模は、上幅で19.7m、下幅で8.2m、現地表面からの堀の深さは2.13mであった。現地表面においても、周堀中心部と範囲の外では約90mの比高が認められた。

墳丘は既に5m程度が崩され、削平されていたようである。トレンチ基点より1.08mで周堀の内縁となり、6mの地点まで、約7°の傾斜角で深くなる。14mまでは周堀底面で、平坦面となる。約16.1mからの立ち上がりでは、14°の傾斜角を呈し、20.8mで周堀外縁となる。1 トレンチに比べると、周堀の幅は広くなっており、傾斜も緩む傾向が見受けられる。

また1 トレンチで検出されたA s-B降下以降に掘削された溝が14~18.4mにかけて続いており、この溝も幅が広がっている。2 トレンチにおいてもこの溝の重複する部分では、周堀の傾斜が階段状に変化している。

埋没土 埋没土の堆積状態は1 トレンチと同様で、基本層序に従っている。表土層55~65cmの堆積の下に、A s-Bを含む砂質の黒色土が35~50cmほど堆積している。その下層には小豆色の火山灰を伴うA s-Bの純層があり、約10cmで周堀の底面となる。表土下のA s-Bを含む黒色土層では鉄分の酸化がみられ、A s-B降下後に滯水していた様子がうかがえる。出土遺物が最も検出されたのはこの層からである。(第124~128図)

(3) 3 トレンチ (P L14・17・44)

形状 前方部の東側、2 トレンチの南12mの位置に周堀の範囲と周堤・外堀の有無を確認するために設定された、全長21.6mのトレンチである。

検出された周堀の掘り込みは、緩やかで皿状を呈している。周堀の上幅は16.9m、下幅は7.25mであり、現地表面からの深さは約2mである。裾部と周堀内縁との境にある平坦面はほとんど見られず、墳

丘裾部は1・2トレンチほど削平されていなかった様子である。

西側のトレンチ基点より25cmで周堀内側の立ち上がりとなる。それより4~7°の傾斜角で徐々に深くなり、3.1mで底面に達し平坦になる。この平坦面は10.4mまで続き、その地点より9~14°の傾斜で立ち上がり、17.5mで周堀外縁となる。途中12.5~13.1mにかけて平坦な面が見られる。現地表面における周堀内外の比高は50cmである。

周堀外縁の外側には平坦な面が続いており、古墳に伴うと考えられる造作は検出されなかった。1・2トレンチで確認されたA s-B降下以降に掘削された溝は約10mの地点から2.2mの幅にわたり確認された。

埋没土 Ⅰ~Ⅳ層までの基本層序に従っている。約50cmの表土層の下に、A s-Bを含む砂質黒色土が75~80cmの厚さで堆積している。検出された増輪片の多くはこの層位からである。その下層には小豆色の火山灰を伴うA s-B純層が周堀底面より15cmで、約10cmの厚さで堆積している。この地点は、Bo、P3に近く、ボーリング調査からも同様の結果が得られる。ボーリング調査で結果から検出したF Aは底面に近い位置からであったと考えられる。(第129・130図)

(4) 4トレンチ (P L14・17・44・45)

形状 このトレンチは、前部東側のコーナー部分に設置されたトレンチである。周堀の内縁、外縁の確認された部分については拡張調査を行った。トレンチの全長は25mである。

調査の結果から、東側コーナー部分では上幅15.1m、下幅3.8m、現地表面からの深さは1.45mである。墳丘側のトレンチ基点より1.9mで周堀内縁、8mで内側下端、11.9mで外側下端、17mで外縁となる。傾斜角は内・外側ともに緩やかであり、周堀内側の傾斜角は6°、外側は9°を呈している。周堀外側の立ち上がりでは、基点より13mに傾斜の緩む点があり、約14mの地点から再び傾斜角を増している。現地表面

面での周堀底面と外縁部分の比高は66cmをはかり、底面の標高は81.4mである。

ここで、このトレンチにおける周堀内縁であるが、3トレンチまでの内縁とラインをつなぐと、コーナー部分で急に張り出す形態になる。4トレンチの基点より1mの間は工事杭を残すために調査がされていない。この内縁部分の両側に設定された拡張区には、内縁と示された位置から1m程内側に地形の変換点が認められる。また、墳丘のコンターによってもラインの乱れ等は確認されない。本来の前部コーナー部分の周堀内縁は、調査により示された地点の約1m内側にあった可能性も考えられる。

1~3トレンチにおいて検出されたA s-B降下以降の溝は、基点より5.8mから6.7mの幅で砂質土の水成堆積が見られる。この溝は、これ以降のトレンチにおいては検出されないことから、墳丘または周堀の埋没する過程でくぼみに陥って掘削され、南に進むほど幅広くなっていた。水成の堆積が見られることにより水路として使用されていたと考えられる。

埋没土 本トレンチの埋没土は、基本層序に従った堆積を呈する。現地表面から表土層の堆積が60~70cmあり、その下のA s-Bを含む砂質黒色土は約50cmの厚さである。その下層には火山灰を伴うA s-B純層が20cm堆積しており、10cmで周堀底面に達する。(第131~136図)

(5) 5トレンチ (P L15・17・45)

形状 前部南側に設定された、全長26.7mの南北方向のトレンチである。上幅で9.2m、下幅で2.3mを測り、現地表面からの深さは1.5mで、現地表面での周堀内外の比高はほとんど見られない。

北側のトレンチ基点より1.2mで周堀内縁となる。25°の傾斜角で掘り込まれ3.8mで底面に達する。底面は平坦ではなく緩く彎曲している。4.1mの地点から再び9°の傾斜角で立ち上がる。途中傾斜角を増し、最大の傾斜角は18°となる。10.5mの地点で外縁に至り、トレンチ南端まで緩やかな傾斜を呈する平

IV 今井神社古墳の調査

垣面が続く。周堀外縁までの覆土は耕作土であり、周堀状の高まりは確認出来ない。周堀外縁より6.5mに「汚れたロームの高まり」があるが、その上の堆積土は黒色土であり後世の掘り込みによる可能性が強い。また、外堀と考えられる掘り込みも検出できなかった。

東側の周堀に比べ上幅、下幅ともに狭く、傾斜角もきつく、碗状に掘り込まれている。現状での墳丘の裾と、調査で確認した周堀内縁との間に約1.5mの平坦面が見られる。この平坦面の上は覆土となっており、墳丘裾部削平されているものと思われる。この場合周堀内縁は調査時点より墳丘寄りになると考えられる。

埋没土 基本土層と同様の堆積を呈する。現耕作土である表土は55cm程堆積し、2層のA s-Bを含む砂質黒色土は35cmである。A s-Bの純層は見られないものの、8層ではA s-Bが多量に混入しており灰も散見される。周堀底面との間層にはやや粘性を帯びた黒褐色土が約15cm堆積している。ここで12層に「酸化で茶色になった砂層のブロック」との土層註があるが、これはボーリング調査で検出されたF Aに比定されると考えられる。(第137・138図)

(6) 6 トレンチ (P L 15・17・46)

形状 前方面南側の西寄りに設定された、全長20.4m、南北方向のトレンチである。現地表面においても周堀内と立ち上がり部分では47cmの比高があり、周堀のくぼみを確認できた。5トレンチで検出された周堀と形状・規模は類似しており、上幅9.5m、下幅3.1mを測り、現地表面からの深さは1.7mである。

北側のトレンチ基点より1.8mで周堀内縁となり、約22°の傾斜角で掘り込まれている。周堀壁はやや彎曲しながら掘り込まれており、4.7mで底面となる。周堀底面は墳丘寄りでレベルが低くなっている。7.8mの地点より6.5°の傾斜角で立ち上がり、7.8mから約1mの間傾斜を緩め、9m付近で再び傾斜を増し約20°の傾斜角で立ち上がり、11.4mで外縁となる。これ以南は耕作土で既に動かされた土が堆積し

ており周堀、外堀の存在は不明である。

埋没土 基本土層と同様の堆積を呈する。現地表面から53cm表土層が堆積し、その下にはA s-Bを含む黒色土が55cmの堆積を見せる。基本土層のIII層に相当する層はA s-Bの純層ではないが、上層に比べA s-Bの含有が多く、純層に近いものである。この下層に約5cmの間層を置き周堀底面となる。(第139・140図)

(7) 7 トレンチ (P L 15・17・46・47)

形状 前方面西側のコーナーに設置された、全長17.6mのトレンチである。調査で得られた周堀の規模は上幅で12.1m、下幅2.6m、現地表面からの深さは1.4mを測り、周堀底面のレベルは80.7mである。調査時点においても周堀内と外では43cmの比高が認められた。

調査時点の墳丘から約1m離れてトレンチを設置している。北側のトレンチ基点より3.7mで周堀内縁となり、約10°の傾斜角で掘り込まれ、7.42mで底面に達する。底面は緩く彎曲し、10.02mから立ち上がる。外側立ち上がりの傾斜角は12°を呈し、14.4mから1.2mの平坦面を持ち、15.8mで周堀外縁となる。周堀外の施設についてはトレンチが伸びておらず未確認である。しかし、ここまでの1～6トレンチの状況を考えると、周堀・外堀等の存在の可能性は薄いと思われる。

周堀内縁については、東の5・6トレンチや前方面東コーナーの4トレンチの状態と併せて考えると、この西コーナーだけが張り出すようになる。北の8トレンチでは墳丘の崩落による流れ込みで周堀内縁は確認できていない。これらのことから、西コーナーにおいて特殊な形態をとることは考え難く、既に周堀内縁部分は削平され、現地より墳丘寄りになる可能性がある。しかし、墳丘のコンターは西コーナーにおいてやや突出する形状を呈しており、東と西のコーナーの形態が異なることも考えられる。

埋没土 基本土層と同様の堆積を呈する。現耕作土

である表土が約70cm堆積し、その下層にはA s-Bをふくむ砂質黒色土が33cm堆積している。10層のA s-B純層は火山灰を伴い15cmで、15~20cmの間層をおいて周堀底面となる。(第142~144図)

(8) 8 トレンチ (P L 15・17)

形状 墳丘西側のくびれ部付近に設置された東西方向、全長13.17mのトレンチである。調査時点で確認された周堀の規模は、上幅10.3m、下幅5.42m、現地表面からの深さは1.5mを測り、周堀底面のレベルは81.0mである。

東側のトレンチ基点より1.64mで周堀内縁となる。そこから20°の傾斜で掘り込まれ、2.55mで周堀底面になる。底面は平坦で幅が広く、内側に比べ外側のレベルは約10cm低くなっている。再び8mの地点より10°の傾斜角で立ち上がり、一旦10m付近で傾斜を緩めた後、25°の傾斜角を呈し、基点より12mで周堀外縁となる。トレンチの中では周堀外の施設は認められなかった。

周堀内縁について、調査時の所見ではトレンチ基点より1.64mということである。これは、内側の下端位置から91cmと非常に近くなっている。また、周堀内縁部の上には現道があり、動かされたロームの下層にこれまでのトレンチの表土層が堆積する状態で、削平は進んでいるものと思われる。これらの事を考え合わせると、周堀の内縁は調査時の位置より墳丘寄りになると思われる。

また、調査時の現状で墳丘から約20mで島状の高まりが認められ、幅5~10m、長さ約60mにわたり、周堀底面部分と1mの比高を持つことが分かる。しかし、トレンチがその部分まで伸びておらず、この高まりが古墳に付随するものかどうかは不明である。

埋没土 一番上層の動かされたロームと表土層とを併せて97cmである。その下層にはA s-Bを含む砂質黒色土が25cm堆積し、火山灰を伴うA s-Bの純層となる。その下は10cm程の間層を挟んで底面となる。

(9) 9 トレンチ (P L 16・47)

形状 後円部の西側の設置された東西方向、全長11.5mのトレンチである。調査時点で確認された周堀の規模は、上幅で5.75m、下幅で2.16mとなっている。現状で見る限りでは周堀部分が0.7~1m程くぼんでおり、周堀の旧状を留めている部分である。

東側のトレンチ基点より1.7mで周堀内縁となっている。これは後で詳述するが、内縁はさらに墳丘よりになる可能性を持っている。周堀底面は4.4mまで、平坦ではなく緩やかな弧を描いている。基点より4.4mの地点から約20°の傾斜角で立ち上がり、5.83mで約90cmの平坦面を持つ。そして、再び35°の傾斜角で立ち上がり7.5mで周堀外縁となる。現地表面からの深さは0.83mで、底面のレベルは81.3mである。

前述の周堀内縁についてであるが、周堀の下端から54cmと不自然である。これは調査時に確認された範囲での内縁であり、実際の内縁はさらに墳丘よりであったはずである。埋没土の断面で見ても図示された内縁上は表土層下から掘り込まれており、それにより周堀内側の立ち上がりが削平されていることが解る。

埋没土 表土層にあたる堆積は薄い部分で20cm、厚い部分で75cmを測る。3層は断面の一部のみでは確証に弱い。墳丘から崩落した土である可能性が考えられる。基本土層のII層にあたるのは6・7層で33cm堆積している。A s-Bの純層は確認できなかったが、さらに周堀の範囲が墳丘よりに延びるとすれば、堆積している可能性がある。6・7層と底面との間層は20~40cmでこの層中から円筒地輪片が多く検出されている。(第141図)

(10) 10 トレンチ (P L 16・17)

形状 後円部北西方向に設置された、全長12.3mのトレンチである。調査で確認された周堀の規模は、上幅で8.75m、下幅1.66m、現地表面からの深さは1.12mである。現地表面での周堀内と立ち上がり部分の比高は10cm程度でありほとんど認められない。

IV 今井神社古墳の調査

底面のレベルは81.5mである。

南側のトレンチ基点より1.1mで周堀内縁となる。約1.2mの平坦面を持ち、6.5°の傾斜角で掘り込まれ、5.33mで底面に至る。底面は緩やかな椀状を呈し、基点より6.98mから約15°の傾斜角で立ち上がり、12.27mで周堀外縁となる。

埋没土 表土層は55~60cm堆積している。その下は基本土層のII層にあたり、A s-Bの純層およびIV層は確認できない。A s-Bを含む砂質黒色土が底面まで堆積している。また、外側の立ち上がり部分に見られる「茶褐色粘質土層」は2次堆積ローム下の層が出ていると思われる。(第149図)

(1) 11トレンチ (P L16・17・47)

形状 後部部北側の参道脇に設置された、全長9mのトレンチである。神社の灯籠があり、周堀内縁は確認されていない。調査で確認された周堀の下幅は3mである。現地表面からの深さは1.35mで、周堀底面のレベルは81.2mである。

南側のトレンチ基点より2mで周堀内側の下端となる。底面はほぼ平坦であり、5mから約14°の傾斜角で立ち上がる。このトレンチは参道が造られたためか、表土層がほとんどなく、周堀外側の立ち上がり部分がロームで確認されており、後部部周堀の外縁を規定するのに良好な資料である。

埋没土 前述のように表土層は周堀部分で約10cmと薄い。その下層には砂質の茶褐色土が50cm程堆積している。基本土層のII層にあたるのは4・7層で32cmである。その下に小豆色の火山灰を伴うA s-Bの純層が15cm堆積し、約20~30cmの間層をおいて底面になる。円筒埴輪片はA s-B層の上下から検出されている。(第145~148図)

5 出土遺物について

(1) 出土埴輪の分類

各トレンチにおける出土遺物は円筒埴輪が殆どで

あり、その全てが埋没土からの一括遺物として各トレンチごとに取り上げられている。この中に形象埴輪は一片も含まれていない。

今回の調査で今井神社古墳周堀より出土した円筒埴輪は破片で遺物収納パン箱(縦60、横37、厚さ13cm)で18箱であった。その中で接合するものは少なく、立ち上がった資料に情報を組み合わせて、古墳に樹立された円筒埴輪の様相を抽出することを試みた。

そのための第一の手段として口縁部と突帯について断面形を観察し、口縁をA~Eの5種類に、突帯を4種類に分け、細かな特徴により更に細分した。

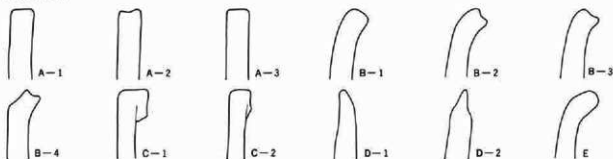
(第114図参照)

口縁は直立するものをA類、緩い外反を示すものをB類、口縁端部に粘土帯を貼り付けるものをC類、口縁部に横撫でを施すときに端部をつまみ出すものをD類、薄手で直立し端部に何らかの形象物を貼り付けるものをE類とした。A・B類については、基本的な形を示すものを1、横撫でにより口縁上面のくぼむものを2、横撫での後に口縁上面に刷毛を施すものを3、口縁端部に稜を持ち強く外反するものを4として細分を行った。また、C類のうち貼り付け部分が突出し段状を呈するものを1、貼り付け部分が崩れ扁平なものを2とした。D類では口縁部内外面の両側からつまみ出し先端の尖るものを1、緩い内彎を示し先端の尖るものを2とした。

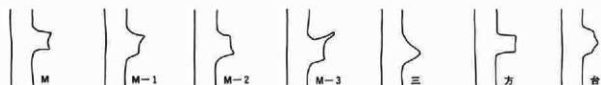
突帯については総じて断面がM字形を呈するものが圧倒的に多く、その中で突帯の上下の稜の高さが同程度のものをM、下側の稜に比べ上側が高くなるものをM-1、下側の稜の高くなるものをM-2とし、やや特異ではあるが上側の稜の発達に特に著しいものをM-3とした。その他、断面方形を呈するものを「方」、台形を呈するものを「台」、三角形を呈するものを「三」と表した。

また、胎土を肉眼で観察できる特徴によって大きく3種類に分類した。Iはにぶい黄褐色またはにぶい橙色で、細かな胎土中に黒色鉱物、長石、軽石、細礫等を含むものである。混入物の粒径は大きくとも1mm程度で、混入の割合も低い。IIはIと同様の

口縁部の分類



突帯の分類



第114図 口縁部・突帯の分類基準

混入物であり、その粒径が大きく割合も多いものである。IIIはふい黄橙色から淡黄色、または橙色を呈する。混入物の多くは細礫と軽石であり、混入量はいくぶんのばらつきが見られる。橙色を呈するものは細砂質の胎土である。

焼成については硬質で良好な焼き上がりを示すものをA、良好な焼き上がりであるがAに比べやや軟質になるものをBとし、Aに比べ焼成度の落ちるものをCとした。この3種類中圧倒的に焼成度Aのものが多く、全体のうち90～95%がAである。

(2) 出土土輪の様相

全体形状 第115図不明トレンチ(以下トレンチはトレと略称する)資料では3条突帯を有し基底部から口縁部まで4段構成であることが窺える。6トレ1も同様であろう。また、第116図墳丘出土資料は2条突帯で3段構成である。最初にこの二つの資料の観察結果を記し、各部位ごとに見ていきたい。

不明トレンチ資料は今回の調査で出土した資料であるが検出トレンチは不明である。口縁部から基底部にかけて約1/2ほどが残存していた。3条突帯で、全体の形状は胴部2段と基底部の間隔はほぼ等しく、口縁部はこれより約1.4倍の長さである。規模は掲載図からの計測で口径32.4cm、底径21.0cm、器高

48.0cmを測る。

口縁部の形状は本報告分類のB-3にあたり、外反する先端には刷毛目を残している。突帯は本報告分類のM-1である。口縁部外面に2条の線刻(ヘラ記号)が記されている。

透孔は胴部第1段・第2段にある。第1段目には第2突帯側に寄った位置に円形透孔、第2段目には90°ずらして半円形透孔が穿孔される。

外面の調整は、基底部を除いた各段に2次調整のB種横刷毛が施されている。工具の静止の間隔は総じて短い。横刷毛は口縁部が3回、胴部が各段1回の周回と思われる。内面調整は斜方向の撫でであるが、粘土紐の接合痕が明瞭に認められる。

第116図の墳丘出土資料は後門部北東側の中段付近からの出土とされるものである(以下2条突帯例と呼称)。基底部は全て残存しているが口縁部と胴部は1/2から1/3ほどが残存するだけである。全体の形状は口縁部に向かって徐々に径を増し、外反ぎみに立ち上がる。口径は37.7cmに復元され、底径は23.5cmを測る。器高45.0cmである。

突帯は2条で、3段の配分は基底部と胴部がほぼ等しく、口縁部はこれに若干粘土紐を足し加えた程度の割合である。突帯の形状は本報告分類のM-1にあたる。

IV 今井神社古墳の調査

口縁部は本報告分類のB-3の範疇にある。先端は外方に向けて明瞭な稜を持ち、口唇部平坦面に刷毛目を残す。剥落が著しいが口縁部外面には赤色塗彩が施され、2条の線刻が見られる。

透孔は胴部に対穿孔される。上辺に直線を指向する部分があり、半円形を意識しているが精美さは薄れている。

外面調整は縦刷毛の後突帯を貼り付け、B種横刷毛を口縁部と胴部に施している。工具幅は7.2cmで一単位の刷毛目が38本前後である。埴輪を上から見て右回転方向に動いている。胴部横刷毛は3.5~6.0cm間隔で静止しながら単周している。口縁部の横刷毛は全面にわたり3周している。

内面には幅2~3cmの粘土紐の巻き上げ痕が顕著に認められ、口縁部にいたる間に15段の接合痕をかぞえる。その上には第2突帯までは粗雑な斜方向の指撫で、口縁部内面には全面に斜方向の指撫でが重ねられている。

基底部の粘土帯は幅6~7cmで、内面下端には横撫でが施されるが、それ以前に指に布を巻き付けて行ったと思われる押圧痕が顕著に認められる。これは粘土帯の段階で付けられたものと考えられる。底面を見ると右を上重ねた接合痕が3箇所認められる。また、幅0.5~1cm程の棒状圧痕が残されている。

焼成は無黒斑で全体に均質である。色調は橙色で、基底部は黄橙色味を帯びている。

基底部 粘土帯を作成し、輪状にして基部としている。底面の観察では右端が上になっている。調査資料からは基部の粘土帯が単独か複数かは不明であるが、2条突帯例では3本の粘土帯からなっている。基部は痕跡から判断すれば幅6~10cmほどである。

外面調整は最下部まで縦刷毛を施す例が多いが3トレ1や6トレ3は下部に未調整部分がある。他に5トレ4、6トレ1・3・21では最下部に縦刷毛を施す以前の横刷毛様のものが看取される。第1突帯の横撫でを縦刷毛は見られない。最下部では縦刷毛を形で横撫でが入る場合がある。なかには1トレ127、3トレ1・3のように寛撫でと思われる強い撫でが

ある。なお、明確に基底部と判断できる資料において二次調整は施されていない。

内面調整では、斜方向の指撫でを施す例が多いが、6トレ1のように斜め刷毛仕上げを施す例も見られる。最下部に指頭圧痕がみえる場合があるが、5トレ3のように押圧後の指撫でを施すのであろう。底面には棒状圧痕がみられる。また、1トレ4には透孔の一部が残存している。

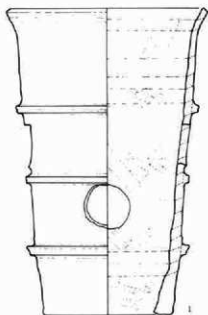
胴部 6トレ1では胴部第1段に半円形透孔、胴部第2段にも透孔が位置し、不明トレ資料では胴部第1段に円形、第2段に半円形の透孔が位置している。これらは胴部各段に90°ずらして配置されており、11トレ1、2トレ10や3トレ1、6トレ4、7トレ21もこの穿孔位置となる可能性がある。6トレ3では第1段に穿孔されず第2段に円形透孔が位置する。第1段の透孔形状を小破片から判断するのは困難を伴うが7トレ21や11トレ1、1トレ2、3トレ1など円形を呈する例や、6トレ1、第115図不明トレ資料のように半円形を呈するものが認められる。4トレ5などのように崩れた方形と推定される資料もみられる。

また、比較的小さい円形透孔が6トレ21で胴部第1段に穿孔される。4トレ69も胴部に小透孔が見られ、4トレ93も胴部の可能性がある。7トレ38が小円形とすれば第2段に位置する。

第2段では、不明トレ資料をはじめ半円形をなす資料が多く、円形を呈する例との比率は7:1ほどである。これらの透孔内面では1トレ4や7トレ41などのように穿孔によって内面にめくれ上がった粘土を指撫でしている例がみられる。

調整をみると外面両段に横刷毛を伴う場合と両段とも一次調整縦刷毛のみの例がみられる。少なくとも明確な胴部の資料で二次調整の有無を判断でき得る残存状態のものでは、どちらかの段のみに二次調整を施す例は認められない。内面では指撫でのみの例と刷毛目を用いる例とがある。

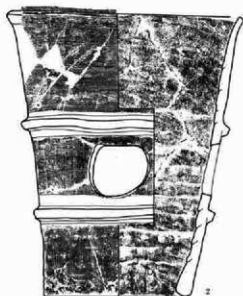
B種横刷毛は第115図の不明トレ資料、第116図の2条突帯例、7トレ21などのように突帯間を単周す



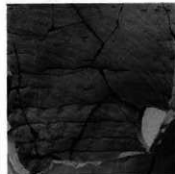
第115図 トレンチ出土円筒埴輪
 (『西大室遺跡群』2より転載)

0 1:6 20cm

- 1 口縁部の横刷毛
 2 胴部の横刷毛



3 外面



0 1:6 20cm

第116図 墳丘出土円筒埴輪

4 底面

5 内面

る例が大部分である。工具幅は6~8cmを測る。横刷毛の静止間隔は2条突帯例で3.0~4.8cmを測り、横刷毛調整末端などで7cm代を測るのみである。他例では少間隔では2cm代があり、3cm代と4cm代が多く若干の差を置いて5cm代が次いでいる。広い間隔の例では7トレ21の胴部第1段では約5cm間隔、第2段で7.2cm間隔を測る例がある。

また、5トレ24はB種横刷毛が最低でも3周回っており、4トレ69、7トレ9も複数周施されている。6トレ2でも横刷毛の重複があるが横刷毛の開始と末端の重複か、複数周回するか残存部分が少なく確定できない。工具幅は10トレ54や7トレ9などのように2cmほどの例や5トレ24のように明らかに突帯間より工具幅が狭いと思われる例がある。

横刷毛と突帯との前後関係は2条突帯例や6トレ1例では2条の突帯とも横刷毛に突帯貼付時の横撫でが消されている。1トレ89・120で横刷毛を横撫でが消す例がみられるが、基本的には突帯貼付後に横刷毛を施している。

5トレ1では突帯貼付以前に縦刷毛と斜め刷毛を施している。基底部から胴部の残存部分での観察では、縦刷毛後向かって左斜め上への刷毛目を等間隔に全周させ、次に右上がりの斜め刷毛を等間隔かつ下端部を左斜め刷毛下端部と合致するように施している。この後、第1突帯が貼付される。このような例は2トレ7や7トレ42にも認められる。5トレ23では曲線を描く横刷毛がみられ、最下部には横刷毛後に施される横撫でがある。

また、わずかではあるが4トレ75や5トレ3のように明らかな斜め刷毛が施される例がみられる。

突帯の形状は分類の項で前述した通りである。その成形については、2トレ63・90、4トレ108、6トレ23のように突帯下に浅く幅広の沈線がみられる場合があり、あらかじめ突帯位置を割り付けておくものと考えられる。また、突帯に布目痕が認められる例からは、布を使用した横撫でが想定されよう。












口縁部 1トレの37~41・45などの口縁部分類のC類は口縁部上端外面が肥厚する例である。それらは

すべて上端が外反せずに直立する形態で、横刷毛を伴っている。口唇部の上面に刷毛目を施す例がある。分類のA-3、B-3にあたる。

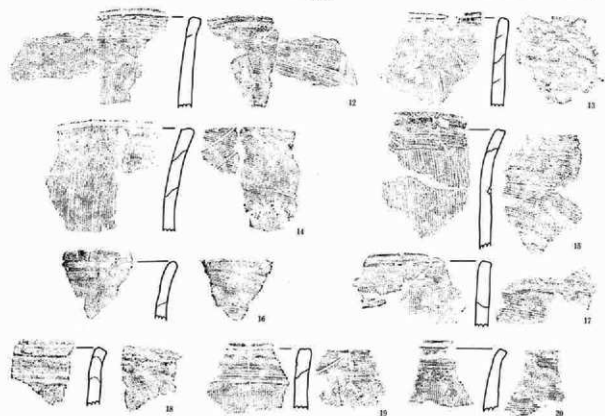
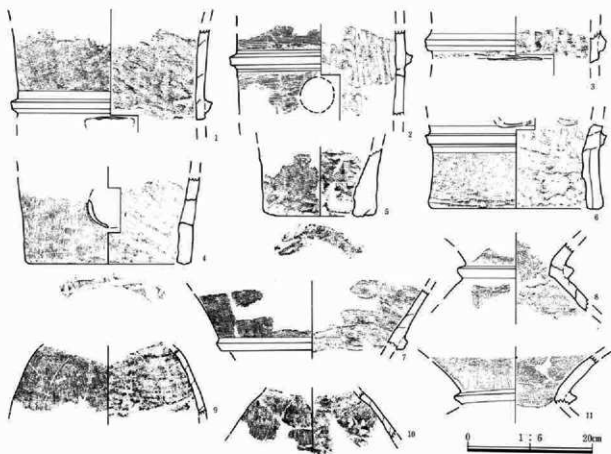
E類とした11トレ20では、上端外面2箇所、内面2箇所に1~2cmほどの割れ口がある。内面では2箇所の痕跡を繋ぐように細い剝離痕が走る。小型動物類が貼り付けられ、内面に腹部が接していた痕跡であろう。動物本体は確認されていない。

赤彩については胴部上位まで至る例もごくわずか見られるが、基本的に口縁部に限られる。2条突帯例では線刻側は薄く上端にしかつかず、その反対側では厚く塗付されている。

外面調整では胴部に横刷毛が施されている資料では口縁部にも横刷毛が入り、口縁部のみあるいは胴部だけに横刷毛が入る例は資料中からは確認できない。11トレ41は口縁部が若干残存し縦刷毛がみられるがこれも判断するには少なすぎよう。不明トレ資料、2条突帯例は突帯貼付後ほぼ口縁部全体に3周工具が動いており、破片資料からも複数回巡ることが看取できる。横刷毛が入らない例のなかには1トレ107、2トレ61、4トレ8・90のように突帯貼付時の横撫でを消す形で縦刷毛が施される例がある。内面調整では多くが上部に刷毛目を施している。

3トレ34や4トレ126では口縁部下端に小孔が穿孔される。後者も破片下端にわずかに突帯貼付時と思われる横撫でがあり、位置は前者と同様であろう。線刻(ヘラ記号) 破片からの判断であるが、口縁部外面に「」「」「」「」「」がみられる。「」は下端が突帯に接して描かれ、突帯下には半円形透孔が伴う。口縁部内面には「」「」「」などがあり、他に内面に「」「」がみられる。このほかに形状不明の沈線の一部がある。

朝顔形 頸部には断面台形の突帯他に三角形を呈す突帯が見られる。肩部には透孔はみられない。花状部では台形突帯を有し、突帯位置では1トレ130では突帯位置で擬口縁を作る例が見られ、さらに2トレ106は刻みを入れてから上位を成形している。花状部には赤彩がなされる場合がある。



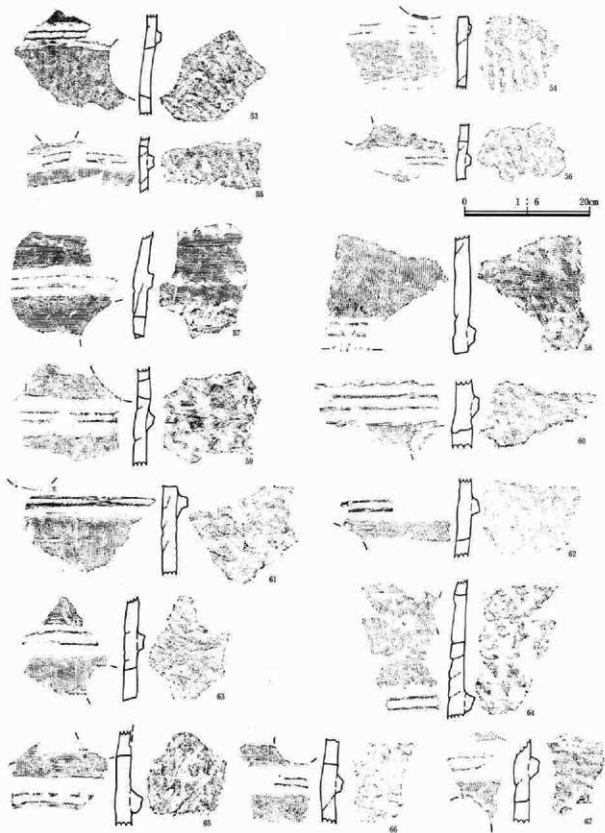
第117図 トレンチ出土円筒壺輪(1)

0 1 : 4 10cm

IV 今井神社古墳の調査



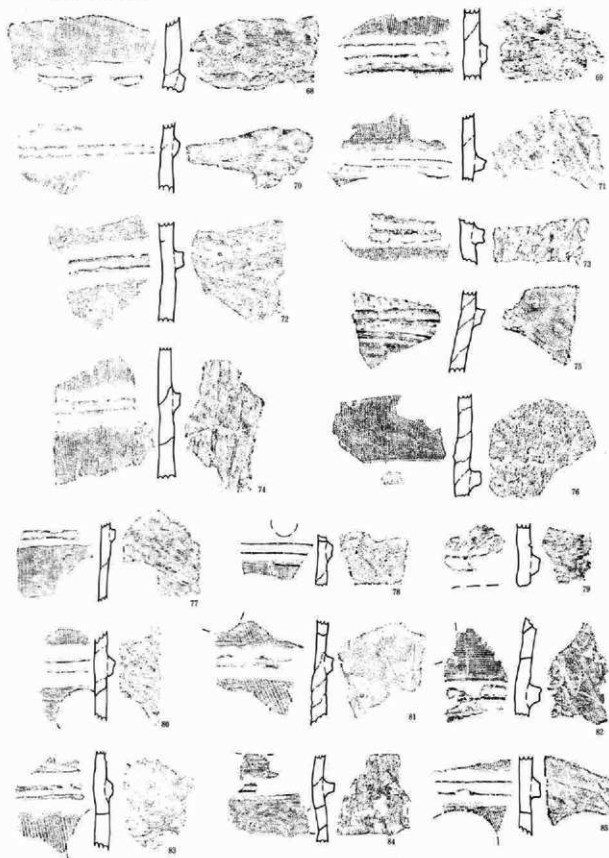
第118図 トレンチ出土円筒埴輪 (2)



第119図 1トレンチ出土円筒埴輪(3)

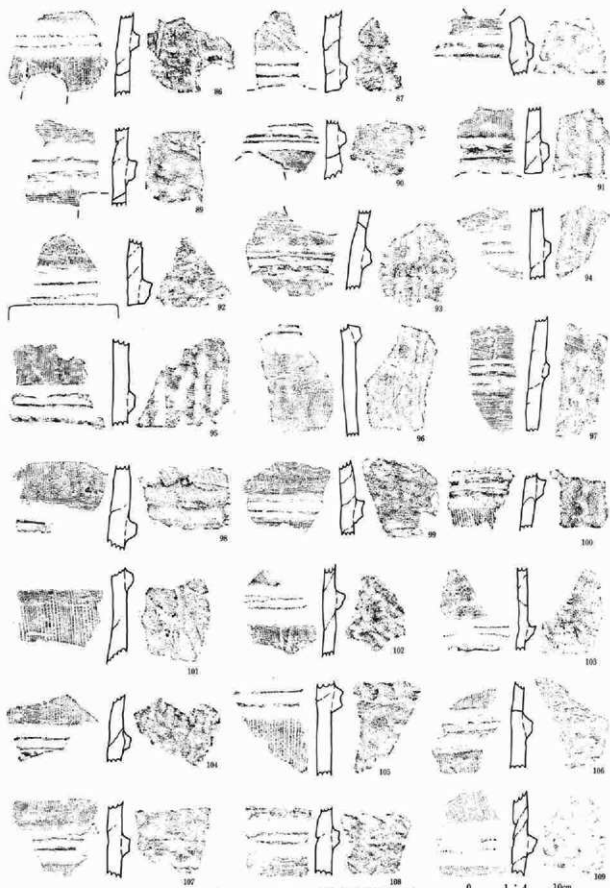


IV 今井神社古墳の調査



第120図 トレンチ出土円筒埴輪(4)

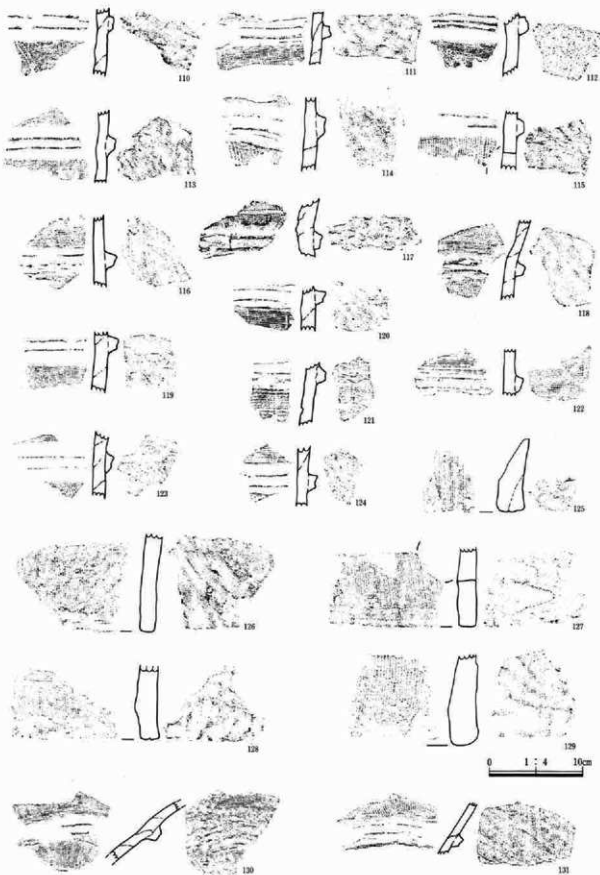
0 1 4 10cm



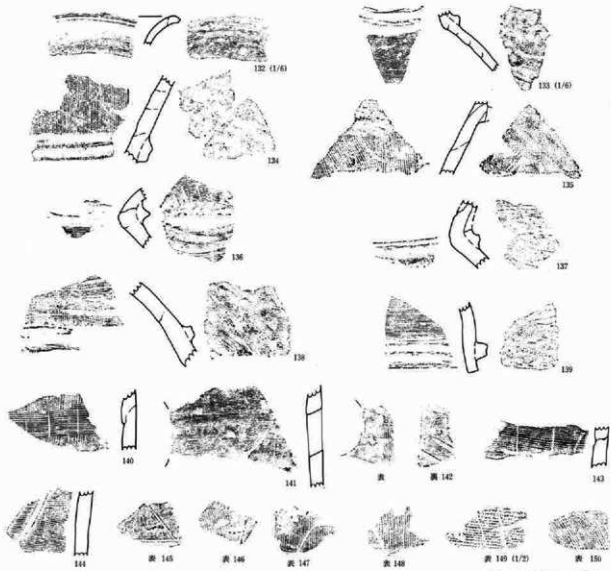
第121図 1トレンチ出土円筒埴輪(5)

0 1 4 10cm

IV 今井神社古墳の調査



第122図 Iトレンチ出土円筒埴輪(6)



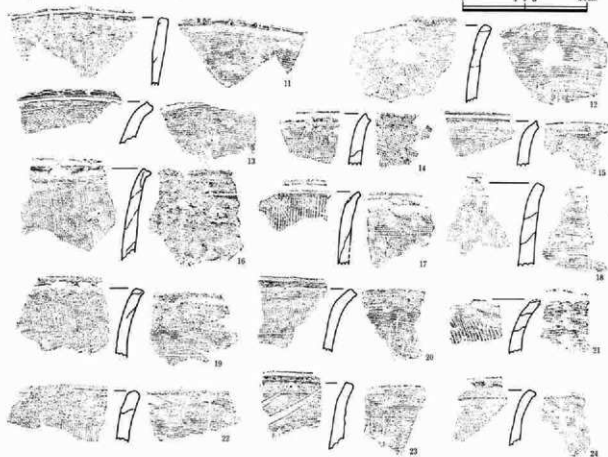
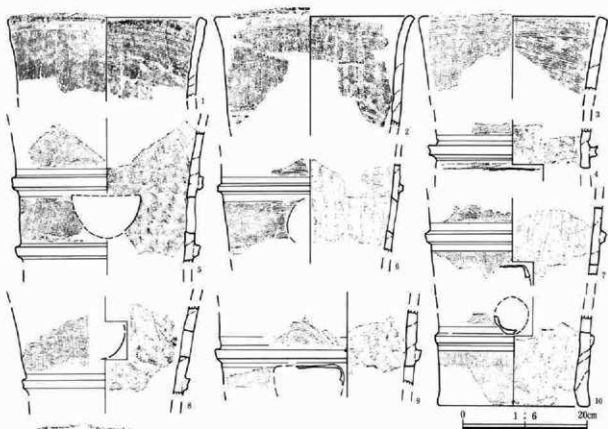
第123図 トレンチ出土円筒埴輪 (7)

0 1 4 10cm

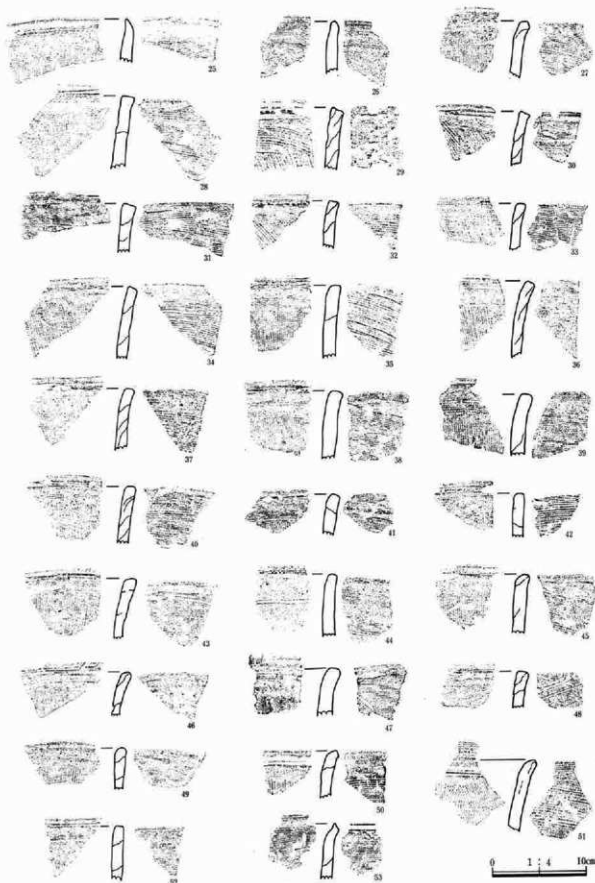
トレンチの精査



IV 今井神社古墳の調査

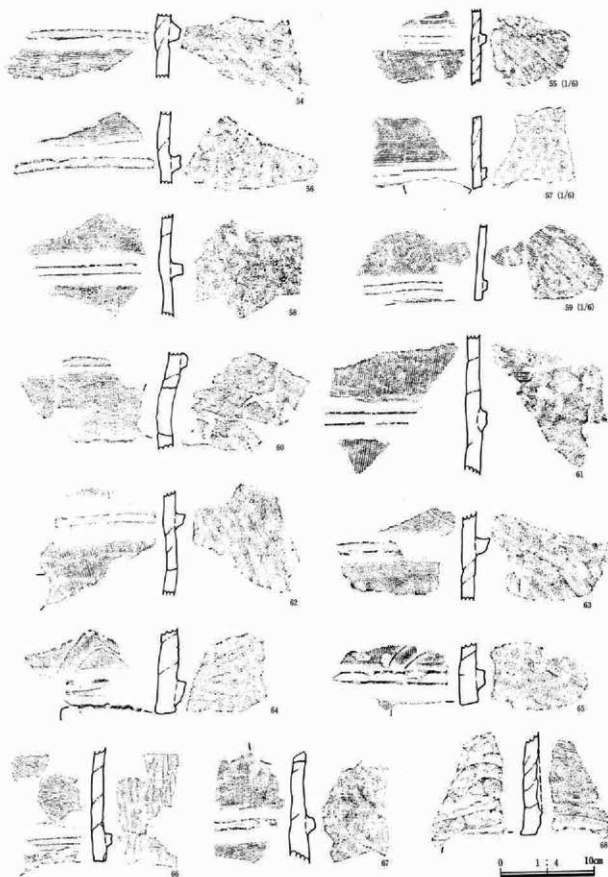


第124図 2トレンチ出土円筒埴輪(1)

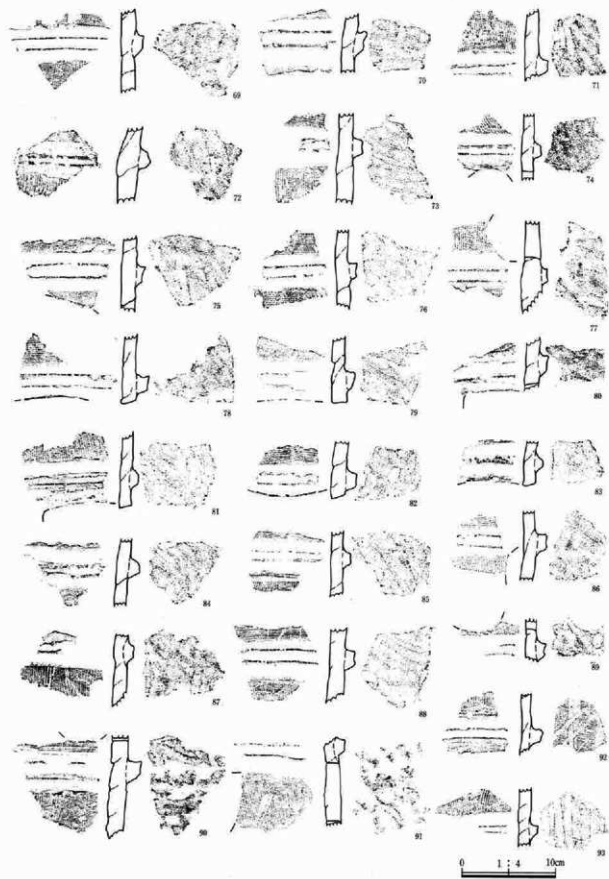


第125図 2トレンチ出土円筒埴輪(2)

IV 今井神社古墳の調査

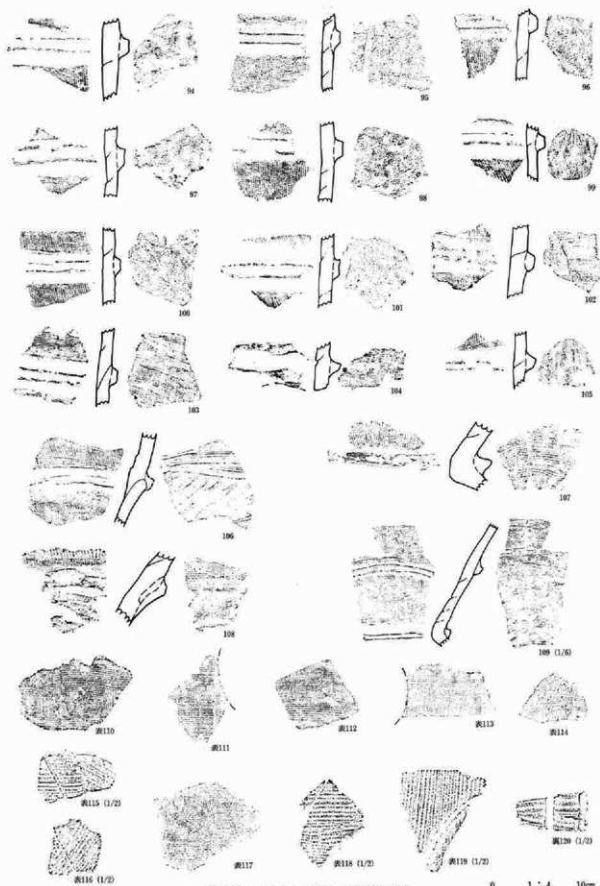


第126図 2トレンチ出土円筒埴輪(3)



第127図 2トレンチ出土円筒埴輪(4)

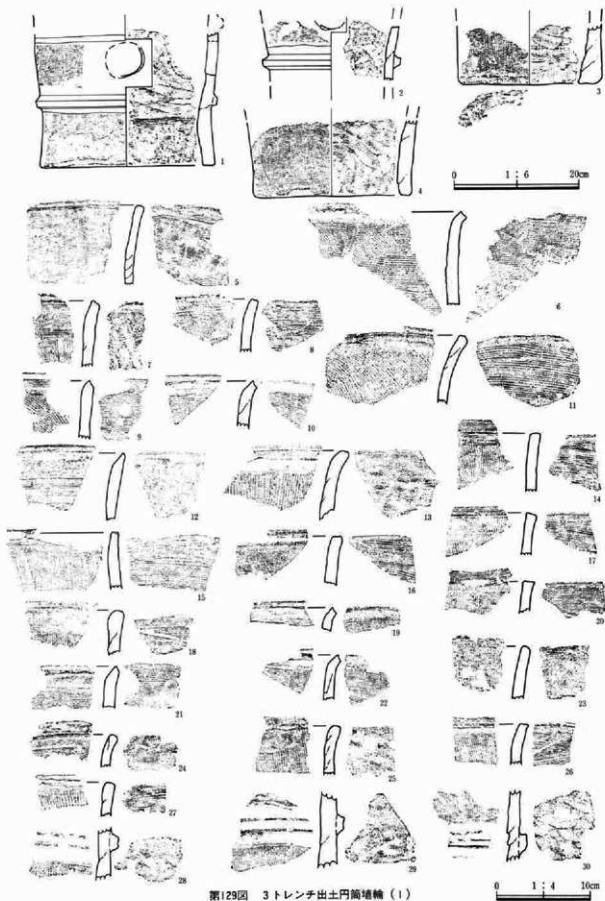
IV 今井神社古墳の調査



第128図 2トレンチ出土円筒埴輪(5)

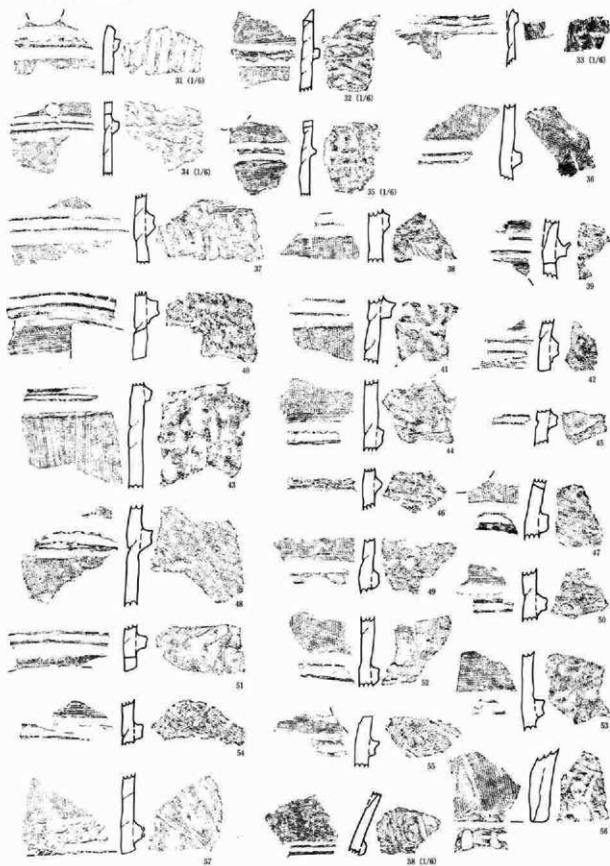
0 1:4 10cm

5 出土遺物について

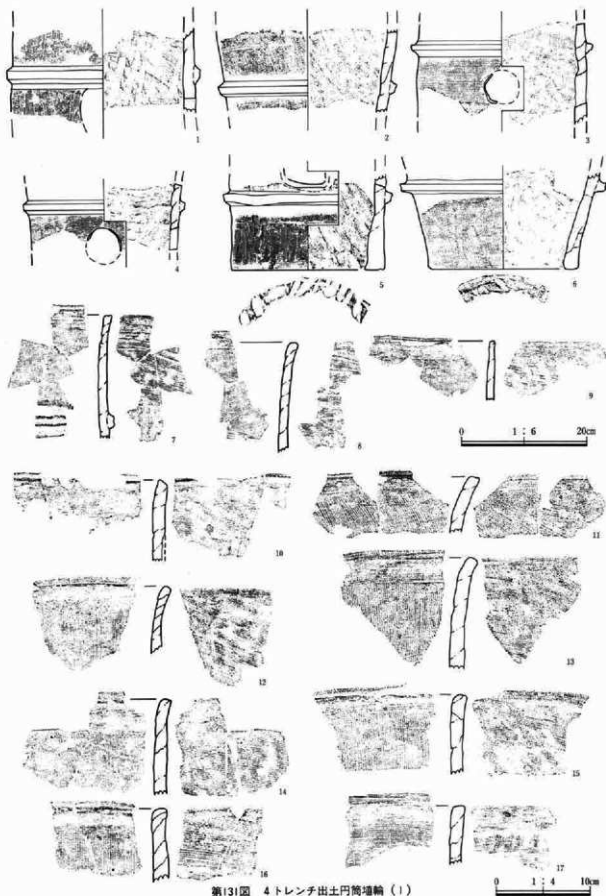


第129図 3トレンチ出土円筒埴輪(1)

IV 今井神社古墳の調査

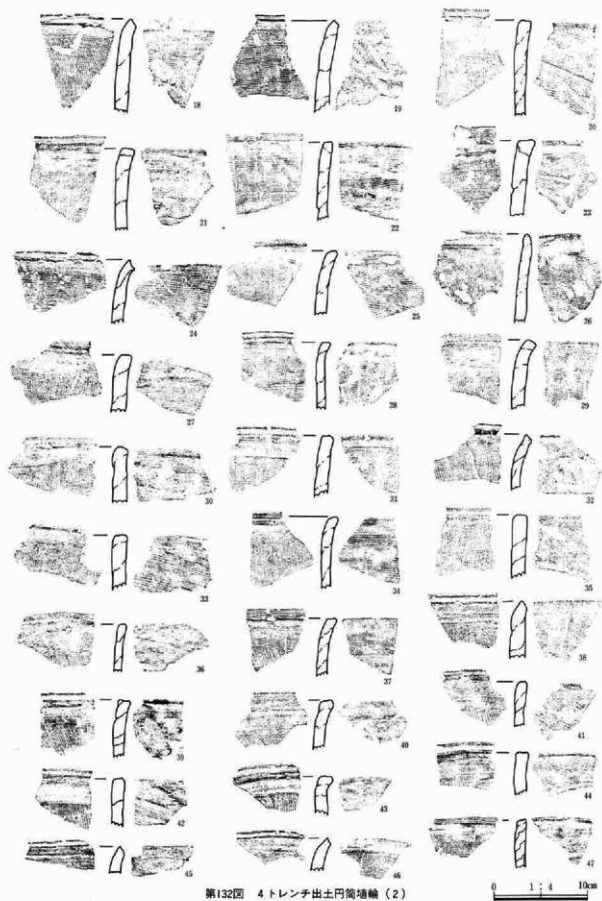


第130図 3トレンチ出土円筒埴輪(2)

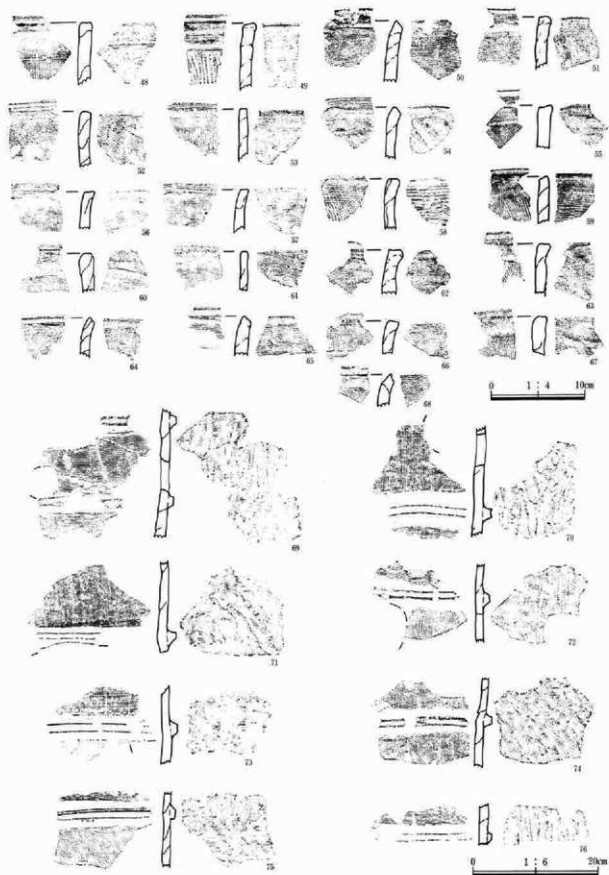


第131図 4トレンチ出土円筒埴輪(1)

IV 今井神社古墳の調査

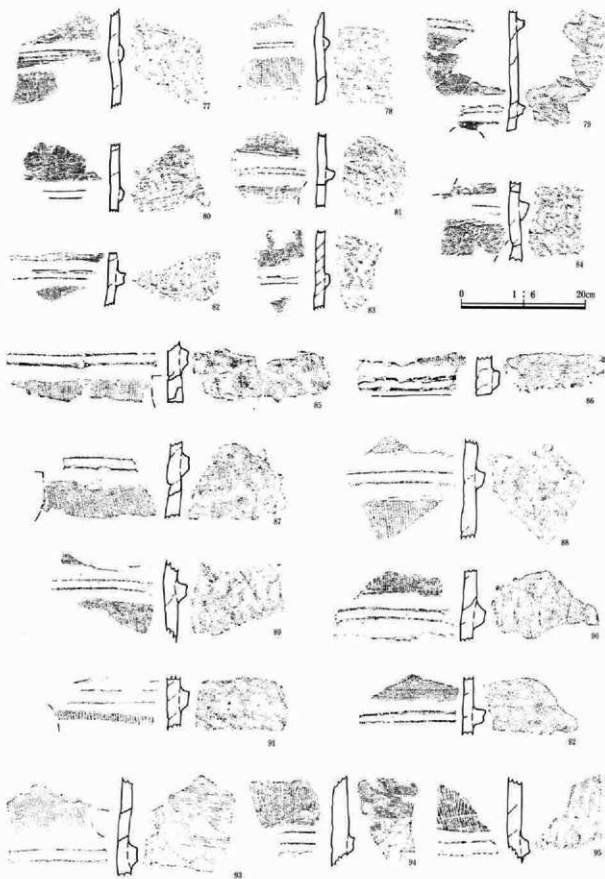


第132図 4トレンチ出土円筒埴輪(2)



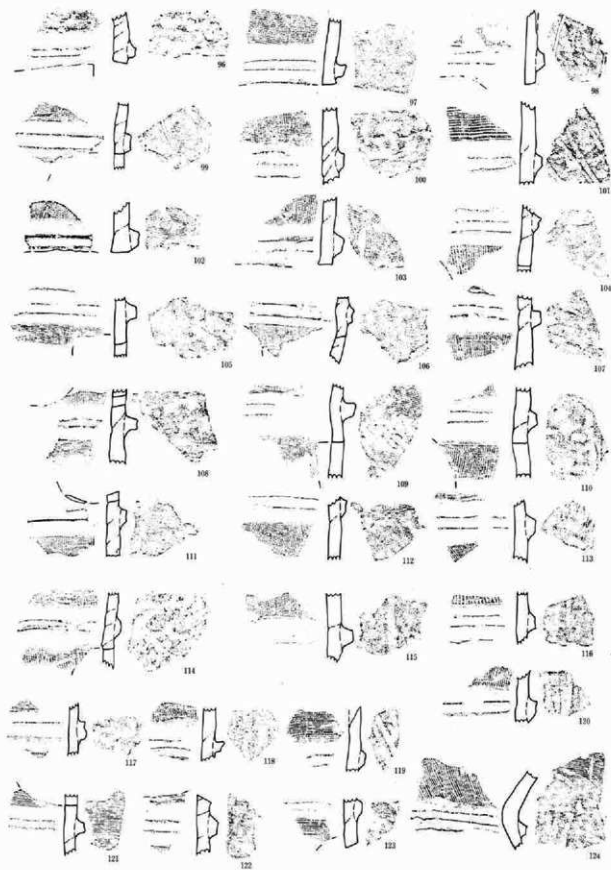
第133図 4 トレンチ出土円筒壺輪 (3)

IV 今井神社古墳の調査



第134図 4トレンチ出土円筒埴輪(4)

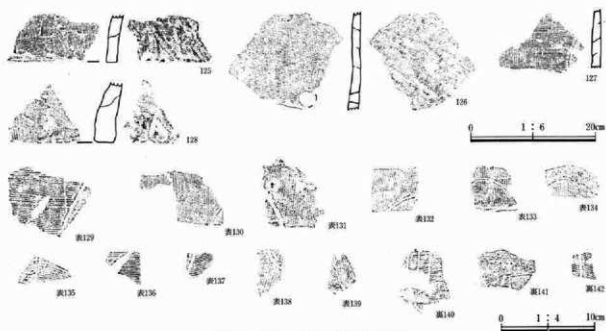
0 1:4 10cm



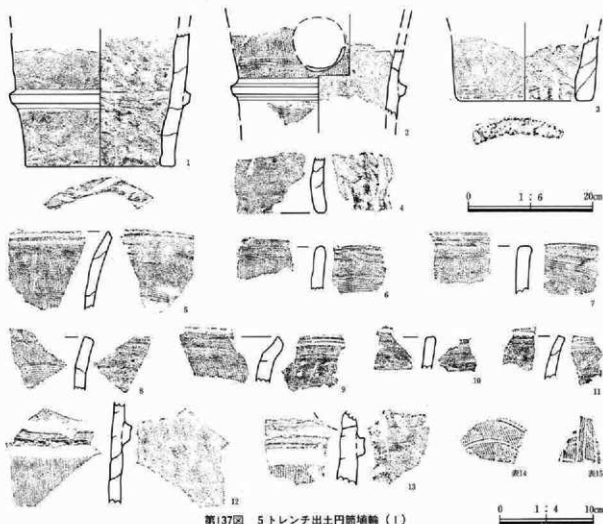
第135図 4トレンチ出土円筒埴輪(5)

0 1:4 10cm

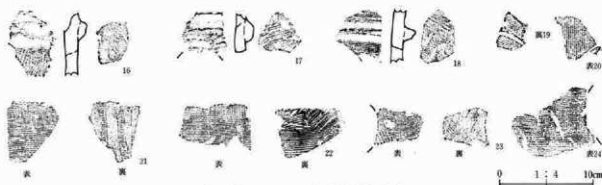
IV 今井神社古墳の調査



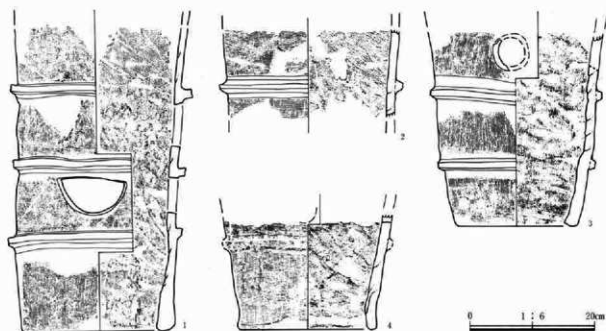
第136図 4トレンチ出土円筒埴輪(6)



第137図 5トレンチ出土円筒埴輪(1)



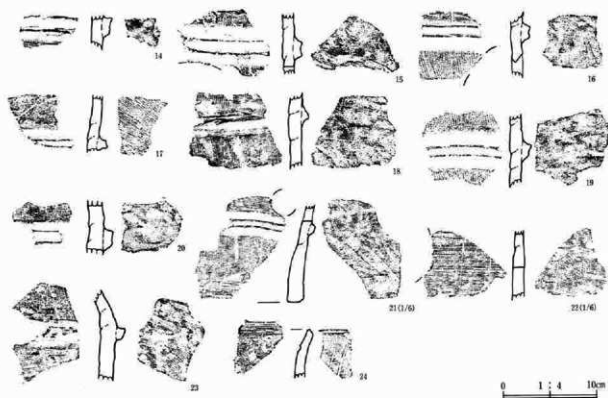
第138図 5トレンチ出土円筒埴輪(2)



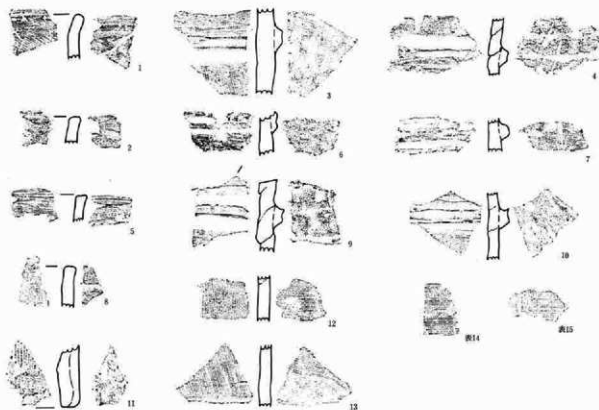
第139図 6トレンチ出土円筒埴輪(1)



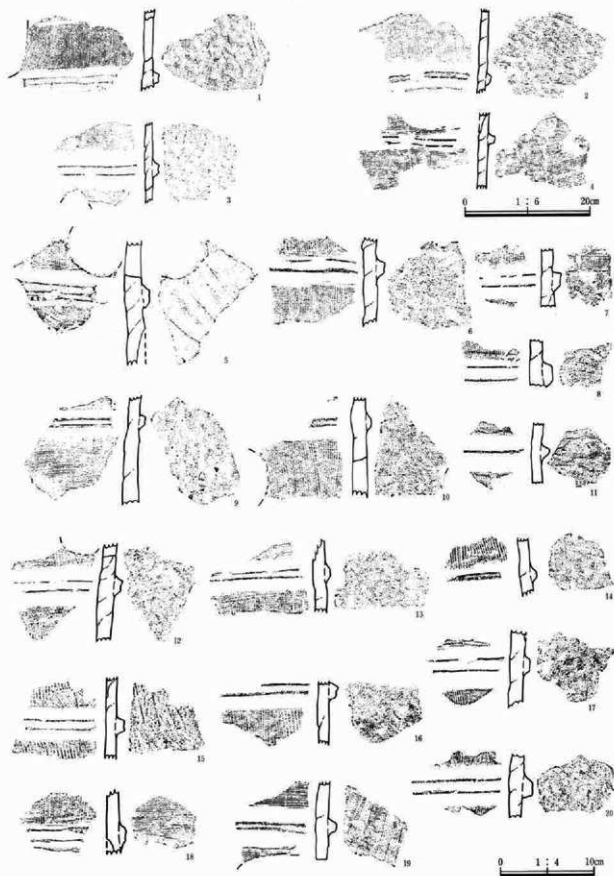
IV 今井神社古墳の調査



第140図 6トレンチ出土円筒埴輪(2)

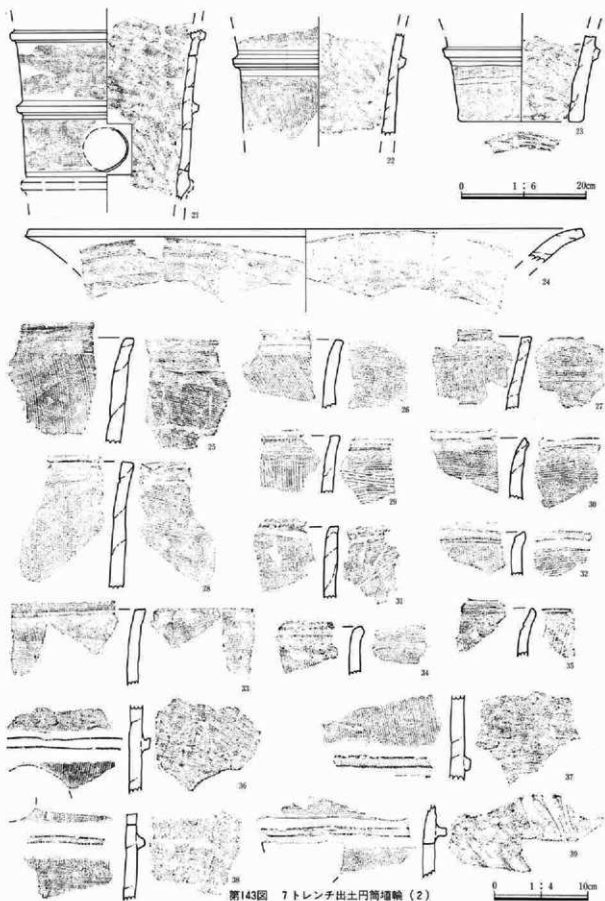


第141図 9トレンチ出土円筒埴輪

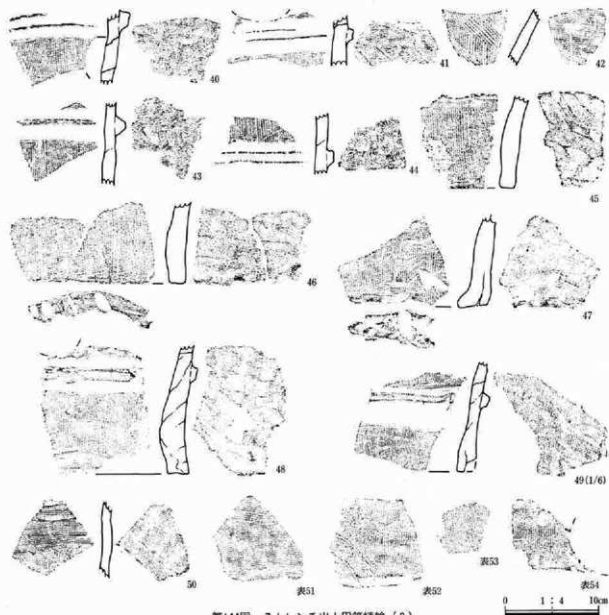


第142図 7トレンチ出土円筒埴輪(1)

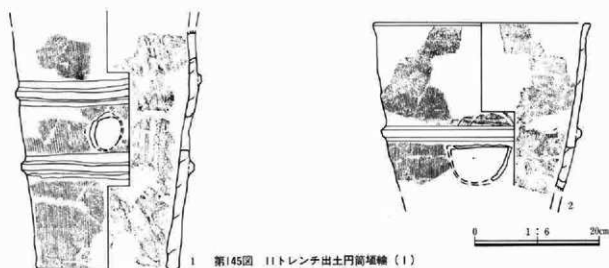
IV 今井神社古墳の調査



第143図 7トレンチ出土円筒埴輪(2)

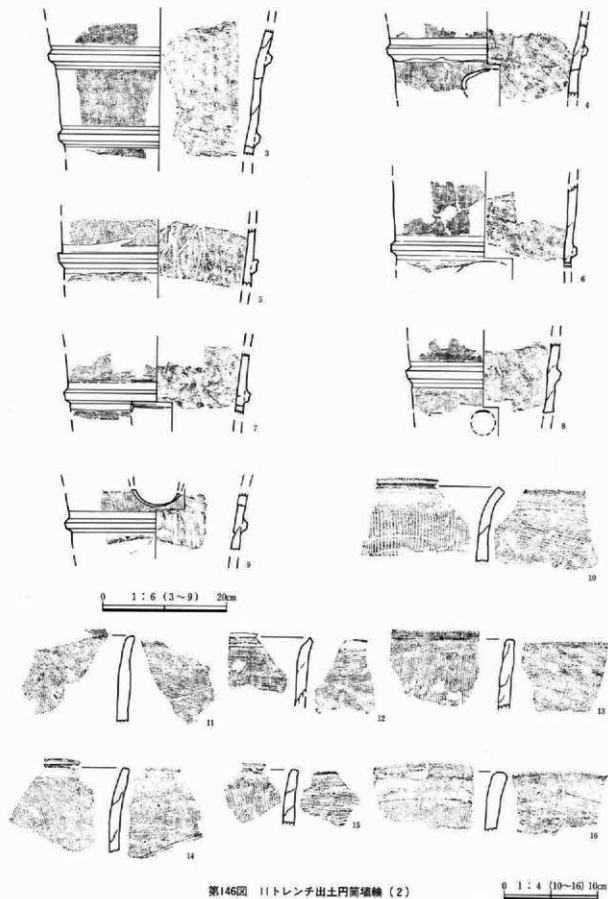


第144図 7トレンチ出土円筒埴輪 (3)

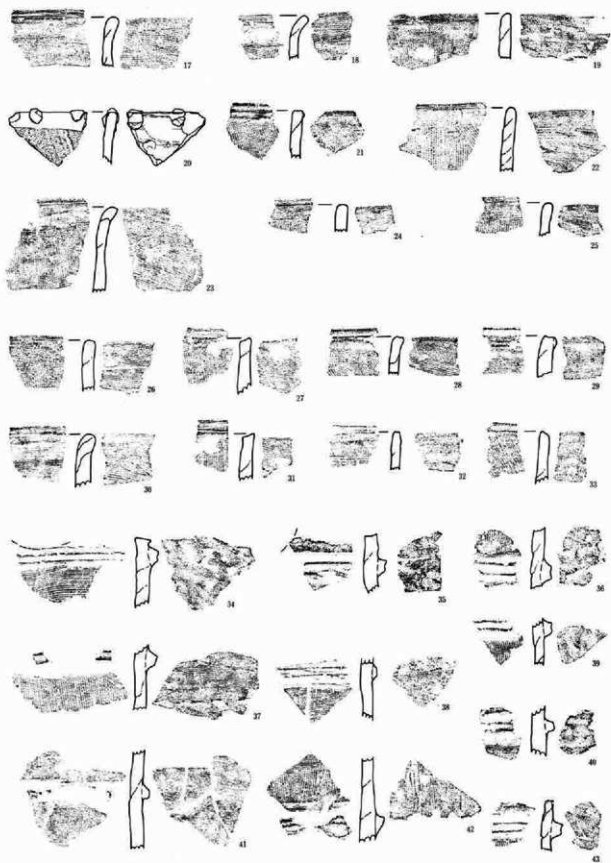


1 第145図 11トレンチ出土円筒埴輪 (1)

IV 今井神社古墳の調査

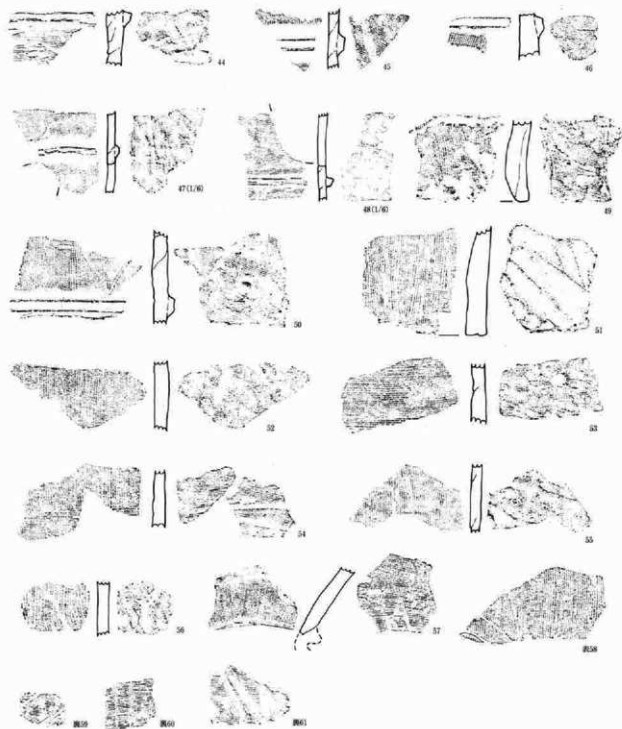


第146図 Ⅰトレンチ出土陶器片(2)



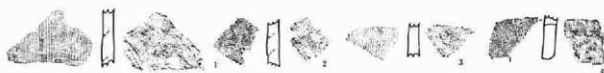
第147図 11トレンチ出土円筒埴輪(3)

IV 今井神社古墳の調査



第148図 11トレンチ出土円筒埴輪 (4)

0 1 4 10cm



第149図 10トレンチ出土円筒埴輪

0 1 4 10cm

6 墳丘と主体部

(1) 墳丘

歴史的環境の項でも述べたように、本古墳は赤城山南麓地域を代表する前方後円墳のひとつであるが、墳丘から表採される円筒埴輪に関する論考を除くと墳丘自体が考察されることは少なかった。

1961(昭和36)年に群馬大学史学研究室により実施された墳丘実測調査は、1971(昭和46)年に刊行された『前橋市史』にその成果が解説されている。この中で本墳の墳丘は全長71m、前方部幅50m、後円径44mと記録され、その数値がその後の本古墳の基礎資料となっている。

調査前の周堀部分は、くびれ部から前方部東側の畑地が周囲よりも一段低くなっていた。また、前方部南側や後円部西側に残された地割りや道路の在り方にその痕跡がみられ詳細を把握することはできないもののその存在は充分指摘できる状況にあった。

今回、11本のトレンチを設定し、調査を実施した結果、各所において周堀の内外縁の立ち上がりを検出した。第152図は群馬大学作成の実測図に今回の調査成果を組み込み周堀の形状を想定した復元図である。調査において確認された部分は一部分にすぎず、これをもってただちに全体の規模・形状を述べることは問題が残ると思われるが、現時点における一応の見解を記し、今後新知見が得られた際には修正を加えていきたい。

各所における周堀の幅は前方部前端で9.20~9.50m、くびれ部東側で18.75m、くびれ部西側で約13.75m、後円部東側で10.25m、後円部西側で9.25m、後円部側で約8.00mを計測、あるいは想定できる。墳丘の主軸線方向をN-15°-Wに設定すると、周堀全体の総長は約92.00mにおよび、外縁の平面形は中軸線を中心に左右がほぼ線対称の形状になると思われる。後円部外縁の描く曲線は径約64mの円弧に近い。前方部先端は大きく開き、前端外縁の幅は85

mを測る。

また、調査時点には墳丘の規模、および築造時期の関係から、周堀の外側部分の施設として外堀と中堤、あるいは周堤の存在が想定された。そこで周堀の東側に1・3トレンチを、南側に5トレンチを設定し周堤・外堀の存在を確認したが、外堀についてはその掘り方や埋設土を検出しなかった。周堤は耕作による土壌の攪拌が進行しておりその存否を断定するにはいたらなかった。

周堀の復元から導き出された墳丘の規模は全長約74.5m、前方部幅約54.25m、後円部径約44.5m、くびれ部幅約37.25mを想定することができる。高さは現在、前方部の頂上部で西側墳端から約7.15m、後円部頂上部で東側から約7.5mを残している。

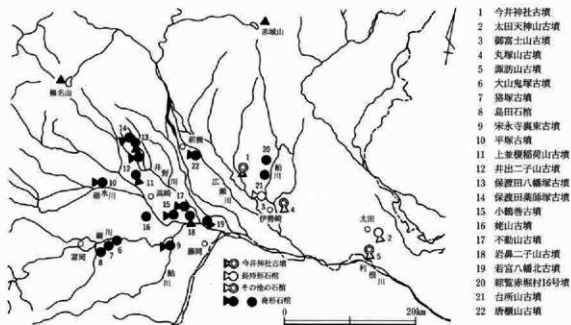
墳丘構造については、墳丘の保存を前提に調査を実施したため、古墳の築造面、盛土の状況などは把握していない。ただし基石については現在も墳丘上に長さ20cm前後の河原石が多数散見され、これらの礫が墳丘面を被覆していたものと思われる。

墳丘は全体に植林・伐採がなされているほか、後円部頂上部には今井神社が鎮座し、社殿の東側あるいは南側には石積が施されている。また、前方部も頂上部に観音堂が、南西中段にも小社が勧請されており、これらを結ぶ参道・階段施設の整備に伴い、両墳頂部を中心に著しく変化を受けている箇所が少なくない。以下、第152図、第153図を参照しつつ、墳丘の現状についての観察結果を記述しておきたい。

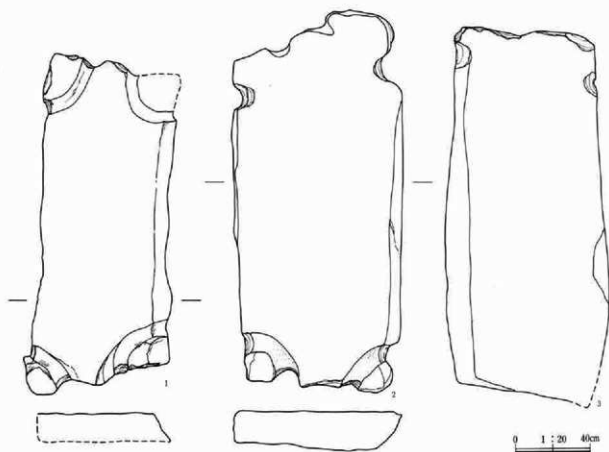
なお、第152図は墳丘頂部を0mとしたマイナス値表示の0.5mコンターで実測されている。これに対し、第153図は1993(平成5)年、今回の整理作業時に実測したものである。第153図は海拔を基準とした0.5mコンターで測量したもので、一部に0.25mの補助線を加えている。

前方部は畑地の耕作により墳丘裾が削平されているが、東西両側の後縁は墳丘端から頂上部まで見通すことが可能で良好な遺存状態を呈している。前庭部下半はコンターが狭密であるが、標高85.00~86.00mにかけてはコンターの間隔が緩やかな面が続

IV 今井神社古墳の調査



第150図 今井神社古墳と舟形石棺採用古墳の分布



第151図 後円部に露出した石室・石棺材

き、再度頂上部に向かって傾斜面が形成されている。この傾向は前方部の両側面にも認められ、この幅約4～5mの緩斜面の部分に中段平坦面が形成されていたと考えられる。

くびれ部西側の標高84.00～86.00m付近には幅8.5mに及ぶ平坦面が観察できる。この部分は、前方部で想定された中段平坦面の延長上にあたる。現状が原形を反映したものであれば、本古墳の墳丘は第1段と第2段の平面形状が相似形をなさず著しく異なったものであったことになる。ただ、くびれ部東側が著しく改変を受けており、東西の形状を比較することが困難な状態にあるため、標高85.00m以下が盛土の流出による可能性も考えられようか。

後門部西側部分はコンターの乱れが少なく比較的等間隔に墳丘を巡っており、現状の観察からは明瞭な段築を想定できない状態にある。ただし前方部の状況との整合性を求めるとすれば、標高85.00m前後、後門部東側というと、現在、後門部東側から鞍部に通じる参道とトレースする位置に中段平坦面が存在したのであろうか。

今回の調査により、今井神社古墳は、全長約74.50m、前方部幅約54.25m、後門部径約44.5m、くびれ部幅約37.25mの規模を有する前方後円墳であることが想定された。墳丘の周囲には総長約92.00m、前方部前端外縁に最大幅を有する盾形の周堀が巡っていたことが確認された。

最後に、本古墳は、前方部前端の両隅や東西のくびれ部分などの細部に非対称となる部分が認められるもののその全体形状については何らかの築造企画に基づいて計画的に築造されたことは充分想定できるところであるがこれについては詳細な検討をすることができなかった。今後の課題としたい。

(2) 主体部

本古墳の内部主体は、今井神社の社殿下に埋設しており、現在は観察することができない状態にある。

前述の『前橋市史』によると、1961（昭和36）年に群馬大学史学研究室が墳丘の実測調査を実施した

際に後門部、社殿脇に板状石の存在することが記録されており、これを石棺の蓋石とする竪穴系の主体部が存在していることが推定された。

1973（昭和48）年に社殿の立て替えがなされた際には主体部が露出し、現在、後門部中段北側におかれている2あるいは3個体の用材が出土したとされるが、主体部そのものの構造については詳細不明である。また、これ以前の1888（明治21）年、1924（大正14）年にも発掘の記録があり、1924年時には「石椁」から直刀と朱が出土したことが記録されている⁽¹⁾。

現在、主体部の用材と考えられる輝石安山岩の板石が墳丘上の2箇所合計3個体おかれている。

1箇所は社殿東脇で、第152図-3が南北方向に長軸をおいて、拜所から前方部にいたる参道のたたくに使用されている。もう1箇所は後門部北側斜面である。2枚の大型材があり、東側におかれているものを第152図-1、西側を第152-2として図示した。部分的に欠損する箇所があるものの比較的旧状を保っている。

これらの石材については既に1979（昭和54）年、橋本博文氏により調査発表されている⁽³⁾。今回は飯塚誠氏に原図の提供をしていただいた資料を掲載した。

以下、各用材について観察された点を記しておく。まず、1は全体形状が長方形を基本とした板石であるが、右長辺は面とりをしたように角を欠いている。図中の右上角は大きく欠損している。表面は後述する溝状のくりこみを除くと全体が平坦面をなしており、裏面も同様と推される。風化のためか器面には顕著な工具痕は認められない。規模は最大長を有する左側辺で180cm、中央部で172cm、幅は約70cmを測る。厚さは20cm弱でほぼ一定であると思われる。この用石の最も注意を引く点に各隅を区画するように彫られた弧状のくりこみがある。図中の左上角のそれは長辺部分で幅11cm、短辺部分で幅12cmを測り側面もくりこんでいる。表面の溝は中央で幅を狭めるが約10cmを測り、深さは2cm前後と総じて浅い。くりこみは裏面には見られない。加工は敲打によるものであろうか、総じていいいな仕上げである。ほ

IV 今井神社古墳の調査

かの3箇所も同様であるが形状や細部の加工については相違があり特段の企画性は認められない。

2も1同様の板状石であるが左右の長辺の差異が著しく全体は図中の左長辺を上辺とする偏平な台形状を呈している。規模は左長辺が170cm、右長辺が200cmを測る。幅はいずれの箇所もほぼ一定で約90cmほどである。厚さは左長辺で17cm、右長辺寄りでは20cmとやや数値を増す。

1の四隅に見られた溝状のくりこみは下側の両隅にのみみられる。上側表面には溝が無く、左右の長辺側面に各1箇所、短辺に2箇所のくりこみが施されているだけである。裏面は右長辺上側のくりこみが若干回り込んでいるほかは平坦面である。橋本氏の発表資料には部分的に赤色塗彩が記録されているが、現在は退色が著しく確認できない。

3は右下隅がやや鋭角をなし変形しているが長方形に近い平面形状を呈する板状石である。規模は左長辺が188cm、右長辺が194cm、幅は76cm前後を測るが下半が幅広の傾向にある。下端短辺の厚さは15cmである。表面は左長辺寄りに稜をなし、面とりのように狭い傾斜面をもつ。下端短辺側面側からの観察によると裏面も弧状を呈するようであるが判然としない。両長辺の側面には両隅から左辺で17cm、右辺で20cmの位置に裏面には影響しない弱いくりこみが見られる。なお、図示した3個体の用材のほかは橋本氏の発表資料には1・2に接して後門部の傾斜面におかれている小型用材が掲載されている。

これらの用石材は、『前橋市史』に記述されているように組合せ式石棺の棺材と認識されることが多く、長持形石棺の系譜を引くものとの見解も示されていた。しかし、近年は竪穴式石室の天井石で縄掛突起が付された石材の例との共通性が指摘されており、その用途については未確定の段階にある。例えば、石室の天井石であれば四隅のくりこみはどのような機能を有したのであろうか。運搬のためならば加工・調整が丁寧すぎないだろうか。むしろ、本古墳の築造者が石材加工の技術者を自己の配下に納めていたこと自体が評価されることなのであろうか。

石棺材とすればくりこみ部は組み合わせ時に各石材を緊縛するための機能が想定されるようであるが、他の組合せ式石棺と全く異なった構造となり、類例も認められない状況にある。

ところで、第150図は5世紀後半前後の群馬県内主要古墳の分布と内部主体の在り方を示したものである。5世紀中頃の築造とされる太田天神山古墳と御富士山古墳には典型的な長持形石棺が採用されている。このことは、この時期、上野地域が畿内勢力との連携のもと、県内東部のいわゆる東毛地域を主導に地域圏が確立されたと理解されている。その後、5世紀後半に入ると、県内西部地域では、不動山古墳をはじめとした100mクラスの前方後円墳、小地域の首長墓の間に朝板式の舟形石棺が面的に波及する。その分布にみられる個在性の背景には主体部の共通性を紐帯の象徴とする地域連合体が西部地域に生まれたことによるものと想定されている。この時、東部地域では、太田市の鶴山古墳で割り石使用の竪穴式石室が、中原古墳では襷帯が採用されている。また、長持形石棺の影響からか太田市諏訪山古墳や伊勢崎市丸塚山古墳では緑泥片岩の板石を組合せた石棺が見られる。赤堀茶臼山古墳の主体部は木炭層である。埋葬主体部で見られる限り西部地域のような統一性はみられない。このような中、本古墳は規模において同時期の西毛地域の古墳と比較するとやや劣るものの、荒砥川周辺の地域にはじめて出現した大型の前方後円墳として、朝板式石棺分布圏の外縁に接し、先行する御富士山古墳の長持形石棺や同時期の丸塚山古墳の石棺の影響を受けて内部主体に加工石材を採用したと思われる。

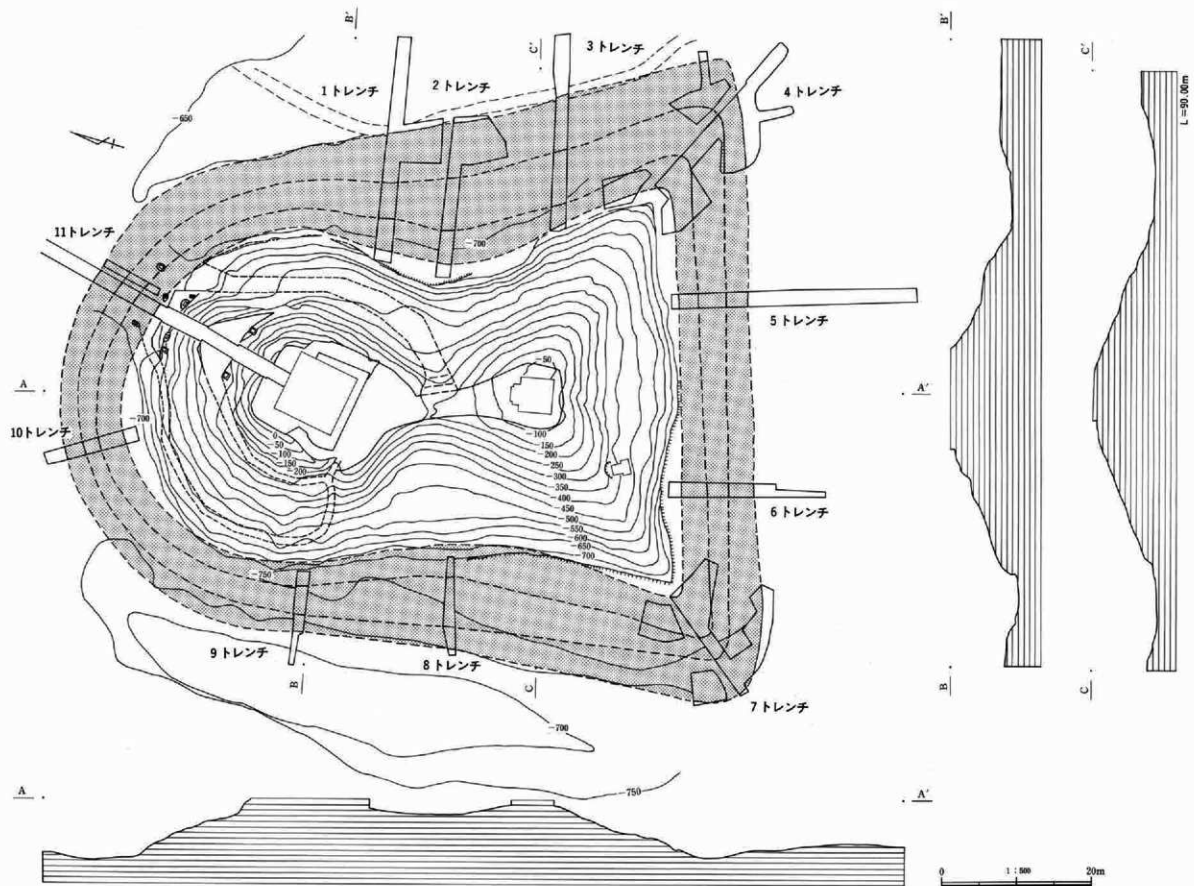
結果、現時点において、後門部にあった竪穴系の埋葬施設の様相、墳丘上に散在する石材の用途について断定するにいたらなかった。今後類似資料の収集に努力し一定の見解を見いだしたいと考える。

註(1)井野誠一氏の御指示による。

(2)引用及び参考文献13

(3)引用及び参考文献22

(4)引用及び参考文献26



第152図 今井神社古墳墳丘・周堀復元図



● ボーリング調査の地点を表す

第153図 今井神社古墳現況図

V 旧荒砥村245号墳の調査

1 遺跡の位置と地形

旧荒砥村245号墳は、1935（昭和10）年に県下一斉に行われた古墳調査の報告書である「上毛古墳総覧」に勢多郡荒砥村第245号として記載されている。調査に際しても「総覧」に則して古墳の名称を付した。

本古墳は、前橋市東大室町字下猿楽乙1,307に所在する。国道50号線の北約300m、通称「多田山」と言われている南北方向に延びる丘陵地形上に位置し、前橋市と赤堀町の行政境界線に接している。

本古墳の立地する多田山丘陵は、赤城山の山体崩壊により引き起こされた泥流によって形成された流れ山と呼ばれるもののひとつである。最高位の標高は159.1mである。丘陵の南側、西側斜面は東側や北側が急傾斜であるのに対し比較的緩やかである。本古墳はこの丘陵南端の小丘東北斜面にあり、標高約120mを測る。西側の沖積地との比高差は約15～20m



である。

丘陵の東側には湧水起源の水流を合わせた狭小な沖積地があり、丘陵の裾部を南北方向に延びる。また、丘陵の西側は、現在はその流路を変更し丘陵縁辺の台地を侵食している桂川により開析されたと考えられる沖積地と大室古墳群の西側を東南流する沖積地が合流し幅広く展開している。水田跡は未検出であるが、濃密な遺跡分布のあり方からは、丘陵の両側の沖積地が古墳時代において既に開発されていた可能性が充分考えられる。



第154図 旧荒砥村245号墳の位置



第155図 旧荒砥村245号墳周辺の遺跡

2 周辺の遺跡

先項の文頭でも述べたように、1935（昭和10）年に『上毛古墳綜覧』の作成に先立って古墳分布の調査が実施された時点において、本古墳の周辺には多数の古墳の存在が確認され、その総数は約50基前後を数える。『綜覧』には荒砥村大字東大室（現在の前橋市東大室町）字下猿楽に14基（その内1基は前方後円墳）の記載があるが発掘調査を経たものは本古

墳以外には認められない。

赤堀村大字今井字見切塚には『綜覧』に7基（その内1基は前方後円墳）の記載がある。1990（平成2）年には、本古墳の北東約200mで『綜覧』漏れの円墳が調査され、本古墳同様、玄室に向かって羨道の床面が下がる構造をなす点が目される。

丘陵の南側斜面から東側裾部には赤堀町田向古墳群が形成されている。『綜覧』では字田向に19基の記載がある。横穴式石室を主体部に持つ径20～30m前後の円墳7基が調査された。6世紀後半から7世紀

の築造である。この他に「綜覧」314号墳(多田山古墳)、「綜覧」325号墳の調査が実施されている。

丘陵の北端、東西の沖積地を見渡す小丘上には赤堀茶臼山古墳が位置する。本墳との距離は約1.2kmである。「綜覧」では赤堀村(現在、赤堀町)大字今井字毒島に4基(赤堀茶臼山古墳を含む)、字三騎堂に1基の存在が知られる。字三騎堂所在の旧赤堀村第265号墳(中里塚古墳)は穀石切組積の横穴式石室を有する7世紀後半の古墳である。さらに赤堀茶臼山古墳に接する船川村三騎堂古墳群では、1986(昭和

61)年に4基の円墳が調査され、その内の1基は竪穴系小石塚を主体部としていた。

以上のように多田山丘陵周辺には5世紀から7世紀の長期間にわたり多数の古墳の築造が認められるが、これらと集落、生産基盤との関連についての詳細な分析については今後の課題とする点が多く残る。

註 赤堀町歴史民俗資料館の松村永子氏のご教示による。

第5表 旧荒砥村245号墳周辺遺跡の概要

No	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	遺跡の概要
1	旧荒砥村245号墳	●	●	●	●					本報告書掲載の遺跡。
2	下船牛伏遺跡	●	●	●	●	●				神沢川左岸のローム台地上に位置する旧石器～平安時代の複合遺跡。旧石器時代文化層を2層検出し、約3,000点の遺物を出土。縄文時代住居址3軒・竪穴25基・土坑18基・聚石3基、古墳時代住居址13軒・古墳10基(円墳・方墳、横穴式石室、7世紀中葉以降)を検出。
3	波志江今宮遺跡			●	●	●				神沢川左岸に位置する。古墳は東側、波志江沼との間の台地上にある。6世紀から7世紀にあたる8基の古墳が調査された。うち1基は竪穴系小石塚を主体部に有する帆立貝式の古墳であった。台地の西側には狭い谷地が入りこみAs-Bの水田と溝が検出されている。
4	宮貝戸古墳群			●						波志江今宮遺跡の北側に位置し、今宮遺跡、下船牛伏遺跡で検出された古墳との関係が強く考えられる。4基が調査され、うち2基は円形埴輪を伴っている。3号古墳は前庭を有し、石室構築の為の掘り方を有している。
5	波志江六反田遺跡	●				●	●			平安時代の住居址3軒とAs-B下の水田を検出した。
6	石山遺跡		●							石山丘陵の南側斜面に位置する。100余点の尖頭器をはじめと多数の銅片等の遺物を出土した。
7	片田古墳群			●						「綜覧」によると前方後円墳を含む70基の古墳が確認されている。
8	八幡林古墳群		●							堀下八幡遺跡の北側に接する。縄文時代前期山間の住居址4軒と古墳4基を検出した。古墳は6～7世紀後半の築造と考えられ、うち1基は竪穴系小石塚を有している。
9	波志江中峰岸遺跡					●				堀下八幡遺跡、波志江六反田天神山遺跡の位置する両台地にはさまれた沖積地。As-Bに埋没した水田址が検出された。
10	割山遺跡		●							船川右岸の浅丘状の台地状にある。縄文時代後期の住居址が調査され、土偶や石塚が出土している。古墳は北側を除く斜面に分布しており「綜覧」では17基が確認された。小型の前方後円墳とされる割山古墳をはじめ7基以上が調査され主体部に竪穴系小石塚を有する円墳もあった。
11	北道遺跡			●	●	●				船川右岸の台地縁辺に立地する。南に岡山遺跡が立地する。2地点の調査が実施され、縄文時代前期磯部、岡山期の住居址、土坑、古墳時代前期の住居址1軒、平安時代の住居址2軒を検出した。
12	鷹風遺跡		●			●				旧桂川の左岸、台地縁辺に位置する。縄文時代前期磯部の住居址と土坑、奈良・平安時代の竪穴住居址と竪立柱建物址を検出した。
13	川上遺跡			●	●	●				多田山丘陵から南に延びる台地の東縁部に位置した台地内部にも遺構はひろがる。古墳時代前期、後期、平安時代の住居址を検出した。竪立柱建物址礎石を有しており、その礎石の構造は上野回分寺と同様のものである。布目瓦片も多く出土した。
14	下船向井遺跡		●		●	●				台地縁辺部に位置し、東側に狭い沖積地を囲む。縄文時代の土坑は早期と報告されている。古墳時代後期の住居址26軒も検出した。
15	向井古墳群			●	●	●				桂川左岸に位置する。下船向井遺跡に接する。うち1基が調査されている。
16	赤堀茶臼山古墳			●	●	●				多田山丘陵の中の北側に位置する。東西両側に沖積地を臨み、古墳と現在の水田間との比高差は約50mである。西へ1.2kmに三、二子古墳が位置する。全長45mの帆立貝式の古墳である。主体部は木炭層で神散置、内行文文鏡、石製標識品、鉄製品等が出土した。墳丘上には家形埴輪をはじめとした形象埴輪、円筒埴輪が密立されていた。5世紀中葉の築造と考えられる。

V 旧荒砥村245号墳の調査

No	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	遺跡の概要
17	多田山古墳群				●					赤城山の残丘状の丘陵である多田山丘陵の南東斜面には後期の円墳が集中する。中層古墳は敏石切組の横穴式石室を有していた。
18	多田山火葬墓地区					●	●			多田山丘陵の東斜面にある。安山岩でつくられた、蓋・身部分からなる青磁器13基が発見されている。
19	荒砥上川久保遺跡	●			●	●	●			穂川右岸の台地上に位置し、西側には沖積地がひろがる。古墳時代前期から平安時代まで継続する集落であり、平安時代の住居址は50軒を抽出した。古墳時代の方形周溝墓5基も検出され、赤井戸式土器が出土している。
20	梅木遺跡			●				●		熊二子古墳の東側、台地の縁辺部に位置する。古墳時代前期と平安時代の住居址を検出した。東西60mの居宅は内区に柱穴列を伴っている。
21	荒砥五反田遺跡				●	●	●			三、二子古墳の立地する台地の南端に位置し、西側に荒砥上川遺跡が隣接する。古墳時代前期から平安時代にかけての住居址を検出した。
22	荒砥上諏訪遺跡	●			●	●	●	●		樹状紋に開析された地形の台地状に東西に調査しており、東西の沖積地は湧水によって形成されたもので遺跡の北東に谷間がある。縄文時代諸磯期、古墳時代後期から平安時代の住居址が検出された。また「総覧」荒砥村第54号古墳の周墓も調査されている。
23	東大宝小学校校庭遺跡				●	●	●			荒砥上諏訪遺跡と同一台地上、台地南端に位置する。古墳時代前期、奈良、平安時代の住居址4軒を検出した。
24	前二子古墳				●					穂川と神沢川にはさまれた台地上に位置する。南側、台地の縁辺には荒砥上諏訪遺跡や荒砥五反田遺跡があり、沖積地がひろがる。全長95mの前方後円墳で軸無型の横穴式石室を主体部に有する。6世紀前半の築造と位置づけられている。周辺には中・後二子古墳のほか10数基の円墳が集中する。
25	中二子古墳				●					全長85mの前方後円墳。周墓を有し一部は二重になっている。
26	後二子古墳				●					全長82mの前方後円墳。主体部は両輪型の横穴式石室である。
27	久保菅戸遺跡				●					穂川左岸、舌状台地の縁辺に位置する。2軒の住居址は樽式土器を出土しているがいずれも古墳時代前期の遺構であろう。瓦器片も出土している。
28	下縄引遺跡				●					穂川左岸の台地上に位置する。検出された4軒の住居址はいずれも久保菅戸遺跡と同様の土器を出土している。
29	丸山古墳				●					台地の南端、孤丘状の高まりの頂部に位置する。
30	今井南原遺跡				●	●				沖積地をはきんで向井遺跡、川上遺跡が位置する。縄文時代は諸磯期の住居址1軒、弥生時代後期から古墳時代の前期36軒、古墳時代後期8軒、奈良・平安時代115軒、獨立建物址4棟を検出している。東側に古墳群が接する。「総覧」によれば27基の古墳が存在していた。
31	今井柳田遺跡	●			●	●	●			郡島から続く沖積地の左岸、台地上に位置する。同一台地上に多田山東遺跡が、沖積地をはきんで西側には田向遺跡がある。縄文時代は諸磯期と柄籠形を呈する堀之内期の住居址を検出した。古墳時代後期12軒、奈良・平安時代の7軒の住居址を検出した。
32	田向遺跡	●			●	●	●			多田山丘陵の東南、沖積地を臨む台地上に位置する。縄文時代は加曾野E期1軒。古墳時代前期は3軒と少ないが以後平安時代まで集落は継続する。
33	多田山東遺跡	●	●				●			柳田遺跡の北側台地の西縁部に位置する。縄文時代の住居址は諸磯期で7軒を検出した。弥生時代の後半から以後各期の住居址があり、平安時代まで継続する遺跡である。
34	牛伏古墳群				●					渡志江沼東側の舌状台地のほぼ中央部に位置する。1号墳調査。直径30m、横穴式石室を有する。西60mに2号墳確認。
35	向井遺跡				●					住居址1軒を調査。下畑向井遺跡と同一遺跡と思われる。
36	南原古墳群				●					穂川右岸の沖積低台地上。「総覧」に愛宕山古墳を中心に28基記載。昭和26年に4基、昭和41年に1基を調査。
37	市場寺回遺跡	●								縄文時代の土22基を検出した。
38	轟山古墳群				●					横穴式軸無型石室を有する小型前方後円墳を中心に、壑穴系小石塚が分布する。形成は6世紀前半～8世紀初頭までと推測される。
39	北原遺跡				●					古墳と重複し6世紀以前の住居址を検出している。
40	北原古墳群				●					調査古墳6基のうち4基は横穴式石室を有し7世紀代の築造と考えられる。
41	御伊勢坂遺跡				●		●			住居址4軒を調査している。
42	千鳥遺跡				●	●	●			銅木川右岸段丘上に位置し、古墳時代を中心に43軒の住居址を検出する。
43	中二子古墳				●					全長30mの前方後円墳である。
44	女廻						●			
45	東山道駅跡					●				

●「総覧」は「上毛古墳総覧」をさす。

3 調査された遺構

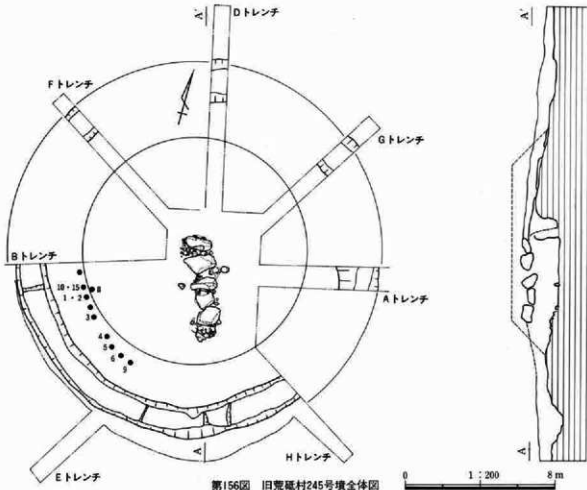
(1) 墳丘及び外部施設

墳丘は、耕作による削平のため、桑畑の中に石室天井石の一部が露出する程に改変を受けており、詳細な規模は不明である。基石の造作は無いが、8本のトレンチの地層断面の観察結果から推して、径は約12mで、高さが2～3m前後の比較的低墳丘の円墳であったと考えられる。ちなみに、「上毛古墳総覧」には、1935(昭和10)年当時の状態として、径26尺・高さ5尺の円墳と記されている。

墳丘の周りには、外縁部径約19mの周堀が巡らされていた。周堀の規模は、上幅150cm前後・下幅70～100cm・深さ30～40cmを測り、断面形は逆台形状を呈するが、底面は部分的に段状に掘られていた。

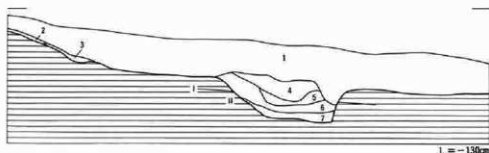
底面のレベルを比較すると、南西部が最も高く、北東部が低くなっており、最大で163cmの高低差が認められる。なお、未発掘の部分が残るが、途切れることなく環状に巡っているものと考えられる。周堀の覆土は、大きく3つに分層でき、底面上にはロームブロックを含みやや粘性の有る黒褐色土が堆積し、その上に淡い褐色土が乗っている。最上層は黑色砂質土で埴輪片は殆どこの層中より出土している。底面からこの層の下端までは18～50cmの層厚が有り、墳丘の崩壊と周堀の埋没過程がある程度窺える。

周堀内縁と墳丘との間は、地山を削り出して整地した幅約2mのテラス面となっており、径約14m規模の円筒埴輪列が確認された。9本の円筒埴輪基部が60～80cmの間隔を以て樹立されていた。個々の埴輪は、円形に掘られた穴の中に1本ずつ樹立されていたが、全体の配列を観察すると、厳密に円弧に沿ってはおらず3～4本が直線上に設置されており、作業方



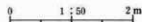
第156図 旧寛堀村245号墳全体図

V 旧荒砥村245号墳の調査

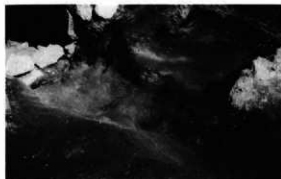


- | | |
|--------------------|----------------------|
| 1. 新作土 | 6. 黒褐色土 やや粘性がある。 |
| 2. 黒褐色砂質土 軽石を含む。 | 7. 褐色土 ロームブロックを多く含む。 |
| 3. 褐色土 やや粘性がある。 | I. ローム遷移層 |
| 4. 黒色砂質土 埴輪片を多く含む。 | II. ローム層 |
| 5. 黒褐色土 | |

第157図 Aトレンチ南壁土層断面図



法が類推される。なお、3（第156図）と4（第156図）との間隔は120cmを測るが、埴輪が抜かれた痕跡が確認されている。また、口縁部付近の資料である8（第156図）が付近のものよりも10cm程高いレベルから横転した状態で出土していることから、墳丘部にも埴輪が産列されていたものと考えられる。各トレンチからも埴輪片が出土しているが、調査区南西の拡張部においては石室の左側のみに埴輪列が遺存していた状況と合わせて考えると、テラス上の埴輪列が全周していたか否かは不明である。未発掘部分を残すが、トレンチ及び周堀内より出土した資料に形象埴輪は認められなかった。（P L55 観、P 258・259）



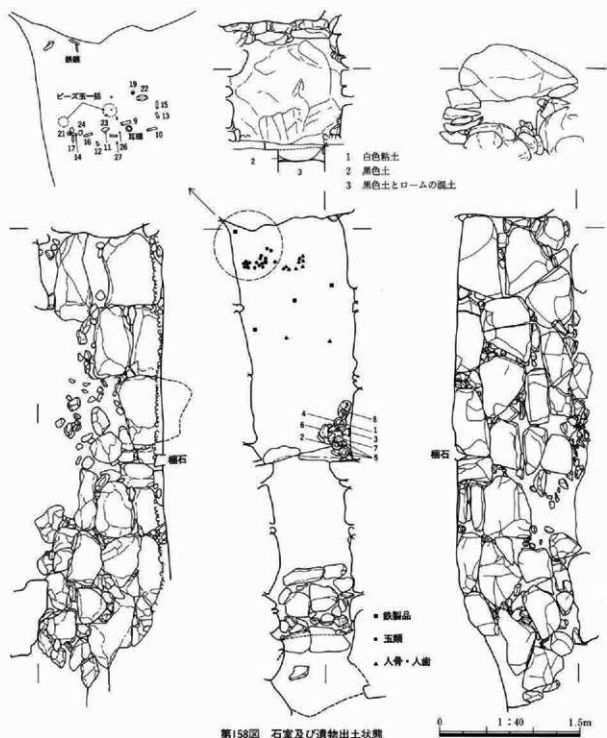
羨道開口部、墓室状施設の状態

(2) 内部施設

埋葬主体部は、地山を1.4m程の深さまで直方体状に掘り込んだ掘り方内に構築された、半地下式の「両袖型横穴式石室」であり、ほぼ南に向かって開口する。玄門・柵石で区分された玄室と羨道との長さはほぼ等しく、全長約5.30mの石室を折半した構成を採っている。石室各部の計測値、計測位置については後述のとおりである。

天井石は、玄室上部に3石、羨道部に2石が遺存しており、玄室の奥から3番目の石は石室内に落ち込む様な状態であったが、上部の被覆に使用された角礫と白色粘土が部分的に確認され、比較的良く旧状を止めていた。天井面については、玄室部から羨道部に移る位置で、1段下げて架構するといった造作は行っておらず、奥壁際と石室入り口部とがほぼ水平になる平面構造をとっていたものと考えられる。

羨道右壁は、床面の造作よりも25cm程外側まで石積みがなされており、現状で約47度の傾斜で立ち上がっているが、攪乱の為に入り口面の詳細は不明である。また、羨道開口部の手前には、テラス面を長さ約170cm・深さ10～30cmに亘って掘り窪めた墓室状の施設が検出されたが、詳細な計測値は記録漏れである。開口部から羨道奥へ約50cmの間は階段状になっており羨道床面へと続いている。墳塞は羨道部

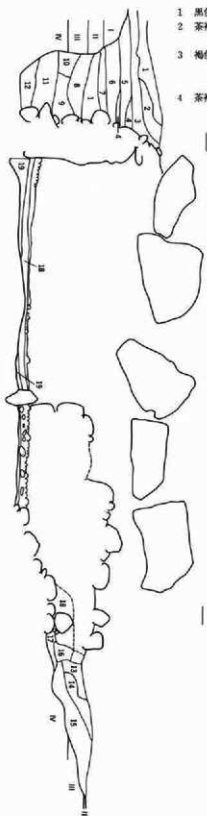


第158図 石室及び遺物出土状態

のほぼ全体に互ってなされていたが、調査時において天井石下面と閉塞石天端とは約20cmの間隔があった。閉塞の除去作業によって、3工程の造作が確認できた。即ち、第1段階は、埋葬部と閉塞部との境に、墓道状施設の底面とほぼ水平にしつらえられた高さ約30cmの下がり框を設けており、上部には黒色土・

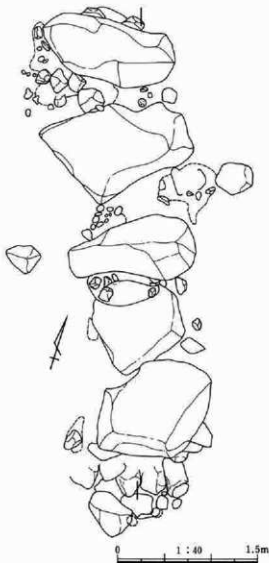
ロームブロック・白色粘土を含む褐色土が20cm程堆積していた。第2段階は、框を更に30cm程嵩上げすると共に、墓道状施設も埋め戻している。第3段階は、羨道奥から約80cm手前の部分から開口部までの約180cmの間を閉詰め構造によって閉塞していた。第1段階と第2段階の間には、堆積土の存在から、明

V 旧瓦礫村245号墳の調査

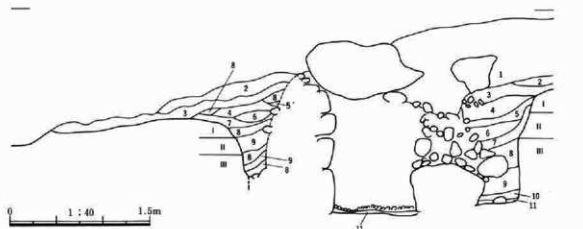


第159図 石室天井石及び掘方縦断面図

- | | |
|--------|--------|
| 1 黒色土 | 5 茶褐色土 |
| 2 茶褐色土 | 6 茶褐色土 |
| 3 褐色土 | 7 褐色土 |
| 4 茶褐色土 | 8 褐色土 |
| | 9 褐色土 |
- ロームの比較的大きなブロックを含む。
 2層よりロームの混入度が多くなる。上層に多量の白色粘土を含む。
 5層よりややロームの量が少ない。
 5層よりやや褐色、ロームブロックが大きくなる。
 ローム主体。
 白色粘土を含む。8層よりも黒色土とロームブロックが大きい。



- | | |
|--------------|----------------------------|
| 10 褐色土 | ロームの非常に大きなブロック。 |
| 11 茶褐色土 | 粒子が細かく比較的軟かい。 |
| 12 褐色土 | ロームブロックが多い。 |
| 13 黒褐色土 | 白色粘土をあまり多く含まない。 |
| 14 黒褐色土 | 白色粘土を多く含む。礫土と同一ような成分。 |
| 15 茶褐色土 | ロームブロック、白色粘土を含む。あまりしまりがない。 |
| 16 白色粘土 | ロームブロック・黒色土の混土。 |
| 17 黒色土 | ロームブロックを含む。かたくなまっている。 |
| 18 白色粘土 | 19 埴土 |
| I 軽石を含入する黒色土 | II 褐色土 |
| III ローム漸移層 | IV ローム |



- 1 耕作土
- 2 黒色土を主体とした風土層
- 3 茶褐色土 比較的大形のロームブロックを含む。黒色土も混入する。
- 4 黒色土を主体としたローム、白色粘土との混入層
- 5 茶褐色土 ロームブロック、白色粘土との混土層
- 5' 茶褐色土 ロームブロック、黒色土を混入する。
- 6 茶褐色土 細粒、比較的さらさらしてしまりが無い。黒色土と混土状をなす。

- 7 軽石を含有する黒色土と少量の褐色土の混土層
- 8 黒色土と非常に大形のロームブロックを含む褐色土の混土層
- 9 黒色土とロームブロックを含む茶褐色土の混土層
- 10 茶褐色土と黒色土の混土層
- 11 白色粘土層
- I 軽石を含有する黒色土
- II 褐色土
- III ローム層

第160図 石室掘り方横断面

らかに時間的隔たりを推定できるが、追葬回数不明までには至らなかった。

石室の側壁は、ほぼ直に構築され、幅70～90cm・高さ40～50cm前後の礫石を使用しており、玄室・羨道の左右壁の根石は各々3石の平積みで構成されている。袖は石の小口面を壁面から突き出す様にして造られていたが、崩落部に当たっており、上部に行くに従ってあまりはっきりとはしなかった。現状において、羨道部壁面から右側で15cm、左側で10cm突出しており、羨道部壁面と揃っていない。壁面用材は上部のものはやや小振りになるが、奥側では奥壁を保持するために大型の物2石、前半部では4石を横目地を意識して積み上げている。右壁には互目積みになった部分も窺えるが、左壁は通目積みの傾向が強く、構造的に弱いためか、左右壁共に袖の上部で壁面が崩落している。

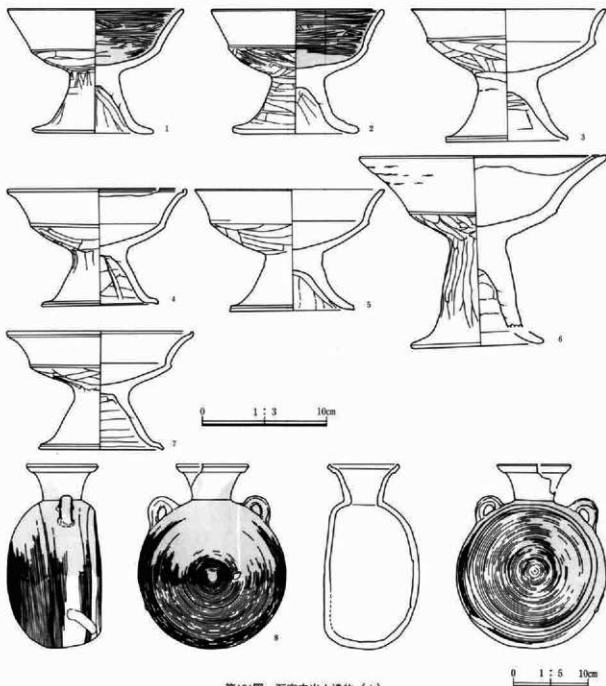
石室の平面は、玄室の左壁から12cm・右壁から25cm突き出た袖によって玄室と羨道と大きく区分されている。玄室のプランは、左右壁共に東側に彎曲しており歪みが認められるが、間口に対して奥行き著しく長い長方形で、両者の比はほぼ1:2.5であ

る。玄室の手前部には袖に接するように高さ10cm程の2石の軽石が据えられている。羨道部は、袖の110～120cm程手前に横長の石が2個設置されており、この前後で床面の状態が異なる。即ち、玄室及び羨道奥部では、掘り方底面の上に灰白色粘土を厚さ10cm程貼った上に径3～4cm前後の玉石を敷き詰めていたが、前半部では掘り方底面に10～25cm大の河原石を敷いている。また、底面のレベルも奥部はほぼ水平であるが、ここから開口部にかけては約25度の上り勾配となる。更に、この手前に前述の墓道状施設が取り付いていた。なお、玄室奥から80cm程手前までの範囲においては、排水機能を意識したためか、前述の灰白色粘土層は壁際のみ認められた。

第6表 石室規模一覧

全長	右中	(5.17)
	左中	(5.14)
	左	(4.81)
玄室長	右中	2.99
	左中	2.96
	左	2.49
玄室幅	前中	0.95
	中	1.10
	奥	1.17
玄室開口		0.54
玄室高	奥	1.20
羨道長	右中	(2.58)
	左中	(2.58)
	左	(2.32)
羨道幅	前	0.73
	奥	0.79
羨道高	奥	1.19
開口方向		S-23°E

V 旧荒砥村245号墳の調査

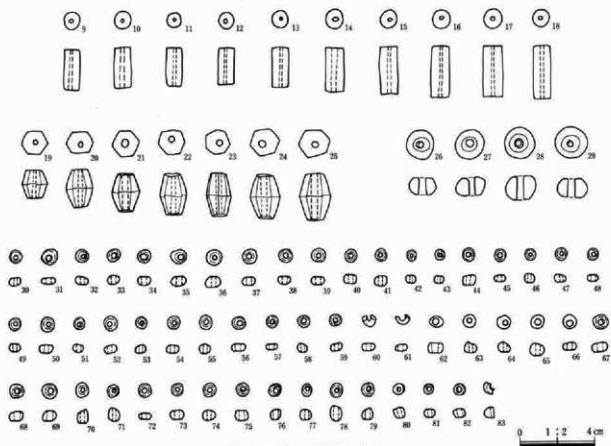


第161図 石室内出土物(1)

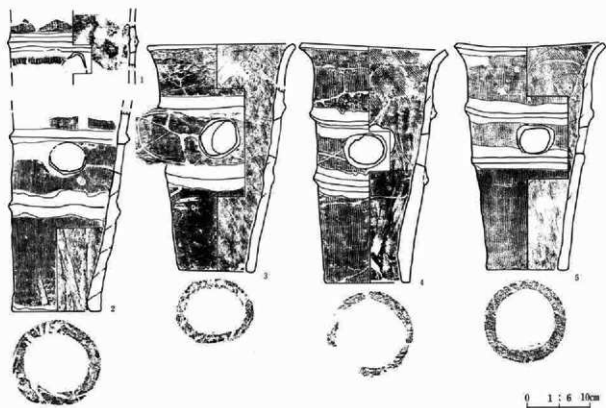
奥壁は、掘り方底面よりも更に15cm程埋め込まれた、幅140cm・高さ130cmの鏡石の上に、幅40cm・高さ10cm程の石を2段積み上げて構成されていた。石材の凹凸は有るが、ほぼ垂直に構築されていた。

石室の掘り方は5箇所を確認したに過ぎないが、前述のとおり、平面形は縦590cm・横310cmの長方形で、深さは130~150cmである。石室の壁材と掘り方との隙間には、径10~30cm程の壊石を裏込め材として使

用し、ロームを主体とした混土と、黒褐色土の混土とを約15cmの厚さで互層状に詰め込んでおり、部分的に白色粘土も使用して埋め戻していた。埋葬部高さの8割以上が安定した地下に所在したにも拘わらず、床面近くに壁材が崩れ落ちていた状態から推して、崩壊の要因として、盗掘行為・壁体構造の限界の他に、自然営力の影響という観点から検討する必要が有るかもしれない。

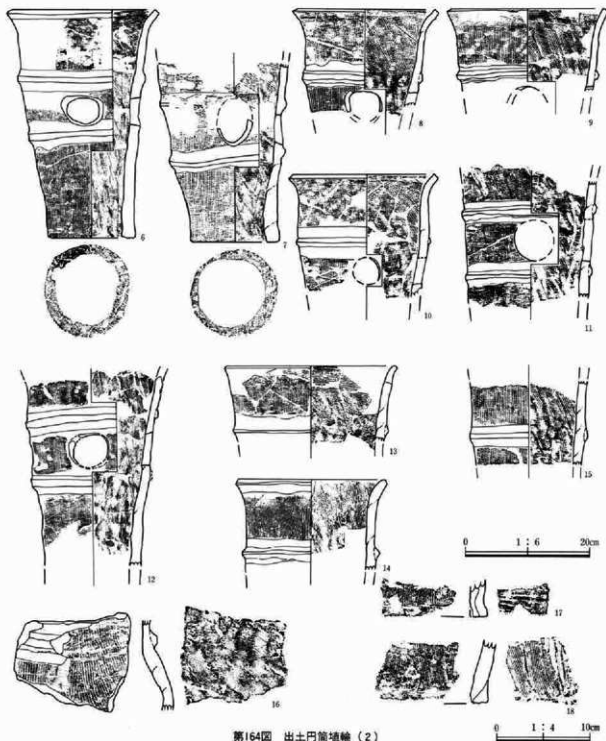


第162図 石室内出土遺物(2)



第163図 出土円筒埴輪(1)

V 旧荒砥村245号墳の調査



第164図 出土円筒埴輪(2)

(3) 遺物の出土状態

玄室内より出土した遺物は以下の通りである。

ガラス小玉58(覆土中)、水晶製切子玉7、碧玉製管玉10、鉄鏃2、刀子1、棒状鉄製品(鉄釘の可能性はあるか)3、金銅製耳環1、土師器高坏7、須

恵器提瓶1である。その他に(4)に記載いただいたように若干の人骨・歯が出土している。

出土状態については、土器類が右袖部の玄室隅にまともって副葬されていた。土師器高坏6個は臥せられており、1個は崩落した際によって潰され横倒しになっていた。須恵器提瓶は高坏に隣接し、胴部

平坦面を右壁にもたせ掛けて立てられ、口縁部には約5cm四方大の角礫があたかも蓋の様に乗せられており、内部には液体が遺存していた（液体の成分については未分析）。（P.L54 観、P251）

他の物は、図示した通り、玄室奥半部より出土しているが、歯と耳環との間隔が約40cm離れていることから明らかなように、埋葬状態の旧状は止めていなかった。なお、ガラス小玉58個は覆土の篩作業によって検出したものであり、出土地点の特定は出来ない。

外部では、南西部において、古墳全体の約4分の1の範囲の覆土を排除したに過ぎないが、周堀内縁から150～165cm程内側に、円筒埴輪9個体の基部が約60cmの間隔をもって樹立された状態で検出された。また、周堀の底面に密着した、焼土・炭化物を含む層中からは須恵器坏片（回転糸切り底）が出土したが、北西部に構築された炭窯に関連するものと考えられる。

(4) 出土人歯・骨について

ここでは石室内から出土した人の歯6本と若干の人骨について記しておきたい。観察の結果、次のことが認められた。

- 1) 年齢は青年期後半から壮年期前半が推定される。
- 2) 小臼歯は小さいが、大白歯の大きさは男性的である。
- 3) 大白歯の歯冠部咬合面にはいくらかの小孔が観察されるが、う蝕ではないようである。
- 4) 細骨片があり、この中に膝蓋骨（膝の皿）の破片と脛骨（？）片が含まれている。

個々の計測値については下記のとおりである。調査項目は主に上条雍彦(1962)『日本人永久歯の解剖学』(地人館、東京)により、○は存在することを、×は存在しないことを意味する。また、咬耗度の表示は、小臼歯は折原博(1957)『日本人歯牙の咬耗にかんする研究』(熊本医学会誌)31補冊、607-656に、大白歯はBrothwell, D. R. (1972) Digging up bones, British Museum, Londonによる。

第7表 出土人歯計測値一覧

下顎小臼歯											単位mm				
歯 種	近心径	頬舌径	歯冠長	副 隆 線		舌側咬痕の位置	辺縁溝 近心 遠心	咬合面の傾斜	舌側付加突起	舌側溝	Blackの分類	咬耗度			
				頬側	舌側										
左下顎第1小臼歯	7.1	8.6	9.1	?	○	?	?	近心	×	×	2	b	×	/	1'b
左下顎第2小臼歯	7.3	8.6	7.6	?	?	?	?	近心	×	×	/	/	/	H	1'b

下顎大白歯計測値

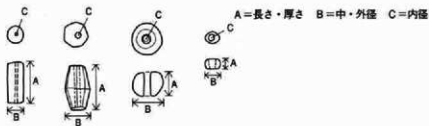
歯 種	近心径	頬舌径	歯冠長	遠心咬痕の退化	辺縁溝 近心 遠心	副 隆 線				咬耗型	咬耗度				
						近心頬側 近心 遠心	近心舌側 近心 遠心	遠心頬側 近心 遠心	遠心舌側 近心 遠心						
右下顎第3大白歯	10.4	9.6	4.8										1		
右下顎第2大白歯	11.8	11.1	7.0*	5	×	×	?	?	○	○	?	?	?	X5	2
右下顎第1大白歯	11.6*	10.5*	6.6*	5	×	×	?	?	○	○	?	?	○	X5	2
左下顎第1大白歯	12.6	11.5	7.1*	5	×	×	?	?	○	○	?	?	○	Y5	2

V 旧荒砥村245号墳の調査

第8表 玉類計測値一覧 (P.L.54)

(単位: A・B・C・cm 重さ・g)

No.	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
種類	管玉	管玉	管玉	管玉	管玉	管玉	管玉	管玉	管玉	管玉	切子玉	切子玉	切子玉	切子玉	切子玉	切子玉	小玉	小玉	
A	2.20	2.20	2.00	2.00	2.10	2.35	2.55	2.70	2.70	2.85	1.60	2.00	2.00	2.20	2.30	2.35	2.50	0.45	0.50
B	0.90	0.90	0.85	0.80	0.90	1.00	0.95	1.00	1.05	0.90	1.40	1.45	1.50	1.40	1.30	1.60	1.70	0.75	0.80
C	0.20	0.15	0.15	0.20	0.15	0.30	0.20	0.20	0.20	0.20	0.25	0.30	0.40	0.30	0.30	0.35	0.30	0.45	0.15
重さ	3.10	2.99	2.44	2.29	3.16	4.43	4.16	4.74	6.11	4.21	3.12	4.21	5.25	5.41	4.77	6.39	7.48	0.33	0.37
No.	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46
種類	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉
A	0.70	0.50	0.25	0.15	0.20	0.20	0.25	0.25	0.30	0.20	0.20	0.20	0.25	0.28	0.18	0.21	0.26	0.17	0.23
B	0.85	0.85	0.35	0.40	0.35	0.35	0.40	0.45	0.45	0.40	0.40	0.40	0.34	0.30	0.26	0.26	0.34	0.33	0.30
C	0.20	0.18	0.10	0.18	0.10	0.10	0.15	0.12	0.10	0.15	0.12	0.15	0.10	0.08	0.08	0.08	0.10	0.10	0.08
重さ	0.52	0.50	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.05	0.03	0.03	0.03	0.03	0.02	0.02	0.03	0.02	0.03
No.	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65
種類	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉
A	0.23	0.18	0.22	0.20	0.20	0.25	0.25	0.25	0.25	0.20	0.15	0.25	0.25	0.20	0.20	0.30	0.30	0.30	0.35
B	0.32	0.30	0.31	0.40	0.30	0.35	0.30	0.35	0.30	0.35	0.30	0.30	0.30	—	0.35	0.40	0.35	0.35	0.40
C	0.08	0.10	0.10	0.10	0.10	0.10	0.10	0.10	0.10	0.15	0.15	0.10	0.10	—	0.10	0.15	0.10	0.10	0.10
重さ	0.02	0.01	0.03	0.04	0.02	0.03	0.03	0.02	0.03	0.02	0.01	0.02	0.02	—	—	0.05	0.05	0.04	0.05
No.	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	
種類	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉
A	0.20	0.25	0.25	0.30	0.35	0.35	0.20	0.25	0.25	0.25	0.25	0.30	0.40	0.30	0.30	0.21	0.23	0.28	
B	0.40	0.40	0.40	0.40	0.30	0.30	0.35	0.30	0.35	0.35	0.30	0.30	0.35	0.30	0.30	0.30	0.32	—	
C	0.15	0.10	0.15	0.15	0.10	0.10	0.10	0.10	0.15	0.10	0.10	0.10	0.10	0.10	0.10	0.10	0.12	—	
重さ	0.04	0.05	0.04	0.05	0.04	0.03	0.02	0.03	0.04	0.04	0.03	0.03	0.04	0.04	0.03	0.02	0.03	—	



VI 成果と問題点

1 荒砥宮川遺跡・荒砥宮原遺跡の集落変遷について

荒砥宮川・荒砥宮原遺跡の位置する地域では、荒砥南部圃場整備事業や上武道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果を踏まえ、農業発達の視点により各遺跡相互の関連性や、遺跡群の動向に関する研究がなされてきた。

これまでの研究の中で、この地域において最も古い時期の住居は荒砥島原遺跡で調査された弥生時代中期後半の事例とされている。その後、弥生時代後半の状況は十分に把握し難いが、古墳時代前期になるとその居住域は、宮川やこれに合流する小河川によって開析された沖積地に臨む低台地や微高地の末端に形成されることを特徴とする。そして、時期が進むとともに台地内部や微高地縁辺に沿って範囲・住居数ともに拡大するとされた。

ここでは、今までの研究の成果を踏まえ出土遺物の様相から荒砥宮川・荒砥宮原遺跡の変遷についての再検討を行いたい。

ただし、今回の調査区は微高地の縁辺部を南北に縦断しているにすぎず、調査が遺跡の範囲全体に及んでいるわけではないために、得られた資料には限界があることを冒頭に述べておきたい。

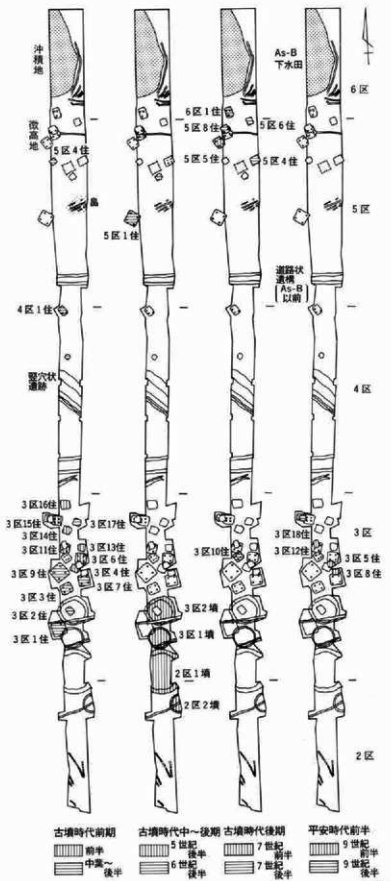
荒砥宮川遺跡において最も古い時期に造られたと考えられる住居は3区15号住居である。この住居からは、土器類の他石包丁1点が出土している。これまでの研究では、本住居の構築時期は弥生時代後期末と位置づけられてきた。今回出土した遺物を再検討した結果、1の蓋(第33図)は弥生時代後期の様相を色濃く残すものの、その他の遺物については、古墳時代初頭に属するものと考えられ、住居の構築時期も古墳時代初頭に当てたい。この住居をはじめとし、古墳時代前期の住居は遺跡地の南半部を中心に多く見られる。この時期の耕作域としては、荒砥宮川遺跡5区においてA8-Cを多量に含む黒色土で覆われた畠跡が検出されている。本遺跡における畠の検出面積は少ないが、東に延びる道路建設部分においても同様の土壌に覆われた畠跡が検出されており、古墳時代前期には、微高地にかなり広い範囲で畠耕作が行われたことが推測される。

5世紀になると、本遺跡地内の住居数は5区1号住居の1軒と減少し、代わって2区北半分から3区南半にかけて古墳群が形成される。2区1号墳、3区1・2号墳では周堀底面から15~25cmの間層をはさ

第9表 荒砥宮川・荒砥宮原遺跡周辺遺跡の動向

No	遺跡名	弥生中期			古墳前期			古墳中期			古墳後期			奈良時代		平安時代		中世		
		居住	生産	墓	居住	生産	墓	居住	生産	墓	居住	生産	墓	居住	生産	居住	生産	居住	生産	
1	荒砥宮川			○	畠	?	○	○									○	B水田		
2	荒砥宮原			○																
4	荒砥洗橋			土器					○					○			○	B水田		
5	荒砥宮西								○					○						
6	荒砥天之宮							○			○	溜井		○	溜井	○	○	溜井 B水田		
7	二之宮宮下西							○			○			○			○			館址
8	二之宮千足			土器	C水田						水田 溜井			○	水田	○	○	B水田		
9	二之宮洗橋			土器										○			○	B水田		
10	荒砥島原	○			○	○(周溝墓)		○			○			○			○	B水田		
11	荒砥冨柳													○			○			
17	二之宮宮東			土器														○	B水田 畠	館址
18	二之宮宮下東										?			水田 溜井	○		○	B水田	館址	水田
20	二之宮谷地									○	水田 溜井			○			○	B水田		

本表は「二之宮千足遺跡」の成果を基礎に新たな資料を追加して作成した。遺跡の番号は第1表のそれと符合する。



第165図 宮川遺跡の変遷

んでFA純層が堆積しており、出土遺物の年代とも考えあわせると、5世紀の後半には古墳の築造がおこなわれるようになったことがわかる。ここで確認された4基の古墳は、互いの周堀がほぼ接する状態で構築されており、先行して造られた比較的大規模な古墳(径12~18m)の間に、あわせるように小規模な古墳(径8~11m)が造られている様子がうかがえる。古墳時代におけるこのような様相は、宮川を挟んで位置する台地の荒砥宮原遺跡からも同様にうかがえる。

6~7世紀になると、居住域の中心は遺跡の北半に移り、5区に集中し、9世紀になると再び3区に移る。また、A≡Bに覆われた水田が、宮川沖積地に開口した小規模な谷頭に当たる6区北半に形成されている。この地点では、トレンチ調査によりA≡Bの下層にはFAをブロック状に含む層が、その直下には水田遺土が確認されている。また、その下層にはA≡Cが堆積し、直下には黒灰色の粘質土が確認されて水田耕作土の可能性をもっている。このことから、荒砥宮川遺跡の位置する微高地上では、少なくとも2区で古墳が築造された時期から大きく下らない頃には水田耕作が開始されていたことが考えられ、水田耕作開始時期が古墳時代の前半までさかのぼる可能性もある。

以上、遺跡の概要をまとめてきた。遺跡の推移については、多少

の訂正はあったもののこれまでの研究・報文とほぼ同様の見解となった。また、本道跡に形成された古墳の築造時期はその様相から、本道跡の北西約1.2kmに位置する前方後円墳である今井神社古墳からあまり時間の経過を経っていないものと考えられる。そして、この時期は荒砥北三木堂遺跡に代表されるよう当該地域における集落の拡大の時期とも相前後するものである。このような周辺遺跡にみられる動向の背景には当該地域において大規模農耕開発がおこなわれたことが想定される。また、その主体となった

のが今井神社古墳を築造した勢力であったことは想像に難くない。その結果もたらされた経済的な飛躍とその後の安定は、今井神社古墳築造勢力を頂点とする地域の統合を進めただけでなく、これまで古墳の築造が許されなかった集落内の有力者の成長を促したものと考えられる。これらの有力者層が古墳築造に対する新たな社会秩序の中に取り込まれて行ったことを具体的に示すものが本道跡で検出された中小規模の円墳、いわゆる初期群集墳の形成であると考えられる。

(磯貝朋子)

2 今井神社古墳出土埴輪の位置付けと課題

南雲芳昭

(1) 工程の復元

全体の形状は3条突帯を有する資料と2条突帯を有する資料がみられる。

成形工程を推定復元すれば、次のようになる。基部を形作るが、基部を作る粘土帯は2条突帯例で3枚確認できる。破片資料から復元できる基部径は2条突帯例ときほど変わらないので、基本的に複数の粘土帯による基部の可能性が考えられる。また、粘土帯の時点で横ハケ状の痕跡がつく場合がある。基部から粘土紐を巻き上げていき、乾燥させながら成形する。突帯位置には浅く幅広い沈線を送らせている。これは沈線の様子から接合効果を増すための投籠技法というよりは突帯の割り付けが主目的と考えられる。口縁部では粘土を貼り付けて肥厚させる場合がある。また、口唇部にハケメを施す場合の2条突帯例をみると、口唇部にハケメを施したのち内外面の横ナデを施している。

二次調整は基本的には突帯貼付後横ハケを胴部突帯間に単周させる。この他に突帯間を複数周回る横ハケが認められる。IV-5-(2)「出土埴輪の様相」で述べた他にも、1トレ141、7トレ38でも可能性がある。4トレ101、10トレ53・54も複数周回るが胴部が否か判別しがたい。口縁部では突帯貼付後に複数周回して口縁部全体に横ハケを充填させている。そして、おそらく横ハケを施すのと相前後して、基底部最下端に横ナデを施している。その原埴輪を倒立させているか否かは明確ではない。横ハケを施さない例でも突帯貼付時の横ナデを消す縦ハケがみられることから、突帯貼付後に再度ハケメを施していることが窺える。ただし、突帯部分の横ナデが横ハケを消す例があることに留意しなければならない。横ハケ後に再度突帯部分を横ナデしていると思われるのである。なお、基底部には横ハケを施している資料

はみられない。

また、口縁部に副次的に小円孔を穿つ例もある。さらに口縁部に四脚を有する動物を貼付ける例が認められる。透孔穿孔後、透孔内面にナデを施す例がある。これらの事象が他の技法と一箇体中においてどのような有機的関係があるか破片資料からは明らかにできない。

赤彩は基本的に口縁部を中心に行われ、著しい例ではハケメの溝を埋没させるほど厚く塗布している。黒斑はみられず、灰色系色調を呈す須恵質の例もみられ、審察を用いていると考えられる。

(2) 諸要素の分析

口縁部における小円孔は時期が特定できる例では5世紀後半からH I - F A 降下前後までの時期に中心を持っている⁽¹⁾。口唇部にハケメを施す例は類例の増加を待たねばならないが、口唇部に施文する例としては刻みをいれる例が太田天神山古墳、女体山古墳、お富士山古墳などにある⁽²⁾。口縁部上端が粘土貼付により肥厚する例は、県内では七興山古墳⁽³⁾、井出二子山古墳⁽⁴⁾、保渡田薬師塚古墳⁽⁵⁾、金冠塚古墳⁽⁶⁾、江原塚古墳⁽⁷⁾でみられ、5世紀後半代から6世紀後半代にわたり、低位置突帯と組み合わせて栃木県の例も含めると6世紀後半に例が多い。ただし、口縁部直下の例も含めると福島県天王壇古墳や栃木県赤麻愛宕塚古墳⁽⁸⁾のような5世紀中～後半まで遡る例もみられる。畿内では大阪府豊田御廟山(応神陵)古墳をはじめとする古市古墳群や日置埴輪窯などにもみられる。

口縁部における動物等の小像を貼付ける例は、可能性のある例も含めると白石稲荷山古墳と七興山古墳⁽⁹⁾、舞台1号墳⁽¹⁰⁾、後二子古墳⁽¹¹⁾、上興引4号墳⁽¹²⁾、若宮八幡北古墳⁽¹³⁾、高崎情報団地遺跡⁽¹⁴⁾などがあげられる。県外では岡山県金蔵山古墳で可能性が指摘されて

⁽¹⁹⁾いるが、県内では5世紀前半～6世紀中葉および後半までの時期で、白石稲荷山古墳例が異なるとすれば5世紀後半からとなる。

3条突帯の胴部における小円形透孔と半円形透孔の組み合わせは、白藤V-2号墳に類例があることが指摘されている。⁽¹⁹⁾白藤V-2号墳は坂口編年III期、須恵器ではTK208型式の時期とされる。⁽²⁰⁾芳賀西部団地埴輪棺資料も類例に加えられる。⁽²¹⁾基底部の透孔については、器財埴輪の一部、たとえば蓋の笠を受ける台部の可能性も考えられるが、他に形象埴輪の破片もなく明確にしたいので円筒埴輪として扱っておく。類例を求めればお富士山古墳資料の基底部に半円形透孔が、⁽²²⁾十二天塚古墳資料の基底部に円形透孔、⁽²³⁾下郷SZ39資料に円形透孔が穿孔されているのが管見に触れる。他は特殊器台の系譜を引く資料を有する下郷天神塚古墳資料に認められるのみである。

基底部最下端には横位のナダが巡る例が多くみられるが、栃木県の資料を中心に研究がなされている。銀杏葉文と組み合わせで考えられ、TK208型式の時期には出現し6世紀初頭に消失するようである。⁽²⁷⁾銀杏葉文との組み合わせの例は管見に触れないが、横ナダを施す例は県内においても白石稲荷山古墳、十二天塚古墳、お富士山古墳、太田天神山古墳、⁽²⁸⁾目塚1号墳、⁽²⁹⁾白藤V-2号墳・V-4号墳、不動山古墳、井出二子山古墳などの首長墓から小型古墳にまで認められる。これは器面を二次調整で整え、仕上げるのと同じように、ハケメ工具が着面した痕跡などで器面が荒れたり、粘土がだぶついたり重みのみえた最下端を整えて仕上げるというひとつの手順であったと考えられる。省力化の方向性から二次調整が失われ、最下端の横ナダが消失していくのであろう。やがて基部の上から一気に巻き上げる反動で最下部に著しい重みが生じるようになり、川西宏幸氏の言う底部調整の必要性が生まれてくるのである。⁽³¹⁾その意味でこの横ナダは二次調整が施されていない円筒埴輪の時期区分を行う際の重要なポイントとなる可能性を有している。

また、二次調整のB種横ハケの変遷については既に畿内では赤塚次郎氏や一瀬和夫氏が、東国を中心に若松良一氏が労作を発表している。⁽³²⁾埼玉県での研究をみれば、若松氏がいう幅の狭い工具で複数周するB1a種から幅の広い工具で単周巡るB2a種へ移行するという。今井神社古墳の埴輪はこの研究のなかで無黒斑のB2a種とされている。今回の報告では胴部を複数周するB種横ハケが小破片ながら認められ、B1a種の存在が確認できた。

一瀬和夫氏の変遷基準に照らせば突帯間を単周巡る横ハケで充填するBc種と静止痕の傾きが浅いBd種、小破片で認められたBb種があることになる。そして今井神社古墳のB種横ハケの静止間隔は3～4cm代が多く、まだ間延びせず規則的なものといえよう。表採資料などの発表資料中でみれば種別の判断できる残存状態の資料では横ハケは単周巡るものであり、B1a種、Bb種は横ハケの資料数のうえで客体的といえよう。また、Bc種とBd種については2条突帯資料の胴部にはBc種が、口縁部にはやや傾きのある静止痕がつく状況が認められる。このことからBc種とBd種の主客の判断は破片からは難しさが残るが、破片数からみればBc種の量が圧倒的に多く、その意味では主体的といえる。

基部を複数の粘土帯で作る点については既に研究成果が発表されており、⁽³³⁾5世紀代の資料の技法的特徴とされている。県内でも七興山古墳や白石稲荷山古墳、十二天塚古墳、お富士山古墳などで確認することができる。大型古墳で多条突帯を有する前二子古墳や後二子古墳などでは認められないことからやはり時期的な様相を示すものと考えられる。

(3) 編年の位置付け

本古墳の埴輪はすべて窯築成である点で、白石稲荷山古墳や赤塚白山古墳、太田天神山古墳、お富士山古墳などより後出するとしておきたい。横ハケの変遷については、野焼きである白石稲荷山古墳や十二天塚古墳が幅の狭い工具で複数周器壁を巡って横ハケを施しており、窯築成の井出二子山古墳

では頸部突帯間を幅広い工具を用いて単周で横ハケを施していることが看取される。群馬県においてもB1a種からB2a種への移行が認められると判断でき得る。小型古墳においても、野焼きである目塚1号墳が突帯間を複数周巡って横ハケを施すのに対し、密室焼成の方賀西部団地M-29号墳が幅広い工具で単周巡って横ハケを施していることから、大型古墳と基本的に同じ変遷を辿ることが判る。この中で白石稲荷山古墳資料の横ハケは少量のA種の他にB種横ハケの頻度が高く、若松氏のB1a種、一瀬氏のBa種、Bb種に相当し、お富士山古墳はB1a種、Bb種にあたるであろう。太田天神山古墳は一瀬氏のBa・Bb種がみられ、Bb種の方が多く認められる⁽³⁹⁾。円筒埴輪の二次調整、透孔、突帯形状の検討からお富士山古墳例は太田天神山古墳や白石稲荷山古墳資料より後出的であるとされる⁽⁴¹⁾。近年の調査成果では白石稲荷山古墳は5世紀第2四半期⁽⁴²⁾、太田天神山古墳では周堀出土の土師器から同じく5世紀第2四半期が想定されている⁽⁴³⁾。お富士山古墳については石製建造品の検討から5世紀前半～中葉にかけての時期でもやや新しい段階とされる⁽⁴⁴⁾。これは東国を対象とした若松氏のB1a種の年代観や、一瀬氏のBb種は須恵器のTK73~216型式を中心に対応するという見解とも大きく矛盾はしない。

本古墳資料における基底部外面最下端の横方向のナデについては、白石稲荷山古墳や太田天神山古墳にもみられ、上限では5世紀第2四半期まで遡ることができる。基底部の透孔については系譜的なものか時期的な様相なのかなお検討が必要であろう。さらにB種横ハケにおいてBc種の他に少量のBb種の存在から十二天塚古墳やお富士山古墳に後出しつつも大きく隔たらない時期が考えられる。突帯形状、透孔などの要素や抽出・分析した諸技法もこの推定を妨げない。

一方、小型古墳では、下高瀬上之原遺跡4号墳からTK208型式の須恵器把手付腕が出土しており、円筒埴輪は密室焼成で今井神社古墳例に近似したB種横ハケを持っている⁽⁴⁵⁾。白藤古墳群では横ハケが1古

墳すべての円筒埴輪に省略される傾向が出現する時期がTK208型式であるといえる。TK208型式の須恵器を出土する白藤V-2号墳の埴輪が本例と類似することは前述した。

首長墓などの大型古墳と小型古墳の資料を同一には論じられず、特に横ハケにおいては小型古墳ほど欠落しやすいという指摘もある⁽⁴⁶⁾。しかし、首長墓系列の資料では良好な例が認められないのでこれら小型古墳の例を参考にすれば、小型古墳のみに横ハケが残存しやすい傾向が今後見出されない限り、横ハケ消滅に関して上之原4号墳や白藤V-2号墳の例はひとつの参考になろう。

小型古墳の埴輪において密室の導入がTK208型式の時期に遡るとすると、首長墓資料においても同様の時期まで遡り得る可能性は高い。野焼きの資料に後出しつつも近接した時期が想定される今井神社古墳の埴輪は、密室導入後の初期段階と考えることができ、その時期もTK208型式の可能性はある。年代としては5世紀第3四半期としておけるが、その中でも早い段階といえよう。この年代によれば県内における貼付け口縁の例や口縁部における穿孔などの技法の初出の例となる。小像貼付もその可能性を有している。

今井神社古墳例と近似した調整の様相を示すものに不動山古墳出土資料があげられる。密室焼成で、3条突帯、Bc種横ハケを施し、口縁部には複数周巡る資料が公表されている⁽⁴⁷⁾。その他にBc種ではない可能性のある調整もみられ⁽⁴⁸⁾、今井神社古墳と相前後する時期が考えられよう。

今井神社古墳の埴輪は密室の採用、整美で典型的なBc種横ハケの導入、それと相まって突帯間隔を定めるための割りつけ沈線存在など、一連の新技術によって作られていることが判る。畿内でのBc種の成立状況から、密室焼成の技術とBc種の技法が同時に伝播してきたことは容易に想定でき、今井神社古墳の埴輪には逸早く新来の技法が採用されているのである。その一方で、基底部における透孔穿孔などの在地的な要素も含有していることも看過で

きない。

密窯焼成とB種の典型例は大山(仁徳陵)古墳と市野山(允恭陵)古墳であるが、大山古墳では女子の頭部と馬形埴輪が認められる。B種を生み出した⁽⁸⁹⁾ 野田御廟山(応神陵)古墳段階でも同古墳からは馬形埴輪が確認され、盾持ち人の存在の可能性も指摘されている。⁽⁹⁰⁾ 今回の今井神社古墳の報告では形象埴輪は確認されていないが、TK208型式の時期といえれば福島県天王塚古墳においてB種横ハケとともに人物・動物埴輪の存在が認められている。県内においてもTK208型式の須恵器をもつ帆立貝式古墳の高徳寺東(古海松塚11号)古墳において女子と馬形埴輪の出土がみられる。今井神社古墳にみられる一連の新技術とともに人物・動物埴輪による儀礼の再現という要素も伝播したことは充分考えられることである。県内の事例からすればその配置場所は墳丘外であり、周廻の外側と推定される。今井神社古墳の調査において設定されたトレンチには配置場所があったらなかった可能性も考えられ、今後の同古墳の調査研究では留意が必要であろう。

また、今井神社古墳に相前後すると思われる例として不動山古墳資料をあげた。さらに、岩鼻二子山古墳の埴輪は不動山古墳例と類似するとい⁽⁹¹⁾。これらの古墳が太田天神山古墳を象徴とする政治的連合の崩壊後に数多く輩出した前方後円墳の一部であることは興味深い。これらの古墳築造の背景には大規模な農耕地開発を成功させ、飛躍的な発展をとげた中小首長層の存在があり、開発を成功に導いた新技術体系は畿内勢力からの供給が考えられている。密窯の採用、典型的なB種横ハケであるB種横ハケの導入はこうした一連の技術革新の動きの中でなされたことが想定できるのである。さらに人物・動物埴輪による儀礼の再現も政治的意義を葆ちながら受容された可能性が高い。密窯の採用や形象埴輪の新組成の出現は埴輪需要の増加と生産の効率化をみせ、埴輪生産体制のいっそうの組織化を促したことが推定できるのである。

(4) 結

今井神社古墳の埴輪の分析から、須恵器のTK208型式の時期である可能性があり、5世紀第3四半期でも中葉と言い得るような早い段階の資料であることを導き出した。これはさきにも試みられた分析と結果的に同様の年代となっている。

ただし、今回諸要素において論じ残した点も多い。たとえばいわゆる貼付け口縁や口縁部穿孔、小像の問題に関しては県内における初出例となることを指摘したのみである。ヘラ描きや2条突帯例と3条突帯例が混在する問題についても触れられなかった。焼成法に関しては、小地域で密窯の導入における微妙な時期差があるのかどうか、密窯導入がどこまで廻り得るのかも明確にする必要があろう。さらに、白藤V-2号墳資料に横ハケが認められない現象が小型古墳ゆえの欠落ではなく、横ハケ消滅へのプロセスであり大型古墳と連動する動きならば、今井神社古墳の年代は密窯導入時期の問題と相まって微妙に年代が廻る可能性がある。

近年の調査によって5世紀代の埴輪資料も少しずつ増加してきているが、いまだその詳細は不明な古墳も数多い。今回今井神社古墳の円筒埴輪の分析によって、基本的なB種横ハケの変遷過程は先学の研究に大きく矛盾しないことが追認された。それによって5世紀代の古墳のより明確な序列もでき得る可能性があり、今後既出資料にも再評価を与える必要性が迫られよう。それは密窯導入の問題やB種からB種、B種からB種などという横ハケの変遷過程を県内資料において明確化させることであり、それによってより確かで細かな歴史的意義を読み解く資料となり得るのである。

最後に、本稿をなすにあたり飯塚誠、一瀬和夫、磯貝朗子各氏に有形無形のご教示、ご助力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

註

- (1) 南雲芳昭「A区2号墳・3号墳出土の埴輪について」『行幸山道跡』徳川市教育委員会 1987。その後、境町上湯名古墳群資料や高崎市谷津古墳群資料など、H-F A降下以前の古墳から出土する例が増加している。
- (2) 橋本博文「上野東部における首長墓の変遷」『考古学研究』第26巻第2号 1979
- (3) 藤岡市教育委員会「七瀬山古墳」1990、1991、1992
- (4) a 群馬町教育委員会「二子山古墳」1985
b 南雲芳昭・若狭徹「保坂田三古墳の埴輪」『埴輪の変遷』1985
- (5) 群馬町教育委員会「群馬町の遺跡」1986
- (6) 前橋市教育委員会「金冠塚(山王二子山)古墳調査概報」1981
- (7) 前掲註(6)の指摘による。
- (8) 本宮町教育委員会「天王塚古墳」1984
- (9) 大橋泰夫「藤岡町(旧赤麻村)受塚塚古墳・第4号墳の埴輪について」『新木原考古学会誌』第8集 新木原考古学会 1984
- (10) 大府教育委員会「大木川改修にともなう発掘調査概要・V」1988
- (11) 大府教育委員会、大阪文化財センター「日置荘遺跡(その5)」1989
- (12) 藤岡市教育委員会「白石稲荷山古墳」1986、1987
- (13) 群馬県教育委員会「舞台・西大室丸山」1991
- (14) 前橋市教育委員会「後二子古墳・小二子古墳」1992
- (15) 前橋市教育委員会「西大室遺跡群II」1981
- (16) 高崎市教育委員会「八幡原遺跡」1975
- (17) 現地説明会のおりに遺物を実見した。
- (18) 須藤宏「古墳出土の土製品と土製小像」『後二子古墳・小二子古墳』前橋市教育委員会 1992 による指摘。
- (19) 黒田晃「円筒埴輪から見た今井神社古墳の築造年代」『研究紀要』9 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- (20) 坂口一「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」『研究紀要』4 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
- (21) 粕川村教育委員会「白藤古墳群」1989 V-2号墳は前掲註(9)において出土土器から坂口編年III期であることが確認されている。
- (22) 前橋市教育委員会「芳賀西部部地遺跡群」第4巻 1991 埴輪について飯塚誠氏からご教示を得た。
- (23) a 白石太一郎・杉山晋作・車崎正彦「群馬県お富士山古墳所在の長持形石棺」『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集 1984
b 伊勢崎市教育委員会「お富士山古墳」1990
- (24) 藤岡市教育委員会「伊勢塚古墳・十二天塚古墳」1988
- (25) 群馬県教育委員会「下郷」1980
- (26) 前掲註(24)
- (27) 水沼良浩「塚山古墳群とその周辺」『古代』第89号 1990
- (28) a 太田市教育委員会「天神山古墳外堀・A陪塚」1990
b 前掲註(22)
- c 岩根達之「太田天神山古墳の円筒埴輪」『太古』第3号 東毛考古学サークルはにわの会 1982
- (29) 太田市教育委員会「市内遺跡III」1987
- (30) a 金子智一・桜井新・山田幸和「高崎市周辺の埴輪」『埴輪の変遷』1985
b 群馬県立歴史博物館「群馬のはにわ」1979
- (31) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2・4号 1978 「古墳時代政治史序説」1988に再録)
- (32) 志塚次郎「コナベ古墳外堀出土埴輪の製作法に関する問題」『奈良市埋蔵文化財調査報告書一昭和54年度一』奈良市教育委員会 1980
- (33) 一瀬和夫「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大木川改修にともなう発掘調査概要・V』大府教育委員会 1988
- (34) 若松良一「ヨコハケ調整円筒埴輪の技術史的検討」『藤山山33号墳の研究』1987
- (35) 前橋市荒砥南部の開場整備に伴う一連の遺跡調査で今井神社古墳資料の可能性のある埴輪がカマドの補強材として住居跡から出土している。前掲註(2)で集成し、表録資料も掲載されている。
- (36) 佐野俊春「円筒埴輪成形技法の一新面」『福井県考古学会誌』第2号 1984
- (37) 前橋市教育委員会「前二子古墳」1993
- (38) 帝室博物館「上野国佐波郡赤堀村今井茶白山古墳」1933
- (39) 前掲註(2)
- (40) 前掲註(2) 一瀬和夫氏に御教示を得た。
- (41) 前掲註(2) a による指摘。
- (42) 前掲註(2)
- (43) 前掲註(2) a
- (44) 前掲註(2)
- (45) 調査担当者の新井仁氏から御教示を得た。
- (46) 前掲註(2)
- (47) 前掲註(2)
- (48) 前掲註(2) a 破片間を充填していない横ハケや複数周する横ハケがみられる。前者は基底部の可能性も考えられるが定かではない。後者は口縁部か胴部か小破片で部位が確定できない。
- (49) a 森浩一「考古学と馬」『日本古代文化の探求 馬』1988
b 小林行雄「陶磁大系3 埴輪」1979
- (50) a 大府府立東北古資料館「大府府の埴輪」1982
b 若松良一「人物・動物埴輪」『古墳時代の研究9 古墳III 埴輪』1992
- (51) 前掲註(50) b
- (52) 右島和夫「古墳からみた5、6世紀の上野地域」『古代文化』42巻7号 1990(『東国古墳時代の研究』1994に再録)
- (53) 前掲註(52)
- (54) 前掲註(53)
- (55) たとえば、前掲註(2)や(4)における太田市亀山古墳資料の評価なども再考する必要がある。

3 旧荒砥村245号墳の石室構造について

旧荒砥村245号墳の築造は出土遺物の様相から推して、6世紀前半と考えられ、本県において小円墳に両袖型横穴式石室を採用した初源期の古墳であり、県内の一般的趨勢に先行する貴重な資料である。また、「赤城山南面における左壁崩壊古墳」の再検討を促す貴重な資料である。

本墳の埋葬施設を「両袖型横穴式石室」としたが、横穴式石室の分類に関して尾崎喜左雄氏が示された基準⁽¹⁾に照らし合わせた場合、①両袖型は「羨道より玄室に移る部分の左右壁共に著しく屈曲し、両者の区別の明瞭なもの」、②玄門は「玄室の入口に構作されたもので、石室のプラン構成上からは玄室部に属する」施設、③柩石は「玄室と羨道の床面がほぼ同高である場合に、床面に埋設され、その上部を床面上に表している施設」であり、「形の上においては羨道部に属している」という条件に対して完全に合致するものではない。即ち、①については、石室プランは笏形（羽子板形）の袖無型石室の側壁から突出させた「玄門」によって区別したものであり、壁体自体の屈曲は少ない。また、②・③については、「玄門」の奥側に「柩石」が設置されており、玄室と羨道との区別をする基準が得られない。しかし、計測値については、次に掲げる2点を考慮し、奥壁面から玄門の奥までを玄室とし、それより手前を羨道として、石川正之助氏が提唱した通り⁽²⁾、10分の1縮尺の実測図面上において比較的整った左壁根石を基準として画した方眼（ちなみに、一目盛を24cm相当とした）の軸線に基づいて計測した数値を示した。柩石の要因としては、石材加工技術が未整備の上、深い掘り方内に横穴式石室を造るという限定された条件下での構築に起因する構造的な歪みと理解できるものと考えている。

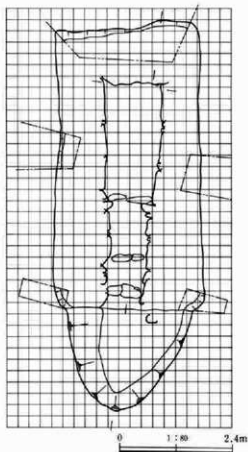
石室のプラン及び玄門については、出土遺物の形態が良く似ており、時期的にも近似すると考えられることから、まぐさ石の架構は認められなかったが、

壁体の構造をも含めて、前橋市前二子古墳例に極めて良く類似するものである。

柩石の位置については、時期的には後出するが、安中市・野殿天王塚古墳例の様に、明らかに玄室内に設置されたものも認められる。（飯塚 誠）

註

- (1) 尾崎喜左雄「横穴式古墳の研究」1966
- (2) 石川正之助「総社二子山古墳前方部石室の平面構成について」『考古学雑誌』第54巻4号 1965



第166図 石室24cm方眼適合状態

VI 付 編

1 今井神社古墳円筒埴輪棺の観察所見

この円筒埴輪は、今井神社古墳南東に広がる桑畑の耕作中に、土地の所有者である阿佐見牧太氏によって偶然に見発見された物である。

埴輪は2本が組み合わされた形で発見されており、その出土状況から円筒埴輪棺であると推定されているが、残念なことに、うち1本は散逸してしまった。

円筒埴輪棺に伴う埋葬施設は、阿佐見氏の記憶によれば存在しなかったようである。

成形は、まず厚さ約2cm、幅約8cmの粘土帯を作り、これを環状につないで基部とし、この上に左回りに粘土紐を巻き上げて行っている。基部の内面は、粘土帯の端部接合部分に調整を行わず、粘土帯の重ね合わせた様子を確認することができる。このような基部の重ね合わせの処理は、この時期の他の円筒埴輪にも普遍的に見られるものである。

基部外面下端には、微細で彫りの浅い平行沈線を観察することができる。これは、ハケ等を用いた調整痕ではなく、なんらかの圧痕であると考えられる。

また、重ね合わされた基部の内側の外面にも施されていることから、成形後の調整痕ではなく、粘土帯を作成中に付いたものと考えられる。従って、この平行沈線は粘土帯を作成する際に作業台として用いた板の木目がのこったものであろう。

粘土帯は直径3～4cmで、3段ほど巻き上げられると次の紐に繋がれている。

巻き上げは、突帯毎に一旦作業を中断し、乾燥を行った後に作業を再開した痕跡は見られず、口縁部まで一気に行われたと考えられる。

突帯部分で作業を中断したのであれば、内面に観察される巻き上げ痕は突帯部分で一旦休止し、調整が施されたはずであるが、巻き上げ痕は連続しており、内面調整も突帯部分を通過して全体的に施されているようである。

黒田 晃

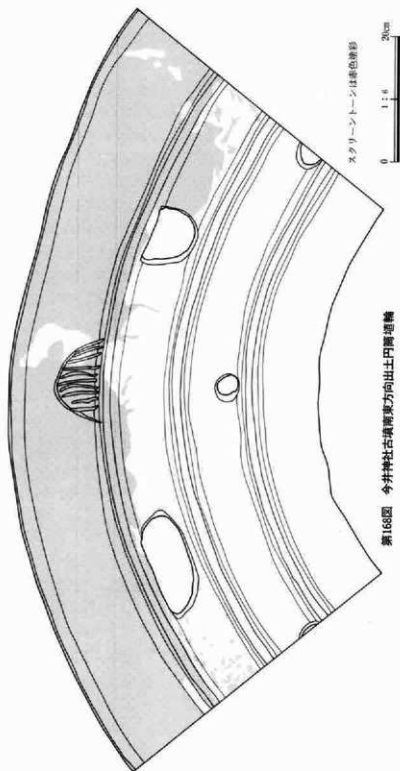
粘土紐を巻き上げると、外面に縦方向のハケを施して器面の調整を行っている。ハケの目は2cm間隔に8～9本と比較的細かく、丁寧な調整を行っている。

口縁部の調整は、刷毛状の工具で口唇部の形を整えた後、獣皮あるいは布を使用してヨコナダを施している。ヨコナダは親指を外面に、人差し指を口唇部に、他の指を内面に当て回転させながら施したと推定される。ヨコナダの幅は、外面が2cm前後、内面が3.5cm前後である。

突帯は突出度の高い台形で、3条存在する。巻き上げを行ったものとはほぼ同じ太さの粘土紐を外面に巡らした後、親指、人差し指、中指の3本を用いてヨコ



第167図 今井神社古墳南東方向円筒埴輪出土地点

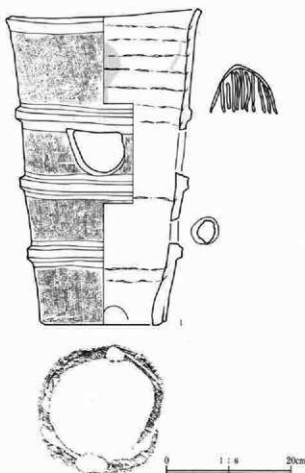


第168図 今井神社古墳南東方向出土円筒型輪

ナデを施している。ヨコナデは人差指にやや力を入れながら回転台を用いて施したと考えられ、突帯中央部がややくぼんでいる。ヨコナデの幅は4cm前後である。

透孔は埴輪製作の最終段階の器面が適度に乾燥し

た状態であけられたものと考えられる。底部から数えて2段目と3段目に1対ずつ見られ、2段目のものは径4.2cmの小さな円形、3段目のものは比較的大きな半円形である。どちらも外側から右回りに穿孔されている。小円の透孔は今井神社古墳出土の円筒



第169図 今井神社古墳南東方向出土円筒埴輪

埴輪からは確認されていない。

口縁部には篋状工具による篋状の記号が刻まれている。これと同様の記号は、今井神社古墳出土の円筒埴輪からは確認されていない。

焼成前に行われる乾燥は、木の枝などを敷いた上に乗せて行ったと推定され、底部にその際に付いたと思われる棒状の圧痕が見られる。圧痕は、底部を一部歪めるほど強く付いているが、その後それを消す調整を行っていない。同様の圧痕は、不動山古墳、井手二子山古墳の円筒埴輪にも見られる。

赤色塗彩は、刷毛などを用いて丁寧に塗っているのではなく、口縁部を中心にたたきつけるように施している。

以上、円筒埴輪棺の製作技法を中心に見てきたが、篋記号や透孔などを除けば概ね今井神社古墳出土の円筒埴輪と一致する。従って、今井神社古墳の円筒埴輪とほぼ同じ時期に製作されたものと見て差し支えないであろう。

2 伝今井神社古墳出土の鉄刀

杉山 秀宏

本資料は現在、前橋市教育委員会が所蔵しているもので、今回の今井神社古墳の報告にあたり、教育委員会のご配慮により実測図を作成、ここに掲載させていただいたものである。

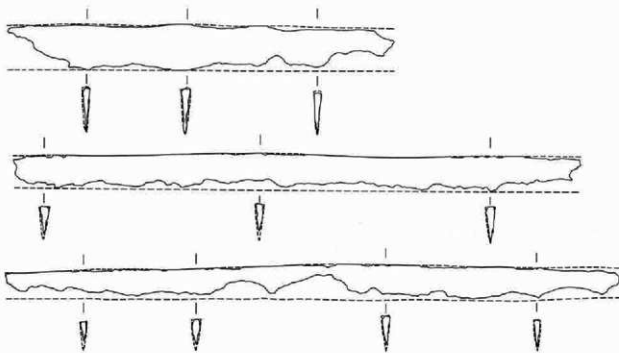
本資料は、地元の方の談話によると現在の今井神社の社殿の前の社殿建立の際、おそらく明治期に、後円部（後ろの山）から出土したものとされている。その後、地元関係者により保管されていたものを前橋市教育委員会が寄贈を受けたものであるという。現在は3片になっている。以下、個々についてその観察所見を記述しておく。

1. 現存長30.7cm、刃幅は3.5cm（推定）ある。棟幅7mmである。錆渡せがひどく、現状では、全長を推定することは不可能である。ただ、刃幅からみて、かなりの長さになると思われる。後述する2・3の刀との接合も考えられるが、どちらの刀に接合するか推定は不可能である。

2. 現存長44.9cm、刃幅は2.8cm（推定）ある。棟幅7mmである。1と同じく錆渡せがひどく、全長を推定することは不可能である。刃幅からみて切先に近い部分かとも思われるが、確認できない。3との接合の可能性は刃幅よりみて可能性は低い。

3. 現存長48.6cm、刃幅は2.6cm（推定）ある。棟幅6mmである。他と同じく錆渡せがひどく、全長を推定することは不可能である。刃幅からみて2と同様、切先に近い部分かとも思われるが、2と同様確認できない。2との接合の可能性は刃幅よりみて可能性は低い。

以上、1～3ともに、茎及び鬘の部分が残っていないため刀の型式が分からず年代の比定は不可能である。刀の本来の本数は、1と2か3が接合する可能性があるものの、確認はできない。刀は多くて3本、少なくとも2本あったものと思われる。



第170図 伝今井神社古墳出土鉄刀

引用及び参考文献

- 1 群馬県史編さん委員会『群馬県史』資料編2 1986
- 2 群馬県史編さん委員会『群馬県史』資料編4 1985
- 3 群馬県史編さん委員会『群馬県史』資料編3 1981
- 4 群馬県教育委員会『群馬県遺跡台帳Ⅰ（東毛編）』1972
- 5 前橋市史編さん委員会『前橋市史』第1巻 1971
- 6 群馬県「上毛古墳総覧」『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告』第5輯 1938
- 7 群馬県埋蔵文化財調査団事業団「荒砥島原遺跡」1983
- 8 群馬県埋蔵文化財調査団事業団「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」1986
- 9 群馬県埋蔵文化財調査団事業団「荒砥天之宮遺跡」1987
- 10 群馬県埋蔵文化財調査団事業団「女堀」1984
- 11 群馬県埋蔵文化財調査団事業団「下舩牛伏遺跡」1986
- 12 群馬県埋蔵文化財調査団事業団「二之宮千足遺跡」1992
- 13 群馬県勢多郡荒砥第二尋常高等学校「荒砥村郷土史」上・下 1939
- 14 山崎 一『群馬県古城遺址の研究』上 1971
- 15 鹿沼 明『荒砥村誌』荒砥村誌刊行委員会 1974
- 16 能登 健・石坂 茂・小島敦子・徳江秀夫「赤城山南麓地域における遺跡群研究—農耕集落の変遷と溜井灌漑の出現」『信濃』第35巻4号 1983
- 17 能登 健・小島敦子「弥生～平安時代の遺跡分布」『新里村の遺跡』新里村教育委員会 1984
- 18 坂口 一「古墳時代後期の土器の編年—三ヶ寺遺跡を中心とした土師器と須恵器の平行関係—」『群馬文化』208号 1986
- 19 坂口 一・三浦京子「奈良・平安時代の土器の編年—住居の重複と共存関係による土器型式組列の検討—」『群馬県史研究』第24号 1986
- 20 高崎市教育委員会『元島名将軍塚古墳』1981
- 21 愛知県埋蔵文化財センター『壘間遺跡』1990
- 22 群馬県考古学談話会・千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究所「埴輪の変遷」1985
- 23 川西宏幸『古墳時代政治史序説』1988
- 24 若松良一・山川守男・金子彰男『諏訪山33号墳の研究』1987
- 25 黒田 晃「円筒埴輪からみた今井神社古墳の築造年代」『研究紀要』9 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 26 白石太郎・杉山晋作・車崎正彦「群馬県お富士山古墳所在の長持形石棺」『国立歴史民俗博物館研究報告』3、国立歴史民俗博物館 1984
- 27 飯塚卓二「埼玉古墳群の出現と毛野地域政權」『研究紀要』3 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 28 粕川村教育委員会『白藤古墳群』1989
- 29 橋本博文「上野東部における首長墓の変遷」『考古学研究』第26巻 2号 1979
- 30 群馬県教育委員会『史跡天神山古墳外堀部発掘調査報告書』1970

- 31 太田市教育委員会「天神山古墳外堀・A陪塚」 1990
- 32 伊勢崎市教育委員会「お富士山古墳」 1990
- 33 前橋市教育委員会「西大室遺跡群II」 1976
- 34 徳江秀夫「上野地域の舟形石棺」『古代学研究』127 1992
- 35 群馬県教育委員会「二之宮遺跡群緊急発掘調査概報」 1976
- 36 尾崎喜左雄「横穴式古墳の研究」吉川弘文館 1966
- 37 右島和夫「群馬県における初期横穴式石室」『古文化談叢』10集 1983
- 38 右島和夫・津金澤茂・羽島政彦「葦石切組横穴式石室の基礎的研究」『群馬県史研究』33号 1991
- 39 右島和夫「古墳から見た5・6世紀の上野地域」『古代文化』42巻7号 1990
- 40 右島和夫「古墳から見た6・7世紀の上野地域」『国立歴史民俗博物館研究報告』44集 1992
- 41 群馬県教育委員会「塚廻り古墳群」 1980
- 42 群馬県埋蔵文化財調査事業団「神保下條遺跡」 1992
- 43 帝室博物館「上野国佐波郡赤堀村今井茶白山古墳」 1933
- 44 東京国立博物館「東京国立博物館図版目録」古墳遺物篇(関東II) 1983
- 45 群馬県教育委員会「上川久保遺跡」 1977
- 46 群馬県教育委員会「昭和58年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報」 1984
- 47 群馬県教育委員会「丸山・北原」 1987
- 48 群馬県教育委員会「丸山・北田下・中畑・村主・中山B」 1988
- 49 群馬県教育委員会「阿弥陀井戸・伊勢山・大道・山王・明神山」 1989
- 50 群馬県教育委員会「舞台・西大室丸山」 1991
- 51 前橋市教育委員会「富田遺跡群・西大室遺跡群」 1982
- 52 前橋市教育委員会「後二子古墳・小二子古墳」 1992
- 53 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「梅木遺跡」 1986
- 54 伊勢崎市教育委員会「宮貝戸古墳群・蟹沼東古墳群」 1983
- 55 伊勢崎市教育委員会「蟹沼東古墳群・宮貝戸下遺跡」 1978
- 56 赤堀村教育委員会「赤堀村崖岸山の古墳」 2 1976
- 57 赤堀村教育委員会「赤堀村地蔵山の古墳」 1 1978
- 58 赤堀村教育委員会「赤堀村地蔵山の古墳」 2 1979
- 59 赤堀村教育委員会「川上遺跡・女堀遺構発掘調査概要」 1980
- 60 赤堀村教育委員会「今井柳田遺跡発掘調査概報」 1982
- 61 赤堀村教育委員会「多田山東遺跡発掘調査概報」 1982
- 62 赤堀村誌編纂委員会「赤堀村誌」上 1978
- 61 粕川村教育委員会「粕川村の遺跡」 1985
- 63 金坂清則「上野国府とその付近の東山道及び佐位駅家について」『歴史地理学紀要』16 1974
- 64 群馬県教育委員会「東山道」 1982

遺物觀察表

目 次

荒砥宮川遺跡	196
荒砥宮原遺跡	221
今井神社古墳	226
旧荒砥村245号墳	258

凡 例

1、土器

番号	種類 器種	出土位置 (cm)	量 目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器 形 の 特 徴	成・整形、技法の特徴	残 存 ・ 備 考
----	----------	--------------	-------------	---------------	-----------	------------	-----------

- a、出土位置の項目中、床直は床面直上から、+5は床面から5cm離れて、埋没土は埋没土中から出土したことを表す。
- b、量目の項目中の口は口径、高は器高、底は底径を表す。また、数値に（ ）のあるものは、復元値を表す。
- c、胎土中の砂粒の大きさ及び色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の「新土色帖」に基づいている。

2、石器

番号	種類 器種	出土位置 (cm)	量 目 ①縦 ②横 ③厚さ ④重量	材 質	特 徴	残 存 ・ 備 考
----	----------	--------------	-------------------------------	-----	-----	-----------

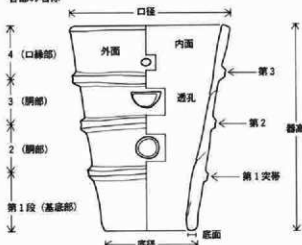
- a、量目の項目の①から③の単位はcm、④はgである。

3、埴輪

番号	量 目 ① 径 ② 高さ	突 帯			透 孔		口縁	①胎 土 ②色 調 ③焼 成	刷 毛 目	成 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
		形状	1	2	3	段					

- a、円筒埴輪各部の名称、突帯・透孔・口縁部先端の形状の分類は、下記、凡例図による。
- b、量目・透孔の項目中で数値に（ ）のあるものは復元値を表す。
- c、突帯・口縁の形状の分類は下記模式図に表記した。
- d、突帯の「1」、「2」は、第1段、第2段の突帯のトップ間の数値である。
- e、胎土の項目中の分類は下記のことを表す。
- I……にぶい黄橙色またはにぶい橙色で、細かな胎土中に黒色鉱物、長石、軽石、細礫等を含む。混入物の粒径は1mm未満で混入の割合は低い。
- II……Iと同様の色調・混入物である。混入物はその粒径が大きく、割合も多い。
- III……にぶい黄橙色から淡黄色、または橙色を呈する。混入物の多くは細礫と軽石であり、混入量にはばらつきが見られる。
- f、焼成の項目中の分類は下記のことを表す。
- A……硬質で良好 B……Aと比較してやや軟質 C……Aと比較して焼成度が落ちる
- g、刷毛目の項目中の縦、横は、刷毛目の方向を表す。数値は、2cmの幅の中に何本の刷毛目が確認できるかを記したものである。
- h、備考中の部位、及び底面粘土板の重ね合わせについては下記模式図に表記した。

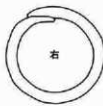
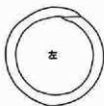
各部の名称



透孔の分類と計測値



底面の重ね方



口縁部の分類



突等の分類



- A 直立して立ち上がる
 1 口縁部の上面が平直
 2 口縁部の上面がくぼむ
 3 口縁部の上面に刷毛を塞す
- B 緩やかに外反して立ち上がる
 1 口縁部の上面が平直
 2 口縁部の上面がくぼむ
 3 口縁部の上面に刷毛を塞す
 4 口縁端部の内面に壁を持ち先端が強く外反する
- C 口縁端部に粘土帯を貼り付ける
 1 貼り付け部が突出し段状を呈する
 2 貼り付け部が漸く扁平
- D 口縁端部をつまみ出す
 1 口縁部内外面の両側からつまみ出し先端が尖る
 2 緩やかに内彎し先端が尖る
- E 口縁端部に形象物を貼付する
- M 断面がM字形を呈し上下の壁の高さが同程度
 M-1 M字形を呈するが上側の壁が高い
 M-2 M字形を呈するが下側の壁が高い
 M-3 M字形を呈するが上側の壁が極端に高い
- 三 断面が三角形を呈する
 方 断面が方形を呈する
 台 断面が台形を呈する

円筒埴輪の各部の名称と分類基準

荒砥宮川遺跡

3区1号住居(第9・10図、P.L21)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 器台	埋没土	口 (8.2) 高 2.2	①細砂②赤褐色 2.5YR4/6 ③良好	口縁下部に沈線を持ち、外反しながら直線的に立ち上がる。	外面横撫で、内面口縁端部は横撫で、受部底磨き。	受け部1/3残存。
2	土師器 高環	埋没土	口 (15.2) 高 4.7	①細砂、黒色 鉱物②灰青 赤褐色5YR 5/4	坏部は緩く内彎しながら立ち上がり、先端は尖る。	外面刷毛目調整後、口縁部のみ横撫で。内面底磨き後、口縁部のみ横撫で。	坏部1/2残存。
3	土師器 壺	埋没土	口 (15.2) 高 7.4	①細砂②灰 黄色10YR 6/3③良好	口縁部は緩やかに外反し、口唇部で屈曲、斜め上方に立ち上がる。	外面口縁部横撫で、胴部刷毛目調整。頸部に刻文を施す。内面頸部横位の線描き、胴部指押え。	口縁から体部上平1/4残存。
4	土師器 台付壺	埋没土	高 6.7 底 9.6	①細砂、黒色 鉱物②灰黄 褐色10YR 4/2③良好	台部は緩い内彎を呈し、下端部は折り返す。	外面6本単位の斜縦位刷毛目後縦位の撫で、内面指押え。	台部2/3残存。
5	土師器 台付壺	埋没土	口 (19.4) 高 4.6	①細砂②灰 黄褐色10YR 5/2③良好	口縁部は強く外反する。	外面口縁部横撫で、頸部以下は6本単位の刷毛目。内面口縁部横撫で、胴部指押え。	口縁部1/3残存。外面に使用時のスス付着。
6	こも編 石	中央部東 壁寄り +15	①15.7②7. 9③4.15④ 700	溶結凝灰岩	棒状の礫を素材とする。打痕は識別できない。		完形。
7	こも編 石	南壁床直 上	①15.1②8. 4③5.1④ 1000	安賀安山岩	偏平な長楕円礫を素材とする。下部に打痕が若干認められる。		4/5
8	こも編 石	中央部東 壁寄り +8	①14.5②7. 3③4.5④ 780	安賀安山岩	偏平な礫を素材とする。打痕は識別できない。		完形。
9	こも編 石	中央部東 壁寄り +14	①23.0②9. 3③4.3④ 1450	粗粒安山岩	偏平な長楕円礫を素材とする。縁辺部全面に打痕が若干認められる。		完形。
10	こも編 石	中央部東 壁床直 上	①19.1②8. 3③5.6④ 1300	粗粒安山岩	やや厚味のある偏平な長楕円礫を素材とする。縁辺部全面に打痕が認められる。		完形。
11	台石	中央部 +10	①23.6② 19.7③6.8 ④4600	ひん岩	偏平な菱形礫を素材とする。表面の平坦面に磨痕が残る。		完形。

3区2号住居(第12図、P.L21)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 高環	中央部 +8	口 (18.6) 高 12.0	①細砂、細礫 ②褐色2.5 YR6/6③良 好	坏部はやや丸みを持ちながら立ち上がる。胴部上位に2孔が対峙し、下位に4孔が対峙する。	坏部外面とも、磨磨き。胴部外面底磨き、内面縦位の指撫で後、横方向の磨削りを施す。	坏部2/3、胴部1/2残存。
2	土師器 埴	西壁+9	口 (8.8) 高 6.7 底 1.5	①細砂、黒色 鉱物②灰黄色 2.5YR8/4③ 良好	体部上位に最大径を持ち、口縁部は直線的に立ち上がり、先端が尖る。底部は上げ状を呈する。	外面口縁部横撫で、体部上位は横斜位、下位は斜縦位の指押え。内面口縁部横撫で、体部下位は指押え。	2/3残存。
3	土師器 甗	中央部 +3	口 (13.2) 高 12.2 底 3.3	①細砂②洗 黄褐色10YR 8/3③良好	口縁部はS字状を呈し、口唇部は外反しながら緩く立ち上がる。胴部中心に最大径を持つ。焼成後底部に穿孔。	外面口縁部横撫で、体部6本単位の刷毛目。胴部に6本単位の横の刷毛目。内面口縁部横撫で、体部指押え後、胴でを施す。	1/2残存。 底部の穿孔は外面から施す。

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
4	土師器 台付壺	中央部 +6	口 (17.0) 高 10.9	①粗砂、黒色 鉱物②灰褐色 色10YR8/4 ③良好	S字状口縁で胴部が張る。 口唇部内面に2本の沈線あり。	口縁部横撫で、体部は下半は 下から上へ、上半は上から下 への7本単位の刷毛目、胴部7 本単位の横線を施す。内面口 縁部横撫で、体部指押え。	口縁部1/3残存。
5	土師器 壺	中央部 +8	口 (20.5) 高 6.9	①細砂②にい い褐色5YR 7/4③良好	口縁部は強く外反する二重 口縁。二重口縁部分に4カ 所相対する位置に3条単位の 棒状突起を貼り付ける。	外面口縁部横撫で、頸部以上 は3本単位の刷毛目を斜縦位 に施す。内面は横位の磨き。	口縁部1/5残存。
6	こも編 石	南東壁 +3	①16.0②4. 7③3.9④ 4.78	ひん岩	棒状の襷を素材とする。打痕、擦痕は認められない。		完形。

3区3号住居 (第13～14図、P L 21)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 台付壺	中央部東 壁寄り +4	口 (12.7) 高 18.1	①細砂多量② い褐色5 YR7/4③普通	口縁部は直線的に外反し先 が尖る。体部上位に最大径 を持つ。	外面口縁部横撫で、体部は斜 縦位7本単位の刷毛目、内面口 縁部横撫で、体部指押え。	口縁部から体部1/2 残存。
2	土師器 壺	中央部東 壁寄り +4	口 16.9 高 6.4	①粗砂、細砂 黒色鉱物②微 色7.5YR7/6 ③良好	直線的な頸部から、強く外 反する二重口縁を持つ。	外面口縁部は横位、頸部は縦 方向、体部は斜縦位の刷毛目 後磨き。内面口縁部は横位、 頸部は斜縦位の刷毛目後磨 き。体部指押え。	口縁部のみ残存。
3	土師器 鉢	埋没土	口 (10.8) 高 5.3 底 4.4	①粗砂、黒色 鉱物②褐色5 YR6/6③普通	底部は内厚で、体部ややや 膨らみを持ち立ち上がる。	外面口縁部横撫で、体部中位 部磨き、下位は磨り。内面 磨き。	1/2残存。 内面赤色塗彩を施 す。
4	こも編 石	中央部北 壁寄り +6	①11.1②5. 2③2.1④ 1.90	ホルンフェル ス	扁平襷を素材とする。下端部 に若干打痕が認められる。		完形。
5	こも編 石	南壁+6	①16.2②6. 2③6.1④ 1.90	ひん岩	棒状襷を素材とする。下半部欠損。表面と右側面に磨痕が 認められる。		1/2

3区4号住居 (第16～18図、P L 22)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 鉢	中央部 +16	口 (13.0) 高 4.6	①細砂、細砂 黒色鉱物②明 赤褐色5YR 5/8③普通	体部は強く外傾する。口縁 部は直線的に立ち上がり、 先端は尖る。	外面横方向の磨り後、横位 の磨き。内面横撫で。	坏部1/4残存。
2	土師器 高 坏	埋没土	口 (10.1) 高 4.4	①細砂②赤褐 色10R4/6③良 好	口縁部は緩やかに内彎す る。	外面、内面とも横位の磨き。	坏部1/3残存。内外面 とも赤色塗彩。
3	土師器 高 坏	南壁+5	高 6.6 底 9.2	①細砂、黒色 鉱物②灰褐色 5YR5/2③普 通	胴部下半にやや丸みを持 ち、内傾する。脚端部は折 り返しを持つ。	外面は縦位4本単位の刷毛目、 内面は指押え後横撫で。	胴部1/2残存。
4	土師器 壺	埋没土	口 (21.8) 高 5.4	①粗砂、黒色 鉱物②外・明 赤褐色5YR 5/6、内・褐色5 YR6/6③良好	口唇部は小さく内彎する。	外面横位の刷毛目後横撫で。 内面横撫で。	口縁部1/4残存。
5	土師器 壺	南西壁 +3	口 (17.3) 高 4.3	①粗砂②黒褐 色7.5YR3/1 ③良好	頸部は強く屈曲する。	外面6本単位の波状文。内面 横位の磨き。	口縁部1/4残存。
6	土師器 壺	埋没土	高 4.6	①粗砂②にい い褐色色2.5 YR5/4③や や軟	頸部で強く屈曲する。	外面口縁部5本単位の波状 文、頸部6本単位の波状文、 体部波状文を施す。内面口縁 部横撫で。体部縦位の磨り。	口縁部破片。

遺物観察表

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①粘土②色調 ③構成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
7	土師器 壺	埋没土	高 3.6	①細砂、細礫 ②ふい赤褐色 5YR5/4③ 良好	頸部で鋭く屈曲し、口唇部 は受け口状に外反する。先 端は尖る。	口唇部縦文を施す。外面頸部 5本単位の縞状文を2条施 す。内面横撫で。	口縁部破片。
8	土師器 壺	埋没土	高 2.8	①細砂、黒色 紅物変外・赤 黒色2.5 YR 2/1、内・ふ い 橙 色 7.5 YR6/4③良 好	頸部で鋭く屈曲して立ち上 がる。「く」字状口縁と頸部 の接合部は粘土を貼り付 け、内面に段を明瞭に残す。	外面口縁部横撫で。	口縁部破片。
9	土師器 壺	埋没土	高 9.8	①細砂②橙 色 7.5YR7/6③ 普通	上位に最大径を有すると思 われる。	外面縦方向の刷毛目後、斜縦 位の波状文を施す。内面横撫 で。	腰部破片。
10	土師器 壺	中央部西 壁寄り +9	口 (15.9) 高 16.8	①細砂②黒褐 色5YR2/1③ やや軟	口縁部はやや外反し、腰部 中位に最大径を持つ。	外面口縁部から腰部上位にか けて刷毛、殆ど山を持たない 波状文を施す。中位以下は縦 位の刷毛目。内面横撫で。	口縁部から腰部破 片。
11	土師器 壺	埋没土	高 10.4	①粗砂、細礫 ②外・暗褐色 7.5YR3/3、 内・ふい褐 色7.5YR6/3 ③やや軟	腰部は球形に丸みを持ち、 口縁部は直線的に立ち上が る。	外面腰部斜縦位の刷毛目。内 面横撫での磨き。	腰部破片。
12	土師器 壺	南西壁 +3	口 (16.8) 高 13.5	①粗砂、細礫 ②ふい褐色 7.5YR5/3③ やや軟	口縁部は鋭く外反し、腰部 上位に最大径を持つ。	外面口縁部は刷れた7本単 位の波状文、腰部は7本単 位の斜縦位刷毛目。外面横 方向の磨き。	口縁部から腰部破 片。
13	土師器 壺	床直 中央部西 壁寄り +9	口 (18.6) 高 13.4	①細砂、細礫 ②黄褐色2.5 YR7/4③普 通	口縁部は直線的に立ち上 がり、口唇部でやや外反す。 腰部上位に最大径を持つ。	外面口縁部から腰部上位にか けて5本単位の刷れた波状文。 内面指押え後、横撫で。	口縁部から腰部1/4 残存。
14	こも編 石	北壁+15	①15.9②29. 9③3.7④ 700	粗粒安山岩	扁平な長楕円盤を素材とする。 左右両側縁は粗い刺歯 によって決りをいれている。打痕は縦線部に認められる。		4/5

3区5号住居(第17~19図、P L 22)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①粘土②色調 ③構成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 壺	埋没土	口 (16.8) 高 8.7	①粗砂、軽石 ②灰赤色2.5 YR4/2③普 通	肩の張り是比较的強く、口 縁端部は強く外反する。	外面横位の磨で、内面横位 撫で。口縁部横撫で。	口縁部1/5残存。
2	土師器 小壺型	埋没土	口 (11.0) 高 8.0	①細砂②灰褐 色5YR5/3③ 普通	頸部で鋭く屈曲し、口縁部 部で外反する。	外面斜縦位磨で、内面横位 撫で。口縁部横撫で。	口縁部から胴部。 1/3残存。
3	こも編 石	南西隅 +8	①14.35② 5.7③4.95 ④815	ひん岩	棒状の襷を素材とする。打痕は認められないが、下部部 には磨痕が良く認められる。		完形。
4	こも編 石	南西隅 +8	①12.7②6. 95③4.85④ 641	粗粒安山岩	やや厚手の扁平襷を素材とする。上下両端部に打痕が若干 認められる。		完形。
5	こも編 石	南西隅 +8	①13.6②7. 8③3.4④ 700	石英閃緑岩	扁平な楕円盤を素材とする。上下両端部と左右両側縁に打 痕が若干認められる。		完形。
6	こも編 石	南西隅 +8	①14.9②7. 7③4.8④ 885	ひん岩	厚手の長楕円盤を素材とする。打痕は上下両端部と左右両 側縁に若干認められる。		完形。

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
7	こも編石	南西隅 +8	①13.4②6.5③5.3④715	溶結凝灰岩	棒状の線を素材とする。打痕、擦痕は識別できない。		完形。
8	こも編石	中央部 +8	①12.5②6.9③3.4④488	粗粒安山岩	下部に打痕あり。扁平な線を素材とする。		完形。
9	こも編石	中央部 +13	①15.25②8.25③4.6④900	石英閃緑岩	上下両端部に打痕が若干認められる。扁平な線を素材とする。		完形。
10	こも編石	中央部 +8	①12.7②10.9③3.0④538	粗粒安山岩	扁平な円線を素材とする。表面にスズ状付着物。左右両端縁中央部に抉りをいれている。		4/5

3区6号住居(第17～19図、P.L22・23)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 小型椀	埋設土	口 6.8 高 3.6 底 4.0	①粗砂②に い黄褐色10 YR6/3③普 通	口縁部は内彎する。	外面指押えによる整形後、口縁部のみ横撫で。内面指撫で。底部縦削り。	口縁部一部欠損。
2	土師器 高杯	北西隅 床直	口 14.3 高 9.1	①細粒、黒色 藍物②淡黄色 2.5YR8/4③ 普通	杯部は下位に線を持ち、内彎しながら立ち上がる。胴部は短脚で、端部に向かって広がる。	外面縦磨き。内面杯部は磨き。脚部上半は横位の削り、下半は横撫で。	口縁一部、脚端部欠損。
3	土師器 器台	埋設土	口 7.4 高 6.9 底 (12.0)	①細粒②明赤 褐色2.5YR 5/6 ③良好	口縁部外面に明確な線を待つ。脚部は下半で強く外反する。	外面6本単位の刷毛目後、縦磨き。内面受部は磨き。胴部横位の磨削り後、縦磨き。	脚部1/2欠損。 胴部上位に3カ所 透孔。赤色塗彩。
4	土師器 壺	中央部北 壁寄り +20	口 (14.0) 高 17.5 底 5.1	①粗砂、黒色 藍物②褐色7. 5YR7/6③良 好	二重口縁部は強く外反する。胴部は球形を呈する。	外面刷毛目後、縦磨き。内面横撫で後、棒状工具による縦位の撫で。底部縦削り。	口縁部一部欠損。
5	土師器 壺	北西隅床 直	口 16.0 高 16.5	①細粒②に い橙褐色7.5 YR7/4③良 好	口縁部は頸部より強く屈曲する。胴部は球形を呈し、中位に最大径を持つ。	外面胴部に斜縦位または横位の刷毛目後、口縁部横撫で。内面口縁部横撫で。頸部横方向の撫で。胴部指押え後撫で。	胴部中位以上2/3残存。
6	土師器 小型壺	北西隅床 直	口 13.9 高 14.0	①粗砂、細粒 ②に赤褐色2.5YR5/3 ③普通	口縁部は頸部より強く屈曲する。胴部は球形を呈し、中位に最大径を持つ。	外面斜縦位の刷毛目後、口縁部のみ横撫で。内面口縁部横撫で。頸部横位の刷毛目。胴部指押え後斜縦位の撫で。	胴部上位以上2/3残存。
7	土師器 台付壺	P7 貯蔵穴 -34	口 15.5 高 26.3 底 9.9	①粗砂、細粒 ②黒褐色5YR 2/1③良好	口縁部は頸部より屈曲する。胴部は球形を呈し、中位に最大径を持つ。台部はやや内彎しながら開く。	外面斜縦位の下から上への刷毛目後、口縁部横撫で。胴部下1/3は刷毛目を撫で待つ。台部斜縦位の刷毛目。内面口縁部から頸部にかけて刷毛目。胴部上半指押え後横撫で。下半棒状工具による磨き。台部横方向後斜縦位の刷毛目。	完形。
8	台石	中央西壁 寄り床直	①24.7②11.95③9.49④4270	石英閃緑岩	比較的厚手の垂内線を素材とする。裏面と右側面には磨痕が残る。		完形。

3区7号住居(第21図、P.L23)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 鉢	南壁+22	口 (14.9) 高 6.2 底 4.5	①細粒、白色 藍石②明赤褐色5YR5/6③普通	体部は底部から丸みを持って立ち上がり、口唇部で強く外反する。	外面上半縦位の刷毛目後、多方向への磨き。その後口縁部横撫で。体部下半は多方向への磨削り後縦磨き。底部縦削り。内面口縁部横撫で。体部多方向への縦磨き。	ほぼ完形。

遺物観察表

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③構成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
2	土師器 高 杯	南壁+16	口 18.4 高 7.3	①粗砂、黒色 胎物②褐色7.5YR6/6③普通	体部は内灣ぎみに開く。	内外面とも多方向への彫磨き。	坏部1/3残存。
3	土師器 器 台	中央部 +7	口 9.0 高 10.9 底 12.0	①粗砂若干② により褐色7.5YR6/3③良好	受部は明瞭な稜を持つ。脚部は下位で強く開く。脚部中に3孔を持つ。	受部内外面斜線位置磨き。脚外面縦位の彫磨き、内面上位は指撫で、下位は横位の撫で。	完形。
4	土師器 器 台	埋没土	口 8.9 高 10.6 底 (12.1)	①粗砂②によ り褐色7.5YR6/3③良好	受部は明瞭な稜を持つ。脚部は下位で開く。脚部中に3孔を持つ。	受部内外面斜線位置磨き。脚外面縦位の彫磨き、内面上位は指撫で、下位は横位の撫で。	ほぼ完形。
5	土師器 器 台	埋没土	口 (10.5) 高 11.2 底 13.4	①粗砂、黒色 胎物②褐色7.5YR6/6③普通	くびれ部が大きく、全体に鼓状を呈する。受部先端は肥厚する。	受部内外面斜線位刷毛目。脚部内面刷毛目後指撫で。	3/4残存。
6	土師器 器 台	中央部 +7	口 7.6 高 6.6 底 4.6	①粗砂、黒色 胎物②明赤褐色2.5YR5/6③普通	胴部中に最大径を持つ。底部は上げ底状を呈する。	外面胴部指押え後、上位は上から下への斜線位置で、口縁部は横撫で。内面口縁部横撫で。胴部指押え。	2/3残存。
7	土師器 器 台	西壁床直	口 9.4 高 10.1 底 5.3	①粗砂②褐色 2.5YR6/6③普通	口縁部は直線的に立ち上がり。胴部中に最大径を持つ。口縁部は胴部整形後折り返し、頸部に明瞭な稜を持つ。底部は上げ底状を呈する。	外面口縁部折り返し後指押え、胴部上半部位置で、下半部指押え。内面口縁部横位の刷毛目、胴部指押え。	口縁部一部欠損。
8	土師器 小型壺	埋没土	口 (15.4) 高 16.0 底 4.6	①細砂、黒色 胎物、白色軽石②により黄褐色10YR7/3③普通	口縁部は外反しながら立ち上がり、胴部上半に最大径を持つ。	外面胴部上半斜線位上から下への彫磨り、下半斜線位下から上への彫磨り、底部彫磨き。内面彫磨き。	1/3残存。
9	土師器 壺	南壁+18	口 18.0 高 26.8 底 8.5	①粗砂、黒色 胎物、白色軽石②により黄褐色10YR7/4③普通	口縁部は外反しながら立ち上がり、胴部下半に最大径を持つ。	外面上位上から下への彫磨で、中位縦位の彫磨で、下位は指撫で。底部は指による調整。内面横撫で。	胴部1/3欠損。

3区8号住居 (第22図、P L 24)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③構成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	須恵器 高 杯	埋没土	口 15.2 高 5.1 底 (8.0)	①粗砂②灰色 7.5Y5/1③やや軟	体部はやや内灣しながら立ち上がる。	右回転コロ整形か。底部切り離し後右回転彫磨り。	1/4残存。
2	土師器 壺	南壁+5	口 19.7 高 28.4 底 4.3	①粗砂②明赤 褐色2.5YR5/6③普通	口縁部は一度直立し外反する弱い「コ」字状を呈する。胴部上半に最大径を持つ。	外面胴部上位に横位磨り、以下は斜線位上から下への彫磨り。口縁部は指押え後横撫で。底部彫磨り。内面横撫で。	完形。 胴部下半外面にスズ付着。
3	灰 石	埋没土	(D5.95)②4.7 ⑤5.1④162	砥研石	4面ともよく研磨されている。上端部には打痕による調整加工が施されている。		1/2
4	こも編 石	東壁+7	①14.3②5.0 ③4.9④562	粗粒安山岩	棒状の礫を素材とする。上下端部に打痕がわずかに認められる。		完形。

3区9号住居 (第24・25図、P L 24・25)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③構成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 器 台	埋没土	口 12.7 高 5.8 底 3.0	①粗砂、黒色 胎物②により黄褐色10YR7/4③良好	口縁部はやや内灣しながら大きく開く。	外面口縁部横撫で、体部多方向の彫磨り。内面横撫で。	口縁部1/3欠損。

番号	種別	出土地	量目	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
2	土師器鉢	埋没土	口(11.4) 高 6.3	①細線多量② 黄褐色色10 YR8/3③普通	口縁部は外傾し突る。体部は球形を呈する。	外面体部刷毛調整、置磨き後、口縁部横撫で。内面体部篋削り後、口縁部横撫で。	1/3残存。
3	土師器高杯	東北隅床直	口 8.0 高 12.4	①細線②明赤褐色5YR5/6③普通	杯部はやや内彎しながら立ち上がる。胴部は中位に3つの透孔をもち開く。	外面杯部横位または斜縦位磨磨き後、口縁部横撫で。胴部は縦位の磨磨き。内面横位の刷毛調整後、置磨き。胴部横撫で。	胴部1/2欠損。
4	土師器鉢	埋没土	口(11.5) 高 7.7	①細線②赤褐色5YR4/6③良好	口縁部は短く、強く外傾する。体部は球形を呈する。	外面体部刷毛調整、棒状工具による磨磨き後、口縁部横撫で。内面棒状工具による磨磨き後、口縁部横撫で。	1/3残存。
5	土師器高杯	P2付近+20	口(22.5) 高 14.0	①細線多量②明赤褐色2.5YR5/6③良好	杯部下位に横を持ち、直線的に立ち上がる。胴部中位に3孔を持つ。	外面杯部斜縦位、胴部縦位の刷毛目後縦位の磨磨き。内面杯部磨磨き。胴部指撫で。	1/3残存。
6	土師器甕台	東北隅床直	口 9.5 高 8.7 底(12.9)	①細砂、細線②灰褐色5YR4/2③普通	受部口縁部に横を持ち、直線的に立ち上がり、先端は突る。胴部は直線的に開き中位に3孔を持つ。	外面口縁部横撫で。受部以下は縦位の刷毛目後、胴部上半のみ磨磨き。胴端部横撫で。内面受部横位の刷毛目後、横撫で。胴部縦位の刷毛目後、上位は縦位の撫で、下位は横撫で。	受部1/3欠損。
7	土師器甕台	東北隅床直	口(8.8) 高 9.1 底 11.7	①細線、黒色鉱物②橙褐色YR6/6③普通	受部は内彎しながら立ち上がる。胴部は下位で大きく外に開く。上半に3孔を持つ。	外面刷毛目後、受部横撫で、胴部縦位の磨磨き、胴端部横撫で。内面受部横撫で、胴部刷毛目後、横撫で。	受部1/2欠損。
8	土師器甕台	埋没土	高 7.2 底(13.5)	①細線②灰白色10YR8/2③良好	胴部は下位で大きく開く。中位に3孔を持つ。	外面縦位の磨磨き。受部との接点は横撫で。内面横撫で。	胴部1/2残存。
9	土師器甕台	南壁床直	口 8.0 高 7.2 底 9.4	①細砂、細線②外・内よひ黄褐色10YR7/3、内・内よひ橙褐色7.5YR7/4③良好	受部は上位に緩い横を持つ。胴部は直線的に開き、端部で内彎する。胴部中位に4孔を持つ。	外面口縁部横撫で、受部下位から胴部にかけて縦位の刷毛目後、縦位の磨磨き。胴端部横撫で。内面受部横位の刷毛目後、横撫で。胴部上位工具による横撫で、下位は横位の刷毛目後、横撫で。	完形。
10	土師器甕台	東北隅床直	口 9.2 高 7.8 底 9.6	①細線②内よひ橙褐色7.5YR6/4③良好	受部はやや内彎気味に立ち上がる。胴部は直線的に開き、下位でやや内彎する。中位に4孔を持つ。	外面縦位の刷毛目後、受部は横位磨磨き。胴部は縦位磨磨き。胴端部で横位磨磨き。内面受部横位の磨磨き。胴部は横位の置磨き後端部横撫で。	ほぼ完形。
11	土師器甕台	南西隅+4	口 8.2 高 7.3 底 10.0	①細砂、細線②明赤褐色5YR5/8③良好	受部はやや内彎気味に立ち上がる。胴部は下位で内彎する。中位に4孔を持つ。	外面刷毛目後、受部横位の磨磨き、胴部上位は縦位の磨磨き、下位は横位の磨磨き。内面受部多方向の磨磨き、胴部5本単位の刷毛目。	ほぼ完形。
12	土師器壺	埋没土	高 9.1	①細線②橙褐色5YR6/6③普通	胴部で鋭く屈曲する。	胴部上位にはR [横文を横位に2段施文後、その各々の上下両端に0段の結節を横位施文し、区画している。	胴部から胴部にかけての破片。
13	土師器台付甕	埋没土	口 16.4 高 6.6	①細線②内よひ黄褐色2.5YR6/3③良好	口縁部はS字状を呈する。	口縁部横撫で。外面胴部7本単位の斜縦位刷毛目後、胴部横位の刷毛目。内面指押え後縦位の撫で。	口縁部から胴部にかけて残存。
14	土師器台付甕	P3付近+16	口 19.0 高 10.7	①細線、黒色鉱物②内よひ黄褐色10YR5/3③良好	口縁部は頸部から外に突出し、鋭い横を持つ。受部は平坦面を持ち、先端は鋭く突る。	口縁部横撫で。外面胴部7本単位の斜縦位刷毛目。内面頸部横位の刷毛目。胴部指押え後横撫で。	口縁部から胴部にかけて1/2残存。

遺物観察表

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①粘土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
15	土師器 台付壺	P 2付近 +20	口 17.0 高 23.6	①粗砂、細礫 ②灰黄褐色10 Y R 4/2③良好	口縁部はS字状を呈し、胴部中央に最大径を持つ。	口縁部横撫で、胴部上位は上から下へ、下位は下から上への斜縦位8本単位の刷毛目、内面上位指押え後横撫で、下位刷毛目後撫で。	2/3残存。
16	土師器 台付壺	東北隅床 直	口 16.2 高 23.4	①細礫多量② 灰黄色2.5 Y R 7/2③良好	口縁部はS字状を呈し、胴部上位に最大径を持つ。	口縁部横撫で、胴部7本単位の斜縦位刷毛目、胴部に3本単位の横位刷毛目、台部7本単位の斜縦位刷毛目後、横撫で。内面胴部上位指押え後、横撫で。胴部下半は斜縦位の横で。	台部1/3欠損。
17	土師器 台付壺	東北隅 +4	口 15.4 高 22.4 底 8.3	①細礫多量② 浅黄色2.5 Y R 7/4③良好	口縁部はS字状を呈し、胴上半に最大径を持つ。右部は直線的に開き、端部を折り返す。	外面口縁部横撫で、胴部上半縦位、下半斜縦位の6本単位の刷毛目。胴部に横線を施す。台部6本単位の斜縦位刷毛目後撫で。内面胴部上位指押え後横撫で。	ほぼ完形。
18	こも編 石	北壁床直	①18.2②7 5③5.4④ 1170	粗粒安山岩	上下両端部に打痕が若干認められる。また擦痕が左右両側面に認められる。素材は棒状礫。		完形。

3区10号住居(第26図、P L 25)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①粘土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 環	床直	口 12.6 高 3.7	①粗砂、黒色 鉱物②褐色7. 5Y R 6/6③やや軟	やや丸みを持った底部から、口縁部は内傾する。	外面口縁部横撫で、底部横位の磨削り。内面横撫で。	ほぼ完形。
2	土師器 盤	竈内	口 (19.2) 高 3.3	①粗砂、黒色 鉱物②褐色7. 5Y R 6/6③やや軟	平底気味の底部から、口縁部は外傾する。体部と底部を面す稜線を持つ。	外面底部磨削り、口縁部内外面とも横撫で。	約1/4残存。
3	須恵器 環	東壁+14	口 (17.0) 高 4.8 底 (10.8)	①粗砂若干② 外・オリーブ 黒色7.5Y 3/ 1、内・灰色N5 ③良好	体部から口縁部にかけて、直線的に外傾する。	右回転口縁口整形。高台は削り出しによる。	約1/4残存。
4	土師器 甕	竈周辺 +4	口 (21.6) 高 9.5	①黒色銅色鉱 物②明褐色7. 5Y R 5/6③普通	頸部で屈曲し、口縁部は直線的に外傾する。	外面口縁部指押え後横撫で、胴部斜縦位の磨削り。内面口縁部横撫で、胴部斜縦位の横撫で。	口縁部から頸部1/3残存。
5	土師器 甕	竈周辺 +8	口 (23.0) 高 9.7	①粗砂、黒色 鉱物②にぶい 褐色7.5Y R 7/4③普通	頸部で屈曲し、口縁部は直線的に外傾する。	外面口縁部横撫で、胴部斜縦位の磨削り。内面横撫で。口縁部に輪積み痕を残す。	口縁部から頸部1/3残存。
6	こも編 石	中央部 +3	①10.9②5. 95③3.7④ 330	粗粒安山岩	扁平な面を素材とする。打痕が上下両端部と表面に認められる。		完形。
7	こも編 石	中央部 +6	①13.4②5. 6③4.9④ 650	頁岩	頁岩棒状礫を素材とする。打痕、擦痕等識別できない。		完形。

3区11号住居(第27・28図、P L 25)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①粘土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 高環	埋設土	底 (12.0) 高 (5.5)	①粗砂②にぶい 黄褐色10 Y R 6/4③良好	胴部は外に大きく開く。中央位に3孔を持つ。	外面胴部上位横撫で、下位は磨削り。内面上位横撫で、下位は7本単位の刷毛目。	胴部約1/2残存。

番号	種類 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
2	土師器 埴	埋没土	口 (10.6) 高 4.0	①粗砂、鮮石 ②浅黄色2.5 Y7/3③良好	口縁部は内彎し、先端は尖る。器内は薄い。	口縁部指押え後、横撫で。胴部指押え。	口縁部から胴部上位1/4残存。
3	土師器 鉢	埋没土	口 (14.8) 高 6.1 底 (4.0)	①細砂少量② 明赤褐色2.5 YR5/6③普通	径の小さな底部から直線的に外傾し、口縁部で小さな立ち上がりを見せる。	内外面とも磨磨き後、口縁部のみ横撫で。	1/3残存。内外面赤色塗彩。
4	土師器 台付甕	埋没土	高 6.0 底 12.0	①粗砂、鮮石 黒色紅物②に ぶい黄褐色10 YR7/3③普通	直線的に開く台部。	外面6本単位の斜縦位刷毛目。端部横撫で。内面工具による縦位の撫で後、7本単位の刷毛目その後下半は横撫で。	台部のみ残存。
5	土師器 台付甕	埋没土	口 (18.2) 高 3.9	①細砂②浅黄 褐色10YR8/ 4③良好	S字状口縁を呈し、内側に平らな受部を持つ。	外面口縁部横撫で。胴部7本単位の刷毛目。内面横撫で。	口縁部から胴部1/6残存。
6	土師器 台付甕	埋没土	口 (19.2) 高 5.6	①細砂②浅黄 色2.5YR7/3 ③良好	S字状口縁を呈する。	外面口縁部横撫で。胴部7本単位の斜縦位刷毛目。内面口縁部横撫で。胴部指押え。	口縁部から胴部に於けて破片。
7	土師器 甕	埋没土	口 (16.0) 高 12.0	①粗砂、鮮石 ②赤褐色5 YR4/6③普通	口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部で外反する。胴部は丸みを持つ。	外面口縁部から胴部上位にかけて、刷れた5本単位の波状文を施す。内面口縁部横撫で。胴部指押え後撫で。	胴部上半から口縁部1/2残存。
8	土師器 甕	中央部割 裂寄り +5	口 15.7 高 11.7	①細砂、黒色 紅物②にぶい 赤褐色5YR 5/4③良好	口縁部は大きく外反する。頸部から丸みを持った胴部に至る。	外面胴部に5本単位の横位帯波文を3条施した後、相対する位置に4か所6本単位の縦位帯波文を2条ずつ施す。口縁部で横撫で。胴部横位の磨磨き。内面横撫で。	口縁部から胴部上位。
9	土師器 甕	埋没土	高 9.5	①粗砂、黒色 紅物②褐色5 YR6/6③良 好	頸部で強く屈曲する。	外面胴部に5本単位の波状文を3条施す。口縁部・胴部とも横位の磨磨き。内面横撫で後、横位の磨磨き。	胴部から胴部上位。
10	土師器 甕	埋没土	高 12.8	①粗砂少量② 明赤褐色5 YR5/6③や や軟	胴部上位はやや丸みを持つ。	外面胴部に6本単位の横位帯波文を3条施し、縦位帯波文を2条ずつ4〜5か所施す。内面横撫で後、口縁部のみ横位磨磨き。	胴部破片。

3区12号住居 (第29図、P L 26)

番号	種類 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	須恵器 高台付 椀	埋没土	口 15.2 高 5.6 底 7.4	①細砂、褐色 土粒②深黄色 2.5YR6/2③ やや軟	底部から口縁部に直線的に外反し、下位にやや膨らみを持つ。	右回転クロコ成形、底部回転糸切り。	1/3欠損。高台は削がれる。
2	土師器 甕	埋没土	口 (21.0) 高 7.7	①粗砂②褐色 5YR6/6③普通	口縁部は「コ」字状を呈する。	口縁部指押え後、横撫で。胴部縦位の調整後、横位の磨磨き。	口縁部破片。

3区13号住居 (第30図、P L 26)

番号	種類 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 小型甕	埋没土	口 (7.6) 高 3.9	①粗砂、鮮石 ②にぶい黄色 2.5YR6/3	口縁部は直線的に外反する。	外面口縁部横位の磨磨き、胴部縦位の磨磨き。内面横撫で。	口縁1/5残存。焼成は良好。
2	土師器 埴	埋没土	口 (13.0) 高 5.2	①細砂②明赤 褐色5YR5/6 ③良好	口縁部は直線的に外反し、径の小さな底部を持つ。	外面口縁部縦位の磨磨き、底部を多方向の磨磨き。内面横位の刷毛目後、斜縦位磨磨き。	口縁部①/4残存。
3	土師器 甕	埋没土	高 4.3	①粗砂②にぶ い黄褐色10 YR7/4③や や軟	直線的に開く口縁部で、端部は小さく内彎する。	波状文を施す。	口縁部破片。

遺物観察表

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①粘土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
4	土師器 甕	埋没土	高 3.0	①細砂②によ い黄褐色10 YR7/4③普 通	頸部で屈曲し、胴部が膨ら むか。	外面胴部に3本単位の横状文 を2条持つ。胴部4本単位の 刷毛目。内面横撫で。	胴部破片。
5	土師器 甕	埋没土	口(16.0) 高 3.8	①粗砂、軽石 ②外・暗赤褐 色5YR3/3、 内・赤褐色5 YR4/6③良 好	口縁は外反して立ち上 がる。	外面口縁部斜線位刷毛目後、 横撫で。胴部縦状文を施す。 内面横位刷毛目後、横撫で。	口縁部破片。

3区14号住居(第32区、P L 26)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①粘土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 甕	南西隅 +3	口 19.0 高 9.5 底 4.0	①細砂②褐色 7.5YR6/6③ 普通	底部から直線的に外反し、 口縁部で内彎する。口縁部 は二重を呈する。	外面口縁部指押え後横撫で、 体部斜線位の刷毛目後、縦位 磨き。内面横撫で。	ほぼ完形。
2	土師器 甕	中央部南 壁寄り床 面	口(18.0) 高 6.0	①粗砂、黒色 鉱物②淡黄色 2.5YR8/4③ 良好	頸部で強く屈曲し、口縁部 は内彎する。胴部は肩が強 く重なる。	外面口縁部刷毛目後横撫で、 胴部斜線位刷毛目。内面横撫 で。	口縁部1/2残存。 台座が付くか?
3	土師器 甕	埋没土	口(19.8) 高 4.7	①粗砂②によ い赤褐色5 YR5/4③普 通	口縁部は外彎しながら、立 ち上がる。	外面輪横み成を残すように指 押え後、口縁部のみ横撫で。 内面磨き後、口縁部のみ横 撫で。	口縁部破片。
4	土師器 甕	南西隅 +3	口(12.6) 高 12.2	①粗砂②赤褐 色2.5YR4/6 ③普通	口縁部は直線的に外反し、 口唇部で外反する。胴部は 中位に最大径を持つと思わ れる。	内外面とも横位の磨き後、 口縁部のみ横撫で。	口縁から体部1/3残 存。 内外面赤色塗彩。
5	台石	南西隅 +12	①20.4② 16.8③7.8 ④4700	粗粒安山岩	比較的厚手の直角縁を素材と する。表面の平坦面には磨 痕が残る。		完形。加熱を受け変 質の認められる部分 がある。住居の崩失 に起因するものか。

3区15号住居(第33・34区、P L 26・27)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①粘土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 甕	中央部北 東寄り +21	紐 4.7 高 7.5 底 19.5	①細砂②によ い褐色7.5 YR6/4③良 好	上位にやや丸みを持ち、下 位で大きく広がる。紐は直 線的に外反する。紐の中央 に穿孔する。	外面縦位磨き、端部横位磨 き。紐は横撫で。内面横位 磨き。	1/4残存。
2	土師器 甕	中央部北 東と西 壁が接合 +6	口(17.0) 高 6.5	①粗砂、黒色 鉱物②赤褐色 5YR4/8③良 好	口縁部は緩く外反しながら 立ち上がる。	外面縦位刷毛目後、口唇部横 撫で。内面横位の磨き後、 口唇部のみ横撫で。	口縁部1/3残存。
3	土師器 甕	埋没土	高 12.7	①粗砂②外・ オリブ黒色 5Y3/1、内・ よい褐色7.5 YR6/4③や や軟	頸部は屈曲、胴部は緩やか に膨らむ。	外面頸部に3本単位の横状文 を施す。口縁部・胴部上位に 6本単位の波状文を施す。中 位以下は横位の磨き。内面 横位の磨き。	胴部破片。
4	土師器 甕	埋没土	口(15.2) 高 14.0	①細砂、黒色 鉱物②暗赤褐 色5YR5/6③ 普通	口縁部は直線的に立ち上 がり、口唇部で外反する。胴 部は上位に最大径を持つ。	外面口縁部から胴部上位にか けて刷れた波状文。下位は斜 線位の磨き。	口縁部から胴部1/3 残存。
5	土師器 甕	中央部北 東寄り +23	口 18.4 高 24.6	①細砂、黒色 鉱物②によ い黄褐色10YR 6/4③良好	口縁部は緩く外反し、胴部 中位に最大径を持つ。	口縁部は縦位、胴部は横位 の刷毛目後横撫で。底部は縦 位磨き後、横撫で。内面横 撫で。	約1/3欠損。

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形, 技法の特徴	残存・備考
6	石包丁	西壁+5	①3.0②7.3 ③0.7④17	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形, 技法の特徴	残存・備考

3区16号住居 (第35図、P L 27)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形, 技法の特徴	残存・備考
1	土師器 高環	埋没土	高 5.0 底 10.3	①粗砂、黒色 ②明赤褐色 ③10YR6/6 ④良好	直線的に開く胴部。中位に逆三角形の位置に配された3孔一単位の透孔が2あるいは3カ所施されているか。	外面多方向の磨き。内面縦位磨き後、横撫で。	胴部1/3残存。
2	土師器 壺	埋没土	口 13.8 高 8.0	①粗砂、紅石 ②粗色7.5 YR6/6③普通	胴部は強く屈曲する。胴部は中位に最大径を持つと思われる。	外面口縁部横撫で、胴部斜縦位刷毛目。内面横撫で。	口縁部から胴部1/2残存。外面黒色地肌。
3	土師器 甕	中央部南壁寄り+8	高 16.2	①細砂、黒色 ②褐色5 YR6/6③良好	胴部は球形を呈する。	外面斜縦位刷毛目。内面横撫で。	口縁部と底部欠損。

3区17号住居 (第36図、P L 27)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形, 技法の特徴	残存・備考
1	土師器 鉢	中央部南壁寄り+4	口 14.9 高 8.3 底 4.6	①細砂、黒色 ②紅物明赤褐色 ③5YR5/6④良好	小さな底部から、体部は内彎しながら立ち上がる。	体部は内外面とも横位の刷毛目後、横位の磨き。底部既削り。	ほぼ完形。
2	土師器 壺	埋没土	口 (19.6) 高 6.3	①黒色紅物多 ②にぶい黄 褐色10YR7/ 3③良好	胴部は直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。	外面縦位刷毛目後、口縁部横撫で。内面縦位刷毛目後、口縁部横撫で。	口縁部1/5残存。
3	磨石	中央部南壁寄り+2	①11.0② 11.2③7.8 ④1540	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形, 技法の特徴	残存・備考

3区18号住居 (第37図、P L 27)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形, 技法の特徴	残存・備考
1	土師器 環	中央部南壁寄り+2	口 11.5 高 3.3 底 7.5	①粗砂②明赤 褐色5YR5/6 ③やや軟	器内は体部でやや厚い。平らな底部から内彎しながら立ち上がり、先端は尖る。	体部は指押え後、横撫で。底部は既削り。	ほぼ完形。 内面漆を塗付か?
2	土師器 環	南東隅床直	口 11.5 高 3.4 底 7.5	①粗砂、細砂 ②にぶい赤褐色 ③5YR5/4④ やや軟	器内は薄く、体部は直線的に立ち上がり、先端は尖る。	体部は指押え後、横撫で。底部は既削り。口縁部に指押えによる線を明瞭に残す。	ほぼ完形。
3	須形器 高台付 杓	南東隅床直	口 (17.2) 高 6.5 底 (8.5)	①細砂②灰色 5Y6/1③良好	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で強く外反する。	右回転クロコ成形。底部回転赤切り。底部切り離し後高台貼り付け。	1/3残存。
4	須形器 環	埋没土	口 (12.4) 高 3.0 底 6.4	①粗砂、紅石 ②灰色5Y6/1 ③普通	体部は内彎しながら立ち上がる。底部は上げ気味に彎曲する。	右回転クロコ成形。底部回転赤切り後、未調整。	1/3残存。
5	土師器 環	南東隅床直	口 12.5 高 3.5 底 8.2	①粗砂、紅物 ②にぶい褐色 ③5YR5/4④ 普通	器内はやや厚く、体部は平らな底部から内彎しながら立ち上がる。	体部は指押え後、横撫で。底部既削り。	1/3欠損。内面に放射状の線刻を施した後、漆を塗付する。
6	土師器 環	埋没土	口 12.4 高 3.2 底 7.2	①粗砂、細砂 ②明赤褐色5 YR5/6③普通	器内は薄く、体部は内彎しながら立ち上がる。先端は尖る。	体部は指押え後、横撫で。底部外面に、「東」の墨書。	1/2残存。身込み、底部外面に、「東」の墨書。

遺物観察表

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
7	土師器 壺	埋没土	口 19.0 高 6.7	①粗砂②褐色 5YR6/6③良好	口縁部は「コ」字状を呈する。	口縁部横撫で、胴部上位横位 磨り。	口縁部1/2残存。
8	土師器 壺	南東隅床 直	口 (19.5) 高 8.5	①細砂②明赤 褐色5YR5/6 ③良好	口縁部は「コ」字状、先端は 外反して立ち上がる。	口縁部横撫で、胴部上位横位 磨り。	口縁部1/5残存。
9	磁石	埋没土	①8.0②5.1 ③3.8④87	角閃石安山岩	表面に研磨したと思われる平滑面があるがそれ程顕著ではない。		1/2

4区1号住居(第38・39図、P L 27・28)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 壇	東壁床直	口 10.8 高 6.5 底 4.0	①細砂、黒色 灰物②に 黄褐色10YR 7/3③良好	底部は上げ底を呈し、体部 やや潰れた球形を呈する。 口縁部は内彎し、先端は尖 る。	内外面とも刷毛目後、口縁部 横撫で、体部棒状工具による 磨き。	完形。
2	土師器 器台	西壁+10	口 8.9 高 9.4 底 12.7	①細砂多量② 褐色5YR6/6 ③良好	受部は内彎しながら立ち上 がり、脚部はやや外彎しな がら開く。脚部中に4孔を 持つ。	外面刷毛目後、受部横位磨 り。内面刷 毛目後、受部横位磨り。脚 部は横撫で。	完形。
3	土師器 台付壺	南東隅 +5	口 14.0 高 11.5	①細砂、紅石 ②に黄褐色 7.5YR7/4③ 良好	口縁部はS字状を呈し、明 瞭な受部を持つ。先端は尖 る。体部は球形を呈すると思 われる。	口縁部内外面とも横撫で、脚 部外面上位は上から下へ、下 位は下から上への斜縦位刷 毛目。内面指押え後横位磨 り。内面脚部に横位の刷毛目 を撫す。	口縁部から胴部上位 2/3残存。
4	土師器 台付壺	南東隅床 直	口 16.8 高 28.7 底 9.4	①細砂、紅石 ②に黄褐色 10YR7/2③ 良好	口縁部はS字状を呈し、明 瞭な受部を持つ。胴部は強 く外に開き、先端は尖る。 胴部上位に最大径を持つ。 脚部は直線的に開き、端部 は折り返す。	口縁部内外面とも横撫で、胴 部外面上位は上から下へ、下 位は下から上への斜縦位刷 毛目。台部斜縦位刷毛目後、 縦位の磨で、内面脚部指押 え後横位磨で、台部指押え 後横撫で。	胴部1/4欠損。
5	土師器 台付壺	南東隅 +6	口 (15.8) 高 20.8 底 8.6	①細砂、紅石 ②に黄褐色 10YR6/3③ 良好	口縁部はS字状を呈し、胴 部上位に最大径を持つ。台 部は直線的に開き、端部を 折り返す。	口縁部横撫で。外面胴部上位 上から下へ、下位は下から上 への斜縦位刷毛目。台部斜 縦位刷毛目後、縦位の横撫 で。内面指押え後、縦位磨 り。	胴部1/2欠損。
6	土師器 壺	埋没土	高 20.2 底 6.9	①細砂多量② に黄褐色 10YR6/4③普 通	径の小さな底部から、胴部 は球形を呈する。	外面縦位刷毛目後、横撫で。 内面横位の刷毛目。粘土の輪 積み痕を明瞭に残す。	底部から胴部中位残 存。
7	こも編 石	埋没土	①15.15② 4.8③3.6④ 420	細粒安山岩	棒状の棒を素材とする。打痕・擦痕は識別できない。		完形。

5区1号住居(第40～42図、P L 28)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 杯	中央部西 壁寄り +4	口 11.7 高 3.8	①細砂②に 黄褐色10 YR4/3③や や軟	口縁部は底部との境に横を 持ち、直線的に立ち上がる。 口縁端部は尖る。	口縁部横撫で、底部は磨り。 ほぼ完形。	
2	土師器 杯	中央部南 壁寄り床 直	口 11.6 高 4.3	①細砂②灰褐 色5YR5/2③ やや軟	口縁部は底部との境に横を 持ち、直線的に立ち上がる。 口縁端部は鋭く尖る。	口縁部横撫で、底部は磨り。 ほぼ完形。	
3	土師器 杯	南壁+9	口 12.0 高 4.5	①粗砂、黒色 灰物②褐色 5YR6/6③普 通	口縁部は底部との境に横を 持ち、やや内傾しながら立 ち上がる。	口縁部横撫で、底部は磨り。 口縁部一部欠損。	

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
4	土師器 環	甕左袖 +29	口 11.8 高 3.9	①細砂、黒色 鉱物透明赤褐色 5YR5/6② やや軟	口縁部は底部との境に線を 持ち、直線的に立ち上がる。 口縁端部は鋭く尖る。	口縁部横撫で。底部は磨削り。	完形。
5	土師器 環	中央部南 壁寄り床 直	口 12.0 高 4.1	①細砂②褐色 7.5YR6/6③ 普通	器形は歪んでいる。口縁部 は底部との境に線を持ち、 外反しながら立ち上がる。	口縁部横撫で。底部は磨削り。	完形。 断面は薄削している。
6	土師器 甕	P1内 -40	口 23.6 高 31.7	①粗砂、軽石、 長石②にぶい 黄褐色10 YR7/3③普通	直線的な胴部から、口縁部 は強く外反する。	口縁部横撫で。胴部外面縦位 瓦削り。内面工具による横撫 で。	口縁部から胴部上位 残存。
7	土師器 甕	甕右袖	口 29.9 高 38.1 底 5.5	①粗砂②褐色 5YR6/6③普通	胴部中位から下位にやや丸 みを持つ。口縁部は強く外 反する。	口縁部横撫で。胴部外面縦位 横撫で。底部棒状工具による 瓦削り。内面工具による横撫 で。	ほぼ完形。
8	土師器 甕	埋没土	口 21.2 高 37.1	①細砂、細砂 ②褐色7.5YR 6/6③普通	直線的な胴部から、口縁部 は強く外反する。胴部と口 縁部との境に線を持つ。	口縁部横撫で。外面胴部上位 斜縦位瓦削り。下位は縦位 瓦削り。内面工具による横撫 で。	底部欠損。
9	こも編 石	中央部西 壁寄り +3	①12.4②6. 45③3.15④ 350	粗粒安山岩	扁平な楕円體を素材とする。	打痕は識別できない。	完形。
10	こも編 石	中央部西 壁寄り +2	①11.6②4. 7③4.8④ 380	細粒安山岩	棒状の體を素材。打痕は識別できない。		完形。
11	こも編 石	中央部西 壁寄り +2	①11.0②5. 35③3.10④ 358	石英閃緑岩	扁平な楕円體を素材とする。上端部に若干の打痕、裏面に 擦痕が認められる。		完形。
12	こも編 石	埋没土	①12.6②5. 25③3.65④ 385	石英閃緑岩	棒状の體を素材とする。打痕は識別できないが、側面には 擦痕が認められる。		完形。
13	こも編 石	埋没土	①15.15② 7.5③2.7④ 510	閃緑岩	中央部に決りを持つ扁平體を素材とする。打痕は識別でき ないが、側面に擦痕が見られる。		完形。
14	こも編 石	P3-1 (砥石と して使用 か)	①13.7②6. 8③3.6④ 598	滑結凝灰岩	扁平な楕円體を素材とする。上下両端部に打痕が若干識別 できる。		完形。
15	こも編 石	埋没土	①14.5②6. 4③4.6④ 725	石英閃緑岩	棒状の體を素材とする。打痕は識別できないが、擦痕が見 られる。		完形。
16	こも編 石	埋没土	①13.25② 6.0③3.5④ 510	ひん岩	扁平な楕円體を素材とする。打痕は上下両端部に若干識別 できる。		完形。
17	こも編 石	中央部西 壁寄り床 直	①14.3②7. 6③5.0④ 710	粗粒安山岩	扁平な楕円體を素材とする。下端部に若干打痕が見られる。		4/5
18	砥石	埋没土	①18.35② 6.25③4.9 ④868	砥沢石	左右両側縁に深さ1mm程の線状痕が顕著である。		ほぼ完形。

5区2号住居 (第44図、P L 29)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 環	西壁+5	口 (11.0) 高 4.5	①細砂、軽石 ②褐色5YR 7/6③普通	口縁部は底部との境に線を 持ち、外反しながら立ち上 がる。	口縁部横撫で。底部磨削り。	2/3残存。
2	土師器 環	甕右側床 直	口 10.4 高 4.7	①粗砂、軽石 ②褐色7.5YR 6/6③普通	器形は歪んでいる。口縁部 は底部との境に線を持ち、 外反しながら立ち上がる。	口縁部横撫で。底部磨削り。	完形。

遺物観察表

番号	種類 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
3	土師器 坏	埋没土	口 (12.0) 高 5.2	①粗砂、軽石 ②褐色5YR 7/6③普通	器形は歪んでいる。口縁部は底部との境に段を待ち、外反しながら立ち上がる。先端は尖る。	口縁部横撫で。底部篋削り。	口縁部1/3欠損。表面はやや磨減している。

5区3号住居(第45図、P L 29)

番号	種類 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 坏	北壁中央 床直	口 (15.7) 高 5.6	①細砂、軽石 ②赤褐色5YR 4/6③良好	内斜口縁を持つ。体部は内贅する。	口縁部横撫で、体部理磨き。	口縁部欠損。
2	土師器 小甕	埋没土	口 (9.6) 高 15.1 底 5.1	①細砂、石英 ②ぶい黄褐色 10 Y R 7 / 3 ③普通	口縁部は直線的に立ち上がり、端部で強く外反する。胴部中位に最大径を持ち、底部は平底である。	胴部外面縦位の刷毛後、横位削り、内面横位の刷毛。口縁部横撫で。	口縁部一部欠損。
3	土師器 台付甕	東壁中央 床直	口 16.9 高 30.4	①粗砂、細砂 ②褐色10YR 4/1③普通	口縁部はS字状を呈する。胴部中位に最大径を持つ。台部はやや彎曲する。	胴部外面斜縦位刷毛目、口縁部横撫で。台部斜縦位刷毛後縦位無で。	台部一部欠損。

5区4号住居(第46・47図、P L 29)

番号	種類 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 坏	埋没土	口 (9.8) 高 3.2	①細砂、黒色 鉱物②褐色5 Y R 6 / 8③普 通	口縁部は内傾する。	体部篋削り、口縁部横撫で。	2/3欠損。
2	土師器 坏	西壁中央 +17	口 9.7 高 3.0	①粗砂②褐色 5YR6/6③普 通	口縁部は内傾する。	体部篋削り、口縁部横撫で。	1/2欠損。
3	土師器 坏	西壁中央 +17	口 9.8 高 3.3	①粗砂、軽石 ②褐色5YR 7/6③普通	口縁部は内傾する。	体部篋削り、口縁部横撫で。	1/2欠損。
4	土師器 坏	埋没土	口 10.2 高 3.4	①細砂②明褐色 7.5YR5/5 ③やや軟	口縁部は内傾する。	体部篋削り、口縁部横撫で。	2/3欠損。
5	土師器 坏	埋没土	口 (12.3) 高 4.2	①細砂、黒色 鉱物②ぶい 褐色5YR7/4 ③やや軟	平底ぎみの底部から、口縁部は内傾する。	体部篋削り、口縁部横撫で。	口縁部2/3欠損。
6	土師器 坏	竈周辺	口 (13.5) 高 4.9	①軽石②褐色 5YR6/6③普 通	平底ぎみの底部から、口縁部は内傾する。	体部篋削り、口縁部横撫で。	口縁1/2欠損。
7	土師器 坏	P 4 付近 東側 +4	口 13.2 高 4.8	①軽石、黒色 鉱物②ぶい 褐色5YR6/4 ③普通	尖りぎみの底部から、口縁部は内傾する。	体部篋削り、口縁部横撫で。	ほぼ完形。
8	須恵器 蓋	北東隅 +25	口 7.8 高 2.5	①白色鉱物② 灰N 4 ③普通	天井部は低く、中央に小紋状のつよみ、内面にかえりがつく。	右回転クロコ成形。端部を横撫で。	1/2残存。天井部に自然釉付着。
9	土師器 壺	竈 +4	口 21.5 高 12.3	①粗砂、軽石 ②淡黄色2.5 Y R 7 / 3③良 好	胴部は直線的で、口縁部は外反する。	胴部縦位篋削り、口縁部横撫で。	口縁部1/5欠損。
10	土師器 甕	P 4 付近 東側 +7	口 23.4 高 31.2	①軽石②ぶい 褐色7.5YR 5/3③普通	胴部は直線的でやや中位で膨れる。口縁部は外反する。	胴部縦位篋削り、口縁部横撫で。	底部欠損。
11	土師器 甕	竈 +22	口 13.4 高 15.6	①細砂、軽石 ②明褐色7. 5YR7/3③良 好	胴部中位にやや膨らみを持つ。口縁部は外反する。	胴部縦位篋削り、口縁部横撫で。	底部欠損。

番号	種類 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形, 技法の特徴	残存・備考
12	土師器 甕	埋没土	口 21.8 高 20.1	①細礫②橙色 7.5YR6/6③ 良好	胴部上位に強い膨らみを持つ。口縁部は強く外反する。	胴部縦位置削り、口縁部横撫で。	口縁部から胴部破片。
13	こも編 石	南壁+2	①14.4②6. 1③5.2④ 720	粗粒安山岩	棒状の礫を素材とする。上下両端部に打痕が見られる。		完形。
14	こも編 石	南壁+2	①15.7②6. 95③4.1④ 660	溶結凝灰岩	偏平な礫を素材とする。打痕は上下両端部に見られる程度だが、磨痕は表裏面とも良く見られる。		完形。
15	こも編 石	南壁+2	①14.4②5. 95③5.2④ 622	粗粒安山岩	断面三角形の礫を素材とする。打痕・磨痕は識別できない。		完形。
16	こも編 石	南壁+2	①15.8②6. 85③4.0④ 678	粗粒安山岩	偏平な楕円礫を素材とする。打痕は識別できないが表裏面に磨痕が認められる。		完形。
17	こも編 石	南壁+2	①16.5②7. 5③5.65④ 1020	粗粒安山岩	棒状の礫を素材とする。上下両端部に打痕が若干残る。磨痕は表面に残る。		完形。

5区5号住居(第48図、P L 29・30)

番号	種類 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形, 技法の特徴	残存・備考
1	土師器 甕	龍石袖 床直	口 (21.0) 高 6.5	①細礫、軽石 ②ぶい③橙色 7.5YR6/4④ 良好	口縁部は強く外反する。	胴部縦位置削り、口縁部横撫で。	口縁部1/2残存。
2	砥石	南壁+6	①18.1②6. 7③3.9④ 790	灰質安山岩	偏平な長楕円礫を素材とし、下端部に打痕が若干残る。磨痕は縁辺部に認められる。		完形。
3	こも編 石	中央部 +15	①11.6②6. 5③4.4④ 460	粗粒安山岩	棒状の礫を素材とし、上端部に打痕が若干程度である。		完形。

5区6号住居(第51・52図、P L 30)

番号	種類 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形, 技法の特徴	残存・備考
1	土師器 坏	北西隅 +17	口 9.8 高 3.3	①細礫、軽石 ②明褐色7.5 YR5/6③や や軟	平底気味の底部から、口縁部は直線的に立ち上がる。	体部縦削り、口縁部横撫で。	1/3欠損。
2	土師器 坏	北西隅 +15	口 9.8 高 3.5	①軽石②橙色 7.5YR6/6③ 普通	平底気味の底部から、口縁部は直線的に立ち上がる。	体部縦削り、口縁部横撫で。	完形。
3	土師器 坏	中央部北 西壁寄り +9	口 9.8 高 3.3	①細砂②褐色 7.5YR7/5③ 普通	平底気味の底部から、口縁部は直線的に立ち上がる。	体部縦削り、口縁部横撫で。	完形。
4	土師器 床直	龍石 床直	口 10.0 高 3.5	①細礫②明赤 褐色5YR5/6 ③やや軟	底部はやや尖り気味である。口縁部は内傾する。	体部縦削り、口縁部横撫で。	口縁部1/4欠損。
5	土師器 坏	中央部西 壁寄り +8	口 10.0 高 3.5	①細礫②褐色 5YR6/6③や や軟	平底気味の底部から、口縁部は内傾する。	体部縦削り、口縁部横撫で。	1/3欠損。
6	土師器 坏	東壁中央 床直	口 9.9 高 3.3	①軽石、鉱物 ②ぶい③黄橙 色10YR6/4 ④良好	平底気味の底部から、口縁部は内傾して立ち上がる。	体部縦削り、口縁部横撫で。	完形。
7	土師器 坏	中央部西 壁寄り +16	口 9.8 高 3.7	①細礫、黒色 鉱物②褐色 5YR6/6③良 好	平底気味の底部から、口縁部は弱く内傾する。	体部縦削り、口縁部横撫で。	1/3欠損。

遺物観察表

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③傷痕	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
8	土師器 杯	北西隅 +12	口 10.3 高 3.5	①軽石、黒色 胎物②に ぶい 橙色7.5YR 6/4③良好	平底気味の底部から、口縁 部は内傾する。	体部削削り、口縁部横撫で。	完形。
9	土師器 杯	東壁中央 床直	口 10.5 高 3.5	①灰物胎②に ぶい 橙色7.5 YR6/4④良 好	平底気味の底部から、口縁 部は内傾する。	体部削削り、口縁部横撫で。	完形。
10	土師器 杯	東壁中央 床直	口 10.5 高 3.4	①細砂・灰物 ②にぶい 橙色 7.5YR6/4③ 良好	平底気味の底部から、口縁 部は内傾する。	体部削削り、口縁部横撫で。	完形。
11	土師器 杯	東壁中央 床直	口 10.3 高 3.5	①細砂・灰物 ②明赤褐色5 YR5/6④や や軟	平底気味の底部から、口縁 部は内傾しながら立ち上 がる。	体部削削り、口縁部横撫で。	完形。
12	土師器 杯	中央部東 壁寄り +5	口 (10.3) 高 3.4	①細砂②にぶ い 橙色5YR 6/4③良好	平底気味の底部から、口縁 部は内傾して立ち上がる。	体部削削り、口縁部横撫で。	1/2欠損。
13	土師器 杯	南壁床直	口 11.1 高 3.8	①細砂②明赤 褐色5YR5/6 ③良好	平底気味の底部から、口縁 部は直線的に立ち上がる。	口縁部一部欠損。	口縁部1/5欠損。
14	土師器 杯	中央部 +4	口 (10.4) 高 4.1	①細砂②橙色 5YR6/6③普 通	平底気味の底部から、口縁 部は内傾しながら立ち上 がる。器形は歪んでいる。	体部削削り、口縁部横撫で。	口縁部1/2欠損。
15	土師器 杯	中央部北 西壁寄り 床直	口 12.4 高 3.6	①細砂②橙色 7.5YR6/6④ やや軟	底部は平底である。口縁部 は内傾しながら立ち上 がる。器形はやや歪んでいる。	体部削削り、口縁部横撫で。	1/3欠損。
16	土師器 杯	南壁+6	口 (13.6) 高 4.6	①細砂②橙色 5YR6/6③良 好	底部は平底である。口縁部 は内傾しながら立ち上 がる。	体部削削り、口縁部横撫で。	1/2欠損。
17	土師器 杯	中央部北 西壁寄り 床直	口 (14.8) 高 4.8	①細砂②にぶ い 赤褐色5YR 5/4③普通	底部は平底である。口縁部 は内傾しながら立ち上 がる。	体部削削り、口縁部横撫で。	口縁部2/3欠損。
18	土師器 杯	東壁中央 と北西壁 寄りが接 合 床直	口 (14.3) 高 5.4	①粗砂・灰物 ② 橙色 5 YR 6/6③良好	平底気味の底部から、口縁 部は内傾しながら立ち上 がる。	体部削削り、口縁部横撫で。	1/2欠損。
19	土師器 壺	北西隅 +16	口 14.4 高 10.9	①粗砂・軽石 ②にぶい 橙色 7.5YR6/4④ やや軟	口縁部は弱い「コ」字状を 呈する。胴部は丸みを持つ。	胴部縦位置削削り、口縁部横撫 で。指環圧痕を残す。	口縁部から胴部上位 1/2。
20	須恵器 壺	北西隅 +16	口 23.9 高 11.0	①細砂②灰色 N4/0③良好	口縁部は反外し、胴部は大 きく開く。	胴部外面削削り、内面削削り を残す。口縁部横撫で。	口縁部から胴部上位 4/5残存。
21	土師器 壺	中央部北 西壁寄り が接合 +3	口 20.0 高 25.6	①細砂・軽石 ② 橙色 5YR 7/6③良好	口縁部は強く外反する。胴 部上位にやや膨らみを持 つ。	胴部上位横位の削削り、下位 縦位置削削り。口縁部横撫 で。	底部欠損。
22	土師器 壺	中央部 +2	口 (23.6) 高 21.9	①軽石②にぶ い 橙色 7.5 YR7/4④良 好	口縁部は強く外反する。胴 部は直線的である。	胴部縦位置削削り、口縁部横撫 で。内面横位の無で。	口縁部から胴部中位 1/3残存。
23	土師器 壺	中央部北 西と東壁 が接合 床直	口 23.2 高 18.0	①軽石②浅黄 橙色 10YR8/ 4③やや軟	口縁部は強く外反する。胴 部は直線的である。	胴部縦位置削削り、口縁部横撫 で。内面横位の無で。	口縁部から胴部上位 1/3残存。
24	土師器 壺	中央部東 壁寄り +4	口 (18.7) 高 25.6 底 4.5	①軽石②浅黄 色 2.5YR7/3 ③やや軟	口縁部は強く外反する。胴 部は直線的である。	胴部縦位置削削り、口縁部横撫 で。	1/2欠損。

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
25	磁石	埋没土	①5.3②3.6 ③2.4④64	磁石	表面を欠損する。表面、左右両面ともよく研磨されている。		1/4

5区7号住居(第54~56図、P.L31)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 環	P.3北側 床直	口 12.3 高 4.5	①細線②褐色 7.5YR6/8③ やや軟	底部は平底気味である。体部と口縁部との境に棱を持ち、口縁部は外反しながら立ち上がる。	体部縦削り、口縁部横撫で。	口縁部1/3欠損。
2	土師器 高環	環左袖 床直	口 13.8 高 7.1 底 8.2	①細線・紅石 ②にぶい褐色 7.5YR7/4③ 良好	環部は体部と口縁部との境に棱を持ち、内腹しながら立ち上がる。脚部は短く強く開く。	環部から脚部上位置削り、口縁部横撫で、脚下部横撫で。	完形。
3	須恵器 壺	埋没土	口 (12.9) 高 7.0	①細砂②灰黄色 2.5Y7/2③ やや軟	胴部と口縁部との度で強く屈曲する。口縁部端部は沈線状にぼむ。	右回転クロコ成形。	口縁部破片。
4	土師器 壺	環右袖 床直	口 22.4 高 30.2	①細線・紅石 ②明褐色7.5 YR6/4③良好	胴部は直線的で中位にやや膨らみを持つ。口縁部は強く外反する。	胴部上位斜縦位置削り、下位は縦位置削り、口縁部横撫で、内面横位の撫で。	胴部1/2欠損。
5	土師器 壺	埋没土	口 19.4 高 32.6 底 6.8	①紅石・紅物 ②にぶい黄褐色 10YR6/4 ③良好	胴部は中位から下位にかけて、膨らみを持つ。口縁部は外反する。	胴部縦位置削り、口縁部横撫で。	口縁部2/3欠損。
6	土師器 壺	環左袖 床直	口 21.0 高 31.5 底 4.2	①粗砂・紅石 ②にぶい黄褐色 10YR6/4 ③良好	胴部は直線的で下位で急部に向けて径が小さくなる。口縁部は強く外反する。	胴部縦位置削り、口縁部横撫で、内面横位の撫で。	ほぼ完形。
7	土師器 壺	環右袖 +12	口 20.8 高 23.5	①細線②褐色 7.5YR6/8③ 普通	胴部上位は直線的である。口縁部は強く外反する。	胴部斜縦位置削り、口縁部横撫で、内面無で。	胴部上位1/2欠損。
8	土師器 壺	環左袖と 貯蔵穴内 の接合 -24	口 18.5 高 25.5 底 4.0	①粗砂・紅石 ②にぶい黄褐色 10YR7/3 ③良好	胴部中位に最大径を持ち、底部に向けて小さくなる。口縁部は外反する。	胴部斜縦位置削り、口縁部横位の撫で、内面横位の撫で。	ほぼ完形。
9	土師器 壺	環左袖	口 20.8 高 38.6 底 3.8	①細線・紅石 ②明褐色5 YR5/6③良好	胴部は直線的で、中位に最大径を持つ。口縁部は強く外反する。	胴部斜縦位置削り、口縁部横撫で、内面横位の撫で。	ほぼ完形。
10	土師器 壺	環右袖 床直	口 21.0 高 39.6	①細線・紅石 ②浅黄色2.5 YR7/3③良好	口縁部は直線的で、底部に向けて径が小さくなる。口縁部は外反する。	胴部縦位置削り、口縁部横位の撫で、内面横位の撫で。	底部欠損。
11	土師器 壺	埋没土	口 22.8 高 35.1	①細線・紅石 ②にぶい黄褐色 10YR7/4 ③普通	胴部は直線的で、中位に最大径を持つ。口縁部は外反する。	胴部斜縦位置削り、口縁部横位の撫で、内面横位の撫で。	胴部下位から底部にかけて欠損。
12	こも編 石	南壁床直	①12.35② 6.1③3.95 ④40	変質安山岩	棒状の礫を素材とする。打痕は識別できないが、側縁部に擦痕が残る。		完形。
13	こも編 石	南壁+20	①12.9②7. 0③2.85④ 458	粗粒安山岩	扁平な楕円礫を素材とする。打痕・擦痕は識別できないが、左側縁にキズ状の打痕一部認められる。		完形。
14	こも編 石	南壁床直	①11.6②6. 5③4.4④ 522	粗粒安山岩	扁平な楕円礫を素材とする。上下両端部に打痕が若干認められる。		完形。
15	こも編 石	南壁+19	①14.0②7. 45④4.1④ 661	変質安山岩	扁平な楕円礫を素材とする。打痕は識別できないが、表面に擦痕が一部認められる。		完形。

遺物観察表

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
16	こも編石	南壁+16	①16.2②8.6③3.7④864	粗粒安山岩	扁平な楕円體を素材とする。打痕は識別できないが、左右両側縁部に磨痕が残る。		完形。
17	こも編石	P3内-16	①16.5②6.9③4.6④820	実質安山岩	棒状の體を素材とする。打痕は識別できないが、表面と下端面に磨痕が認められる。		完形。
18	台石	P3内-10	①16.5②16.4③4.6④1740	実質安山岩	扁平な円盤を素材とする。周縁部には打痕が認められる。磨痕は識別できない。		完形。
19	台石	P3内-22	①22.4②19.2③4.0④2600	粗粒安山岩	扁平な體を素材とする。周縁部には打痕、表・裏面には打痕が認められる。		完形。
20	砥石	中央部+2	①28.8②8.4③6.55④2740	石英閃緑岩	棒状體を素材とし、平断面に磨痕が残る。		4/5

5区8号住居(第57図、P L 32)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 環	燃焼部奥壁床直	口(13.5)高4.3	①粗砂・灰物②にぶい褐色5YR6/4③良好	平底気味の底部から、口縁部は内彎しながら立ち上がる。	体部蔑削り、口縁部横位の無で。	1/4残存。
2	土師器 壺	燃焼部奥壁床直	口16.5高19.8	①細砂・軽石②にぶい黄褐色10YR6/3③普通	胴部は上位にやや膨らみを持つ。口縁部は外反する。	胴部縦位蔑削り、口縁部横位の無で。内面横位の無で。	胴部下位から底部欠損。

6区1号住居(第59・60図、P L 32)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 環	埋没土	口10.6高3.2	①細砂②褐色5YR6/6③普通	平底気味の底部から、口縁部はやや内傾する。	体部蔑削り、口縁部横位の無で。	1/4欠損。
2	土師器 環	竈周辺+37	口10.5高3.4	①粗砂②にぶい褐色7.5YR5/3③普通	平底気味の底部から、口縁部はやや内傾する。	体部蔑削り、口縁部横位の無で。	口縁部一部欠損。
3	土師器 環	竈内+29	口(10.8)高3.8	①粗砂②褐色5YR6/6③普通	平底気味の底部から、口縁部はやや内傾する。	体部蔑削り、口縁部横位の無で。	1/2欠損。
4	土師器 壺	竈周辺+24	口11.9高6.3	①細砂②明褐色7.5YR5/6③良好	胴部と口縁部との境に稜を持つ。胴部は丸みを持つ。	胴部横位の蔑削り、口縁部横位の無で。	口縁部から胴部上位1/2残存。
5	土師器 壺	竈内+37	口15.0高18.5底8.0	①細砂②軽石③にぶい黄褐色10YR6/3④良好	胴部中に最大径を持つ。胴部と口縁部との境に稜を持ち、外反する。	胴部上位横位の蔑削り、下位は斜縦位蔑削り。口縁部横位の無で。	ほぼ完形。
6	土師器 壺	竈左袖	口(24.0)高22.0	①細砂②軽石③明黄褐色10YR6/6④普通	胴部は直線的である。口縁部は強く外反する。	胴部縦位蔑削り、口縁部横位の無で。	口縁部から胴部上位1/2残存。
7	土師器 壺	埋没土下層	口(21.8)高9.4	①細砂②軽石③明赤褐色5YR5/6④普通	胴部は直線的である。口縁部は強く外反する。	胴部上位横位の蔑削り。口縁部横位の無で。	口縁部から胴部上位1/2残存。
8	こも編石	埋没土下層	①6.6②4.9③2.1④290	粗粒安山岩	小型の扁平な円盤を素材とする。打痕・磨痕は識別できない。		完形。
9	こも編石	中央部+31	①8.1②6.9③3.4④285	粗粒安山岩	小型の扁平な円盤を素材とする。表面に磨痕が残る。打痕は若干残る程度である。		完形。

2区1号墳埴輪 (第63図、P L33)

番号	量目 ① 径 ② 高さ	突 帯			通 孔		口縁	①胎土 ②色調 ③焼成	刷毛目	成・整形の特徴	備考			
		形状	1	2	3	段						形状	縦×横	
1	① 淵 16.4 ② 淵 21.2 ③ 淵 27.5	胴部 M 頸部 三				?	半円	5.5× 8.8		① I ② 橙③ A	縦 16	朝顔形埴輪口縁部は2段である。胴部から頸部にかけては短い。口縁部、胴部は外面1次縦刷毛、胴部外面1次縦刷毛。内面は口縁部横位刷毛、胴部から胴部縦位の無で、接合痕明瞭に残す。口縁部内外面、胴部外面赤帯。	朝顔形埴輪胴部上位から口縁部破片。	
2	① 底 19.7 ② 底 16.5	三	13				円?	(7.2)		① I ② ぶい 橙③ A	縦 8	底部から8.5cmまでは粘土帯によって成形。外面1次縦刷毛、内面縦位の無で。刷毛目は粗い。	底部破片。	
3	② 4.3							円	(6.4)	A-2	縦 (7)	① I ② 橙③ A	口縁部は強い横撫でにより、内面・上面はくぼむ。外面1次縦刷毛、内面横位の刷毛。口縁部横撫で。	口縁部破片。
4	② 5.0							円	(4.6)	A-1	縦 (6)	① I ② 明赤 褐③ A	口縁部内面は強い横撫でによりくぼむ。外面1次縦刷毛、内面横位の刷毛。口縁部横撫で。	口縁部破片。
5	② 4.1							円	(4.6)	A-2	縦 (7)	① I ② 明赤 褐③ A	口縁部内面は強い横撫でによりくぼむ。外面1次縦刷毛、内面横位の刷毛。口縁部横撫で。	口縁部破片。
6	② 14.3	三					円	(6.4)		① I、0.5 ~1cmの小 礫② ぶい 橙③ B	縦 (7)	外面1次縦刷毛、内面縦位の無で。突帯部横撫で。	胴部破片。	
7	② 7.8	M-1				22	円	(4.6)		① I ② 橙③ A	縦 8	器内は薄い。外面1次縦刷毛、内面縦位の無で。刷毛目は粗い。	胴部破片。	
8	② 8.1	M					半円 ?			① I ② 橙③ A	縦 13	突帯の突出度は高い。外面1次縦刷毛、内面縦位の無で。突帯部横撫で。	胴部破片。	

2区1号墳土器 (第63図、P L33)

番号	器 形 種 類	出土位置 (cm)	量 目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器 形 の 特 徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
9	土師器 壺	南側周堀	底 9.2 高 23.6	① 明赤② ぶい 褐色 7.5 YR5/4③ 良 好	胴部は球形を呈する。内外面とも輪横み痕を明確に残す。	外面斜縦位位置筋り、内面横位の無で。	底部から胴部下半破片。
10	土師器 坏	南側周堀	口 12.3 高 5.3	① 細礫・軽石 ② 褐色 5 YR6/6③ 良 好	体部は丸みを持ち、口縁部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面刮削り、口縁部横位の無で。口縁部から体部上位にかけて斜縦位の暗文状の磨きを持つ。	完形。

3区1号墳埴輪 (第65図、P L33)

番号	量目 ① 径 ② 高さ	突 帯			通 孔		口縁	①胎土 ②色調 ③焼成	刷毛目	成・整形の特徴	備考		
		形状	1	2	3	段						形状	縦×横
1	② 4.1								B-2	① I ② 明赤 褐③ A	縦 (7)	外面1次縦刷毛、内面斜縦位の刷毛。口縁部横撫で。	口縁部破片。
2	② 5.3	三								① I ② 外・ 明赤灰・内・ 橙③ A	縦 (6)	器内は薄い。外面1次縦刷毛、内面横位の無で。縦位撫で。刷毛目は粗い。	胴部破片。須忠實?
3	② 5.0									① I ② ぶい 橙③ A	縦 16	外面1次斜縦位刷毛、内面斜縦位刷毛を施すが磨減著しい。	胴部破片。
4	② 5.2	三								① I、小礫 多量② ぶい 橙③ A	縦	外面1次縦刷毛、内面縦位の無で。突帯部横撫で。	胴部破片。

遺物観察表

3区2号墳埴輪 (第67図、P L 33)

番号	量目 ①径 ②高さ	突起			遠孔	口径	①胎土 ②色調 ③焼成	刷毛目	成・整形の特徴	備考
		形状	1	2						
1	② 4.3	M							尖帯は扁平である。外面1次縦刷毛、内面縦位の撫で。尖帯部横撫で。	胴部破片。
2	② 9.1								外面1次縦刷毛、内面縦位の撫で。	胴部破片。
3	①胴底 17.3 ②底 11.0 ③底 33.5	M	14	11	2	円	7×6.7		底面は楕円形である。立ち上がりは比較的直線的である。外面1次縦刷毛、内面上半部縦位の刷毛、下半部は斜縦位撫で。尖帯部横撫で。外面3段目に斜位2本の線刻。	1/2欠損。

3区2号墳土器 (第68図、P L 33)

番号	種類 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
4	土師器 環	埋没土 FA上面	口 11.5 高 4.5	①細礫・軽石 ②明赤褐色5YR5/6 ③良好	底部は平底気味である。体部と口縁部との境に横を持ち、口縁部は直線的である。	体部外面磨削り、口縁部横位の撫で。	口縁部一部欠損。
5	土師器 壺	埋没土	口 19.2 高 16.6	①細礫・軽石 ②におい黄褐色10YR7/4 ③普通	胴部上位は弱い膨らみを持ち、中位へと続く。口縁部は外反する。	胴部縦位磨削り、口縁部横位の撫で。	口縁部から胴部上位1/2残存。

3区1号井戸 (第74図、P L 33)

番号	種類 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形・成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	砥石	埋没土	①6.4②3.2 ③0.65④25	雑質頁岩	裏面は欠損するが、表面、側面ともよく研磨されている。	1/2

3区2号井戸 (第74図、P L 33)

番号	種類 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	常滑 壺	埋没土	口 (36.0) 高 8.9	①細礫②暗赤褐色5YR3/4 ③堅緻	口縁部断面はM字形を呈する。胴部から口縁部への引き出しが強い。	内外面とも自然釉がかかる。	口縁部破片。
2	常滑 壺	埋没土	口 (31.0) 高 9.0	①細礫②暗赤褐色5YR3/4 ③堅緻	口縁部断面はM字形を呈する。胴部から口縁部への引き出しが強い。	内外面とも自然釉がかかる。	口縁部破片。
3	砥石	埋没土	①7.7②4.3 ③3.1④155	砥沢石	表・裏面及び左右両面の4面ともよく研磨されている。		1/2
4	打製 石斧	埋没土	①9.6②6.2 ③2.95 ④144	黒色頁岩	分刺形で、刃部角は比較的鋭い。鋭角な刃部が作出できなくなるまで、刃部再生を行っている。		ほぼ完成。

5区4号井戸 (第74図、P L 33)

番号	種類 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 環	埋没土	口 (10.2) 高 3.1	①細砂・軽石 ②褐色5YR6/6 ③良好	底部は平底気味であると思われる。口縁部はやや内湾する。	体部磨削り、口縁部横位の撫で。	1/2欠損。
2	土師器 壺	埋没土	口 (18.1) 高 6.0	①細礫・軽石 ②におい黄褐色7.5YR6/4 ③良好	口縁部と胴部との境に横を持ち、口縁部は外湾しながら立ち上がる。	胴部縦位磨削り、口縁部横位の撫で。	口縁部1/2破片。

2区2号溝埋輪 (第78図、P L 33)

番号	量目 ①径 ②高さ	形状	突帯			通孔 形状	口径	①胎土 ②色調 ③焼成	刷毛目	成・整形の特徴	備考		
			1	2	3								
1	② 8.9	M				2	半円			①H②に いれ③良好	刷毛目 成(7)	外面1次縦刷毛、内面縦位の撫で。内面に接合痕残す。	胴部破片。
2	② 8.0	方								①小礫多量 ②浅黄橙 ③A	刷毛目 成(6)	外面1次縦刷毛、内面縦位の撫で。突帯部横撫で。刷毛目は粗い。	胴部破片。

3区1号溝 (第80図、P L 33)

番号	種類 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	古甕	埋没土	径 2.3		雫の壺状元筒。		完形。

3区2号溝 (第81図、P L 33)

番号	種類 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	かわらけ	埋没土	口 7.3 高 1.9 底 5.3	①細砂②外・明褐色7.5 YR5/6内・赤褐色5YR4/6 ③良好	器内は厚く、口縁部は外反する。	左回転クワロ成形成。	口縁部1/2欠損。

4区2号溝 (第82図、P L 34)

番号	種類 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	砥石	埋没土	①10.6②5.3 ③4.9④264	黒色頁岩	スタンプ形石磨を砥石に転用しており、研磨痕が顕著に認められる。		完形。

4区8号溝 (第85図、P L 33・34)

番号	種類 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	志高 高台付 椀	埋没土	口 (14.0) 高 6.1 底 8.1	①粗砂・灰物 ②に いれ③黄褐色10 YR 7/3 ④やや軟	体部は直線的に立ち上がる。高台部の器内は厚く、強く開く。貼付け高台。	右回転クワロ成形成。底部切り離し後、高台を貼付け。	口縁部2/3欠損。
2	土師器 壺	埋没土	口 (20.5) 高 8.5	①粗砂②明赤褐色5YR5/8 ③普通	口縁部は「コ」字状を呈する。胴部は丸みを持つ。	胴部横位削毛後、口縁部横位の撫で。	口縁部破片。

4区竪穴遺構 (第88図、P L 34)

番号	種類 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 壺	埋没土	口 (15.2) 高 18.0	①細砂②浅黄褐色7.5 YR 8/4③やや軟	口縁部は頸部で屈曲して立ち上がり、先端は尖る。胴部は球形を呈すると思われる。	胴部上位横位の刷毛後、縦位の撫で。口縁部縦位刷毛後、横位の撫で、内面斜縦位刷毛後、口縁部を接合する。	口縁部から胴部上位残存。
2	土師器 壺	中央部	口 14.8 高 20.8 底 4.8	①細砂・灰物 ②に いれ③黄褐色10 YR 7/3 ④良好	口縁部は強く外反し、端部で直線的に立ち上がる。上端部外面に沈堀を持つ。胴部は下位に最大径を持つ。	胴部外面斜縦位撫で後、横位の磨き。口縁部横位の撫で。胴部内面横位の撫で、接合痕を残す。口縁部横位の磨き。	ほぼ完形。
3	土師器 台付壺	中央部	口 14.0 高 22.0 底 8.5	①粗砂・灰物 ②に いれ③黄褐色10 YR 7/4 ④良好	口縁部はS字状を呈する。胴部上位に最大径を持ち、台部は内側しながら開く。台端部は折り返す。	胴部斜縦位刷毛後、最大径を持つ部分で消す。台部は斜縦位刷毛後、縦位撫で。口縁部横位の撫で。	胴部1/3欠損。

遺物観察表

遺構外の出土遺物（第89図1・第90図2～16・第91図17～20、P L 34～36）

番号	種類 器形	出土位置	計測値 (cm)	①胎 ②胎 ③土 ④成 ⑤調	器形・成・整形の特徴	備考
1	縄文土器 深鉢	5区南半埋 壘付近	口 28.0 高 35.9	①角閃石細粒多、 砂粒少②硬質③に よい黄緑	口縁部には3個1単位の刺突を有する円形浮文を4単位站 付、浮文間に1条の沈線をはさむ。口縁部下は無文で頸部に1 条の沈線をはさみ、胴部と区画している。胴部文様は器面を 粗く磨いた後に条線状列点文を施した横円区画文と、「R」状 の懸垂文を垂下する。	底部欠損。 3/4残存。
2	縄文土器 深鉢		厚 1.0	①白色細粒多、角 閃石多②硬質③洗 黄	深鉢のくびれ部で、外面は沈線と列点で文様構成されている。	胴部破片。
3	縄文土器 深鉢	5区南半	厚 0.9	①輝石と角閃石細 粒多、白色細粒多 ②硬質③洗黄	くびれ部付近の破片、沈線で文様を描出し、区画内に列点を 施す。	胴部破片。
4	縄文土器 深鉢	4区1号住 南半	厚 1.2	①輝石・細粒多② 硬質③洗黄	沈線で鋭角的な文様を描出し沈線間に円形刺突を連続施文す る。	胴部破片。
5	縄文土器 深鉢		厚 0.9	①細粒砂多②硬質 ③灰黄褐	沈線で鋭角的な文様を描出し沈線間に列点文を施す。	胴部破片。
6	縄文土器 深鉢	4区	厚 1.2	①粗粒を含む。砂 粒多②硬質③に よい黄緑	平行沈線で文様を描出し、沈線間に円形刺突を施す。	胴部破片。
7	縄文土器 深鉢	5区南端	厚 0.7	①石英・角閃石細 粒少、粗・細粒砂 少②硬質③に よい黄緑	沈線で鋭角的な区画文を描出し区画内に列点文を施文。	胴部破片。
8	縄文土器 深鉢	4区北端	厚 1.1	①角閃石・細粒砂 少②硬質③に よい黄	沈線で「J」字文を含む区画文を描出し、区画内に列点文を 施す。	胴部破片。
9	縄文土器 深鉢	5区1号住 居	厚 1.0	①輝石細粒少、細 粒砂少②硬質③洗 黄	平行沈線で文様描出し、間に列点文を施す。文様施文は全体 に施す。	胴部破片。
10	縄文土器 深鉢	4区北端	厚 1.3	①輝石少、細粒砂 少②硬質③洗黄	沈線で文様を描出し、沈線間に列点文を施文。	胴部破片。
11	縄文土器 深鉢	5区南半	厚 1.3	①石英・輝石少、 細粒砂多②硬質③ 灰オリーブ	沈線で文様を描出し、沈線間に半截竹管状の工具による刺突 を施す。	胴部破片。
12	縄文土器 深鉢	4区	厚 1.2	①角閃石細粒多、 細粒砂多②やや硬 質③洗黄	平行沈線で曲線的な文様を描出し間に列点文を施文。	胴部破片。
13	縄文土器 深鉢	4区	厚 1.3	①輝石多、細粒砂 少②硬質③洗黄	割くびれ部の破片で、沈線で文様描出し、沈線間に列点文を 施文。	胴部破片。
14	縄文土器 深鉢	5区南半	厚 1.3	①白色細粒多、輝 石細粒少、細粒砂 少②やや硬質③洗 黄	平行沈線を垂下し、沈線間に列点文を施文。	胴部破片。
15	縄文土器 深鉢	5区南半	厚 1.3	①輝石多、細粒砂 多②硬質③洗黄	割くびれ部の破片で3条の平行沈線を垂下し、沈線間に列点 文を施文。	胴部破片。
16	縄文土器 深鉢	5区南半	厚 1.3	①輝石細粒多、細 粒砂多②硬質③洗 黄	3本単位の平行沈線を垂下し、沈線間に列点文を施す。	胴部破片。
17	縄文土器 深鉢	3区17号住 P-2	厚 0.7	①石英細粒多、輝 石多、細粒砂少② やや硬質③明赤褐	4単位の突起で、内面に沈線で「C」字と円形刺突を施す。	口縁部破片
18	縄文土器 深鉢	5区南半埋 壘付近	厚 0.7	①石英・輝石細粒、 細粒砂少②硬質③ によい黄	口縁部破片で、口唇部は内面に肥厚する。口縁部外面には沈 線を描し両端に円形の刺突があるものと思われる。	口縁部破片
19	縄文土器 深鉢	5区南半	厚 0.7	①輝石・角閃石細 粒多、細粒砂少② 硬質③洗黄	口縁部突起部破片で円孔が2カ所ある。口縁部外面に1条の 沈線をはさむ。	口縁部破片
20	縄文土器 深鉢	5区南半	厚 1.1	①石英・輝石細粒 多、砂粒多②やや 硬質③灰白色	口縁部破片で、口縁部外面に2条の沈線をはさみ、低い突起 部には上下左右に円形刺突を施す。	口縁部破片

(第91図21～34・第92図35～39、P.L.36・37)

番号	器種 器 鉢	出土位置	計測値 (cm)	① 胎 色	胎 色 ②	土 底 色	器形・成・整形の特徴	備 考
21	縄文土器 深 鉢	4区北端	厚 1.0	①石英・輝石細粒多、細粒砂多②硬質③明褐色			胴部くびれの弱い器形で、口縁部に1条の沈線を送らせ、1対の円形刺突を施した4単位の小突起を有すると思われる。口縁部下は無文で、くびれ部に横位平行沈線と列点文を施し、胴部には平行沈線を垂下している。	口縁部破片
22	縄文土器 深 鉢	5区南半	厚 0.8	①砂粒多、石英・角閃石多、金雲母細粒多②やや軟質③灰白色			口縁部の破片で、内面に段を有する。口縁部に円管刺突を施した円形浮文がみられ、この部分から平行沈線を垂下している。	口縁部破片
23	縄文土器 深 鉢	5区南半	厚 0.7	①角閃石細粒、金雲母粒少、細粒砂少②硬質③灰白色			口縁部に1条の沈線と3コ単位の円形刺突を施す。胴部には「A」状の沈線を垂下する。	口縁部破片
24	縄文土器 深 鉢	5区南半 埋壁付近	厚 1.4	①変石質粗粒砂多、石英・角閃石細粒少②やや硬質③にぶい褐色			口縁部外面に突起を送らし、1条の沈線と2コ単位の円形刺突を施す。	口縁部破片
25	縄文土器 深 鉢	4区1号住居	厚 1.0	①石英・角閃石細粒多②やや硬質③灰白色			口縁部下に1条の沈線を送らせ、胴部には沈線で文様を描出する。	口縁部破片
26	縄文土器 深 鉢	5区南半	厚 1.2	①角閃石細粒多、細粒砂多②硬質③浅黄褐色			胴部中に弱いくびれを有し、上半は外反する。口縁部内面に段を有し、円形刺突を施す。胴部文様は沈線で斜面的な文様を描出する。地文はなし。	口縁部破片
27	縄文土器 深 鉢	4区1号住居	厚 0.7	①石英多、細粒砂少②硬質③にぶい黄褐色			胴部中に強いくびれを有し、口縁部は外反する。口縁部外面に1条の沈線を送らし、胴部と区画する。胴部には「A」状の沈線を送らせ、施文は全体に施し、口縁部内面に1条の深い沈線を送らせる。	口縁部破片
28	縄文土器 深 鉢	5区南半	厚 1.0	①砂粒多②やや軟質③褐色			口縁部破片で、4条の横位沈線を送らし、沈線間に円形刺突を施す。	口縁部破片
29	縄文土器 深 鉢	4区1号住居	厚 1.0	①砂粒多②やや硬質③にぶい褐色			口縁部破片で、4条の横位沈線を送らし、沈線間に円形刺突を施す。28と同一個体。	口縁部破片
30	縄文土器 深 鉢	4区1号住居	厚 0.8	①石英・輝石細粒少、砂粒多②硬質③灰白色			口縁部に沿って3条の沈線を送らし沈線間に円管による刺突を施す。	口縁部破片
31	縄文土器 深 鉢	4区	厚 1.1	①輝石・金雲母・石英細粒少、細粒砂少②硬質③浅黄褐色			口縁部がわずかに内傾する器形で、外面に2条の沈線を送らす。	口縁部破片
32	縄文土器 深 鉢	5区	厚 0.95	①石英・角閃石細粒少、細粒砂少②硬質③硬質			わずかに内傾する口縁部を有し、外面に2条の沈線を送らせ、2本単位の平行沈線で曲線的な文様を描出。	口縁部破片
33	縄文土器 深 鉢	5区1号住居	厚 1.1	①角閃石細粒多、細粒砂多②硬質③浅黄褐色			胴部が比較的強くくびれる器形で、平行沈線で文様を描出する。施文は縦。	胴部破片
34	縄文土器 浅 鉢	4区1号住居	厚 0.9	①輝石細粒多、細粒砂多②硬質③浅黄褐色			「く」状に屈曲する口縁部で、口縁部に槽凹区画文と上下の円形刺突と短い沈線を施す。胴部と口縁部文様帯との間に1条の沈線を送らす。	口縁部破片
35	縄文土器 深 鉢	5区南半埋壁付近	厚 1.3	①角閃石細粒多、白色細粒・細粒砂多②硬質③灰黄褐色			胴部破片で、沈線で「J」状文施文。	胴部破片
36	縄文土器 深 鉢	6区南半	厚 1.1	①輝石・石英微、細粒砂多②やや軟質③にぶい黄褐色			胴部破片で、沈線で「J」状文施文。施文は縦。	胴部破片
37	縄文土器 深 鉢	5区南半	厚 1.1	①輝石細粒多、細粒砂多②硬質③にぶい黄褐色			胴部破片で、沈線で「J」状文等施文。	胴部破片
38	縄文土器 深 鉢	4区	厚 1.5	①角閃石細粒多、細粒砂多②やや軟質③にぶい黄褐色			胴部破片で、比較的深い沈線で曲線的な文様を描出。	胴部破片
39	縄文土器 深 鉢	5区南半	厚 1.1	①角閃石細粒多、細粒砂少②やや硬質③にぶい黄褐色			弱くびれの弱い器形で比較的シャープな沈線で「J」状文等の文様を描出。	胴部破片

遺物観察表

(第92図40～58・第93図59、P L 37・38)

番号	種類 器型	出土位置	計測値 (cm)	①胎 ②土 ③変 色	器形・成・整形の特徴	備考
40	縄文土器 深鉢	5区南平埋 壘付近	厚 1.1	①輝石細粒少、砂粒少②硬質③に よい黄橙	胴部破片で、沈線で「J」状文等の文様施文。	胴部破片。
41	縄文土器 深鉢	4区	厚 1.1	①石英・輝石多、 砂粒少②硬質③に よい黄橙	胴くびれ部破片で、比較的シャープな沈線で文様描出。	胴部破片。
42	縄文土器 深鉢	4区北端	厚 1.3	①角閃石・石英多 細粒砂多②やや硬 質③褐灰	胴部破片で、沈線で文様施文。	胴部破片。
43	縄文土器 深鉢	5区南平	厚 1.2	①石英・輝石多、 細粒砂多②やや軟 質③浅黄	くびれ部破片で、2条単位の平行沈線を巡らし、円形刺突を施した突起を貼付。胴部文様は沈線で描出。	胴部破片。
44	縄文土器 深鉢	5区南平	厚 1.4	①石英・角閃石細 粒砂少②硬質③に よい黄橙	胴部が強くくびれる器形で上半無文。くびれ部には2条の平行沈線と円形刺突を施した円形浮文を貼付。平行沈線下には円管による刺突を施す。	胴部破片。
45	縄文土器 深鉢	4区北端	厚 0.75～1.2	①輝石細粒多、細 粒砂多②硬質③に よい黄	くびれ部の破片で、2条の平行沈線を巡らせ、胴部には、沈線で曲線的な文様施文。	破片。
46	縄文土器 深鉢	4区	厚 1.1	①輝石粒少、砂粒 多②硬質③によい 黄橙	くびれ部破片で、2条の平行沈線を巡らせ、胴部文様は深い沈線で描出。	破片。
47	縄文土器 深鉢	6区1溝	厚 0.65～0.75	①石英細粒少、細 粒砂多②硬質③に よい黄橙	くびれ部破片で、2条の隆帯と「8」状の小突起を貼付。胴部文様は沈線で描出する。	破片。
48	縄文土器 深鉢	5区南平	厚 1.3	①石英微、角閃石 多、細粒砂多②や や硬質③によい黄 橙	くびれ部の破片で2条の平行沈線を巡らせ、胴部文様は深い沈線で描出。	破片。
49	縄文土器 深鉢	4区1号住 居	厚 1.2	①輝石・角閃石多、 細粒砂多②やや軟 質③によい黄	胴部の狭りの弱い器形で、3条単位の平行沈線で曲線的な文様施文。	破片(5片接合)。
50	縄文土器 深鉢	5区南平	厚 1.4	①片岩質粗粒砂多、 輝石少②やや硬 質③によい黄	胴部破片で2条単位の沈線で文様描出。	胴部破片。
51	縄文土器 深鉢	3区15号住 居	厚 0.9	①細粒砂少・金雲 母微、角閃石細粒 多②硬質③浅黄	胴部に狭りのある器形で、胴部に沈線と円形刺突を施した円形浮文を貼付。胴部には沈線で文様描出する。沈線間に三角形の列点文を施す。	胴部破片。
52	縄文土器 深鉢	5区南平埋 壘付近	厚 0.5～0.85	①輝石多、細粒砂 多②硬質③褐灰黄	胴部破片で、沈線で曲線的な文様描出。	胴部破片。
53	縄文土器 深鉢	5区1号住 居	厚 1.1	①輝石多、砂粒多 ②やや軟質③に よい黄	胴部破片で、平行沈線で曲線的な文様を描出し、区画内に列点文施文。	胴部破片。
54	縄文土器 深鉢	4区北端	厚 1.2	①輝石少、細粒砂 多②硬質③によい 赤褐	胴部破片で横位に沈線を数条施し沈線間に刺突状に列点文施文。	胴部破片。
55	縄文土器 深鉢	4区北端	厚 1.3	①砂粒多②やや軟 質③によい黄橙	くびれ部から胴部にかけての破片で、円形刺突を施した円形浮文を貼付し、胴部文様は深い平行沈線で描出する。沈線間に先のがった棒状の工具による刺突を充填する。	胴部破片。
56	縄文土器 深鉢	5区墓下	厚 0.8	①輝石微、細粒砂 少②硬質③浅黄	胴部破片で、細い1条の隆帯で器面を縦区画し、区画内に沈線で帯状の区画文を施文。	胴部破片。
57	縄文土器 深鉢	5区南平埋 壘付近	厚 0.65～1.15	①角閃石・石英少 砂粒少②硬質③に よい黄橙	くびれ部破片で、円管を横位に挿入した隆帯を縦位に貼付する。	胴部破片。
58	縄文土器 深鉢	5区南平	厚 1.2	①石英・角閃石多 細粒砂多②やや硬 質③によい黄橙	胴くびれ部破片で2条単位の平行沈線で器面を縦位に区画し、区画内を2条の平行沈線で三角形に区画する。	胴部破片。
59	縄文土器 深鉢	4区北端	厚 1.2	①石英・輝石少、 砂粒多②やや軟質 ③浅黄	胴部破片で、沈線で文様区画し区画内にRしを充填施文。	胴部破片。

(第93図、P L 38)

番号	種類	型類	出土位置	計測値 (cm)	① 胎 色 ② 土 質	器形・成・整形の特徴	備考
60	縄文土器	深鉢	4区北端	厚 1.0	①石英・輝石少、 細粒砂多②硬質③ にぶい黄橙	胴部破片で、沈線で文様を区画し区画内にLを斜位充墳施文。	胴部破片。
61	縄文土器	深鉢	5区南半壇 礎付近	厚 0.9	①石英・輝石少、 細粒砂多②硬質③ にぶい橙	胴部破片で、沈線で文様区画し区画内にR充墳施文。	胴部破片。
62	縄文土器	深鉢		厚 0.85-1. 15	①角閃石多・白色 細粒多②硬質③灰	割くびれ部破片で、沈線で文様区画し、区画内にR Lを充墳施文する。	胴部破片。
63	縄文土器	深鉢	5区南半	厚 1.1	①石英・角閃石細 粒少、細粒砂多② やや硬質③にぶい 黄橙	割くびれ部に2条の平行沈線と、円形刺突を施した円形浮文を 貼付し、上下に沈線で曲線的文様施文。区画内にはL Rを充 墳施文している。	胴部破片。
64	縄文土器	深鉢	3区南半	厚 1.0	①角閃石細粒多、 白色細粒多②硬質 ③淡黄	割くびれ部破片で、沈線で文様描出し、区画内にL Rを充墳 施文。	胴部破片。
65	縄文土器	深鉢	4区	厚 1.0	①角閃石細粒少、 細粒砂少②硬質③ にぶい橙	沈線で文様描出し、区画内にLを充墳施文。	胴部破片。
66	縄文土器	深鉢	5区1号住 居	厚 0.9	①白色粒少②硬質 ③橙	沈線で曲線的文様を描出し、区画内にL Rを充墳施文。	胴部破片。
67	縄文土器	深鉢	5区7号住 居	厚 0.9	①白色細粒微②硬 質③にぶい黄橙	沈線で渦巻を描出し、沈線間にR Lと考えられる原体を充墳 施文。	胴部破片。
68	縄文土器	深鉢	5区	厚 0.6	①石英・角閃石細 粒少、細粒砂少② 硬質③にぶい黄褐	張りのある胴部破片で、沈線で渦巻文を描出し、沈線間にL Rを充墳施文。	胴部破片。
69	縄文土器	深鉢	5区南半壇 礎付近	厚 0.8	①角閃石多、細粒 砂少②やや硬質③ にぶい黄橙	頸部に3条単位の平行沈線と円形刺突のある円形浮文を施し、 胴部に沈線で左右に連続された小渦巻を描出す。区画内は R Lの充墳施文。	胴部破片。
70	縄文土器	深鉢	5区南半壇 礎付近	厚 1.1	①角閃石細粒多、 白色細粒多②やや 硬質③淡黄	頸部に2条単位とみられる沈線を送らせ、胴部には3条単位の沈 線で曲線的文様を描出す。原体はL Rと思われるが、沈線 施文以前に施文されたものと思われる。	胴部破片 (2片)。
71	縄文土器	深鉢	5区南半	厚 1.1	①石英少・角閃石 多、細粒砂多②硬 質③にぶい橙	頸部に3条単位と考えられる平行沈線を送らせ、胴部上半に は3条単位の沈線で区画文と小渦巻を描出し、区画内には非常に 密りの細かなL Rを充墳施文する。	胴部破片。
72	縄文土器	深鉢	5区南半	厚 0.9	①角閃石細粒多、 砂粒多②硬質③淡 黄	胴部のくびれの弱い器形で、口縁部とくびれ部に平行沈線と 列点文を送りし、円形浮文を貼付する。胴部はL R縦位施文 後、くびれ部円形浮文部から2列の列点文を垂下している。	口縁部破 片。
73	縄文土器	深鉢	5区南半	厚 1.1	①角閃石砂粒多、 砂粒多②硬質③灰	胴部破片で、L R縦位施文後2列の列点文を垂下する。	胴部破片。
74	縄文土器	深鉢	4区北端	厚 1.2	①細粒砂多、角閃 石細粒少②軟質③ にぶい黄橙	平行沈線で文様区画し、区画内にL R充墳施文。	胴部破片 (2片)。
75	縄文土器	深鉢	3区10号住 居	厚 1.1	①石英・角閃石細 粒多、細粒砂多② 軟質③淡黄橙	沈線を横位に送らせ、沈線間にL Rを横位充墳施文。	胴部破片。
76	縄文土器	深鉢	3区裏探	厚 0.7	①細粒砂少、角閃 石細粒少②硬質③ 橙	細い平行沈線を送らせ、沈線間に細かな密りのL Rを横位充 墳施文する。この縄文帯下には斜位の条線施文。	胴部破片。
77	縄文土器	深鉢	3区9号住 居	厚 0.7	①細粒砂多、石英 細粒少②硬質③に ぶい赤褐	胴部大部に平行沈線を送らせ、上位に1対の円形刺突を施し、 刺突間を弧状に区画する。区画内は細かな密りのL R充墳 施文、下位は刺突文部から「8」状の沈線を垂下し間を弧状 に連結する。一部沈線間には口縁部のものよりやや大の原 体を施文する。	胴部破片。
78	縄文土器	深鉢	3区2号墳	厚 0.7	①細粒砂多、石英 細粒少②硬質③に ぶい赤褐	胴部下半の破片で「8」状の垂下する沈線間を弧状に連結し、 沈線間にL Rを充墳施文する。77と同一体。	胴部破片。

遺物観察表

(第94回、P.L39)

番号	量目		突帯			透孔		口縁	胎土 ①胎土 ②色調 ③焼成	刷毛 目	成・整形の特徴	備考
	①径	②高さ	形状	1	2	3	形状					
79	②	5.9							①II②軟③A	横 (8)	口縁端部内面は強い楔でより外反する。外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。内面横刷毛。口縁部横撫で。	口縁部破片。 2区1号土坑
80	②	6.5	方				半円		①II②浅黄 橙③A	横 (5)	外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。突帯部横撫で。	口縁部破片。 2区1号土坑
81	②	5.6	三				半円		①I、小硬 ②橙③A	縦	外面1次縦刷毛、内面縦位の撫で。突帯上は外面赤彩。	胴部破片。 2区1号土坑
82	②	6.3							①II②外 内・橙③A	縦 (8) 横 (6)	外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。内面縦位撫で後、上端部に刷毛を施す。	胴部破片。 2区1号土坑
83	石鉢	旧2区4号溝		①10.45② 21.5③5.6 ④2070			粗粒安山岩	3/4近くを欠損する。凹部は使用によって磨滅するが、それほど著しくはない。				底部破片。
84	銅片	2区		①8.4②9. 15③2.7④ 225			黑色頁岩	比較的厚手の横長銅片で、下部部に鋭角状突起の微細刻線が認められる。被熱の為一部が変質している。				
85	こも編石	旧2区4号溝		①16.35② 7.2③5.4④ 1100			粗粒安山岩	棒状の礫を素材とする。上下両端部に打痕が若干残る。				完形。
86	砥石	3区		①7.6②7. 05③2.7④ 207			流紋岩	扁平な円礫を素材とする。裏・裏面及び右側面に磨損痕がよく残るが、特に右側面は著しい。				1/4
87	石鏝	3区13号住埋段土		①1.85②1. 45③0.25④ 1.7			黒曜石	若干左右が非対称的である。				完形。
88	凹石	6区		①12.5②6. 1③3.4④ 420			溶結凝灰岩	扁平な楕円礫を素材とし、表面中央部に深さ5mm程の凹部が一ヶ所認められる。この他磨痕と打痕が残る。				完形。

荒砥宮原遺跡

宮原遺跡1・2号住居 (第98図、P.L.39)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①粘土②色調 ③形状	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 埴	埋没土	口 10.6 高 5.8	①粗砂・黒色 7.5YR5/8③ 普通	外に強く開く口縁部である。先端部は尖る。	縦位の磨きを施す。口縁部上 端部横位の撫で、内外面赤彩。	口縁部破片。
2	土師器 埴	埋没土	口 (7.6) 高 7.5	①細礫・灰物 ②にぶい黄橙 色10YR7/3 ③やや軟	直線的に立ち上がる口縁部 である。先端部は尖る。	縦位の磨削り後、口縁部は横 位の撫で。	口縁部破片。
3	土師器 壺	埋没土	口 (10.0) 高 3.1	①細礫・灰石 ②赤褐色5 YR4/6③良 好	口縁部はS字状を呈する。	胴部上位縦位刷毛後、横位の 刷毛。口縁部横位の撫で。	口縁部破片。

宮原遺跡3号住居 (第100図、P.L.39)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①粘土②色調 ③形状	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 埴	西壁 床直	高 8.2 底 3.7	①細礫・黒色 灰物②にぶい 赤褐色5YR 5/4③良好	胴部は球形を呈する。底部 は上げ底気味である。	縦位の磨り後、縦位磨き。 内面横位の撫で。	口縁部欠損。
2	土師器 埴	北壁 床直	口 9.6 高 9.3 底 4.3	①細礫・灰物 ②にぶい黄橙 色10YR7/3 ③良好	胴部はやや扁平な球形を呈 し、口縁部は胴部で屈曲し 強く外反する。底部は上げ 底気味である。	胴部斜縦位刷毛、口縁部縦位 刷毛後、横位の撫で。	ほぼ完形。
3	土師器 埴	北西隅 床直	高 9.9 底 3.5	①細礫・灰物 ②にぶい橙色 7.5YR7/3③ 良好	胴部は球形を呈する。底部 は上げ底である。	胴部外部斜縦位の刷毛後、横 位の磨き。内面横位の撫で。	胴部1/2欠損。
4	土師器 器台	南西隅 +8	口 9.5 高 10.0 底 11.8	①細礫・灰物 ②にぶい橙色 5YR7/4③良 好	受部は強く開き、口縁部 に比線が高る。胴部下端部 で強く開く。胴部は中位に 3割の透孔あり。	外面縦位刷毛後、横位の磨き。 胴部内面は横位の撫で。	完形。
5	土師器 片口鉢	北壁+4	口 17.1 高 7.4 底 2.1	①粗砂・黒色 灰物②灰黄色 2.5YR7/2③ 良好	小さな底部から、体部は外 反しながら立ち上がる。片 側に注口部を持つ。	内外面とも斜縦位の丁寧な磨 きを施す。口縁部横位の撫で。	完形。
6	土師器 台付壺	埋没土	口 (19.2) 高 6.3	①細礫・黒色 灰物②にぶい 褐色7.5YR 5/3③良好	口縁部はS字状を呈する。 胴部は強く屈曲し、胴部へ 強く開く。	胴部は斜縦位刷毛後、最大径 部分に横位の刷毛を施す。口 縁部横位の撫で。	口縁部破片。
7	砥石	中央部 床直	①27.7② 13.6③7.7 ④4300	石灰質緑岩	断面三角形の楕円礫を素材とする。平坦面に擦痕が、周 縁部には打痕が残る。		ほぼ完形。
8	台石	中央部東 壁寄り床 直	①26.2② 23.5③8.7 ④8400	粗粒安山岩	扁平な三角形の礫を素材とする。表面面の平坦面に擦痕 が顕著に残り、また周縁部には打痕が見られる。		4/5
9	台石	中央部南 壁寄り床 直	①31.5② 23.2③8.4 ④8600	粗粒安山岩	扁平な菱形の礫を素材とする。直上からの打撃による割落痕 が表面に顕著に残る。擦痕も認められるが、割落痕の方が 切り合い関係において新しい。		5/6

遺物観察表

宮原遺跡1号墳埴輪 (第103・104図、P.L.39~41)

番号	量目 ① 径 ② 高さ	突 帯			透 孔		口縁	①胎 土 ②色 調 ③焼 成	刷 毛	成・整形の特徴	備 考
		形状	1	2	3	形状					
1	①口(25.0) 底(15.0) ② 35.8	M	11	11	13	2	半円 (7.7) ×7.5 三角 6.5 ×6.2	B-1	①II、小磯 ②にぶい殻 ③B	縦 13 目 径の小さな底部から直線的に開き、口縁部で外反する。2段目に1対の半円形の透孔を、3段目に1つ三角形の透孔を持つ。外面1次縦刷毛、内面縦刷毛。口縁部横撫で。内面下部部に横位の刷毛目と思われる痕跡あり。3段目外面赤彩。底面は右を上を重ねる。	2/3欠損。
2	①口(28.6) 底(15.4) ② 38.4	M-1	13	12	13	2	半円 7.5 ×6.5 小円 2.0 ×2.5	B-2	①I、小磯 ②にぶい殻 ③B	縦 13 目 径の小さな底部から直線的に開き、口縁部で外反する。2段目に1対の半円形の透孔を、3段目に1つ小円形の透孔を持つ。外面1次縦刷毛、内面上部縦位の刷毛、下半部縦位の撫で。口縁上面は強い撫でによりくぼむ。3段目外面赤彩。外面磨滅著しい。底面は右を上を重ねる。	2・3段目2/3欠損。
3	①口(22.8) ② 35.4	M		11	17	2	半円 6.3 ×7.9	A-1	①I②横③ A	縦 19 目 全体の器形は直線的であり、1・2段に比べて3段目が長い。外面1次縦刷毛、内面上部部は横刷毛、下半部は縦位の撫で、下半部には接合痕明瞭に残す。口縁部横撫で。3段目に斜線の線刻を1つ持つ。	口縁部2/3、底部欠損。
4	①口(25.7) 底(14.1) ② 49.0	M or M-1	13	12	14	2	半円 6.8 ×7.8 小円 (3.0)	B-2	①I、小磯 ②にぶい殻 ③A	縦 19 目 口縁部は大きく開き外反する。2段目に半円形の1対の透孔を、3段目に小円の透孔を1つ持つ。外面1次縦刷毛、内面2～3段は斜縦位の刷毛、内面2は縦位の撫で。底部に棒(管)状の圧痕残す。口縁部横撫で。3段目外面赤彩。底面は右を上を重ねる。	1/3欠損。
5	①口 24.2 底(13.0) ② 37.1	M-1	13	11	12	2	半円 7.5 ×7.5 三角 5.3 ×5.2	B-1	①I、小磯 ②にぶい殻 ③A	縦 19 目 底面から直線的に立ち上がり、口縁部で外反し開く。2段目に半円形の1対の透孔を、3段目に三角形の透孔を1つ持つ。外面1次縦刷毛、内面2～3段目に粗い縦位の刷毛の後、口縁部に斜縦位刷毛。1段目は縦位の撫で、口縁部横撫で。外面3段目に赤彩。	底部1/2欠損。
6	①口 19.7 底(12.3) ② 36.3	M	14	11	12	2	円 6.7 ×7.8	A-1	①III②赤刷 ③A	縦 19 目 全体の器形は直線的であり、口縁上端で横撫でにより小さく外反する。2段目に円形の1対の透孔を持つ。外面1次縦刷毛、内面2～3段目は横位の撫での後、口縁部のみ横位の刷毛。1段目は縦位の撫で。口縁部横撫で。底面は右を上を重ねる。	底部1/2欠損。
7	①底(14.4) ② 8.2								①II②横③ A	縦 13 目 基底部の粘土帯による成形部分。外面1次縦刷毛、内面縦位の撫で、下部には外面に横撫で、内面に指頭圧痕が残る。	基底部破片。
8	①底 14.9 ② 11.4								①III②横③ A	縦 19 目 底面から5.5cmまでは粘土帯による成形である。外面1次縦刷毛、内面縦位の撫で。下部には外面に横撫で、内面に指頭圧痕が残る。底面には棒(管)状圧痕が残る。	基底部破片。
9	② 9.8								①II②横③ A	縦 13 目 底面から5.5cmまでは粘土帯による成形か？外面1次縦刷毛、内面縦位の撫で、縦位刷毛。内面下部部に指頭圧痕が残る。底面は右を上を重ねる。	基底部破片。

番号	墓目 ① 径 ② 高さ	突 帯			透 孔		口縁	①土 ②色 ③焼	刷毛 目	成・整形の特徴	備考		
		形状	1	2	3	段						形状	縦×横
10	①胴(15.4) ② 胴(19.5) ③ 25.0	M or M-1		11	11	2?	円?	(5.8) ×(6.6)	①I②焼③ A	縦 9	肩部は短く張り出す。外面1次刷毛内 面2段目は縦位の刷毛後、1cm間隔で縦 位の無で、3段目は斜縦位の無で、頸部 以上に刷毛を施す様子である。内外面 の刷毛状工具は同一か?	朝顔形埴輪部 から胴部破 片。	
11	①胴(20.0) ② 15.6	M				2?	円	(8.1)	①II②焼③ A	縦 19 1 22	器形は直線的で、2段目に1対の円形 の透孔を持つと思われる。外面1次刷 毛、内面縦位の無で後、横位の無で を部分的に施す。	胴部破片。	
12	①胴 20.1 ② 9.8	M				2?	円	(7.8)	①II②焼③ A	縦 11	器形は直線的で、2段目に1対の円形 の透孔を持つと思われる。外面1次刷 毛、内面縦位の無で後、横位の無で を部分的に施す。	胴部破片。	
13	①胴 16.4 ② 7.8	M							①II②焼③ A	縦 03	器内は比較的厚い。口縁部はあまり広 がらないと思われる。外面1次刷毛 後、一部斜縦位刷毛、内面横位の無で 後、頸部以上横刷毛。	朝顔形埴輪頸 部破片。	
14	①底(16.7) ② 11.7								①II②焼③ A	縦 19	底面より5.7cmまでが粘土帯による成 形と思われる。外面1次刷毛、内面横 位の無で後、縦位の無で。下部部には 外面に横位の無で、内面には指面圧痕 が残る。	基底部破片。	
15	①底(14.4) ② 18.2	M	13			2	円	(11.4)	①II②焼③ A	縦 17	底面より5.5cmまでが粘土帯による成 形と思われる。外面1次刷毛、内面縦 位の刷毛。透孔部は内側から無で下 端部外面横位の無で。底面は右を上 に重ねる。	基底部から第 1突帯破片。	
16	② 6.8								B-4	①I②浅黄 ③B	縦 16	外面1次刷毛、内面横刷毛。口縁部 横無で。	朝顔形埴輪口 縁部か?
17	② 8.6					3?	小円	(3.6)	A-1	①田②ふ い貴輪③A	縦 02	口縁部は強く外反する。口縁端部はつ まむ様に横無でされ、先端は尖る。外 面1次刷毛、内面横位の無で後、口 縁部横無で。	口縁部破片。 須恵質。
18	② 5.6								A-1	①I②焼③ A	縦 02	外面1次刷毛、内面横刷毛。口縁部 横無で。	口縁部破片。
19	② 4.5								B-2	①I②焼③ A	縦 02	外面1次刷毛、内面斜縦位の刷毛。 口縁部横無で。	口縁部破片。
20	② 5.7								B-4	①II②焼③ A	縦 09	外面1次斜縦位刷毛、内面横刷毛。口 縁部横無で。口縁端部内面は強い無で によりくぼむ。	口縁部破片。
21	② 4.3								B-4	①I②ふ い貴輪③B	縦 02	外面1次斜縦位刷毛、内面斜縦位刷毛 口縁部横無で。	口縁部破片。
22	② 4.2								B-4	①I②焼③ A	縦 09	口縁端部で強く外反する。外面1次刷 毛、内面斜縦位刷毛後、部分的に縦 位の無で。口縁部横無で。口縁端部内面 は強い無でによりくぼむ。	口縁部破片。
23	② 7.2	M					内or 半円		①I②焼③ B	縦 03	頸部の張りは弱い。突帯下に円形また は半円形の透孔を持つ。外面1次刷毛 、内面横位の無で後、縦位の無で、 内面に接合痕残す。	朝顔形埴輪頸 部破片。	
24	② 13.9	M				2?	円	(7.2)	①II②焼③ A	縦 15	全体の器形は直線的であると思われ る。外面1次刷毛、内面縦位の無で。 透孔部は内側より無で。	胴部破片。	
25	② 6.2	M							①I②焼③ B	縦 09	頸部は強く屈曲する。外面1次刷毛 内面斜縦位の無で。頸部以上は縦位 の刷毛を施す。	朝顔形埴輪頸 部破片。	
26	② 8.1	M-1				2?	円	(6.8)	①II②焼③ B	縦 14	透孔部は内外面より無で。外面1次 刷毛、内面縦位の無で。外面突帯以上 赤彩。	胴部破片。	

遺物観察表

番号	量目 ①径 ②高さ	突帯			透孔		口縁	①胎土調成 ②色 ③焼	刷毛目	成・整形の特徴	備考
		形状	1	2	3	形状					
27	② 14.6	M	11					①II②橙③B	縦	底面より4cmまで粘土帯による成形。外面1次刷毛目、内面斜縦位の無で。	基底部破片。
28	② 12.3	M-1			2?	円形 半円	(7.2)	①II②橙③B	縦	突帯は扁平である。外面1次刷毛目、内面縦位の無で。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
29	② 16.2	M-1	13					①I②黄橙③A	縦	器内は比較的薄い。突帯は即く扁平である。外面1次刷毛目、内面縦位の無で。	基底部破片。
30	② 6.5	M			2?	円?	(6.6)	①II②浅黄橙③A	縦	突帯上部は強い無でによりくぼむ。透孔部は内外面を無で。外面1次刷毛目、内面縦位の無で。	胴部破片。

宮原遺跡1号墳土器 (第104図、P L 39)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土調成 ②焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
31	土師器 坏	埋没土	口 10.3 高 6.0	①細砂・長石 ②褐色5YR 6/8③良好	底部は丸底で、胴部はやや扁平である。口縁部は短く内舞しながら立ち上がる。	体部器用り。口縁部は横位の無で。	ほぼ完成。
32	須恵器 壺	埋没土	口 (15.0) 高 6.3	①細砂②暗灰色 N3/0③良好	口縁部は頸部で屈曲し、外舞しながら立ち上がる。口縁上部部は強い横無でによりくぼむ。	右回転クワロ成形。	口縁部破片。

宮原遺跡2号墳埴輪 (第106図、P L 41)

番号	量目 ①径 ②高さ	突帯			透孔		口縁	①胎土調成 ②色 ③焼	刷毛目	成・整形の特徴	備考	
		形状	1	2	3	形状						縦×横
1	② 3.9							A-1	①I②橙③A	縦	口縁部は直立すると思われる。外面1次刷毛目、内面横刷毛。口縁部横無で。	口縁部破片。
2	② 7.5								①II②橙③A	縦	底面より5.5cmまでが粘土帯による成形と思われる。外面1次刷毛目、内面斜縦位無で。内面下部部に刷毛状の痕跡あり。	基底部破片。
3	② 9.2	M			2?	円?	(6.2)		①I、小磯 ②浅黄橙③A	縦	器内は比較的薄い。外面1次刷毛目、内面縦位の無で。刷毛目は無い。	胴部破片。
4	② 5.3							B-2	①I②橙③A	縦	口縁部は鋭く外反する。外面1次刷毛目、内面横刷毛。口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
5	② 6.3								①I②明黄 ③A	縦	底面より5.5cmまでが粘土帯による成形と思われる。外面1次刷毛目、内面縦位の無で。内面下部部に指印痕あり。	基底部破片。
6	② 8.7	M			2?	半円?			①I②橙③A	縦	突帯はやや扁平である。外面1次刷毛目、内面突帯部は横位の無で、突帯以上は縦位無で。上部部に刷毛目あり。	胴部破片。

宮原遺跡2号墳土器 (第106図、P L 41)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土調成 ②焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
7	土師器 坏	南東周堀	口 11.8 高 5.6	①細砂②褐色 5YR6/8③良好	体部と口縁部との境に線をもち、口縁部は直線的に立ち上がる。	体部外面削り、口縁部横位の無で。	完成。
8	土師器 坏	南東周堀	口 12.4 高 5.4	①細砂②褐色 5YR6/8③良好	体部と口縁部との境に線をもち、口縁部は直線的に立ち上がる。	体部外面削り、口縁部横位の無で。	完成。
9	須恵器 壺	埋没土	口 (21.7) 高 7.5	①細砂②暗灰色 N3/0③良好	頸部で屈曲し、口縁部は強く外反する。口縁部上部部に比線を通らす。	右回転クワロ成形。胴部上位内外面に敷き目を残す。	口縁部破片。

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
10	須恵器 高坏	埋没土	底 (12.0) 高 6.7	①細粒②灰色 N4/6③良好	胴下半で強く開く。下腹部 で外側に折り返す。長方形 の1段返しを持つ。	右回転ロクロ成形。	胴部破片。

宮原遺跡1号溝 (第108図、P L 41)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 坏	埋没土	口 10.8 高 4.8 底 5.0	①細粒・藍物 ②赤褐色2.5 YR4/8③良好	口縁部は内側に呈する。体 部は丸みを帯び、底部は平 底である。	体部外面磨削り、口縁部横位 の撫で。内面磨き。	1/4欠損。

宮原遺跡4号溝 (第108図、P L 41)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 坏	埋没土	口 12.5 高 5.4	①粗砂・藍物 ②褐色5YR 6/8③良好	体部と口縁部との境に線を 持ち、口縁部はやや外彎し ながら立ち上がる。	体部外面磨削り、口縁部横位 の撫で。	ほぼ完形。
2	土師器 坏	埋没土	口 12.4 高 5.0	①粒石・藍物 ②赤褐色5 YR4/6③良好	体部と口縁部との境に線を 持ち、口縁部はやや外彎し ながら立ち上がる。	体部外面磨削り、口縁部横位 の撫で。	口縁部1/2欠損。

遺構外の出土遺物 (第111図、P L 41)

番号	種類	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 壺		頸 13.8 高 27.0	①細粒・藍物 長石②褐色7. 5YR7/6③普通	口縁部は頸部で屈曲し、外 反しながら立ち上がる。胴 部は球形を呈する。	胴部外面横位の撫で後、磨き を加す。口縁部横位の撫で。	口縁部底部、胴部欠 損。

今井神社古墳

1 トレンチ出土遺物 (第117図、P L 42)

番号	量目 ①高さ ②高さ (cm)	突帯					透孔		口縁	①胎土 ②色調 ③焼成	刷毛目	成・整形の特徴	備考
		形状	1	2	3	4	段	形状					
1	①(31.8) ② 13.9	M-1					3?	平円		①I②焼③A	11	外面1次刷毛、内面斜縦位撫で。突帯上部の撫でに比喩あり。外面赤彩。	第3突帯-口縁部破片。
2	①(28.0) ② 14.1	M-1					3?	円 (5.5)		①II②によい焼③A	横12	外面1次刷毛、2次B種横刷毛、内面縦撫で後に、6本単位の刷毛を2.5cm間隔に施す。外面赤彩。	胴部破片。
3	①(27.1) ② 5.3	M-1					3?	平円 横 9.4		①I②焼③A	縦10	外面1次刷毛、内面横撫で後、縦位の撫で。突帯は撫でにより上端が下がり、突帯側面に横を持つ。	胴部破片。
4	①(27.0) ② 13.6			13					(7.8)	①II②焼③A	縦11	外面1次刷毛、一部斜め刷毛。内面丁寧な斜縦位の撫で。底部に棒(管)状圧痕あり。	基底部破片。
5	①(18.6) ② 19.6									①II②によい焼③B	縦12	外面1次刷毛、一部斜め刷毛、内面横撫で。粘土帯の接合痕明瞭に残し、外面下部部横撫で、作りは粗雑である。底面は右を上を重ねる。	基底部破片。
6	①(28.0) ② 8.6	M-1	10				2	円?		①III②によい黄焼③A	縦11	外面1次刷毛、内面横撫で後、1cm間隔の縦位撫で。透孔内側は内面から撫でる。内面下部部5cmは内彎しながら外に開き、布目を残す。最下部部は指印圧痕あり。	基底部破片。最下部部外面に横撫で。
7	①(33.4) ② 16.9	M								①I②によい焼③A	縦12	外面1次刷毛、内面丁寧な横撫で。外面赤彩。	朝顔形埴輪口縁部破片。
8	①順 (18.6) ② 7.5	三								①I②外・内・に よい黄焼③A	縦10	外面1次刷毛、頸部以下は2次B種横刷毛。内面横撫で後、頸部以上横刷毛。胴部の張り強い。外面赤彩。	朝顔形埴輪頸部破片。
9	①(35.0) ② 8.6									①II②焼③A	縦12	外面1次刷毛、内面横撫で。外面赤彩。	朝顔形埴輪胴部破片。
10	① 28.0 ② 7.5									①II②によい焼③B	縦12	外面1次刷毛、内面横撫で。外面赤彩。	朝顔形埴輪胴部破片。
11	①順 19.7 ② 6.8	三								①I②によい黄焼③A	縦12	外面1次刷毛、内面丁寧な横撫で後、頸部に横刷毛を施す。外面赤彩。	朝顔形埴輪頸部-口縁部。
12	② 9.3									A-2 ①III②によい赤焼③A	縦10	外面1次刷毛、内面横刷毛後、約8cm間隔で2本単位の縦位撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
13	② 9.3									A-2 ①II②によい黄焼③A	縦11	外面1次刷毛、内面横撫で。内面に接合痕明瞭に残す。外面赤彩。	口縁部破片。
14	② 10.8									B-2 ①I②によい黄焼③A	縦13	外面右下がりが斜め刷毛後、左下がりが斜め刷毛。内面撫で後、横刷毛内面斜位4本の縦刷。外面赤彩。	口縁部破片。
15	①(30.0) ② 12.2									B-1 ①III②によい赤焼③A	縦9	外面1次刷毛、内面横撫で。口縁部横撫で。内外面赤彩。	口縁部破片。
16	② 6.9									A-1 ①I②によい黄焼③A	縦10	外面1次刷毛、内面横刷毛。口縁部は撫で。内外面赤彩。	口縁部破片。
17	② 6.8									A-1 ①II②によい黄焼③B	縦12	外面1次刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
18	② 6.0									A-1 ①I②浅黄焼③A	縦12	外面1次刷毛、内面縦位の撫で。口縁部を幅広く横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
19	② 6.3									A-1 ①II②によい黄焼③B	縦11	外面1次刷毛、内面横撫で後、縦位の撫で。内面口縁付近に斜位の線刻。	口縁部破片。

(第117・118図)

1 トレンチ

番号	量目 ① 径 ② 高さ (cm)	装 飾				透 孔		口縁	胎土 ① 胎色 ② 焼成	刷毛 目	成・整形の特徴	備 考
		形状	1	2	3	4	段					
20	② 6.1								A-2	① I ② ③ い赤褐色③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。外面赤彩。	口縁部破片。 須恵貫。
21	② 8.0								A-1	① I ② ③ い黄褐色③A	斜 外面斜縦位刷毛、内面斜縦位無で、口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
22	② 6.4								A-2	① I ② ③ い橙③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。口縁上縁は強い横無でによりくぼむ。外面赤彩。	口縁部破片。
23	② 6.4								A-2	① I ② ③ い橙③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。口縁上縁は強い横無でによりくぼむ。	口縁部破片。
24	② 9.5								B-1	① I ② ③ い橙③A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位の刷毛後横無で。口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
25	① (31.0) ② 8.8								B-4	① III ② ③ い赤褐色③A	縦 外面1次縦刷毛、内面縦位無で。口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
26	② 8.8								B-4	① I ② ③ い橙③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。内面口縁上端部から外面赤彩。	口縁部破片。
27	② 9.1								B-2	① I ② ③ A	縦 外面1次縦刷毛、内面河位の無で。口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
28	② 8.4								A-1	① I ② ③ 黄褐色③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁上縁は横無でによりくぼむ。	口縁部破片。
29	② 6.7								B-1	① I ② ③ A	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
30	② 5.7								B-1	① II ② ③ A	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
31	② 6.6								A-1	① II ② ③ A	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
32	② 8.1								D-1	① I ② ③ A	横 外面1次縦刷毛、2次B縦横刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。	口縁部破片。
33	② 8.1								B-4	① III ② ③ い赤褐色③A	縦 外面1次縦刷毛、内面縦位無で。口縁部横無で。内面に斜縦位2本の線刻。	口縁部破片。
34	② 7.9								B-4	① I ② ③ A	横 外面1次縦刷毛、2次B縦横刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。	口縁部破片。
35	② 4.2								B-3	① III ② ③ い赤褐色③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部上面に刷毛目。外面赤彩。	口縁部破片。
36	② 2.2								D-2	① III ② ③ い橙③A	横 外面横刷毛、内面横位無で。口縁部横無で先端は尖る。外面赤彩。	口縁部破片。
37	② 4.8								C-1	① III ② ③ い赤褐色③A	横 内外部横刷毛、口縁部横無で。口縁部は貼り付け。	口縁部破片。
38	② 8.8								C-2	① III ② ③ B	横 外面1次縦刷毛、2次B縦横刷毛、内面横無で後、口縁部付近横刷毛。口縁部は貼り付け。外面赤彩。	口縁部破片。
39	② 8.3								C-2	① III ② ③ A	横 外面1次縦刷毛、2次B縦横刷毛、内面横無で後、口縁部付近横刷毛。口縁部は貼り付け。外面赤彩。	口縁部破片。
40	② 7.7								C-2	① III ② ③ A	横 外面1次縦刷毛、2次B縦横刷毛、内面横無で後、上位に横刷毛。口縁部は貼り付け。外面赤彩。	口縁部破片。
41	② 5.4								C-1	① II ② ③ A	横 外面1次縦刷毛、2次B縦横刷毛、内面横無で後、口縁部付近横刷毛。口縁部は貼り付け。	口縁部破片。
42	② 3.9								B-1	① III ② ③ 黄灰③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。	口縁部破片。 須恵貫。
43	② 6.4								A-1	① III ② ③ 黄灰③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横無で。口縁部横無で。	口縁部破片。 須恵貫。

番号	量目 ①径 ②高さ (cm)	突帯				通孔		口径	①胎土 ②色 ③焼成	刷毛目	成・整形の特徴	備考
		形状	1	2	3	4	段					
44	② 6.1								A-2	①I②にぶ い橙③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口 縁部横撫で。口縁上縁は横撫でに よりくぼむ。	口縁部破片。
45	② 3.7								C-2	①II②橙③ A	横 外面2次B種横刷毛、内面横刷毛。 口縁部横撫で。口縁部は貼り付け。	口縁部破片。
46	② 3.5								A-1	①II②にぶ い黄橙③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口 縁部横撫で。	口縁部破片。
47	② 4.3	M-1				3	半円 ?			①III②にぶ い橙③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横位の撫で。	胴部破片。
48	② 6.0	M-1					円?			①II②にぶ い橙③A	横 外面2次横刷毛、内面横位の撫で。	胴部破片。
49	② 5.0	方				4	小円 (4.0)			①I②にぶ い黄橙③A	横 外面1次縦刷毛、2次横刷毛、内 面横撫で。突帯以上外面赤彩。	胴部破片。
50	② 3.7	M					円 (7.6)			①I②にぶ い橙③B	縦 外面1次縦刷毛、内面横撫で。刷 毛目は粗い。外面赤彩。	胴部破片。
51	② 6.1	M				3	半円			①II②橙③ A	縦 外面1次縦刷毛、内面横位の撫で 口縁部付近内面横刷毛か?外面赤 彩。	胴部破片。
52	② 4.0	M-2				3	半円 ?			①III②にぶ い橙③A	縦 外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛 内面横位の撫で。	胴部破片。
53	② 15.6	M					円 ?			①II②にぶ い赤褐③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横位の撫で。 内面接合板残す。外面突帯以上赤 彩。	胴部破片。
54	② 11.5	M-1			10		円?			①I②橙③ A	縦 外面1次または斜め刷毛、突帯以 上は2次横刷毛。内面縦位の撫で。 突帯以上外面赤彩。	胴部破片。
55	② 8.3	M					円 (7.6)			①II②にぶ い黄橙③A	縦 外面1次縦刷毛、内面縦位の撫で 後、横位の撫で。透孔部内面は透 孔後に撫で。刷毛目は粗い。	胴部破片。
56	② 8.5	M-1					円? (5.0)			①I②淡黄 ③A	縦 外面1次縦刷毛、内面縦位の撫で。	胴部破片。
57	② 11.1	M					円 (11.2)			①III②赤褐 ③A	縦 外面1次縦刷毛、2次横刷毛、内 面横撫で後、突帯以上は横刷毛。 外面赤彩。	胴部破片。
58	② 12.5	M					半円 ?			①II②外・ にぶい赤褐 内・淡黄 ③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横位の撫で 後、突帯以上は横刷毛。内面やや 磨滅。外面赤彩。	胴部破片。
59	② 10.0	M-1					円or 半円 (10.4)			①I②淡黄 ③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横位の撫で。 突帯上部は横撫でによりくぼむ。	胴部破片。
60	② 7.0	M-1					半円 ?			①I②橙③ B	縦 外面1次縦刷毛、内面横位の撫で。	胴部破片。
61	② 9.3	方					円or 半円 (5.2)			①III②橙③ A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位の撫 で。内面接合板明瞭に残す。突帯 以上外面赤彩。	胴部破片。
62	② 8.6	M-2					円			①II②橙③ A	縦 外面突帯以下外面1次縦刷毛、2 次横刷毛。突帯以上は磨滅により 不明。内面縦位撫で。外面突帯以 上赤彩。	胴部破片。
63	② 10.5	M-1					円? (4.4)			①II②淡黄 ③A	縦 外面1次縦刷毛、内面突帯以下は 横位の撫で、以上は斜縦位の撫で。	胴部破片。
64	② 14.3	M-1				3	半円 ?			①II②にぶ い橙③A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位の撫 で。内面接合板明瞭に残す。外面 赤彩。	胴部破片。
65	② 10.0	M-1				3	半円 ?			①II②橙③ A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位の撫 で。	胴部破片。

(第119～121図、P L 42)

1 トレンチ

番号	量 ① 径 ② 高さ (cm)	目	突 帯				透 孔		口縁	① 治 土 ② 色 調 ③ 焼 成	刷 毛 目	成・整形の特徴	備 考
			形状	1	2	3	4	段					
66	② 8.5	M-1						円			① I ② ③ ④ ⑤ A	縦 外面1次刷毛、内面縦位無で、 透孔以上は横刷毛。	胴部破片。
67	② 9.0	M						円	(7.2)		① I ② ③ ④ ⑤ A	縦 外面1次刷毛、内面縦位の無で 外面赤彩。	胴部破片。
68	② 7.9	M-1									① I ② ③ ④ ⑤ A	縦 外面1次刷毛、内面縦位の無で 内面上部に横刷毛。外面赤彩。	胴部破片。
69	② 7.2	M-1									① II ② ③ ④ ⑤ A	縦 外面1次刷毛、内面横位無で。	胴部破片。
70	② 7.3	M-1									① I ② ③ ④ ⑤ A	縦 外面刷または斜位の刷毛。内面縦 位無で後、横位無で。	胴部破片。
71	② 7.7	M-1									① II ② ③ ④ ⑤ B	縦 外面1次刷毛、縦位無位無で、 内面に接合痕残す。	胴部破片。
72	② 10.4	M-1									① III ② ③ ④ ⑤ A	縦 外面1次刷毛、縦位無で後、横 位無で。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。須 恵貫。
73	② 4.0	M									① III ② ③ ④ ⑤ A	縦 外面1次刷毛、内面縦位無で。	胴部破片。須 恵貫。
74	② 8.4	M									① I ② ③ ④ ⑤ A	縦 外面1次刷毛、内面無で。口縁 部に刷毛目後、2条単位の縦位無 で。	胴部破片。
75	② 7.4	M-1									① II ② ③ ④ ⑤ B	縦 外面1次刷毛後突帯貼り付け。 幅広く無で施す。内面斜縦位の 無で。	胴部破片。
76	② 10.6	M									① II ② ③ ④ ⑤ A	縦 外面1次刷毛、内面横位無で後、 縦位無で。刷毛目は細かい。	胴部破片。
77	② 12.4	M									① I ② ③ ④ ⑤ A	縦 外面1次刷毛、内面横位無で後、 1.5～2cm間隔で縦位の無で。	胴部破片。
78	② 5.2	M				4	小円				① II ② ③ ④ ⑤ B	縦 外面1次刷毛、内面横位無で後、 縦位の無で。	胴部破片。
79	② 6.5	M				3	半円				① II ② ③ ④ ⑤ B	縦 外面無で、内面横位無で後、縦位の 無で。外面透孔上に突帯を挟んで 二重半円の縦刻。外面赤彩。	胴部破片。
80	② 9.8	M-1				3	円	(5.6)			① I ② ③ ④ ⑤ A	縦 外面1次刷毛、内面斜縦位無で。 外面赤彩。	胴部破片。
81	② 9.9	M-1				3	円?	(5.2)			① II ② ③ ④ ⑤ A	縦 外面1次刷毛、内面横位無で後、 縦位の無で。刷毛目は粗い。	胴部破片。
82	② 10.5	M-1				3	半円 ?	(6.8)			① I ② ③ ④ ⑤ A	横 外面2次B種横刷毛、内面横位無で後、 縦位無で。B種横刷毛の工具は突 帯間と同幅か?	胴部破片。
83	② 10.4	台				3	円	(6.8)			① II ② ③ ④ ⑤ B	縦 外面1次刷毛、内面縦位の無で 後、横位無で。刷毛目は粗い。突帯 は偏平である。	胴部破片。
84	② 9.2	方				3	半円 ?				① III ② ③ ④ ⑤ A	縦 外面1次刷毛、内面縦位無で。 突帯は高く突出し、シャープである。 。	胴部破片。須 恵貫。
85	② 8.1	M-1						円?	(8.8)		① I ② ③ ④ ⑤ A	縦 外面1次刷毛、内面は丁寧な横 位の無で。刷毛目は粗い。	胴部破片。
86	② 8.4	M-1				2	円	(5.2)			① III ② ③ ④ ⑤ A	縦 外面1次刷毛、内面横位無で後、 約1cm間隔の縦位無で、外面突帯以 上赤彩。	胴部破片。
87	② 8.2	M				3	半円				① II ② ③ ④ ⑤ A	縦 外面1次刷毛、内面横位無で。半 円の透孔上に二重の半円の縦刻を 持つ。外面赤彩。	胴部破片。
88	② 6.3	台						円	(6.6)		① I ② ③ ④ ⑤ B	横 外面2次B種横刷毛、内面縦位の 無で。突帯は偏平である。	胴部破片。

遺物観察表

(第121・122図、P L 42)

1トレンチ

番号	直径 ②高さ (cm)	突 帯				透 孔		口縁	①胎 土 ②色 調 ③焼 成	刷 毛 目	成・整 形 の 特 徴	備 考
		形状	1	2	3	4	形状					
89	② 8.2	M-1					32	半円		縦 10	①胎②焼③A 外面1次刷毛、2次B種刷毛。内面横撫で後、縦位撫で、内面接合痕残す。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
90	② 6.5	方						円 (8.8)		縦 13	①I②によい焼③A 外面1次刷毛、2次B種刷毛。内面縦位撫で後、横刷毛を施す。	胴部破片。
91	② 6.9	M-1					32	半円		縦 10	①I②によい焼③A 外面1次刷毛、内面横刷毛後、縦位の撫で。外面赤彩。	胴部破片。
92	② 6.5	M-1					32	半円		縦 10	①I②浅黄焼③A 外面1次刷毛、内面横撫で後、縦位撫で、口縁部内面は横刷毛。外面に弧状の線刻。	胴部破片。
93	② 8.1	M-2						円? (8.2)		縦 10	①I②によい黄焼③A 外面1次刷毛、内面横撫で後、縦位の撫で。	胴部破片。須恵質。
94	② 7.5	台								横 11	①II②焼③A 外面1次刷毛、2次B種刷毛。内面横撫で後、縦位の撫で。外面赤彩。	胴部破片。
95	② 9.2	台								縦 11	①I②によい黄焼③A 外面1次刷毛、内面横撫で後、横刷毛、5mm間隔の縦位撫で。外面赤彩。	胴部破片。
96	② 11.5	M								縦 13	①I②焼③A 外面1次刷毛、内面横撫で後、縦位の撫で。	胴部破片。
97	② 12.1	M								横 16	①II②焼③A 外面1次刷毛、2次B種刷毛。内面横撫で後、縦位の撫で。突帯以上は横刷毛を施す。突帯は扁平である。外面赤彩。	胴部破片。
98	② 9.0	M-1								縦 11	①胎②灰白③A 外面1次刷毛、内面横撫で後、縦位の撫で。内面接合痕残す。	胴部破片。須恵質。
99	② 7.8	M-1								縦 11	①II②によい黄焼③A 外面1次刷毛、内面横撫で後、縦位の撫で。	胴部破片。
100	② 5.8	M-1								縦 8	①II②によい赤褐③B 外面1次刷毛、内面斜縦位の撫で。	胴部破片。
101	② 10.5	台								縦 7	①胎②灰③A 外面1次刷毛、内面斜縦位の撫で。刷毛目は粗い。	胴部破片。
102	② 9.6	M-1								縦 13	①I②浅黄焼③A 外面1次刷毛、内面縦位撫で。	胴部破片。
103	② 8.7	M-1								縦 10	①I②によい焼③A 外面1次刷毛、内面横撫で後、縦位の撫で。外面赤彩か。	胴部破片。
104	② 7.0	M-1								縦 8	①I②によい黄焼③A 外面1次刷毛、内面横撫で後、縦位の撫で。刷毛目は粗い。外面赤彩。	胴部破片。
105	② 9.5	M								縦 8	①II②浅黄焼③B 外面1次刷毛、内面横撫で。内面接合痕明瞭に残す。突帯上部は強い横撫でによりくぼむ。	胴部破片。
106	② 9.0	M								縦 12	①II②によい焼③A 外面1次刷毛、内面縦位撫で後、横位の撫で。	胴部破片。
107	② 8.0	M-1								縦 11	①II②によい赤褐③A 外面1次刷毛、内面縦位撫で後、横位の撫で。突帯上に二重半円の線刻か。外面赤彩。	胴部破片。須恵質。
108	② 7.2	M-1								縦 10	①I②浅黄焼③B 外面1次刷毛、内面横撫で。内面接合痕明瞭に残す。外面赤彩。	胴部破片。
109	② 9.4	M-1								縦 13	①II②焼③A 外面1次刷毛、内面縦位の撫で。接合痕明瞭に残す。外面赤彩。	胴部破片。
110	② 7.6	M-1								縦 10	①II②焼③A 外面1次刷毛、内面縦位撫で。内面接合痕明瞭に残す。外面赤彩。	胴部破片。
111	② 5.4	M-2								縦 11	①I②赤褐③A 外面1次刷毛、内面丁寧な横位の撫で。外面赤彩。	胴部破片。

(第122・123図、P L 42)

1 トレンチ

番号	目録 ①径 ②高さ (cm)	突 帯				透 孔		口縁	①胎 土 ②色 調 ③焼 成	刷 毛 目	成・整形の特徴	備 考
		形状	1	2	3	4	段					
112	② 6.5	台							①II②灰オ リーブ③A	横 13	外面1次刷毛、2次横刷毛か? 内面縦位の撫で。	朝顔形埴輪口 縁部破片。須恵 質。
113	② 7.5	M-1							①I②によ い橙③A	縦 10	外面1次刷毛、内面斜縦位の撫 で後、突帯以上は斜縦位刷毛目。 外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
114	② 7.3	M-1							①I②橙③ A	縦 7	外面1次刷毛、内面横位の撫で。	胴部破片。
115	② 6.2	台							①II②浅黄 橙③A	縦 9	外面1次刷毛、内面斜縦位撫 で、横位の撫で。刷毛目は粗い。	胴部破片。
116	② 7.8	M-1							①I②橙③ A	横 12	外面1次刷毛、2次B種横刷毛。 内面丁寧な斜縦位の撫で。器内は 比較的薄く突帯は高く突出する。	胴部破片。
117	② 6.1	M							①II②橙③ A	縦 12	外面1次刷毛、内面縦位の撫で。 内面接合痕明瞭に残す。外面赤彩。	胴部破片。
118	② 8.2	M-1							①I②淡黄 ③A	縦 11	外面1次刷毛、内面縦位の撫で。 外面やや澄減。	胴部破片。
119	② 6.5	M-1							①I②淡黄 ③A	縦 13	外面1次刷毛、内面斜縦位の撫 で。内面接合痕明瞭に残す。外面 突帯以上赤彩。	胴部破片。
120	② 4.8	M-1							①I②淡黄 ③A	横 12	外面2次B種横刷毛。内面撫で。	胴部破片。
121	② 6.7	M							①III②によ い赤橙③A	横 7	外面1次刷毛、2次B種横刷毛。 内面撫で調整後、横刷毛。接合痕 明瞭に残す。外面赤彩。	胴部破片。須 恵質。
122	② 4.8	M-1							①I②橙③ A	横 13	外面1次刷毛、2次B種横刷毛。 内面撫で調整後、斜縦位刷毛。外 面赤彩。	胴部破片。
123	② 6.5	M-1							①I②橙③ A	縦 11	外面1次刷毛、2次B種横刷毛。 内面斜縦位撫で後、突帯以上横位 の撫で。外面赤彩。	胴部破片。
124	② 6.3	M-1							①I②橙③ A	横 12	外面1次刷毛、2次B種横刷毛。 内面縦位の撫で。突帯側面は強い 横撫でによりくぼむ。外面赤彩。	胴部破片。
125	② 7.5								①I②橙③ A	縦 12	外面1次刷毛、内面縦位の撫で。 器内および粘土帯の合わせ目に圧 痕あり。	基底部破片。
126	② 10.0								①I②によ い橙③A	縦 10	外面1次刷毛、内面縦位の撫 で。外面下部は横撫で。	基底部破片。
127	② 8.4								①II②によ い橙③A	縦 13	外面1次刷毛、内面横位の撫で。 外面下部部は横撫で。	基底部破片。
128	② 7.9								①II②によ い橙③A	縦 10	外面1次刷毛、内面縦位の撫で。 内面下部3cm程に布目7あり。底 面には棒(管)状圧痕あり。	基底部破片。
129	② 9.7								①II②橙③ A	縦 10	外面1次刷毛、内面斜縦位の撫 で。内面下部3cm程は外に開く。外 面下部部横位の撫で。底面に棒 (管)状圧痕あり。	基底部破片。
130	② 12.6	台							①II②浅黄 橙③A	縦 10	外面1次刷毛、内面横位の撫 で。横刷毛。外面赤彩。	朝顔形埴輪口 縁部破片。
131	② 8.9	M-1							①III②によ い橙③A	縦 9	外面1次刷毛、内面縦位撫で後、 斜縦位の撫で。刷毛目は粗い。外 面赤彩。	朝顔形埴輪口 縁部破片。
132	② 4.0							E	①II②橙③ A	斜 10	内外面斜縦位の刷毛後、口縁部 撫で。外面赤彩。	朝顔形埴輪口 縁部破片。

番号	量目 ①径 ②高さ (cm)	実 帯				透 孔		口縁	①胎土 ②色調 ③焼成	刷毛 目	成・整形の特徴	備 考
		形状	1	2	3	4	段					
133	② 10.6	台								①II②橙③A 10	横 外面1次刷毛、2次横刷毛。内面横位の無で、内面接合痕明瞭に残す。	朝顔形埴輪口縁部破片。
134	② 8.6	台								①II②にぶい橙③A 12	縦 外面1次刷毛、内面横位または斜縦位の無で、	朝顔形埴輪口縁部破片。
135	② 7.4	M-1								①II②にぶい赤褐色③B 10	縦 外面1次刷毛、内面斜縦位の無で、実帯部は疑似口縁をなしたか。	朝顔形埴輪口縁部破片。
136	② 6.4	三								①I②にぶい橙③A 16	横 外面1次刷毛の刷毛、実帯貼り付け後、横位の無で、内面口縁横位の刷毛目。	朝顔形埴輪頸部破片。
137	② 5.4	三								①III②橙③B 11	縦 外面1次刷毛、2次B種横刷毛。内面横位で、頸部以上に横刷毛外面赤彩。	朝顔形埴輪頸部破片。
138	② 9.6	M-1								①I②灰黄③A 11	縦 外面1次刷毛、内面斜縦位の無で、外面に棒状工具による横位の沈線あり。	朝顔形埴輪頸部破片。
139	② 7.5	M-1					半円?			①I②にぶい橙③A 15	横 外面1次刷毛、2次横刷毛。内面横位の無で、実帯側面は強い横位によりくぼむ。外面赤彩。	朝顔形埴輪頸部破片。
140	② 6.3									①III②にぶい黄橙③A 10	縦 外面1次刷毛、2次B種横刷毛。内面横位の無で、縦位の無で、縦位の刷毛状工具は同一か?	胴部破片。
141	② 10.3						円	(6.4)		①III②橙③B 14	横 外面1次刷毛、2次B種横刷毛。内面縦位の無で、外面磨滅する。	胴部破片。
142	② 6.7						半円?			①I②にぶい黄橙③A 17	横 外面1次刷毛、2次横刷毛。内面横刷毛。外面赤彩。	胴部破片。
143	② 3.7									①I②にぶい赤褐色③A 10	横 外面1次刷毛、2次B種横刷毛。内面斜縦位の無で、	胴部破片。
144	② 7.5									①II②にぶい赤褐色③A 11	横 外面1次刷毛、2次横刷毛。内面横位の無で、外面二重半円の縁刻、外面赤彩。	胴部破片。
145	② 4.8									①II②にぶい橙③A 22	縦 外面1次刷毛、内面横位で、横刷毛。外面縁刻。外面赤彩。	胴部破片。
146	② 3.2									①I②橙③A 9	縦 外面1次刷毛、内面斜縦位の無で、外面に二重半円の縁刻か?	胴部破片。
147	② 4.7									①III②にぶい橙③A 9	縦 外面1次刷毛、内面横位の無で、縦位の無で、外面二重半円の縁刻か?外面赤彩。	胴部破片。
148	② 5.1									①I②にぶい橙③A 10	縦 外面1次刷毛、内面縦位の無で、横刷毛。外面二重半円の縁刻か?	胴部破片。
149	② 5.2									①I②浅黄橙③A 13	横 外面1次横刷毛、内面斜縦位の無で、外面斜位2本の縁刻。外面赤彩。	胴部破片。
150	② 4.3									①II②浅黄橙③A 11	縦 外面1次刷毛、内面横位の無で、外面斜位2本の縁刻。	胴部破片。

2 トレンチ出土遺物 (第124図、P L 43)

番号	量目 ①径 ②高さ (cm)	突帯				透孔		口縁	①胎土 ②色調 ③焼成	刷目	成・整形の特徴	備考	
		形状	1	2	3	4	形状						縦×横
1	①(32.0) ② 12.0									A-1	①II②ぶ い椀③A	縦 外面1次刷毛、内面横撫で後、 横刷毛。口縁部横撫で。	口縁部破片。
2	①(28.0) ② 16.5									B-1	①I②ぶ い椀③A	縦 外面1次刷毛、口縁部横撫で。 口縁部調整後に内面横刷毛。その 後0.5~2cm間隔で縦位の撫で、外 面赤彩。	口縁部破片。
3	①(30.6) ② 11.8									A-1	①II②横 ③A	縦 外面1次刷毛、内面横刷毛。口 縁部横撫で、外面はやや磨滅する 外面赤彩か。	口縁部破片。
4	①(26.0) ② 6.9	M-1					3P	半円	横 7.5		①II②横 ③A	縦 外面1次刷毛、内面横位の撫で 後、縦位の撫で。突帯上辺は強く つまみ出され尖る。	胴部破片。
5	①(30.2) ② 20.6	M-1			11		3	半円	縦 6.6		①I②灰白 ③A	縦 外面1次斜縦位の刷毛、内面縦位 撫で。内面接合痕明瞭に残す。外 面磨滅著しい。	胴部第2突帯 ~第3突帯破 片。
6	①(29.0) ② 13.8	M-1			11 ?		3 or 4	円			①II②ぶ い椀③A	縦 外面1次刷毛、2次B種横刷毛。 内面横位の撫で後、縦位撫で。上 部は横刷毛。器内は磨手である。 外面赤彩。	胴部破片。
7	①(29.0) ② 10.9	M-1						円or 半円			①I②横黄 横③A	斜 外面縦刷毛後、斜縦位の刷毛。内 面縦位の撫で。	胴部破片。
8	①(29.8) ② 13.7	M-1					3P	円?			①II②横 ③A	縦 外面1次刷毛、内面横位の撫で 後、一部斜縦位の撫で。外面赤彩。	胴部破片。
9	①(32.0) ② 11.8	M-1					3P	半円	横 7.8		①I②ぶ い椀③A	縦 外面1次刷毛、内面斜縦位撫で 後、縦位の撫で。半円形の透孔上 に突帯を挟んで二重半円の線刻。 器内は非常に厚い。外面赤彩。	胴部破片。
10	①(24.5) ② 14.0	M-1	11				2	円	径 5.5		①II②ぶ い椀③A	縦 外面1次刷毛、内面横位の撫で 後、縦位の撫で。下部は軽く外 に開く。外面磨滅する。	基底部破片。 6と同一個体 か。
11	② 7.1									A-2	①I②ぶ い椀③A	縦 外面1次刷毛、内面横刷毛。口 縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
12	② 8.6									B-1	①II②ぶ い椀③A	縦 外面1次刷毛、口縁部横撫で、 内面横刷毛。外面赤彩。	口縁部破片。
13	② 6.6									B-4	①I②横黄 ③A	斜 外面横刷毛後、斜縦位の刷毛。内面 横刷毛。口縁部横撫で。口縁部は 短く外反する。外面赤彩。	口縁部破片。 胴部形造輪口 縁の可能性。
14	② 5.4									B-4	①I②赤褐 ③A	横 外面1次斜縦位の刷毛、2次B種 横刷毛。内面横刷毛。口縁部横撫 で。外面赤彩。	口縁部破片。
15	② 5.1									B-4	①I②横 ③A	斜 外面斜縦位の刷毛、内面横位の撫 で。口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
16	② 10.1									B-2	①II②ぶ い椀③A	縦 外面1次刷毛、内面横撫で。口 縁部横撫で。口縁上辺は横撫でに よりくぼむ。	口縁部破片。
17	② 7.6									B-4	①I②ぶ い椀③A	縦 外面1次刷毛、内面横刷毛。口 縁部横撫で。口縁部から外面赤彩。	口縁部破片。
18	② 8.5									B-2	①I②ぶ い椀③A	縦 外面1次刷毛、内面横位の刷毛 口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
19	② 7.2									B-1	①II②横 ③A	縦 外面1次刷毛、内面横位の刷毛 口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。

番号	量目 ①径 ②高さ (cm)	突 部				透 孔		口縁	①胎土 ②色調 ③焼成	刷毛目	成・整形の特徴	備考	
		形状	1	2	3	4	段						形状
20	② 7.0								B-2	①I②浅黄 ③A	縦11	外面1次刷毛、2次横刷毛。内面横刷毛。口縁部横無で、口縁上面は強い横無でよくぼむ。外面赤彩。	口縁部破片。
21	② 6.1								B-4	①I②浅黄 ③A	縦6	外面1次刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。刷毛目は粗い。外面赤彩。	口縁部破片。
22	② 5.3								A-1	①II②橙③A	縦10	外面1次刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。内外面赤彩。	口縁部破片。
23	② 7.4								B-1	①II②灰黄 ③A	縦12	外面1次刷毛、2次横刷毛。内面横刷毛後、縦位の無で。口縁上面は強い横無のためくぼむ。外面に下から上への斜位の縦刷。	口縁部破片。
24	② 6.3								B-2	①I②浅黄 ③A	縦12	外面1次刷毛、内面横刷毛後、縦位の無で。口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
25	② 4.8								D-1	①I②浅黄 ③A	縦10	口縁部をつまんで横無で行い先端は尖る。外面1次刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
26	② 5.6								D-1	①II②に よ い ③A	縦10	外面1次刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
27	② 6.1								B-2	①II②赤 ③A	縦12	外面1次刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
28	② 8.0								A-2	①II②浅黄 ③A	縦11	外面1次刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
29	② 5.4								A-2	①II②橙③B	縦8	外面斜縦位刷毛後、端部に横位の刷毛。内面横位の無で。刷毛目は粗い。外面赤彩。	口縁部破片。
30	② 5.5								A-2	①I②浅黄 ③A	斜7	外面斜縦位刷毛、内面横位の無で口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
31	② 5.3								A-2	①II②浅黄 ③A	縦11	外面1次刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
32	② 5.0								A-2	①II②橙③A	斜8	外面1次斜縦位刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。	口縁部破片。
33	② 4.6								B-1	①III②に よ い ③A	縦11	外面1次刷毛、一部斜縦位刷毛。内面横刷毛。口縁部横無で。外面赤彩。内面縦刷あり。	口縁部破片。
34	② 7.6								B-1	①I②橙③A	縦11	外面1次刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
35	② 7.5								A-1	①I②浅黄 ③A	縦10	外面1次刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
36	② 8.3								B-1	①II②浅黄 ③A	縦11	外面1次刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
37	② 6.7								B-2	①II②橙③A	縦9	外面1次刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
38	② 7.4								B-1	①II②浅黄 ③A	縦12	外面1次刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
39	② 5.7								B-2	①I②浅黄 ③A	縦10	外面1次刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
40	② 6.1								A-2	①III②明 灰③A	縦10	外面1次刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。	口縁部破片。 須恵質。
41	② 4.3								A-1	①II②浅黄 ③A	縦10	外面1次刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。	口縁部破片。

(第125・126図、P L 43)

2 トレンチ

番号	縦目 ①径 ②高さ (cm)	突 帯				透 孔		口縁	①胎 土 ②色 調 ③焼 成	刷 毛 目	成・整形の特徴	備 考
		形状	1	2	3	4	段					
42	② 4.7								A-1	①II②浅黄 橙③A	刷 11 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
43	② 6.6								B-2	①III②褐灰 ③A	刷 9 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で。	口縁部破片。 須臾質。
44	② 6.5								A-1	①I②橙③ A	刷 13 外面1次縦刷毛、一部斜縦位刷毛。内面横刷毛。口縁部横撫で。内外面赤彩。	口縁部破片。
45	② 6.4								A-1	①II②浅黄 橙③A	刷 10 外面1次縦刷毛、内面横刷毛、一部斜縦位刷毛。口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
46	② 4.7								B-1	①III②に よ い 橙③A	刷 14 外面1次縦刷毛、内面横位の撫で。口縁部横撫で。内外面赤彩。	口縁部破片。
47	② 4.8								A-1	①II②に よ い 橙③A	刷 11 外面1次縦刷毛、内面横位刷毛。口縁部横撫で。内面に斜位の縁刷み。	口縁部破片。
48	② 4.2								A-1	①III②に よ い 橙③A	斜 12 外面1次縦刷毛、内面斜縦位の刷毛。口縁上面から口縁外面横撫で内面上端部に斜位に縁刷。内外面赤彩。	口縁部破片。
49	② 4.3								A-1	①I②浅黄 橙③A	刷 12 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
50	② 4.6								B-4	①I②橙③ A	刷 10 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
51	② 7.8								B-3	①III②浅黄 橙③A	斜 11 外面1次斜縦位刷毛、内面横刷毛口縁部横撫で後、上面と外面に刷毛目を施す。外面赤彩。	口縁部破片。
52	② 5.8								A-1	①I②橙③ A	刷 10 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
53	② 5.7								B-4	①I②橙③ A	横 13 外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。内面横刷毛。口縁部横撫で。内外面赤彩。	口縁部破片。
54	② 6.4	M								①I②浅黄 ③A	刷 12 外面1次縦刷毛、内面横位の撫で後、縦位または斜縦位の撫で。内面に接合痕残す。	胴部破片。
55	② 11.9	M-1								①I②に よ い 黄 橙③A	刷 13 外面1次縦刷毛、内面斜縦位の撫で。	胴部破片。
56	② 7.4	M-1								①I②浅黄 橙③A	横 12 外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。内面縦位の撫で。外面赤彩。	胴部破片。
57	② 10.9	M-1					平円 ?			①I②に よ い 橙③A	横 10 外面1次斜縦位刷毛、2次B種横刷毛。内面横位の撫で後、縦位の撫で。	胴部破片。
58	② 10.8	方								①III②橙③ A	刷 11 外面1次縦刷毛、内面縦位の撫で後、突帯以上は横刷毛。上端部に縦2本の縁刷あり。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
59	② 12.9	M-1				3?	平円			①II②橙③ A	刷 9 外面突帯以上1次斜縦位刷毛、以下は縦位刷毛。内面斜縦位刷毛後上端部は斜縦位刷毛。	胴部破片。
60	② 9.8	M					方?			①II②浅黄 橙③B	刷 10 外面1次縦刷毛、内面横位の撫で。	胴部破片。
61	② 13.8	M-1								①II②橙③ A	刷 10 外面1次縦刷毛、内面横位の撫で後、上端部に横刷毛。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
62	② 10.9	M-1					平円 ?			①I②に よ い 黄 橙③A	刷 10 外面1次縦刷毛、内面斜縦位の撫で。	胴部破片。

番号	量目 ①径 ②高さ (cm)	突帯				透孔		口縁	①胎土 ②色調 ③焼成	刷毛目	成・整形の特徴	備考
		形状	1	2	3	4	形状					
63	② 9.3	M-1							①II②灰白 ③A	縦 10	外面1次縦刷毛、突帯以上は2次B種横刷毛。内面斜縦位の撫で。	胴部破片。
64	② 8.9	M-1					半円		①II②にぶ い橙③A	縦 10	外面1次縦刷毛、内面斜縦位または横位の撫で。突帯を挟んで上に二重半円の線刻、下に半円の透孔を持つ。外面赤彩。	胴部破片。
65	② 6.1	M					半円		①I②にぶ い橙③A	縦 11	外面1次縦刷毛、内面横位の撫で上部に横刷毛。突帯を挟んで上に二重半円の線刻、下に半円の透孔を持つ。外面赤彩。	胴部破片。
66	② 11.7	M-1					円?		①III②灰黄 橙③A	横 13	外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内面横位の刷毛後、縦位の撫で。	胴部破片。須 恵質。
67	② 11.7	M					円?		①II②橙③ A	縦 10	外面1次縦刷毛、内面縦位または斜縦位の撫で。外面赤彩。	胴部破片。
68	② 10.8						半円 ?		①I②橙③ A	縦 10	外面1次縦刷毛、内面横位の撫で上部に横刷毛。内面縦位または二重半円の線刻、下に半円の透孔を持つ。外面赤彩。	胴部破片。
69	② 8.8	M							①III②淡黄 橙③A	縦 12	外面1次斜縦位刷毛、内面縦位の撫で。外面赤彩。	胴部破片。
70	② 6.0	M-1							①I②淡黄 ③A	縦 9	外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内面横位の撫で後、縦位の撫で。	胴部破片。
71	② 7.6	M-1							①III②橙③ B	縦 11	外面1次縦刷毛、内面縦位の撫で。	胴部破片。
72	② 8.0	M-2							①II②淡黄 橙③B	縦 11	外面1次縦刷毛、突帯以上2次B種横刷毛。内面斜縦位の撫で。	胴部破片。
73	② 9.7	M							①III②にぶ い黄橙③A	縦 10	外面1次縦刷毛、突帯以上は2次B種横刷毛。内面斜縦位の撫で。	胴部破片。
74	② 7.1	M-2					円?		①II②橙③ B	斜 8	外面1次斜縦位刷毛、内面斜縦位撫で。	胴部破片。
75	② 8.0	M-1					円?		①III②橙③ A	縦 12	外面1次縦刷毛、内面斜縦位の撫で。	胴部破片。
76	② 8.3	M-1							①I②橙③ A	縦 10	外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。内面斜縦位撫で。外面赤彩。	胴部破片。
77	② 9.8	M					円		①II②橙③ A	縦 9	突帯は偏平である。外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で。内面は榫合痕残す。	胴部破片。
78	② 6.9	方					半円		①III②淡黄 橙③A	横 9	外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛、内面斜縦位の撫で。	胴部破片。
79	② 6.8	M-1					半円		①I②橙③ A	縦 11	外面1次縦刷毛、一部斜縦位刷毛。内面斜縦位撫で。外面赤彩。	胴部破片。
80	② 5.8	M-1					半円		①I②褐灰 ③A	縦 10	外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で。	胴部破片。須 恵質。
81	② 7.9	台					半円		①III②淡黄 橙③A	縦 10	外面1次縦刷毛、内面縦位の撫で突帯以下は横位の撫で。	胴部破片。
82	② 6.1	方					半円		①III②にぶ い黄橙③A	横 11	外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。内面縦位撫で。	胴部破片。
83	② 4.3	台					半円		①I②橙③ A	縦 10	外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内面横位の撫で。	胴部破片。 刷毛目不明瞭
84	② 6.6	台							①I②橙③ B	縦 10	外面1次縦刷毛、内面斜縦位の撫で。外面磨滅している。	胴部破片。 刷毛目不明瞭

(第127・128図, P L 43)

2 トレンチ

番号	量目 ① 径 ② 高さ (cm)	突 帯						透 孔		口縁	①胎 土 ②色 調 ③装 成	刷 目	成・整形の特徴	備 考
		形状	1	2	3	4	段	形状	縦×横					
85	② 7.0	M											① I ② 胎③ A 縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位の撫で。外面赤彩。	胴部破片。
86	② 7.3	M-1							円?				① I ② 胎③ A 縦 外面1次縦刷毛、突帯以上は2次横刷毛。内面縦位の撫で。	胴部破片。頸直貫。
87	② 7.9	M											① I ② 胎③ A 縦 外面1次縦刷毛、内面縦位の撫で後、突帯以上は斜縦位の撫で。突帯以上外面赤彩。	胴部破片。
88	② 7.2	M-1											① I ② 洗黄 ③ A 横 外面1次縦刷毛、突帯以上2次B種横刷毛。内面突帯以上斜縦位の撫で。以下は横位の撫で。	胴部破片。
89	② 3.1	M-1							円?	(7.6)			① II ② 洗黄 ③ A 縦 外面1次縦刷毛、内面縦位の撫で。	胴部破片。
90	② 11.2	M-1							円?				① I ② 洗黄 ③ A 縦 外面1次縦刷毛、内面横位の撫で後、斜縦位の撫で。内面に擦合痕残す。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
91	② 9.3	M-1							半円				① III ② によ い貴橙③ A 縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位の撫で。	胴部破片。
92	② 6.5	M-1											① I ② 胎③ A 縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛後、縦または斜縦位の撫で。	胴部破片。
93	② 6.2	M-1											① III ② 胎③ A 縦 外面1次斜縦位の刷毛、内面縦位の撫で。外面赤彩。	胴部破片。
94	② 8.8	M											① II ② 胎③ A 縦 外面1次縦刷毛、内面横位の撫で。突帯以上外面赤彩。	胴部破片。
95	② 8.3	M											① III ② 赤褐 ③ A 縦 突帯は偏平である。外面1次縦刷毛、内面横位の撫で後、縦位の撫で。	胴部破片。
96	② 7.3	台											① I ② 洗黄 ③ A 縦 外面1次縦刷毛、内面縦位の撫で後、横位の撫で。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
97	② 7.4	M-1											① I ② 灰白 ③ A 縦 外面1次縦刷毛、突帯以上は2次横刷毛。内面縦位の撫で。	胴部破片。
98	② 8.1	M-1											① III ② によ い貴橙③ A 縦 外面1次縦刷毛、内面横位の撫で後、縦位の撫で。	胴部破片。
99	② 6.1	M-2											① III ② 洗黄 ③ A 斜 外面1次斜縦位の刷毛、内面斜縦位の撫で後、縦位の撫で。内面2条の縦刷毛。外面赤彩。	胴部破片。
100	② 8.3	M											① II ② 胎③ A 縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位の撫で。外面赤彩。	胴部破片。
101	② 7.2	M-1											① II ② によ い貴橙③ A 斜 外面1次斜縦位の刷毛、内面斜縦位の撫で。外面やや磨滅する。	胴部破片。
102	② 7.3	台											① III ② 胎③ A 縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛後、横位の撫で。	胴部破片。
103	② 7.4	M											① I ② 洗黄 ③ A 横 外面1次縦刷毛、突帯以上は2次横刷毛。内面横刷毛後、横位の撫で。	胴部破片。
104	② 4.7	三							円?				① I ② 洗黄 ③ A 縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位の撫で。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。刷毛目不明瞭
105	② 6.0	M-1											① III ② によ い貴橙③ A 縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位の撫で。外面赤彩。	胴部破片。
106	② 10.2	三?											① I ② 洗黄 ③ A 縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位の撫で後、上層は横刷毛。突帯以上外面赤彩。	朝顔形埴輪口縁部破片。
107	② 7.0	三											① II ② 洗黄 ③ A 縦 外面1次縦刷毛、内面横位の撫で後、突帯以上は横刷毛。外面赤彩。	朝顔形埴輪頸部破片。
108	② 8.7	台											① III ② 洗黄 ③ A 縦 外面1次縦刷毛、内面横位の撫で後、突帯以上は横刷毛。	朝顔形埴輪口縁部破片。

遺物観察表

(第128図、P.L.43)

2 トレンチ

番号	量目 ①径 ②高さ (cm)	突 帯				透 孔		口縁	①胎土 ②色調 ③焼成	刷毛目	成・整形の特徴	備考		
		形状	1	2	3	4	段						形状	縦×横
109	② 16.6	M									①II②外・ 内・楕③A	縦 10	外面1次縦刷毛、内面横位の撫で後、頂部以上は横刷毛。内外面赤彩。	基部彫刻輪口縁部破片。
110	② 8.9										①II②に 楕③A	横 10	外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。内面横位の撫で後、底位撫で。	胴部破片。
111	② 10.2						円?				①I②に い黄楕③A	横 10	外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。内面斜縦位の撫で。	胴部破片。
112	② 7.3										①I②洗 黄楕③A	横 10	外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。内面斜縦位の撫で。	胴部破片。
113	② 5.6						円?				①III② 楕③A	横 13	外面1次斜縦位刷毛、2次B種横刷毛。内面縦位の撫で。外面赤彩。	胴部破片。
114	② 6.3										①I②に い楕③A	斜 11	外面斜縦位の刷毛、内面横位の撫で後、底位撫で。上部部に横刷毛外面縦刷毛。外面赤彩。	胴部破片。
115	② 2.6										①I②に い楕③A	横 11	外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内面横位の撫で。外面縦刷毛。外面赤彩。	胴部破片。
116	② 2.9										①I②楕 ③A	縦 10	外面1次縦刷毛、内面斜縦位の撫で。外面縦刷毛。外面赤彩。	胴部破片。
117	② 9.9										①III② 楕③A	横 10 5 12	外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。内面斜縦位の撫で。外面縦刷毛。	胴部破片。
118	② 4.4										①II②楕 ③A	横 10	外面1次縦刷毛、内面斜縦位の撫で。外面二重半円の縦刷毛?外面赤彩。	胴部破片。
119	② 5.0										①III②洗 黄楕③A	縦 12	外面1次縦刷毛、内面斜縦位の撫で。外面二重半円の縦刷毛?	胴部破片。
120	② 3.4										①I②楕 ③A	横 7	外面1次斜縦位刷毛、内面横刷毛。内面縦刷毛。外面赤彩。	胴部破片?

3 トレンチ出土遺物 (第129図、P.L.44)

番号	量目 ①径 ②高さ (cm)	突 帯				透 孔		口縁	①胎土 ②色調 ③焼成	刷毛目	成・整形の特徴	備考		
		形状	1	2	3	4	段						形状	縦×横
1	①(28.2) ② 20.5	M	10	11			2	円	6.2		①II②洗 黄楕③B	縦 12	外面1段目上半縦位の撫で、2段目斜縦位刷毛。内面斜縦位の撫で。基部彫刻指押え。	基部から2段目破片。
2	①(21.5) ② 8.5	方						円?	(6.8)		①I②楕 ③A	縦 9	外面1次縦刷毛、内面縦位の撫で。	胴部破片。
3	①(23.1) ② 9.5										①III②に い楕③A	縦 13	外面1次縦刷毛、内面横位の撫で。下部内外面横位の撫で。	基部破片。
4	①(25.8) ② 11.9										①I②楕 ③A	縦 10	外面1次縦刷毛、内面斜縦位の撫で。下部外部面横位の撫で。	基部破片。
5	② 12.6										①III②楕 ③A	縦 11	外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で。内面上位から外面赤彩。	口縁部破片。
6	② 9.9										①I②洗 黄楕③A	縦 9 5 11	外面1次斜縦位刷毛、2次B種横刷毛。内面斜縦位の撫で後、上半は横刷毛。口縁部横撫で。	口縁部破片。
7	② 7.0										①I②楕 ③A	縦 11	外面1次縦刷毛、内面斜縦位の撫で。口縁部横撫で。	口縁部破片。

(第129図、P L 44)

3 トレンチ

番号	量目 ①径 ②高さ (cm)	类帯				透孔		口縁	①胎土 ②色調 ③焼成	刷目	成・整形の特徴	備考
		形状	1	2	3	4	段					
8	② 5.6								A-2	①I②改良 ③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。	口縁部破片。
9	② 6.1								B-4	①II②改良 ③A	斜 外面1次斜縦位刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。	口縁部破片。
10	② 4.7								B-4	①I②改良 ③A	横 外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内面横刷毛。口縁部横無で。	口縁部破片。
11	② 7.5								B-2	①III②改良 ③A	縦 外面1次斜縦位刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。上面は強い横無でによりくまむ。	口縁部破片。
12	② 7.1								D-2	①I②改良 ③A	横 外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。内面斜縦位刷毛。口縁部横無で。	口縁部破片。
13	② 7.7								B-1	①II②改良 ③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横位の粗で。口縁部横無で。刷毛目は粗い。外面赤彩。	口縁部破片。
14	② 6.0								A-3	①I②改良 ③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で後、上面に刷毛。	口縁部破片。
15	② 5.9								A-1	①II②によ い改良 ③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。	口縁部破片。
16	② 5.2								A-1	①I②改良 ③A	横 外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内面横刷毛。口縁部横無で。内面上端部から外面赤彩。	口縁部破片。
17	② 4.4								A-3	①I②改良 ③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で後、上面に刷毛。外面赤彩。	口縁部破片。
18	② 4.8								A-1	①II②改良 ③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。	口縁部破片。
19	② 2.5								B-4	①I②によ い改良 ③A	横 外面1次斜縦位刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。内面上端部から外面赤彩。	口縁部破片。
20	② 3.4								A-3	①I②によ い改良 ③A	縦 外面1次縦刷毛。口縁部横無で後口縁上面から内面横刷毛。内外面赤彩。	口縁部破片。
21	② 4.6								B-4	①I②によ い改良 ③A	横 外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内面横刷毛。口縁部横無で。	口縁部破片。
22	② 5.0								B-4	①I②改良 ③A	横 外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。内面横刷毛。口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
23	② 5.7								A-1	①I②改良 ③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横位の無で後、縦位の無で。口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
24	② 3.6								B-1	①II②改良 ③A	縦 外面1次斜縦位刷毛。口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
25	② 5.2								B-1	①I②改良 ③A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位の無で。口縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
26	② 4.3								B-2	①III②によ い改良 ③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。内面横無。	口縁部破片。
27	② 3.7								B-2	①III②改良 ③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横無で。刷毛目は粗い。外面赤彩。	口縁部破片。
28	② 5.5	M-1								①III②改良 ③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横位の無で。	胴部破片。
29	② 7.1	M								①I②改良 ③A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位の無で。	胴部破片。
30	② 7.3	M-1								①I②改良 ③A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位の無で。外面赤彩。	胴部破片。

遺物観察表

(第130図、P L 44)

3 トレンチ

番号	量 ① 目 ② 高さ (cm)	突 形状	帯				通 孔		口径	①胎 土 ②色 調 ③焼 成	刷 毛 目	成・整形の特徴	備 考
			1	2	3	4	段	形状					
31	② 7.5	M-1						円	(7.4)		① I ② 洗黄 地③ A	縦 9 外面 1 次縦刷毛、内面横位無で後、 縦位の無で、外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
32	② 12.5	M-1									① II ② 洗黄 地③ A	縦 11 横 12 外面 1 次縦刷毛、突帯以上 2 次 B 種横刷毛。内面横位または斜縦位 無で、外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
33	② 9.0	M									① I ② 地③ A	縦 18 外面 1 次縦または斜縦位刷毛。内 面縦位の無で後、横位の無で、外 面赤彩。	胴部破片。
34	② 11.7	M-1					4?	小円	2.2		① I ② 地③ A	縦 12 外面 1 次斜縦位刷毛後、縦刷毛。 内面斜縦位の無で、内面接合痕残 す。外面赤彩。	胴部破片。
35	② 11.7	M-1					3?	円?	(5.6)		① III ② 洗黄 地③ A	横 10 外面 1 次縦刷毛、2 次 B 種横刷毛。 内面縦位の無で。	胴部破片。
36	② 8.2	M									① I ② 地③ A	縦 14 外面 1 次縦刷毛、内面斜縦位無で 後、突帯以上は横刷毛。	胴部破片。
37	② 7.5	M									① III ② 地③ A	縦 13 外面 1 次縦刷毛、内面縦位の無で 上端部に横刷毛。	胴部破片。
38	② 5.7	M									① I ② 洗黄 地③ A	縦 11 外面 1 次縦刷毛、内面縦または横 位の無で、外面赤彩。	胴部破片。
39	② 6.0	M-3						円?			① III ② ぶ い地③ A	縦 11 外面 1 次縦刷毛、内面縦位の無で、	胴部破片。 刷毛目不明瞭
40	② 7.0	M					3?	半円			① I ② 地③ A	横 10 外面 1 次斜縦位刷毛、2 次 B 種横 刷毛。内面斜縦位の無で、縦位の 無で、外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
41	② 7.3	M-1									① I ② 洗黄 地③ A	縦 9 外面 1 次縦刷毛、内面縦または横 位の無で。	胴部破片。
42	② 5.5	M-2					3?	半円 ?			① III ② ぶ い地③ A	縦 10 外面 1 次縦刷毛、内面横位無で後、 縦位の無で、内面赤彩。	胴部破片。
43	② 11.0	M-1									① III ② 地③ A	縦 11 外面 1 次縦刷毛、内面縦位の無で。	胴部破片。
44	② 7.5	M-1									① III ② 洗黄 地③ A	縦 12 外面 1 次縦刷毛、内面斜縦位の無 で後、下位は横位の無で。	胴部破片。
45	② 3.5	M									① I ② 地③ A	縦 9 外面 1 次縦刷毛、内面斜縦位無で。	胴部破片。 刷毛目不明瞭
46	② 4.3	三									① I ② 洗黄 地③ A	縦 9 外面 1 次縦刷毛、内面横位の無で。	胴部破片。 刷毛目不明瞭
47	② 6.6	M						円?	(9.0)		① III ② ぶ い地③ A	縦 10 外面 1 次縦刷毛、内面横位の無で。	胴部破片。
48	② 10.6	M-1									① I ② 洗黄 地③ A	縦 12 外面 1 次縦刷毛、内面横位の無で、 外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
49	② 5.5	M									① III ② 地③ B	縦 12 外面 1 次縦または斜縦位刷毛、内 面横位の無で、外面赤彩。	胴部破片。
50	② 5.1	M-2									① III ② 地③ A	縦 13 外面 1 次縦刷毛、2 次横刷毛。内 面横位の無で。	胴部破片。
51	② 4.8	方						円?			① I ② ぶ い地③ A	縦 11 外面 1 次縦刷毛、内面斜縦位無で 後、縦位の無で、外面赤彩。	胴部破片。
52	② 7.2	M-1									① I ② 地③ A	縦 11 外面 1 次縦刷毛、内面横位の無で 後、上端部に横刷毛。外面赤彩。	胴部破片。
53	② 8.1	M-1									① I ② 地③ A	横 9 外面 1 次縦刷毛、2 次横刷毛。内 面斜縦位の無で、外面赤彩。	胴部破片。
54	② 4.5	M-1									① III ② 地③ A	横 9 外面 1 次縦刷毛、2 次横刷毛。内 面横または斜縦位の無で、外面赤 彩。	胴部破片。

(第130図、P L 44)

3 トレンチ

番号	量目 ①径 ②高さ (cm)	突 帯				透 孔		口縁	①胎土 ②色調 ③焼成	刷毛目	成・整形の特徴	備 考
		形状	1	2	3	4	段					
55	② 5.5	M-1						円?			外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
56	② 7.7										外面1次縦刷毛、内面上位横位の撫で、下位は指押え。外面下部は横位の撫で。	基底部破片。
57	② 8.5	M-1P					3	半円			外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で後、斜縦位刷毛。	胴部破片。須原貫。
58	② 10.0	M-2									外面1次斜縦位刷毛、内面斜縦位の撫で。	明原形埴輪口縁部破片。

4 トレンチ出土遺物 (第131図、P L 44)

番号	量目 ①径 ②高さ (cm)	突 帯				透 孔		口縁	①胎土 ②色調 ③焼成	刷毛目	成・整形の特徴	備 考
		形状	1	2	3	4	段					
1	①(30.0) ② 13.0	M-1					3	半円?			外面1次縦刷毛、内面斜縦位の撫で後、1.5cm間隔で縦位の撫で。上端部に斜縦位刷毛。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。突帯に布目痕。
2	①(29.4) ② 12.5	M-1									外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で。内面に接合痕残す。	胴部破片。
3	①(27.2) ② 14.8	方						円	5.5		外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。内面斜縦位の撫で後、突帯以上に横刷毛。	胴部破片。
4	①(25.0) ② 19.0	M					2	円	5.7		外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。内面横位の撫で後、縦位の撫で。	胴部破片。
5	① 25.0 ② 15.0	M-1	11				2	方	横 7.1		外面1次縦刷毛、内面斜縦位の撫で。外面下部横位の撫で。底面は右を上を重ねる。	基底部破片。底面布目痕。
6	①(24.2) ② 15.1	M-1	12								外面1次縦刷毛、下部を横位の撫でた後、もう1度斜縦位の刷毛内面斜縦位の撫で後、上位に斜縦位の撫で。底面は左を上を重ねる。	基底部破片。
7	② 19.1	M				17				B-1	外面1次縦刷毛、内面横位の撫で後、縦位撫で。上半部は横刷毛。口縁部横撫で。外面赤彩。	第3突帯から口縁部破片。
8	② 16.7									B-1	外面1次縦刷毛、内面横位撫で後、縦位の撫での後に横刷毛。口縁部5横撫で。内面口縁上端部から外面赤彩。	口縁部破片。
9	② 9.3									A-3	外面1次縦刷毛、内面横刷毛後、縦位撫で。口縁部横撫で後、上面に刷毛を施す。外面赤彩。	口縁部破片。
10	② 8.4									B-4	外面1次縦刷毛、内面横刷毛後、縦位の撫で。口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
11	② 5.7									B-1	外面1次斜縦位刷毛、内面斜縦位刷毛。口縁部撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
12	② 9.2									B-1	外面1次縦刷毛、内面斜縦位刷毛。口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。

遺物観察表

(第131・132図、P L44・45)

4トレンチ

番号	量目 ① 径 ② 高さ (cm)	突 帯				透 孔		口縁	①胎土 ②色調 ③焼成	刷目	成・整形の特徴	備考
		形状	1	2	3	4	段					
13	② 11.7								B-1	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦刷毛、内面斜縦位刷毛 口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
14	② 9.7								B-1	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦刷毛、内面横刷毛。 口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
15	② 7.9								A-2	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫 で後、横刷毛。口縁部横撫で。外面 赤彩。	口縁部破片。
16	② 7.0								A-1	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦刷毛、内面横刷毛。 口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
17	② 5.9								A-3	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛 内面横刷毛。口縁部横撫で後、上 面に前毛を施す。内面接合痕残す。	口縁部破片。
18	② 9.2								B-4	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦位刷毛、内面斜縦位 撫で後、横刷毛。口縁部横撫で。	口縁部破片。
19	② 8.4								B-2	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛 内面斜縦位撫で。口縁部横撫で。	口縁部破片。
20	② 9.4								A-2	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦刷毛、内面斜縦位刷毛 口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
21	② 8.5								B-2	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦刷毛、内面横刷毛。 口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
22	② 8.0								A-3	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛 内面横刷毛。口縁部横撫で後、上 面に前毛を施す。	口縁部破片。
23	② 7.9								C-2	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦刷毛、2次横刷毛。 内面横刷毛。口縁部横撫で。内外 面赤彩。	口縁部破片。
24	② 6.3								B-4	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内 面横刷毛。口縁部横撫で。内面上 半面赤彩。	口縁部破片。
25	② 6.7								B-1	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内 面横刷毛。口縁部横撫で。外面赤 彩。	口縁部破片。
26	② 9.2								D-1	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口 縁部横撫で。	口縁部破片。
27	② 5.9								A-1	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口 縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
28	② 6.9								B-2	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛 内面横刷毛。口縁部横撫で。	口縁部破片。
29	② 6.6								B-1	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口 縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
30	② 5.8								A-1	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口 縁部横撫で。	口縁部破片。
31	② 6.0								A-2	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦刷毛、内面横位の撫で 口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
32	② 6.1								B-4	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦刷毛、内面横位の撫で 口縁部横撫で。	口縁部破片。
33	② 5.1								A-2	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口 縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
34	② 7.5								B-1	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口 縁部横撫で。内面の刷毛目は粗い。	口縁部破片。
35	② 6.2								A-2	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦刷毛、内面斜縦位刷毛 口縁部横撫で。	口縁部破片。
36	② 5.0								B-1	①胎土 ②色調 ③焼成	外面1次縦刷毛、内面斜縦位刷毛 口縁部横撫で。	口縁部破片。

(第132・133図、P L 45)

4 トレンチ

番号	量 ① 径 ② 高さ (cm)	突 帯				透 孔		口縁	①胎 土 ②色 調 ③焼 成	刷 目	成・整形の特徴	備 考
		形状	1	2	3	4	段					
37	② 5.7								B-3	① I ② 焼③ A	横 外面1次斜線位刷毛、2次B種横刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で後、上面に刷毛。	口縁部破片。
38	② 5.7								B-4	① III ② 浅黄 ③ A	横 外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で、外面赤彩。	口縁部破片。
39	② 6.1								A-2	① III ② 浅黄 ③ A	斜 外面1次斜線位刷毛、内面斜線位撫で、口縁部横撫で。	口縁部破片。
40	② 4.9								B-2	① I ② 焼③ A	斜 外面1次斜線位刷毛、内面斜線位撫で、口縁部横撫で。	口縁部破片。
41	② 4.9								A-2	① III ② 浅黄 ③ A	斜 外面1次斜線位刷毛、内面斜線位刷毛。口縁部横撫で。	口縁部破片。
42	② 5.2								A-2	① I ② 浅黄 ③ A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜線位刷毛。口縁部横撫で。	口縁部破片。
43	② 4.0								A-2	① III ② 焼③ A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜線位刷毛。口縁部横撫で。口縁上端部はつまみ出すように外に突出する。外面赤彩。	口縁部破片。
44	② 4.7								A-2	① I ② 浅黄 ③ A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜線位刷毛。口縁部横撫で、内外面赤彩。	口縁部破片。
45	② 2.9								B-4	① III ② ぶ い黄③ A	横 外面1次斜線位刷毛、内面斜線位撫で、口縁部横撫で、外面赤彩。	口縁部破片。
46	② 3.9								B-4	① I ② 浅黄 ③ A	横 外面1次斜線位刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で。	口縁部破片。
47	② 5.0								A-3	① I ② 浅黄 ③ A	横 外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で、外面赤彩。	口縁部破片。
48	② 6.6								A-2	① I ② 焼③ A	縦 外面1次縦刷毛、内面横撫で。口縁部横撫で、内外面赤彩。	口縁部破片。
49	② 6.5								A-2	① III ② 浅黄 ③ A	縦 外面1次縦刷毛、内面縦位の撫で。口縁部横撫で、刷毛目は粗い。	口縁部破片。
50	② 6.3								B-4	① I ② 焼③ A	横 外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で、外面赤彩。	口縁部破片。
51	② 4.9								B-2	① III ② ぶ い黄③ A	斜 外面1次斜線位刷毛、内面斜線位撫で後、縦位の撫で、口縁部横撫で、外面赤彩。	口縁部破片。 顕著質。
52	② 5.5								A-2	① III ② 浅黄 ③ A	斜 外面1次斜線位刷毛、内面斜線位刷毛。口縁部横撫で。	口縁部破片。
53	② 5.8								A-3	① I ② 焼③ A	縦 器内は薄い、外面1次縦刷毛、内面縦位の撫で。口縁部横撫で後、上面に刷毛。	口縁部破片。
54	② 5.3								B-4	① III ② 焼③ A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜線位撫で、口縁部横撫で、外面縁刻、外面赤彩。	口縁部破片。
55	② 4.6								A-2	① I ② 浅黄 ③ A	斜 外面1次斜線位刷毛、内面斜線位撫で、口縁部横撫で、外面赤彩。	口縁部破片。
56	② 4.0								B-2	① III ② 浅黄 ③ A	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で、外面赤彩。	口縁部破片。
57	② 3.0								B-3	① I ② 焼③ A	横 外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で後、上面に刷毛。外面赤彩。	口縁部破片。
58	② 5.1								B-1	① III ② 焼③ A	斜 外面1次斜線位刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で。	口縁部破片。

番号	量目 ①径 ②高さ (cm)	突 帯				造 孔		口縁	①胎土 ②色調 ③焼成	刷毛目	成・整形の特徴	備考
		形状	1	2	3	4	段					
59	② 4.7								A-3	①II②橙③A	斜 9 外面1次斜縦位刷毛、内面横刷毛、口縁部横撫で後、上面に撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
60	② 4.1								A-1	①I②橙③A	縦 10 外面1次縦刷毛、内面横刷毛、口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
61	② 4.2								A-3	①I②浅黄橙③A	縦 12 外面1次縦刷毛、内面横刷毛、口縁部横撫で後、上面に刷毛。外面赤彩。	口縁部破片。
62	② 4.5								B-2	①III②橙③A	横 15 外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内面斜縦位刷毛、口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
63	② 5.3								B-2	①III②浅黄橙③A	縦 11 外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で。口縁部横撫で。	口縁部破片。
64	② 4.1								B-4	①I②橙③A	斜 10 外面1次斜縦位刷毛、内面横刷毛、口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
65	② 4.0								A-1	①I②浅黄橙③A	横 12 外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内面横刷毛。口縁部横撫で。	口縁部破片。
66	② 3.6								B-2	①I②橙③A	斜 12 外面1次斜縦位刷毛、内面横刷毛、口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
67	② 4.1								A-1	①I②橙③A	縦 10 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
68	② 3.7								B-4	①I②橙③A	斜 10 外面1次斜縦位刷毛、内面横刷毛、口縁部横撫で。内外面赤彩。	口縁部破片。
69	② 20.0	M			13	3	円	65.0		①II②橙③A	縦 11 外面1次縦刷毛、突起以上は2次B種横刷毛。内面横位の撫で後、縦位の撫で。	胴部破片。
70	② 16.6	M				32	半円			①III②橙③A	縦 13 外面1次縦刷毛、内面縦位の撫で。	胴部破片。
71	② 15.0	M					半円?	横 8.6		①I②橙③A	縦 13 外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で。内面接合痕残す。	胴部破片。
72	② 12.0	M				2	円			①III②橙③A	縦 10 外面1次縦刷毛、突起以上は2次横刷毛か?内面横位の撫で後、縦位の撫で。	胴部破片。
73	② 12.3	M-1					半円			①I②浅黄橙③A	横 9 外面1次縦刷毛、突起以上2次B種横刷毛。内面斜縦位撫で。	胴部破片。
74	② 14.0	M-2								①III②橙③A	縦 12 外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で。	胴部破片。
75	② 11.5	M-2								①I②浅黄橙③A	斜 10 外面1次斜縦位刷毛、内面縦位の撫で後、横位の撫で。外面突起以上赤彩。	胴部破片。
76	② 6.5	M-1								①I②橙③A	横 11 外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内面横位の撫で後、縦位撫で。外面赤彩。	胴部破片。
77	② 15.6	台								①III②橙③A	縦 11 突起は偏平である。外面1次斜縦位刷毛、内面斜縦位撫で。外面赤彩。	胴部破片。
78	② 14.5	M								①III②浅黄橙③A	縦 8 外面1次縦刷毛、内面横位の撫で。外面突起以上赤彩。	胴部破片。
79	② 18.3	M-1			14	2	円	(4.4)		①III②外・橙、内・にぶい・黄橙③A	横 12 外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内面横位の撫で。外面第2段から第4段まで赤彩と思われる。	胴部破片。
80	② 10.6	M-1								①I②橙③A	縦 15 外面1次縦刷毛、内面横位の撫で後、上部部は横刷毛。外面突起以上赤彩。	胴部破片。

(第134・135図、P L 45)

4 トレンチ

番号	量 ① 径 ② 高さ (cm)	突 帯				透 孔		口縁	①胎 土 ②色 調 ③焼 成	測 目 目 目	成・整形の特徴	備 考
		形状	1	2	3	4	形状					
81	② 11.3	M-1							①II②焼③A	横	外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛、内面斜縦位無で、上部帯は横刷毛。	胴部破片。
82	② 7.3	M-1							①I②洗黄③A	縦	外面1次縦刷毛、2次横刷毛、内面横位の撫で、縦位の撫で。	胴部破片。
83	② 12.6	M-1							①III②焼③A	斜	外面1次斜縦位刷毛、内面斜縦位撫で。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
84	② 11.3	M-1					円?		①III②洗黄③A	縦	外面1次縦刷毛、内面横位の撫で、縦位の撫で。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
85	② 6.3	M-1					半円		①I②焼③A	縦	外面1次縦刷毛、内面横位の撫で後、縦位の撫で。外面赤彩。	胴部破片。
86	② 3.9	M-1					半円 横 7.9		①I②洗黄③A	縦	外面1次縦刷毛、内面横位の撫で。外面半円の透孔と突帯を挟んで二重半円の縁刻か?	胴部破片。
87	② 7.6	M-1					半円		①III②洗黄③A	縦	外面1次縦刷毛、内面横位の撫で後、縦位の撫で。内面接合痕明確に残す。外面赤彩。	胴部破片。
88	② 10.6	M-1							①II②にふい黄③A	縦	外面1次縦刷毛、内面横位の撫で後、縦位の撫で。刷毛目は粗い。	胴部破片。
89	② 8.8	M-1							①I②洗黄③A	縦	外面1次縦刷毛、内面斜縦位無で。	胴部破片。
90	② 7.3	M-1							①I②洗黄③A	縦	外面1次縦刷毛、内面横位の撫で後、縦位の撫で。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
91	② 6.4	M-1					円?		①I②焼③A	縦	外面1次縦刷毛、内面斜縦位無で。刷毛目は粗い。外面赤彩。	胴部破片。
92	② 5.9	M-1							①III②焼③A	横	外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛、内面斜縦位無で。外面赤彩。	胴部破片。
93	② 10.2	M					小円 (3.0)		①III②にふい焼③A	縦	外面1次縦刷毛、内面斜縦位無で、上位は横刷毛、外面赤彩。	胴部破片。
94	② 9.7	M-1							①III②にふい焼③A	縦	外面1次縦刷毛、内面斜縦位無で後、突帯以上は横刷毛、外面赤彩。	胴部破片。
95	② 9.2	M-2							①I②洗黄③A	縦	外面1次斜縦位刷毛、内面縦位の撫で。刷毛目は粗い。外面赤彩。	胴部破片。
96	② 5.3	M					半円		①I②焼③A	縦	外面1次縦刷毛、内面横位の撫で。内面接合痕残す。	胴部破片か?
97	② 7.1	M-1					半円		①III②焼③A	横	外面1次斜縦位刷毛、2次B種横刷毛、内面斜縦位無で、外面赤彩。	胴部破片。
98	② 7.8	M-2					円		①III②洗黄③A	縦	外面1次縦刷毛、内面横位の撫で後、縦位の撫で。内面横位の縁刻外面赤彩。	胴部破片。
99	② 6.7	M					円		①III②焼③A	縦	外面1次縦刷毛、内面横位の撫で後、縦位の撫で。内面に縁刻あり。外面赤彩。	胴部破片。
100	② 8.1	M-1							①I②焼③A	縦	外面1次縦刷毛、内面横位の撫で後、横位の撫で。外面赤彩。	胴部破片。
101	② 8.7	M-1							①III②焼③A	横	外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛、内面横位の撫で後、斜縦位無で。	胴部破片。
102	② 5.1	M-1					半円		①III②焼③A	縦	外面1次縦刷毛、内面横位または縦位の撫で後、横刷毛、半円の透孔と突帯を挟み二重半円の縁刻。外面赤彩。	胴部破片。

番号	縦目 ①往 ②高さ (cm)	突 帯				透 孔		口縁	①胎 土 ②色 調 ③焼 成	刷 毛 目 目	成・整形の特徴	備 考	
		形状	1	2	3	4	段 形状						縦×横
103	② 7.4	M-1					3	半円			①胎②焼③A 縦 11	外面1次縦刷毛、内面横位無で縦位の無で。突帯を挟んで下に半円、上に二重半円の縁部。外面赤彩。	胴部破片。
104	② 7.3	M-1						円?			①胎②灰③A 縦 10	外面1次縦刷毛、内面横位の無で後、部分的に縦位の無で。	胴部破片。須恵質。
105	② 6.4	方						半円?			①I②焼③A 縦 13	外面1次縦刷毛、内面横位の無で。縦位の無で。外面赤彩。	胴部破片。
106	② 7.0	M						円			①I②浅黄 橙③A 縦 13	外面1次縦刷毛、内面斜縦位無で。外面赤彩。	胴部破片。
107	② 8.0	方									①I②浅黄 橙③A 縦 13	外面1次縦刷毛、内面横位の無で。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
108	② 7.8	方						半円?			①I②焼③A 縦 10	外面1次縦刷毛、内面縦位の無で。	胴部破片。
109	② 10.2	M-1						半円?			①I②焼③A 縦 12	外面1次縦刷毛、内面斜縦位無で後、突帯以上横刷毛。外面赤彩。	胴部破片。
110	② 9.5	台						円?	(8.2)		①II②浅黄 橙③A 縦 12	外面1次縦刷毛、内面横位の無で後、縦位の無で。	胴部破片。
111	② 6.7	M-1						円?			①I②焼③A 縦 10	外面1次縦刷毛、内面斜縦位無で後、突帯以上は斜縦位無で。外面赤彩。	胴部破片。
112	② 6.7	M-1									①胎②に よ い 焼③A 縦 14	外面1次斜縦位刷毛、内面斜縦位無で後、上端は横位の無で。外面赤彩。	胴部破片。
113	② 6.7	M-1									①胎②に よ い 焼③A 縦 12	外面1次縦刷毛、内面横位の無で。	胴部破片。須恵質。
114	② 8.1	台						円			①I②浅黄 橙③A 縦 9	突帯は偏平である。外面1次縦刷毛、内面斜縦位無で。刷毛目は粗い。外面赤彩。	胴部破片。
115	② 7.3	方									①胎②焼③A 縦 10	外面1次縦刷毛、内面斜縦位無で。	胴部破片。
116	② 5.6	M-2									①I②焼③A 縦 6	外面1次縦刷毛、内面斜縦位無で。外面赤彩。	胴部破片。
117	② 5.7	M-2									①胎②焼③A 縦 12	外面1次縦刷毛、内面横位の無で後、縦位の無で。	胴部破片。
118	② 5.8	M-1									①胎②浅黄 橙③A 縦 11	突帯の突出度は高い。外面1次縦刷毛、内面斜縦位刷毛後、縦位の無で。外面赤彩。	胴部破片。
119	② 6.9	台									①I②浅黄 橙③A 横 12	外面1次縦刷毛、2次横刷毛、内面横刷毛後、縦位の無で。外面赤彩。	胴部破片。
120	② 5.6	M-1									①I②浅黄 橙③A 縦 10	外面1次縦刷毛、内面横位の無で後、縦位の無で。外面赤彩。	胴部破片。
121	② 5.7	M-2						半円 or方			①I②浅黄 橙③A 縦 12	外面1次縦刷毛、2次横刷毛、内面横刷毛。外面赤彩。	胴部破片。
122	② 6.7	M-1						半円?			①胎②灰黄 ③A 横 12	内面横位無で後、縦位の無で。	胴部破片。須恵質。
123	② 5.5	M-1						円			①胎②焼③A 横 11	外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内面横刷毛後、横位の無で。外面赤彩。	胴部破片。
124	② 8.3	M									①I②焼③A 縦 11	外面1次斜縦位刷毛、内面頭部以上は横位の無で後、横刷毛。以下は横位の無で後、縦位の無で。外面赤彩。	朝顔形輪破片。

(第136図、P L 45)

4 トレンチ

番号	量目 ① 径 ② 高さ (cm)	突 帯				透 孔		口縁	①胎 土 ②色 調 ③焼 成	刷 毛 目	成・整形の特徴	備 考
		形状	1	2	3	4	段					
125	② 7.3								①Ⅲ②焼③A	11	縦 外面1次縦位刷毛、内面斜縦位撫で。底面には棒(管)状圧痕が残る。	基底部破片。
126	② 14.8					4?	小円	2.5	①Ⅲ②焼③A	14	縦 外面1次斜縦位刷毛、内面斜縦位刷毛後、横位の撫で。外面赤彩。	第4段破片。
127	② 9.1								①Ⅲ②焼③A	12	横 外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内面横刷毛。外面緑彩。内外面赤彩。	胴部破片。
128	② 6.2								①Ⅲ②焼③A	13	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で。外面下部は撫で。	基底部破片。
129	② 7.3								①Ⅲ②焼③A	12	横 外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。内面横刷毛。外面緑彩。外面赤彩。	胴部破片。
130	② 5.2								①Ⅲ②焼③A	12	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で後、斜縦位刷毛。外面緑彩。外面赤彩。	胴部破片。
131	② 7.2								①Ⅲ②にぶ い焼③B	9	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で後、横刷毛。外面緑彩。外面赤彩。	胴部破片。
132	② 4.9								①Ⅰ②焼③A	11	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で後、上位に横刷毛。外面緑彩。外面赤彩。	胴部破片。
133	② 4.9								①Ⅲ②焼③A	10	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で。外面突帯上に二重半円の線刻。外面赤彩。	胴部破片。
134	② 3.7								①Ⅰ②焼③A	10	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で後、上位は横刷毛、下位は縦位撫で。外面二重半円の線刻。外面赤彩。	胴部破片。
135	② 3.7								①Ⅲ②焼③A	11	横 外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。内面斜縦位撫で。外面線刻。外面赤彩。	胴部破片。
136	② 3.5								①Ⅰ②浅黄 焼③A	13	横 外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。内面横位または縦位の撫で。外面線刻。	胴部破片。
137	② 2.8								①Ⅰ②焼③A	12	横 外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内面横刷毛後、縦位撫で。外面線刻。外面赤彩。	胴部破片。
138	② 5.4								①Ⅲ②にぶ い焼③A	8	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位刷毛。外面線刻。外面赤彩。	胴部破片。
139	② 4.1								①Ⅲ②焼③A	11	縦 外面1次縦刷毛、内面横位の撫で後、上位は横刷毛、下位は縦位撫で。外面線刻。	胴部破片。
140	② 7.2								①Ⅲ②焼③A	12	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛後、縦位の線刻。	胴部破片。
141	② 4.0								①Ⅲ②にぶ い焼③A	9	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛後、横位の線刻。	胴部破片。
142	② 2.6								①Ⅰ②にぶ い焼③A	11	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。内面線刻。外面赤彩。	胴部破片。

遺物観察表

5 トレンチ出土遺物 (第137・138図、P L 45)

番号	量目 ①径 ②高さ ③(cm)	突 部				透 孔			口径	①胎土 ②色調 ③焼成	刷毛目	成・整形の特徴	備考	
		形状	1	2	3	4	段	形状						縦×横
1	①(24.2) ② 21.0	M-1	11									①I②浅黄 ③A	縦 11 外面1次斜線位刷毛、内面縦位の 無で後、横位の無で、底面に棒(管) 状圧痕あり。	基底部から第 2段破片。
2	①(28.0) ② 12.2	M-1						円				①II②橙 ③A	縦 9 外面1次縦刷毛、内面縦位の無で、 突部部は横位の無で。	胴部破片。
3	①(22.0)											①II②によ い橙③A	斜 10 外面1次斜線位刷毛、内面斜線位 無で、下端部は指押え、外面下端 部横位の無で、底面には棒(管)状 圧痕あり。	基底部破片。
4	② 8.6											①II②橙 ③A	縦 11 外面1次縦刷毛、内面縦位の無で、	基底部破片。
5	② 7.9								B-4			①I②浅黄 ③A	縦 10 外面1次斜線位刷毛、2次横刷毛、 内面横刷毛。口縁部横無で。	口縁部破片。
6	② 4.4								A-1			①I②橙 ③A	縦 11 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口 縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
7	② 4.5								A-1			①II②浅黄 ③A	縦 10 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口 縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
8	② 5.5								A-3			①II②浅黄 ③A	横 10 外面1次縦刷毛、2次横刷毛、内 面横位の無で、口縁部横無で。内 外面赤彩。	口縁部破片。
9	② 4.7								B-4			①II②橙 ③A	斜 8 外面1次斜線位刷毛、内面縦位の 無で、口縁部横無で。内面口縁端 部に2条の沈線を持つ。外面赤彩。	口縁部破片。
10	② 3.5								A-2			①I②浅黄 ③A	縦 10 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口 縁部横無で。	口縁部破片。
11	② 3.9								B-1			①I②浅黄 ③A	横 12 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口 縁部横無で。外面赤彩。	口縁部破片。
12	② 10.9	M-1										①I②浅黄 ③A	縦 13 外面1次縦刷毛、内面縦位無で、 内面接合残痕す。外面赤彩。	胴部破片。
13	② 7.0	M-1						円?				①II②橙 ③A	縦 8 外面1次縦刷毛、内面斜線位の無 で。突部部は横位の無で。	胴部破片。
14	② 5.2											①I②浅黄 ③A	縦 9 外面1次縦刷毛、内面斜線位無 で後、縦位の無で、外面二重平円の 縁見。外面赤彩。	胴部破片。
15	② 4.8											①II②浅黄 ③A	縦 9 外面1次縦刷毛、内面横位の無 で後、上端部に横刷毛。外面斜列。 外面赤彩。	胴部破片。
16	② 6.2	M-1										①II②橙 ③A	斜 8 外面1次斜線位刷毛、内面斜線位 無で。	胴部破片。
17	② 3.2	M						平円?				①I②橙 ③A	縦 8 外面1次縦刷毛、内面斜線位無 で後、横刷毛。外面赤彩。	胴部破片。 刷毛目不明瞭
18	② 5.1	M-1						円?				①II②橙 ③A	横 10 外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。 内面斜線位無で、突部以上は横刷 毛後、縦位の無で。外面赤彩。	胴部破片。
19	② 3.8											①I②浅黄 ③A	縦 15 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。内 面斜列。外面赤彩。	胴部破片。
20	② 5.5											①I②橙 ③A	縦 10 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。外 面斜列。外面赤彩。	胴部破片。
21	② 6.7											①II②橙 ③A	縦 11 外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。 内面横刷毛後、縦位の無で。外面 赤彩。	胴部破片。
22	② 4.9											①I②浅黄 ③A	縦 12 外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。 内面横刷毛。	胴部破片。

(第138図、P L 45)

5 トレンチ

番号	量目 ①径 ②高さ (cm)	突帯				透孔		口縁	①胎土 ②色 ③焼成	刷目	成・整形の特徴	備考
		形状	1	2	3	4	段					
23	② 4.4						円?	(8.4)			外面1次縦刷毛後、弧状の刷毛、内面斜縦位刷毛後、縦位の撫で、外面赤彩。	胴部破片。
24	② 7.5						円?				外面1次縦刷毛、2次横刷毛、内面斜縦位撫で。外面赤彩する。	胴部破片。

6 トレンチ出土遺物 (第139・140図、P L 46)

番号	量目 ①径 ②高さ (cm)	突帯				透孔		口縁	①胎土 ②色 ③焼成	刷目	成・整形の特徴	備考
		形状	1	2	3	4	段					
1	① 口(27.6) 胴(26.5) 底(24.5)	方 orM	15	11	12	2	半円	(10.8) ×(5.9)			外面1次縦刷毛、第2段から第4段は、2次B種横刷毛、内面斜縦位撫で後、斜縦位の刷毛、外面下部に横位の刷毛状工具痕、内面下部に縦位の刷毛痕。外面の磨滅著しい。	第1段から第4段。
2	①(27.0) ② 13.7	M-1									外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛、内面横位の撫で後、斜縦位の撫で、外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
3	① 胴(26.9) 底(20.0) ② 30.5	M	10	11		3	円	(5.9)			外面縦または斜縦位刷毛、下部横位の撫で、内面横位の撫で、底面は左を上に乗ねる。	基底部から第3段破片。
4	①(22.4)		13			2	円or 半円				外面1次縦刷毛、下部横位の撫で、内面斜縦位撫で、下部部は指押え、突帯の貼り付け部分に横位の沈線1条あり。	基底部破片。
5	② 7.5								B-2		外面1次斜縦位刷毛、内面横刷毛、口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
6	② 2.7								A-2		外面1次縦刷毛、口縁部横撫で、刷毛目は粗い。	口縁部破片。
7	② 4.7								B-1		外面1次縦刷毛、内面横刷毛、口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
8	② 7.6										外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で。	胴部破片。
9	② 9.2	M									外面1次縦または斜縦位刷毛、内面横位の撫で、突帯前部は横撫でが強く、沈線状にくぼむ。内面接合痕残す。	胴部破片。
10	② 11.0	M									外面1次斜縦位刷毛、内面斜縦位撫で。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
11	② 8.0	M-1					半円				外面1次縦刷毛、内面横刷毛、内面縁列、外面赤彩。	胴部破片。
12	② 9.1	M-1									外面1次斜縦位刷毛、内面斜縦位撫で後、縦位の撫で。	胴部破片。
13	② 7.1	M-1									外面1次縦刷毛、内面横位の撫で後、縦位の撫で。外面赤彩。	胴部破片。
14	② 3.5	M-1									外面1次縦刷毛、2次横刷毛、内面斜縦位撫で。外面赤彩。	胴部破片。

遺物観察表

(第140図、P.L46)

6トレンチ

番号	量目 ①径 ②高さ (cm)	突 帯				透 孔		口縁	①胎土 ②色調 ③焼成	刷毛目	成・整形の特徴	備 考	
		形状	1	2	3	4	段						形状
15	② 6.2	M						平円?		①胎土②橙③A	縦 11	外面1次刷毛、内面斜縦位無で、突帯部は横位の無で、外面赤彩。	胴部破片。
16	② 6.8	M						円?		①I②浅黄③A	縦 13	外面1次刷毛、内面斜縦位無で、外面線刻。外面赤彩。	胴部破片。
17	② 5.8	方								①II②明黄③A	縦 12	外面は磨減が著しく不明。内面斜縦位刷毛。	胴部破片。
18	② 8.0	三								①II②浅黄③A	縦 14	外面1次刷毛、内面斜縦位無で、突帯部に横位の無で、外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
19	② 7.5	M-1								①胎土②浅黄③A	縦 11	外面1次刷毛、内面斜縦位無で、	胴部破片。
20	② 5.6	M-1								①胎土②灰③A	縦 14	外面1次刷毛、内面斜縦位無で、突帯部は横位の無で、	胴部破片。須恵質。
21	② 15.2	M-1	11				2	円? (5.4)		①II②浅黄③A	縦 12	外面1次刷毛、内面斜縦位無で、	底部破片。
22	② 10.3							平円 縦 6.5		①胎土②橙③A	横 12	外面1次刷毛、2次B種刷毛。内面斜縦位刷毛。外面赤彩。	胴部破片。
23	② 9.3	M-1								①胎土②橙③A	縦 12	外面1次刷毛、突帯以下は2次刷毛。内面斜縦位無で、縦位の無で、外面赤彩。	胴部破片。
24	② 4.3								B-2	①I②橙③A	斜 12	外面1次斜縦位刷毛、内面横位の無で。口縁部線無で。外面赤彩。内面線刻あり。	口縁部破片。

7トレンチ出土遺物 (第142図、P.L46・47)

番号	量目 ①径 ②高さ (cm)	突 帯				透 孔		口縁	①胎土 ②色調 ③焼成	刷毛目	成・整形の特徴	備 考	
		形状	1	2	3	4	段						形状
1	② 12.1	M-1						平円		①胎土②橙③A	縦 10	外面1次刷毛、内面斜縦位無で、	胴部破片。
2	② 13.2	M-1								①I②橙③A	縦 10	外面1次刷毛、内面斜縦位無で、突帯部は横位の無で、	胴部破片。
3	② 12.6	M						平円?		①II②ぶい黄③A	縦 13	外面1次刷毛、内面横位の無で、内面接合痕残す。	胴部破片。
4	② 12.0	方								①I②淡黄③A	横 12	外面1次刷毛、2次B種刷毛。内面斜縦位刷毛。	胴部破片。
5	② 13.0	M						円? (7.0)		①I②橙③A	縦 10	外面1次刷毛、内面斜縦位無で、透孔後内面より無で。	胴部破片。
6	② 9.2	M-1								①I②橙③A	縦 12	外面1次刷毛、内面斜縦位無で、	胴部破片。
7	② 6.0	M-1								①I②浅黄③A	縦 10	外面1次刷毛、内面横位無で、上位に横刷毛。	胴部破片。
8	② 4.8	M								①I②ぶい黄③A	縦 12	外面1次刷毛、内面横位の無で、外面線刻。外面2条の線刻。	胴部破片。
9	② 11.1	M								①胎土②灰③A	横 12	外面1次刷毛、2次横刷毛。内面横位の無で、外面赤彩。	胴部破片。須恵質。
10	② 13.0	台						円?		①I②浅黄③A	縦 10	外面1次刷毛、内面斜縦位無で、	胴部破片。
11	② 6.3	三								①I②淡黄③A	縦 10	外面1次刷毛、内面斜縦位または横位の無で。	胴部破片。刷毛目不明瞭

(第142・143図、P.L46)

7トレンチ

番号	最目 ①径 ②高さ (cm)	突帯				透孔		口縁	①胎土 ②色 ③焼成	刷毛目	成・整形の特徴	備考
		形状	1	2	3	4	段					
12	② 10.0	M-1									①I②焼③A 外面1次斜線位刷毛、内面斜線位刷毛後、突帯部に横位の撫で。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
13	② 7.6	台									①I②淡黄③A 外面1次縦刷毛、内面斜線位撫で後、突帯部に横位の撫で。	胴部破片。
14	② 6.2	台									①I②焼③A 外面1次縦刷毛、内面横位の撫で。刷毛目は粗い。外面赤彩。	胴部破片。
15	② 8.7	M									①I②焼③A 外面1次縦刷毛、内面斜線位撫で。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
16	② 6.2	M-1									①I②焼③A 外面1次縦刷毛、内面斜線位撫で。	胴部破片。
17	② 8.2	M									①I②焼③A 外面1次縦刷毛、内面横位撫で後斜線位の撫で。	胴部破片。
18	② 6.7	M									①II②淡黄③A 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。	胴部破片。
19	② 8.2	方									①I②焼③A 外面1次縦刷毛、2次B横刷毛。内面上位は横刷毛、下位は横位撫で後に、縦位の撫で。外面赤彩。	胴部破片。
20	② 6.4	M-1									①I②焼③A 外面1次縦刷毛、内面斜線位撫で。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
21	①(29.2) ② 27.0	M		11	11	2	円	(7.3)			①III②に い黄橙③A 外面1次縦刷毛、2次B横刷毛。内面斜線位撫で。第3突帯以上外面赤彩か？	第1から第3突帯破片。
22	①(28.0) ② 17.3	M-1									①III②に い黄橙③A 外面1次斜線位刷毛、内面斜線位撫で。	胴部破片。
23	①(20.1) ② 14.4	M-1	11								①II②に い黄橙③A 外面1次縦刷毛、内面斜線位撫で。突帯部は横位の撫で。外面突帯下3.5cmに横位の沈線あり。	基底部破片。
24	①(60.0) ② 5.7								E	①III②焼③A 外面1次斜線位刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で。外面赤彩。	朝顔形地輪口縁部破片。	
25	② 11.2								B-1	①II②淡黄 橙③A 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。	
26	② 7.2								B-2	①I②に い橙③A 外面1次斜線位刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で。	口縁部破片。	
27	② 7.5								A-1	①III②焼③A 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。	
28	② 13.2								B-2	①III②に い橙③A 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。	
29	② 5.9								A-2	①III②焼③A 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で。内面線刻。	口縁部破片。	
30	② 6.4								B-4	①I②焼③A 外面1次斜線位刷毛、2次横刷毛。内面横刷毛。口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。	
31	② 7.4								A-3	①I②淡黄 ③A 外面1次縦刷毛、内面横位の撫で後、上部部に横刷毛。口縁部横撫で。内面線刻。	口縁部破片。	
32	② 4.5								B-4	①I②淡黄 ③A 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で。	口縁部破片。	
33	② 7.6								A-3	①I②焼③A 外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内面横刷毛。口縁部横撫で後、上面に刷毛。外面赤彩。	口縁部破片。	
34	② 4.7								B-1	①I②焼③A 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。	

遺物観察表

(第143・144図、P L 46・47)

7トレンチ

番号	罫目 ①径 ②高さ (cm)	突帯				透孔		口縁	①胎土 ②色調 ③焼成	刷毛目	成・整形の特徴	備考
		形状	1	2	3	4	形状					
35	② 3.5								B-4	①I②橙③A	外面1次縦刷毛、内面横位刷毛。口縁部横撫で。	口縁部破片。
36	② 9.2	M					円	(10.0)		①I②浅黄橙③A	外面1次縦刷毛、内面横位または縦位の撫で後、上位に横刷毛。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
37	② 8.6	M-1								①II②橙③A	外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で。	胴部破片。
38	② 9.2	方					小円	(4.0)		①II②にぶい橙③A	外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。内面斜縦位刷毛後、縦位の撫で。	胴部破片。
39	② 9.5	方					平円	横 7.9		①I②橙③A	外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内面斜縦位撫で。内面縦刷。外面赤彩。	胴部破片。
40	② 6.6	M-1					円?			①I②橙③A	外面1次斜縦位刷毛、内面横位の撫で後、縦位の撫で。	胴部破片。
41	② 5.2	M-1					円?	(7.0)		①I②浅黄橙③A	外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で後、突帯部は横位の撫で。透孔後内面より撫でる。	胴部破片。須恵質。
42	② 6.1									①I②橙③A	斜 外面1次縦刷毛後、斜縦位の刷毛。内面横刷毛。外面赤彩。	胴部破片。
43	② 8.7	三								①I②浅黄橙③A	縦 外面1次縦刷毛、内面縦位の撫で後、横位の撫で。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
44	② 6.1	M-1								①I②浅黄③A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で後、突帯部は横位の撫で。	胴部破片。
45	② 9.8									①II②浅黄橙③A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で。	基底部破片。
46	② 8.5									①III②灰黄褐③A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で。底面に棒(管)状圧痕あり。	基底部破片。
47	② 8.9									①III②浅黄③A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で。下層部は横位の撫で、底面に棒(管)状圧痕あり。底面は右を上を重ねる。	基底部破片。
48	② 13.2	M-1	11				円?			①II②浅黄橙③A	縦 外面1次斜縦位刷毛、内面縦位撫で、下位は斜縦位撫で。外面突帯以上赤彩。	基底部から第1突帯破片。
49	② 17.4	M	11							①I②橙③A	斜 外面1次斜縦位刷毛後、縦位の撫で。内面斜縦位撫で。下層部は指押え。外面突帯以上赤彩。	基底部破片。
50	② 8.0									①I②橙③A	横 外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。内面横刷毛後、縦位の撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
51	② 8.9									①I②橙③A	横 外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。内面横位の撫で後、上位は横刷毛。外面縦刷。外面赤彩。	胴部破片。
52	② 9.2									①I②浅黄橙③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横位または斜縦位の撫で後、上位に横刷毛。外面二重平円の縁刷。外面赤彩。	胴部破片。
53	② 5.3									①III②橙③A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で。外面縦刷。外面赤彩。	胴部破片。
54	② 7.7						円or 平円	(8.0)		①III②橙③A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で後、縦位の撫で。内面混合痕残す。	胴部破片。

9トレンチ出土遺物 (第141図、P.L47)

番号	量目 ①径 ②高さ (cm)	突帯				透孔		口縁	①胎土 ②色 ③焼成	刷毛目	成・整形の特徴	備考
		形状	1	2	3	4	段					
1	② 4.4								B-1	①I②残黄 ③A	斜 8 外面1次斜縦位刷毛、内面横位の 無で、口縁部横無で、外面赤彩。	口縁部破片。
2	② 2.8								A-1	①I②残黄 ③B	斜 9 外面1次斜縦位刷毛、内面横刷毛。 口縁部横無で、外面赤彩。	口縁部破片。
3	② 9.0	M								①III②淡青 ③A	縦 11 外面1次縦刷毛、内面横位の無で 後、縦位の無で、外面突帯以上赤 彩。	胴部破片。
4	② 6.0	M								①II②ぶ い黄③A	縦 11 外面1次縦刷毛後、撫でて刷毛目 を消す。内面斜縦位無で、内面接 合痕残す。	胴部破片。
5	② 2.5								B-3	①I②残黄 ③A	横 10 外面1次斜縦位刷毛、2次横刷毛。 内面横刷毛。口縁部横無で後、上 面に刷毛。外面赤彩。	口縁部破片。
6	② 3.9	M								①I②淡黄 ③A	縦 13 突帯は扁平である。外面1次縦刷 毛、内面斜縦位無で。	胴部破片。
7	② 3.2	台								①I②残黄 ③A	縦 13 外面1次縦刷毛、内面横刷毛後、 縦位の無で、外面突帯以上赤彩。	胴部破片。 刷毛目不明瞭
8	② 4.4								A-1	①I②横③ A	縦 13 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口 縁部横無で。	口縁部破片。
9	② 7.4	M-1					円?	(9.0)		①I②横③ A	縦 9 外面1次縦刷毛、内面横位の無で 後、縦位の無で。	胴部破片。
10	② 6.4	M-1								①I②淡黄 ③A	横 12 外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。 内面斜縦位無で。	胴部破片。
11	② 6.5									①III②横③ A	縦 7 外面1次縦刷毛、下端部は横位の 無で。内面横位の無で。	基底部破片。
12	② 4.7									①II②横③ A	縦 11 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。外 面赤彩。	胴部破片。
13	② 6.3									①III②淡黄 ③A	斜 13 外面1次斜縦位刷毛、内面斜縦位 無で後、横刷毛。外面赤彩。	胴部破片。
14	② 5.3									①I②横③ A	横 13 外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内 面斜縦位無で。	胴部破片。
15	② 4.1									①III②横③ A	横 15 外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。 内面横位の無で。	胴部破片。

10トレンチ出土遺物 (第149図)

番号	量目 ①径 ②高さ (cm)	突帯				透孔		口縁	①胎土 ②色 ③焼成	刷毛目	成・整形の特徴	備考
		形状	1	2	3	4	段					
1	② 6.0									①I②横③ A	縦 10 外面1次縦刷毛、内面斜縦位無で、 外面赤彩。	胴部破片。
2	② 5.0									①I②横③ A	横 11 外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内 面斜縦位無で。	胴部破片。
3	② 3.5									①I②横③ A	縦 10 外面1次縦刷毛、内面斜縦位無で、 外面赤彩。	胴部破片。
4	② 4.5						円?	(6.2)		①I②横③ A	縦 14 外面1次縦刷毛、一部斜位の無で、 内面斜縦位無で。内外面赤彩。	胴部破片。

遺物観察表

11トレンチ出土遺物(第145~147図、P L 47)

番号	星目 ①径 ②高さ (cm)	突 帯				透 孔		口径	①胎土 ②色調 ③焼成	刷毛目	成・整形の特徴	備考	
		形状	1	2	3	4	段						形状
1	① 29.0 ② 22.6 ③ 38.2	M	16	12			2	円	(6.1) ×(4.2)		①II②に ぶい貴橙③A	外面1次刷毛、内面斜紋位 で、上部に横刷毛。刷毛目は粗い。 外面第2突帯以上赤彩。	基底部から第 3段破片。
2	① 34.0 ② 29.5 ③ 25.4	M-1				18	32	半円	9.8 ×6.3	B-2	①I②橙③ A	器内は比較的薄い。外面1次刷 毛、内面横位の撫で、突帯以上 に横刷毛。口縁部横撫で。外面突 帯を狭んで下に半円の透孔、上に 二重半円の縁刻。外面赤彩。	第3段から第4 段破片。
3	①(35.6) ② 20.1	M-1				13					①I②橙③ A	外面1次刷毛、内面下位は横位 の撫で、上位は斜紋位の撫で。 1cm間隔の縦位の撫で。外面突帯 部赤彩。	第2突帯から 第3突帯破片。
4	①(31.6) ② 10.3	M-1						半円 ?			①I②橙③ A	外面1次刷毛、内面斜紋位撫 で、突帯部に横位の撫で。内面接 合痕残す。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
5	①(30.6) ② 9.2	M-1									①III②橙③ A	外面1次斜紋位刷毛、内面斜紋位 撫で。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
6	①(29.0) ② 12.3	M				32		半円 ?			①I②浅黄 ③A	外面1次刷毛、内面斜紋位撫 で、上位は横刷毛。外面突帯以上 赤彩。	胴部破片。
7	①(29.2) ② 9.5	M				32		半円			①III②橙③ A	外面1次刷毛、内面斜紋位撫 で、上位に横刷毛。外面突帯以上 赤彩。	胴部破片。
8	①(24.4) ② 10.8	M-1				2 or 3		円	(3.9)		①I②浅黄 橙③A	外面1次刷毛、内面斜紋位撫 で。	胴部破片。
9	①(28.9) ② 9.1	M				2 or 3		円	(7.8)		①I②橙③ A	外面1次刷毛、内面横位の撫で。 内面接合痕残す。	胴部破片。
10	② 8.1									B-1	①III②橙③ A	外面1次刷毛、内面斜紋位刷毛。 口縁部横撫で。外面赤彩。外面縁 刻。	口縁部破片。
11	② 9.1									B-1	①III②に ぶい橙③A	外面1次刷毛、内面横刷毛。口 縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
12	② 6.4									B-4	①I②に ぶい橙③A	外面1次刷毛、2次B種横刷毛。 内面横刷毛。	口縁部破片。
13	② 7.4									A-1	①I②橙③ A	外面1次刷毛、内面斜紋位撫で。 口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
14	② 9.1									B-1	①II②浅黄 橙③A	外面1次斜紋位刷毛、内面横刷毛 口縁部横撫で。	口縁部破片。
15	② 5.8									A-2	①II②橙③ A	外面1次刷毛、内面横刷毛。口 縁部横撫で。	口縁部破片。
16	② 6.3									A-1	①II②に ぶい貴橙③A	外面1次刷毛、内面横刷毛。口 縁部横撫で。	口縁部破片。
17	② 5.3									B-1	①I②に ぶい橙③A	外面1次刷毛、内面横刷毛。口 縁部横撫で。	口縁部破片。
18	② 4.2									B-1	①I②浅黄 橙③A	口縁の外反は強い。外面1次刷 毛、2次横刷毛。内面横刷毛。口 縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
19	② 4.7									A-1	①I②橙③ A	外面1次斜紋位刷毛、内面横刷毛。 口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
20	② 6.1									A-1	①III②に ぶい貴橙③A	外面1次斜紋位刷毛、内面斜紋位 撫で。口縁部横撫で後、口縁上部 部に何らかを貼り付け、斜縁直 あり内外面一部赤彩。	口縁部破片。

(第147・148図、P L 47)

11トレンチ

番号	景目 ①径 ②高さ (cm)	突帯				透孔		口縁	①胎土 ②色調 ③焼成	磨目	成・整形の特徴	備考
		形状	1	2	3	4	段					
21	② 5.1								A-2	①II②焼③A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位刷毛。口縁部横撫で。	口縁部破片。
22	② 6.7								A-1	①II②にふい焼③A	縦 外面1次縦刷毛、一部斜位の刷毛。内面横位の撫で。口縁部横撫で。	口縁部破片。
23	② 9.2								B-1	①III②にふい焼③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
24	② 3.9								A-2	①I②にふい焼③A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位刷毛。口縁部横撫で。	口縁部破片。
25	② 3.6								A-1	①I②にふい焼③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横位の撫で。口縁部横撫で。	口縁部破片。
26	② 5.2								A-1	①III②焼③A	縦 外面1次縦または斜位の刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
27	② 5.7								A-2	①III②浅黄焼③A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位刷毛。口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
28	② 4.0								A-2	①I②浅黄焼③A	斜 外面1次斜縦位刷毛、内面横刷毛。口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
29	② 4.5								C-2	①I②焼③A	横 外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内面横刷毛。口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
30	② 5.8								B-1	①I②焼③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横位または斜位の刷毛。口縁部横撫で。	口縁部破片。
31	② 4.6								A-2	①I②浅黄焼③A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位刷毛。口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
32	② 4.0								A-2	①III②にふい焼③A	斜 外面1次斜縦位刷毛、2次横刷毛。内面横位の撫で。口縁部横撫で。	口縁部破片。
33	② 5.3								A-2	①II②浅黄焼③A	斜 外面1次斜縦位刷毛、内面横位の撫で。口縁部横撫で。外面赤彩。	口縁部破片。
34	② 7.4	M-1								①I②浅黄焼③A	横 外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。内面斜縦位撫で。	胴部破片。
35	② 6.0	M-1					円?			①III②にふい焼③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横位の撫で。	胴部破片。 刷毛目不明瞭
36	② 6.1	M								①I②焼③A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で。外面赤彩。	胴部破片。
37	② 6.7	M-1								①III②焼③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横位の撫で後、一部横刷毛。	胴部破片。
38	② 6.6	台								①III②焼③A	横 外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内面斜縦位撫で後、斜位の刷毛。	胴部破片。
39	② 5.0	M								①I②焼③A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で。外面赤彩。	胴部破片。
40	② 5.2	方								①I②焼③A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で。	胴部破片。 刷毛目不明瞭
41	② 10.1	方								①III②焼③B	縦 外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。内面斜縦位撫で。内面磨滅する。外面赤彩。	胴部破片。
42	② 8.8	M-1								①II②焼③A	縦 外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内面横刷毛。	胴部破片。
43	② 5.3	M-1								①I②焼③A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位撫で。	胴部破片。
44	② 5.9	M-1								①III②焼③A	横 外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内面斜縦位撫で。内面接合痕残す。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。

遺物観察表

(第148図、P L 47)

11トレンチ

番号	量目 ①径 ②高さ (cm)	突帯				透孔		口縁	①胎土 ②色 ③焼成	刷毛目	成・整形の特徴	備考	
		形状	1	2	3	4	段						形状
45	② 6.6	M-1									①胎②によ い黄橙③A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位刷毛 後、斜縦位の無で。外面突帯以上 赤彩。	胴部破片。
46	② 5.5	M									①胎②によ い黄橙③A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位無で 後、突帯部に横位の無で。	胴部破片。
47	② 11.8	M					円	(8.4)			①胎②横③ A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位の無 で。外面突帯以上赤彩。	胴部破片。
48	② 13.5	M-1					半円	縦 7.8			①胎②横③ A	横 外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。 内面斜縦位無で。外面一部赤彩。	胴部破片。
49	② 7.5										①胎②淡黄 ③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横位の無で。 下部部は指押え。	底部破片。
50	② 9.7	M									①胎②横③ A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位無で 後、突帯部に横位の無で。上半に 斜位の刷毛。外面線刻。外面赤彩。	胴部破片。
51	② 11.5										①胎②淡黄 橙③A	縦 外面1次縦刷毛、下部部は横位の 無で。内面斜縦位無で。下部部に 指押え。底部に棒(管)状圧痕あり。	底部破片。
52	② 7.4										①胎②によ い橙③A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位無で 後、上部に斜位の刷毛。	胴部破片。
53	② 6.5										①胎②淡黄 ③A	横 外面1次縦刷毛、2次B種横刷毛。 内面斜縦位無で。	胴部破片。
54	② 6.0										①胎②横③ A	横 外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内 面横位の無で。	胴部破片。
55	② 7.2										①胎②横③ A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位無で。 外面赤彩。	胴部破片。
56	② 5.6										①胎②によ い橙③A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位無で。 刷毛目は粗い。外面赤彩。	胴部破片。
57	② 7.6										①胎②横③ A	縦 外面1次縦刷毛、内面横位または 斜位の刷毛。外面赤彩。	朝顔形地輪口 縁部破片。
58	② 7.7										①胎②横③ A	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。外 面線刻。外面赤彩。	胴部破片。
59	② 3.7										①胎②横③ A	縦 外面1次縦刷毛、内面斜縦位無で。 内面線刻。外面赤彩。	胴部破片。
60	② 5.0										①胎②によ い橙③A	縦 外面1次縦刷毛、内面横刷毛。内 面線刻。	胴部破片。
61	② 6.0										①胎②横③ A	横 外面1次縦刷毛、2次横刷毛。内 面横刷毛後、一部斜縦位の無で。 外面赤彩。	胴部破片。

今井神社古墳南東方向出土埴輪 (第167・168図、P L 56)

番号	量目 ①径 ②高さ (cm)	突帯				透孔		口縁	①胎土 ②色 ③焼成	刷毛目	成・整形の特徴	備考	
		形状	1	2	3	4	段						形状
1	①口39.2 底20.0 ② 49.6	M-1	11.1	11.2	10.4	16.5	2	円形	6.8 ×7.7	B-3	①胎 ③A	縦 外面1次縦刷毛、内面はていねい に磨でている。裏面は右を上に乗 ねる。口縁部に線刻。口縁部と第 3段に赤色塗彩。	完形。

今井神社古墳出土埴輪 (第115・116図、P L 119)

番号	量目 ①径 ②高さ (cm)	突 部				透 孔		口縁	①油 ②色 ③焼	土 調 成	刷 毛 目	成・整形の特徴	備 考	
		形状	1	2	3	4	段							形状
1	①口 (32.4) 底 (21.0) ②約18.0	M-1	19.5	19.8	11.1	15.6	2	凹形	6.9 ×10.2	B-3		裏 9 12	外面1次縦刷毛、基底部を除いた各段には2次B種横刷毛。内面に粘土紐の接合痕を残す。口縁に織刻を施す。	約1/2残存か。 トレンチ出土。
2	①口 (37.7) 底23.5 ② 45.0	M-1	13.1	14.1	17.8		2	半円	8.3 ×9.5	B-3	①I ②橙 ③A	裏 12 12	外面1次縦刷毛、2段と3段目は2次B種横刷毛。内面、斜縦方向の撫でを施すが粘土紐の接合痕は顕著に認められる。底面は右を上に乗せる。口縁部に織刻を施す。	上半は1/2残存、基底部は完形。後円部北東部分出土。

旧荒砥村245号墳

石室内出土遺物 (第161図、P L 54)

番号	種類 器種	出土位置 (cm)	量目 (cm)	①胎土②色調 ③焼成	器形の特徴	成・整形、技法の特徴	残存・備考
1	土師器 高環	玄室内 床面	口高 14.0 底高 9.9 底 9.6	①細砂②濃い 褐色5YR 6/6、環部内 面・黒色③良 好	環部中段に横を持ち、口縁部は縦やかに外反する。	外面口縁部横撫で、環下部撫で。脚上部縦撫で、端部は横撫で。内面環部縦磨き、脚部横撫で後、縦撫で。	完形。
2	土師器 高環	玄室内 床面	口高 13.9 底高 9.8 底 10.0	①細砂②濃い 褐色7.5 YR6/4、環部 内面・黒色③良 好	環部中段に横を持ち、脚部は「ハ」字状に開き、裾部は外反する。環部はやや深めである。	口縁部横撫で、環部による磨き状の撫で。脚部縦撫で、裾部横撫で。内面環部縦磨き、脚部縦磨き。脚部縦磨き。裾部横撫で。	完形。
3	土師器 高環	玄室内 床面	口高 15.5 底高 10.5 底 9.7	①細砂②褐色 5YR6/8③良 好	環部中段に強い横を持ち、口縁部は外反する。脚部は「ハ」字状に開き裾部は弱く外反する。端部平相面を持つ。	外面口縁部横撫で、環下部縦磨り後撫で。内面口縁部横撫で、脚部横撫で、裾部横撫で。	完形。
4	土師器 高環	玄室内 床面	口高 14.4 底高 9.3 底 9.4	①細砂②褐色 5YR6/6③良 好	環部中段にかなりシャープな横を持つ。口縁部は強く外反し、端部内面に肥厚する。脚部は「ハ」字状に開き、裾部は強く外反し平相になり、端部内面に沈線状の凹みがある。	外面上部横撫で、環下部縦磨り後撫で。内面口縁部横撫で、環底部縦磨、脚部横撫で後縦仕上げ。裾部横撫で。	完形。
5	土師器 高環	玄室内 床面	口高 15.2 底高 9.7 底 10.0	①細砂②褐色 7.5YR6/6③良 好	環部中段に強い横を持ち、口縁部は外反する。脚部「ハ」字状に開き裾部は平坦面を持つ。端部内面に沈線状の凹みあり。	外面口縁部横撫で、環下部縦磨り後撫で。内面口縁部横撫で、脚部横撫で、裾部横撫で。	完形。
6	土師器 高環	玄室内 床面	口高 19.7 底高 15.3 底 10.5	①細砂②褐色 7.5YR6/6③良 好	環部中段に強い横を持ち、口縁部強く外反する。脚部は中段が膨らみ、端部は外反して開く。	外面口縁部横撫で、脚部縦磨り、端部横撫で。内面脚部指状の撫で。	ほぼ完形。
7	土師器 高環	玄室内 床面	口高 14.9 底高 9.6 底 10.0	①細砂②褐色 7.5YR6/6③良 好	環部中段に強い横を持ち、口縁部外反し端部内面に肥厚する。脚部は「ハ」字状に開き裾部は外反し、端部内側に強く屈曲する。	外面口縁部横撫で、環部縦磨り後撫で。脚部横撫で、裾部横撫で。内面口縁部横撫で。	完形。
8	須恵器 菱環	玄室内 床面	口高 9.8 底高 24.3	①粗砂・軽石 ②暗灰色N3/ 1③良好	口縁部は上半で強く外反する。端部は折り返し、明確な横を持つ。脚部は円形で口縁の両側に帯状の耳を持つ。	外面は細いかいき目を全面に施す。上半には自然釉の付着が顕著である。	ほぼ完形。

円筒埴輪 (第163図、P L 55)

番号	量目 ①径 ②高さ (cm)	突起			透孔	口縁	①胎土 ②色調 ③焼成	副 目 目	成・整形の特徴	備考			
		形状	1	2							3		
1	① (20.2) ② 7.4	三			22	円?	①細砂・軽石・ 植物変態③B	破	外面1次縦刷毛、内面縦線の撫で。	胴部破片。ナラス面原位置。			
2	①胴 18.5 底 14.3 ② 31.9	三	17	11	2	円	4.5× 5.7	①細砂・軽石・ 植物② 橙③B	破 (8)	外面1次縦刷毛、内面斜縦線の撫で後、第2段以上に斜縦刷毛。外面第2段の透孔部に線刻あり。底面は右を上に乗ねる。	高底部から第2突起。ナラス面原位置。		
3	①口 23.8 底 11.8 ② 36.3	三	15	11	10	2	円	5.9× 6.5	B-1	①細砂・軽石・ 植物② 赤③B	破 (7)	外面1次縦刷毛後、細かな帯状の工具で縦線の撫で。内面斜縦線の撫で後、突帯部に横線の撫で。口縁部横撫で。外面裾部調整か。底面は右を上に乗ねる。	第3段2/3突起。ナラス面原位置。

(第163・164図、P L 55)

番号	層目 ① 径 ② 高さ ③ 横 (cm)	突 帯			透 孔		口縁	①胎土調成 ②焼 ③焼	刷毛目	成・整形の特徴	備考	
		形状	1	2	3	段						形状
4	①口 23.7 底 13.4 ② 38.8	三 or M-1	15	10	12	2	円	6.9× 7.5	B-2	①細線・紅物②のぶい黄橙③C	縦線の立ち上がり、口縁部で強く外反する。2段目に1対の円形の透孔を持つ。2段目外面に線刻あり。外面1次刷毛、内面2〜3段目は斜線位刷毛後、1〜2段目に斜線位の無で、口縁部横無で。底面は右を上に乗せる。	ほぼ方形。テラス面原位置。
5	①口 24.2 底 13.2 ② 36.0	M	17	7	11	2	円	4.4× 5.9	B-1	①細線・軽石・黒色紅物②橙③B	外面1次刷毛、内面縦位の無で後、第2段以上に斜線位刷毛。口縁部横無で。	第3段1/2次皿。テラス面原位置。
6	①口 24.3 底 13.8 ② 36.3	M	17	8	11	2	円	4.7× 6.5	B-2	①細線・軽石②のぶい橙③B	外面1次刷毛、内面縦位の無で後、第2段以上に斜線位刷毛。口縁部横無で。	第3段一部残存。テラス面原位置。
7	①胴(20.5) 底 14.2 ② 28.2	三	14	7		2	長円	7.5× 5.5		①小線・軽石・黒色紅物②のぶい橙③B	外面1次刷毛、内面縦位の無で後、第2突部以上に斜線位の刷毛。第1段外面に指痕あり。内面基底部最下位を彫削り調整。	基底部から第2突部。テラス面原位置。
8	① 23.4 ② 16.6	M			11	2	円	5.7× (4.5)	B-4	①小線・紅物②橙③B	口縁部は強く外反し、突帯は扁平である。2段目に円形の透孔を1対持つ。3段目外面に線刻を持つ。外面1次刷毛、内面3段目に斜線位刷毛、突帯以下は斜線位の無で、口縁部横無で。刷毛目は内外面同一工具か？	2段目上位から口縁部。テラス面。
9	① (26.0) ② 14.5	M-1			11	2	円?		B-1	①粗砂・小線②のぶい橙③B	口縁部は外反する。突帯は扁平である。3段目に円形と思われる透孔を持つ。外面1次刷毛、内面斜線位の刷毛。口縁部横無で。内外面の刷毛状工具は同一と思われる。	第2突部から口縁部破片。テラス面か。
10	①口(23.9) 胴 20.8 ② 18.9	三			11	2	円	4.5	B-4	①小線・軽石②橙③B	外面1次刷毛、内面斜線位刷毛後、下位は斜線位無で、口縁部横無で。2段目外面に線刻あり。	口縁部から2段目破片。テラス面。
11	① (21.2) ② 18.0	M-1			22		円	6.5		①小線・軽石・紅物②のぶい黄橙③B	外面1次刷毛、内面縦位の無で後、斜線位刷毛。刷毛目は細かく浅い。内面に斜線位2本の線刻あり。	胴部破片。Gトレンチ周縁内。
12	①胴 21.2 底 15.3 ② 29.2	M-2	13	10		2	円	(5.7) ×6.5		①粗砂・細線②橙③B	突帯は扁平である。外面1次刷毛、内面上位は斜線位無で後、縦位の無で下位は縦位無のみ。	胴部破片。石室開口部前か。
13	①口(27.8) ② 11.8	三			10				B-1	①細線・紅物②のぶい黄橙③C	外面1次刷毛、内面斜線位の無で後、口縁部横無で後、横帯を施す。	口縁部から第2突部破片。Fトレンチ。
14	①口(24.4) 胴(21.1) ② 14.0	三			11				B-2	①細線・軽石②橙③A	外面1次刷毛、一部斜線位刷毛。内面斜線位刷毛後、縦位の無で、口縁部横無で。	口縁部破片。Gトレンチ周縁内。
15	② 12.3	M								①粗砂・小線②のぶい橙③B	外面1次刷毛、内面斜線位刷毛後、突帯以下に無で。外面やや磨減している。	胴部破片。Dトレンチ周縁内。
16	①胴(18.3) ② 9.3	M								①細線・小線②橙③B	外面1次刷毛、内面斜線位刷毛。	胴部形埋輪破片。Gトレンチ周縁内。
17	② 6.5									①細線・紅物②橙③A	外面1次刷毛、内面斜線位の刷毛。底面に棒(管)状圧痕あり。	基底部破片。
18	② 3.9									①細線・小線②のぶい黄橙③B	外面1次刷毛、内面縦位の無で、無での下に4条の横位の線が残る。	基底部破片。Cトレンチ石室天井部。

報告書抄録

フリガナ	アラトミヤガワイセキ アラトミヤハライセキ
書名	荒砥宮川遺跡 荒砥宮原遺跡
副書名	昭和55年度県営圃場整備事業荒砥宮原南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第158集
編著者名	磯貝朗子他
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2
発行年	西暦1993年3月27日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
荒砥宮川	前橋市二之宮 町字洗足	10201		36°21'34"	139°9'49"	昭和55年12月1日～ 昭和56年2月28日 19801201～19810228	8,000㎡	圃場整備事業
荒砥宮原	前橋市下増田 町字宮原	10201		36°21'22"	139°9'49"	昭和55年12月1日～ 昭和56年2月28日 19801201～19810228	953㎡	圃場整備事業
今井神社古墳	前橋市東今井町 字白山東	10201		36°21'48"	139°9'11"	昭和55年12月8日～ 昭和55年12月15日 19801208～19801215	665㎡	圃場整備事業
旧荒砥村 245号墳	前橋市東大 室町下飯室	10201		36°22'30"	139°12'25"	昭和51年2月5日～ 昭和51年3月22日 19760205～19760322	360㎡	圃場整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
荒砥宮川	住居 墓 生産	古墳 ～ 平安	竪穴住居	28軒	4世紀～9世紀土器・石器 円筒埴輪	円墳は5世紀後半前後の築造である。道路状遺構、水田は浅間B軽石降下(1108年)以前の遺構である。
			掘立柱建物	1棟		
			円墳	4基		
			道路状遺構	1面		
			畠	1面		
			水田	1面		
	住居 生産	中世以降	土坑	26基	中～近世陶磁器	
			井戸	13基	土師質皿	
			溝	23条		
荒砥宮原	住居 墓	古墳	竪穴住居	3軒	円筒埴輪	
			円墳	2基		
今井神社古墳	墓	古墳	前方後円墳 (厚形)	1基	円筒埴輪	5世紀後半の築造。
旧荒砥村245号墳	墓	古墳	古墳	1基	6世紀土器 碧玉製管玉・水晶製切子玉 ガラス製小玉・円筒埴輪	6世紀前半の築造、横穴式石室を有する。周辺に古墳群が形成される。

写 真 图 版



1 3区1号住居



2 3区1号住居遺物出土状態



3 3区2号住居



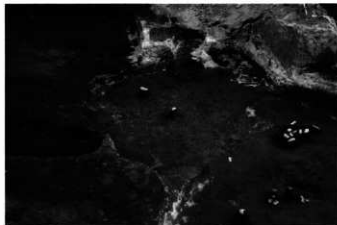
4 3区3号住居



5 3区4・6・13号住居



1 3区4・5号住居



2 3区6・5・4号住居



3 3区6号住居遺物出土状態



4 3区6号住居遺物出土状態



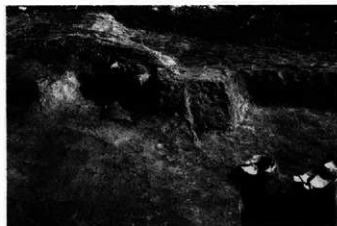
5 3区7・8号住居



6 3区7号住居遺物出土状態



7 3区7号住居遺物出土状態



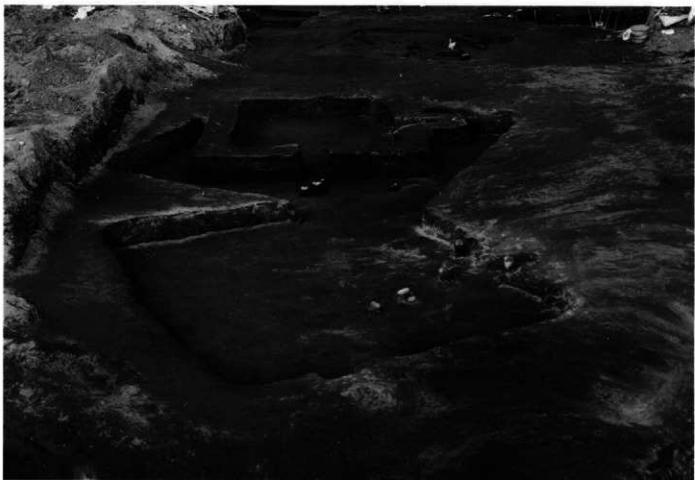
8 3区8号住居



1 3区9号住居



2 3区9号住居遺物出土状態



3 3区10・11・12号住居



4 3区10号住居



5 3区11・10号住居



1 3区13号住居



2 3区14号住居



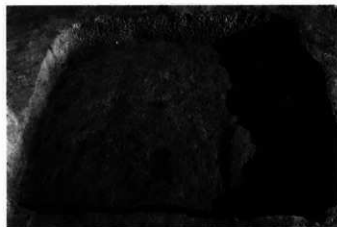
3 3区15・18号住居



4 3区16号住居遺物出土状態(石包丁)



5 3区16号住居遺物出土状態



6 3区17号住居



7 4区1号住居



8 4区1号住居遺物出土状態



1 5区1号住居



2 5区1号住居



3 5区2号住居



4 5区3号住居



5 5区4号住居



6 5区4号住居



7 5区7号住居



8 5区7号住居遺物出土状態



1 5区5・7号住居



2 5区8号住居竈



3 5区6号住居



4 5区6号住居遺物出土状態



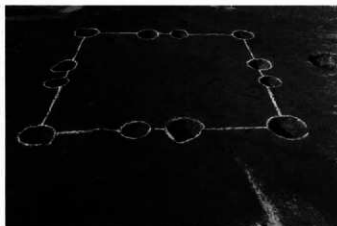
5 5区6号住居遺物出土状態



1 6区1号住居



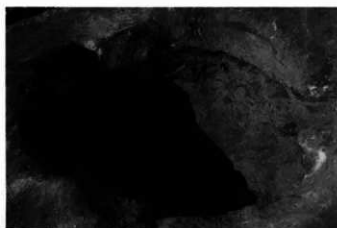
2 6区1号住居竈



3 5区1号掘立柱建物



4 2区2号溝



5 3区1号井戸



6 3区2号井戸



7 5区道路状遺構



1 6区基本層序(冲積地)



2 5区基本層序



3 6区As-B下水田面



4 5区壘



5 6区冲積地FA堆積状況



6 2区7号溝



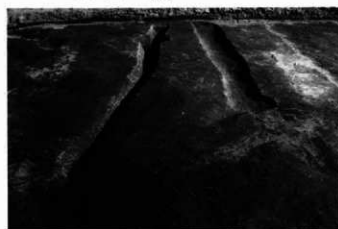
1 4区4・3・2・1号溝



2 4区1号井戸、6・7号溝



3 4区5号溝



4 6区2・1号溝、2号井戸



5 4区竪穴状遺構



1 宮原遺跡全景



2 1号住居



3 2号住居



4 3号住居



5 3号住居遺物出土状態



1 1号墳



2 1号墳セクション



3 1号墳遺物出土状態



4 1号墳遺物出土状態



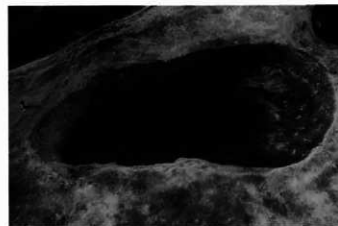
5 2号墳



6 2号墳セクション



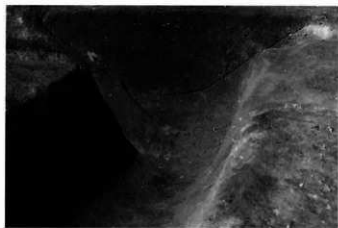
7 2号墳遺物出土状態



8 1号土坑



1 1号溝



2 1号溝Aセクション



3 1号溝Bセクション



4 2号溝



5 2号溝セクション



6 4号溝



1 今井神社古墳透景



2 今井神社古墳前方部より



3 今井神社古墳後門部より



1 1トレンチ



2 2トレンチ



3 3トレンチ



4 4トレンチ



1 5トレンチ



2 6トレンチ



3 7トレンチ



4 8トレンチ



1 9トレンチ



2 10トレンチ



3 11トレンチ



4 1トレンチセクション



5 2トレンチセクション



1 3トレンチセクション



2 4トレンチセクション



3 5トレンチセクション



4 6トレンチセクション



5 7トレンチセクション



6 8トレンチセクション



7 10トレンチセクション



8 11トレンチセクション



1 後円部に露出した石室・石棺材 1



2 後円部に露出した石室・石棺材 2



3 後円部に露出した石室・石棺材 3



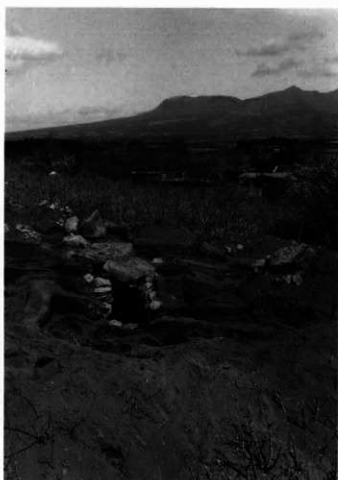
4 今井神社古墳南側の古墳群



1 遠景（西より、中央の小高い部分が245号墳）



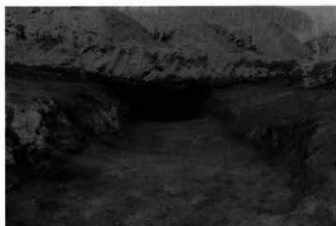
2 天井石の検出状態



3 全景（後方は赤城山）



4 古墳近景



1 周境の土層セクション



2 円筒墳輪列検出状態



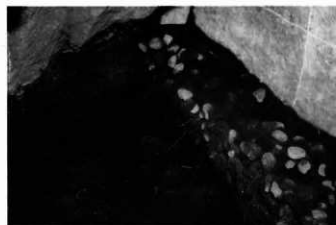
3 玄室から羨道



4 玄門部の天井石



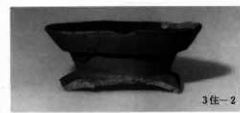
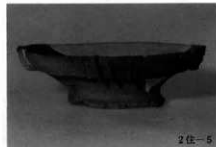
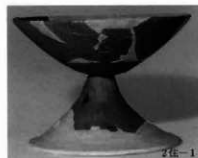
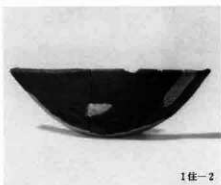
5 玄室内土器出土状態

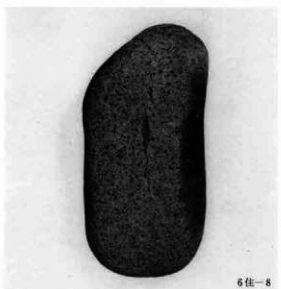
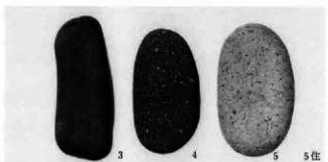
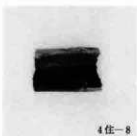
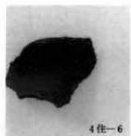
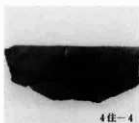
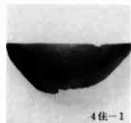


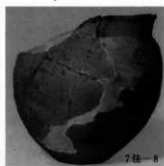
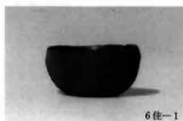
6 玄室床面断ち割り

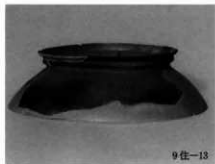
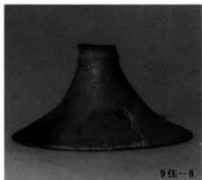


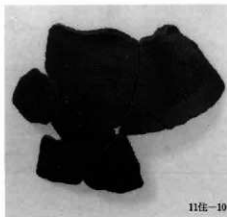
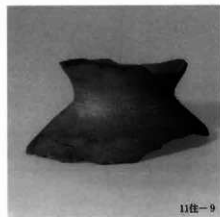
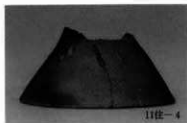
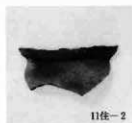
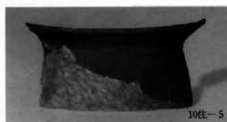
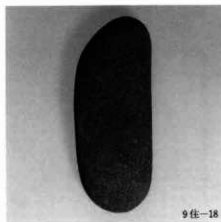
7 石室掘り方・裏込めの状態

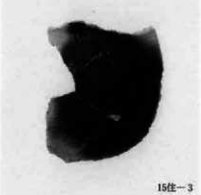
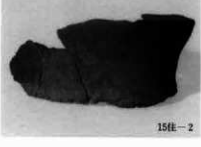
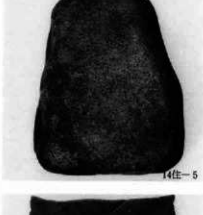


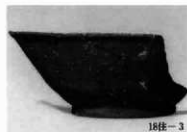
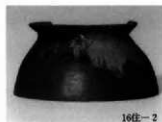


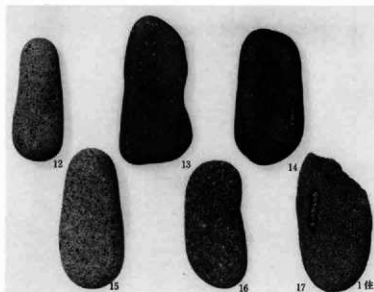
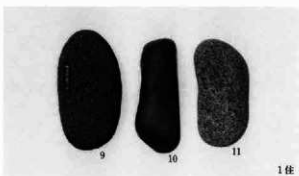














2 住-1



2 住-2



2 住-3



3 住-1



3 住-2



3 住-3



4 住-1



4 住-2



4 住-3



4 住-4



4 住-5



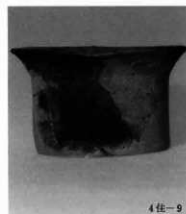
4 住-6



4 住-7



4 住-8



4 住-9



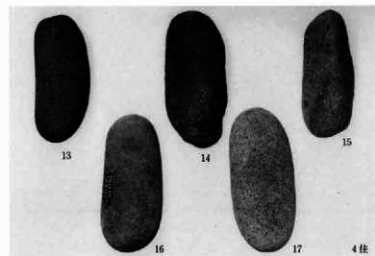
4 住-11



4 住-12



4 住-10



13

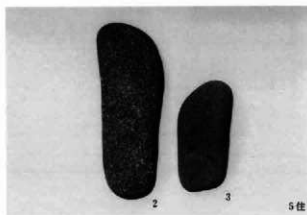
14

15

16

17

4 住



2

3

5 住



6住-1



6住-1



6住-2



6住-3



6住-4



6住-5



6住-6



6住-7



6住-8



6住-9



6住-10



6住-11



6住-12



6住-13



6住-14



6住-15



6住-16



6住-17



6住-18



6住-19



6住-20



6住-24



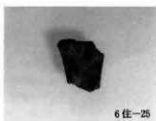
6住-21



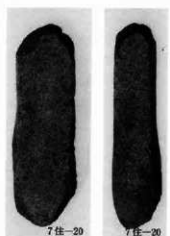
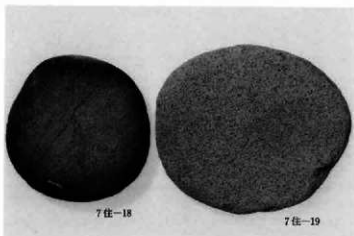
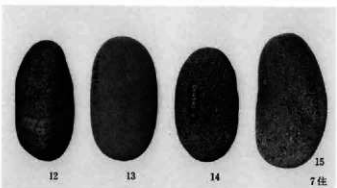
6住-22

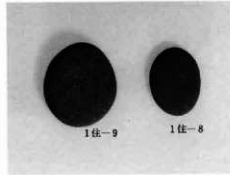
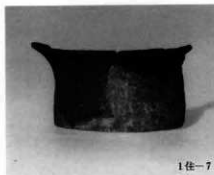


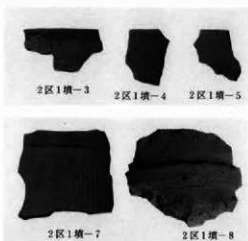
6住-23

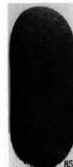
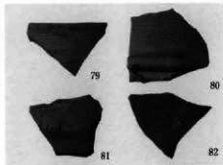


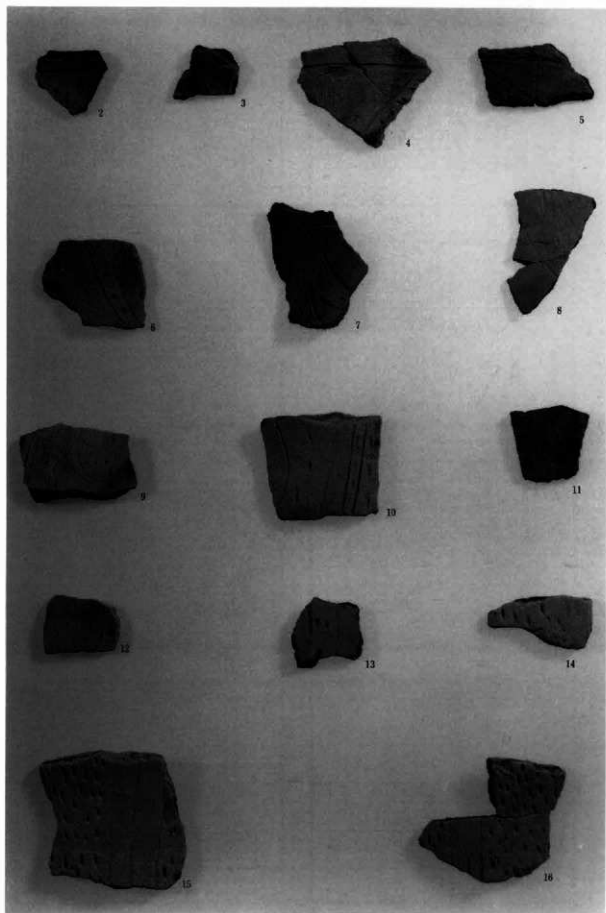
6住-25

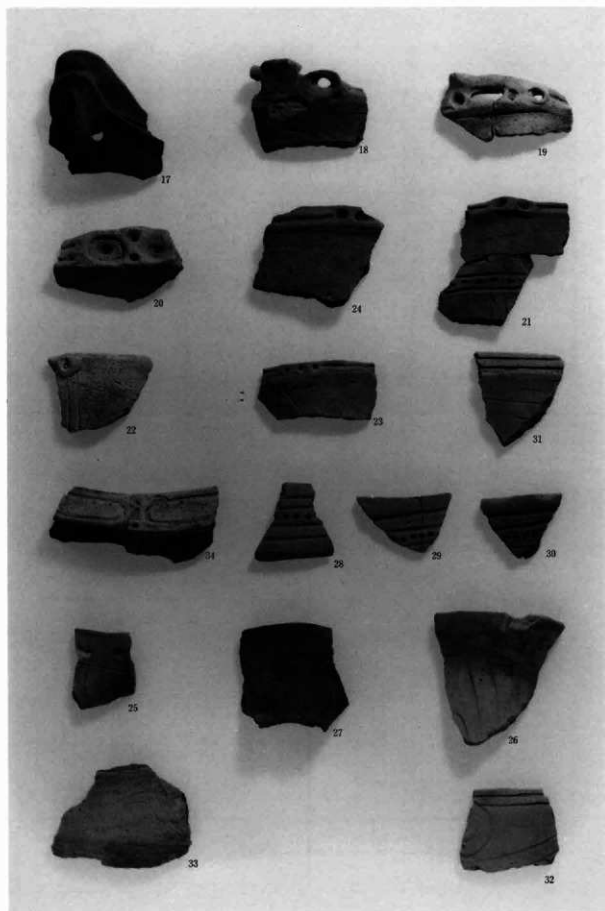


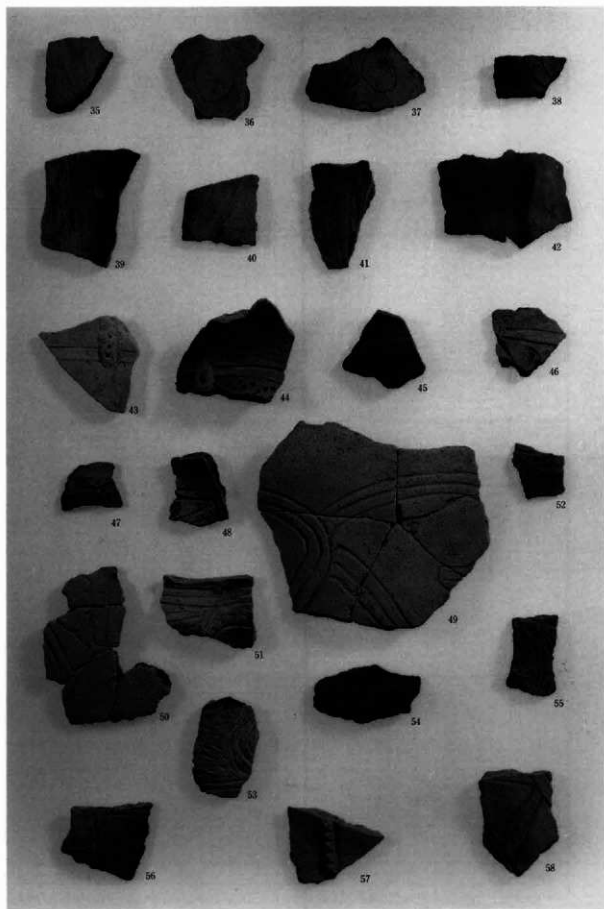


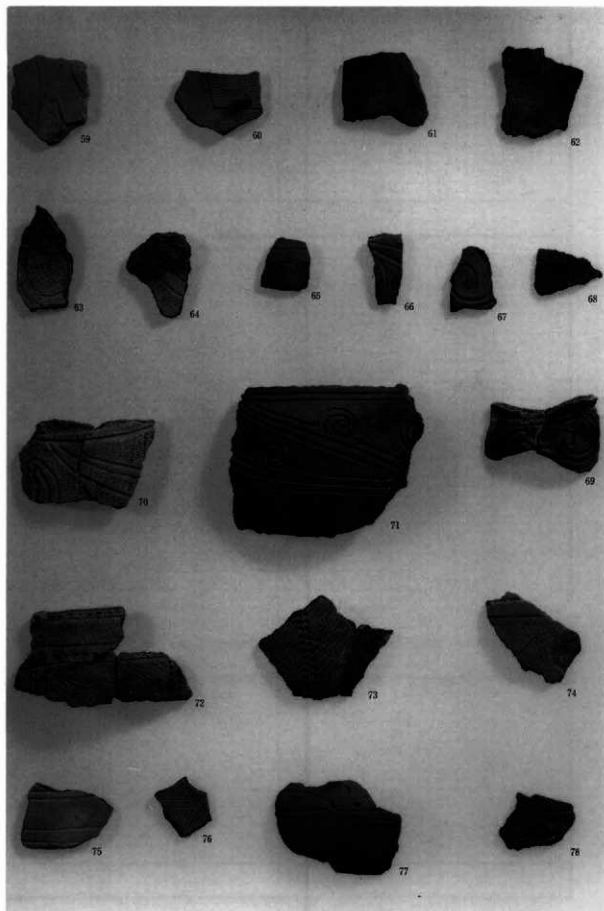


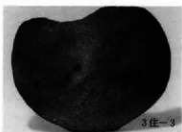
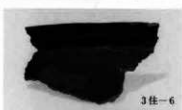


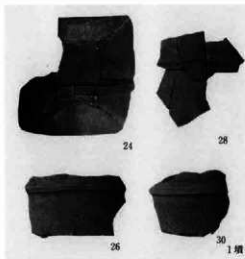
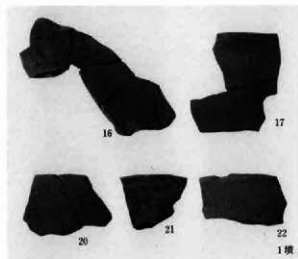
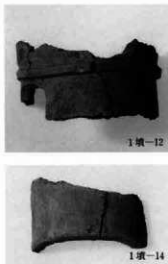
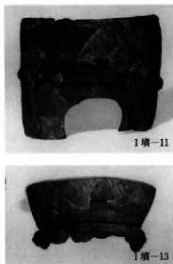


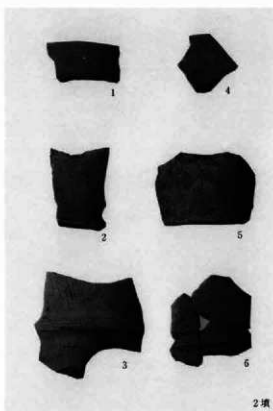


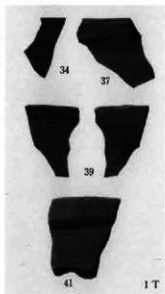
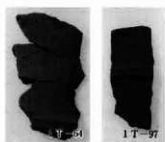
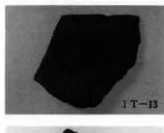


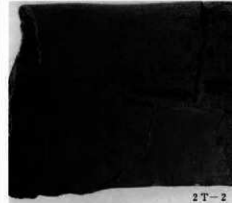
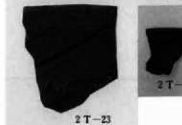
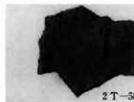
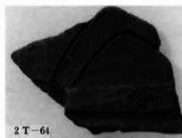
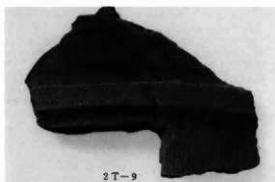


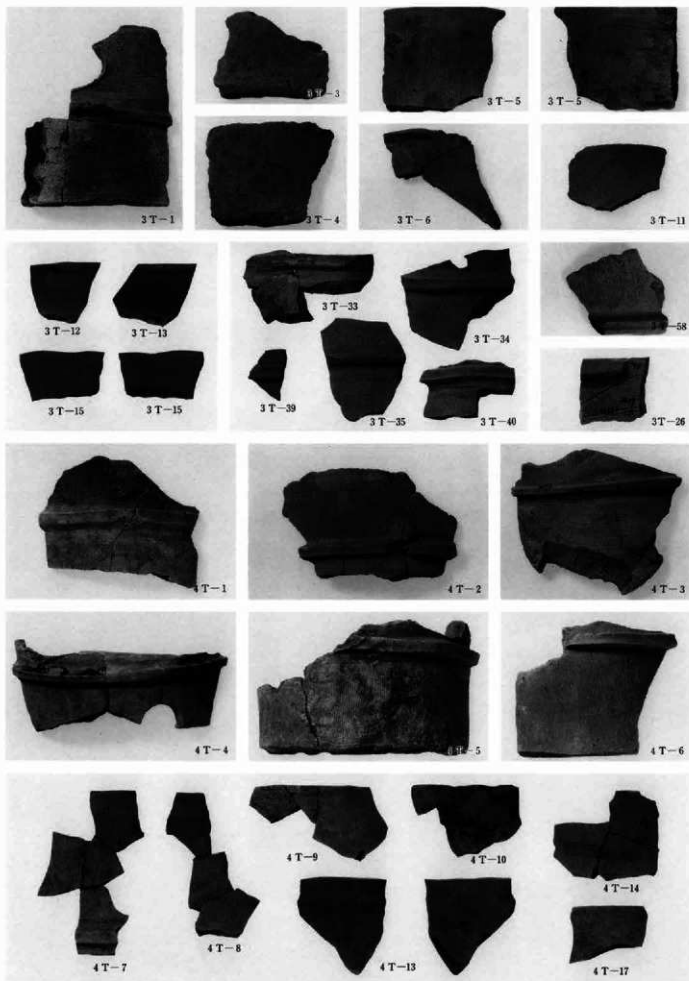


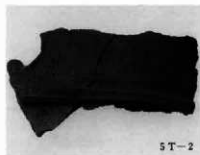
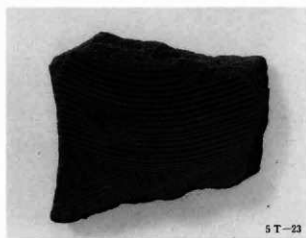
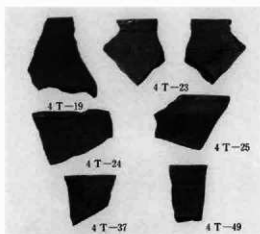
















7T-4



7T-49



11T-3



11T-4



7T-48



9T-3



9T-10



11T-5



11T-1



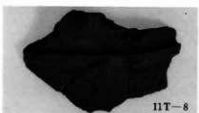
11T-2



11T-6



11T-7



11T-8



11T-9



11T-10



11T-12



11T-47



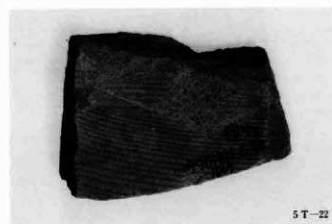
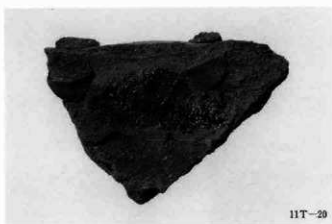
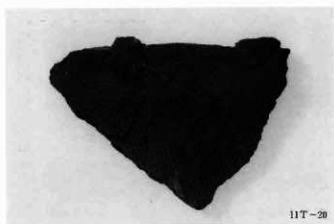
11T-50

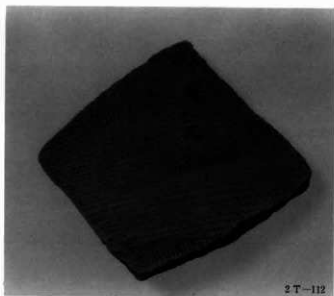
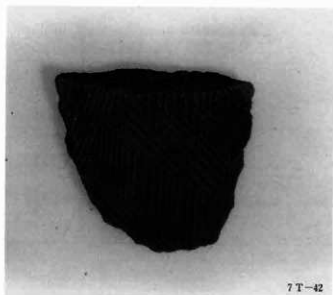


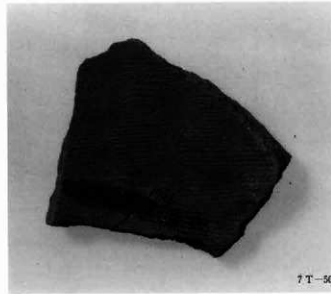
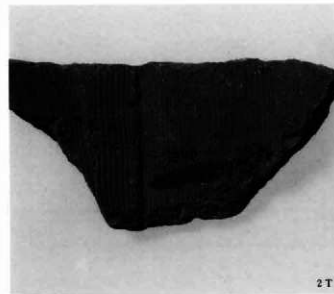
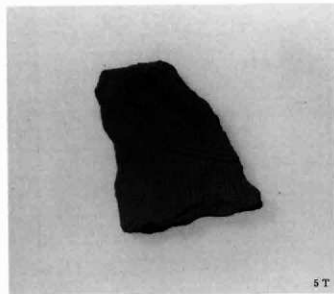
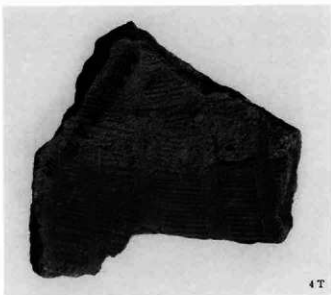
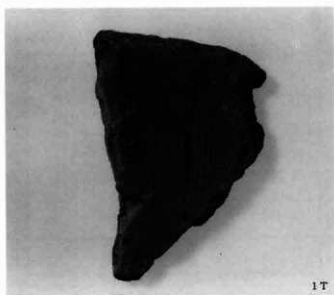
11T-48

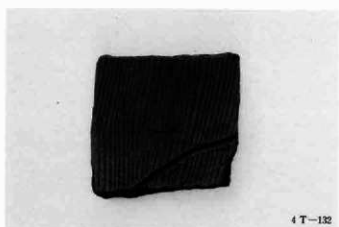
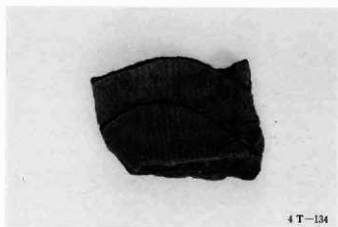


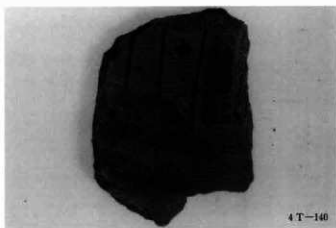
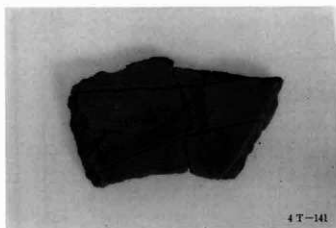
11T-57

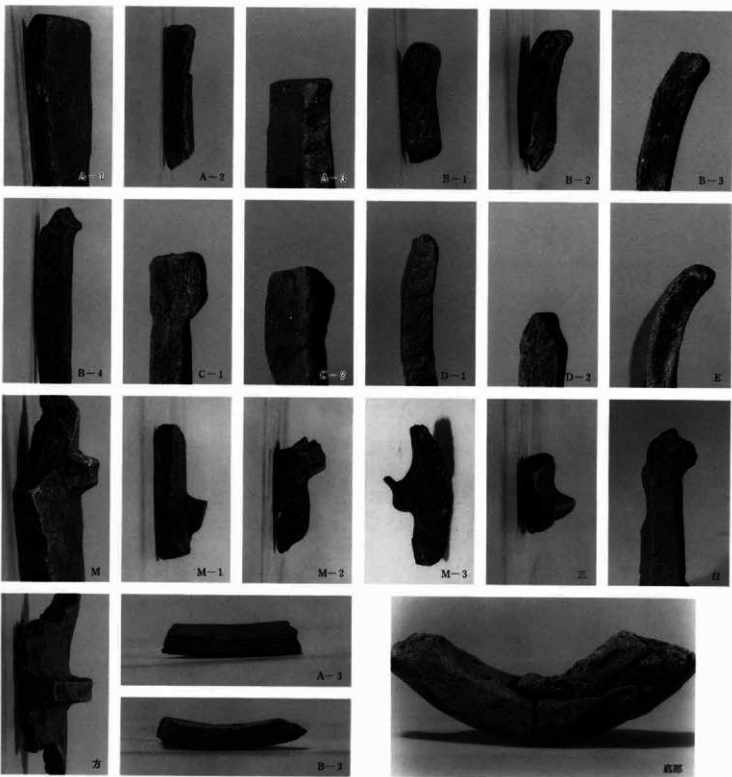


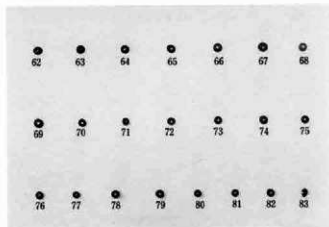
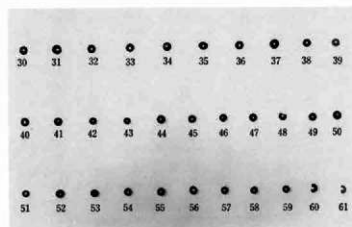
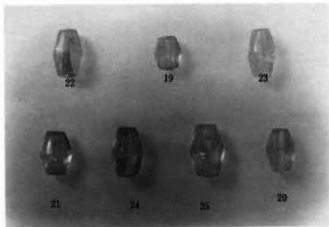
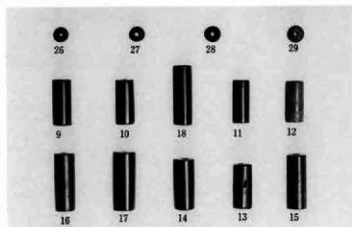








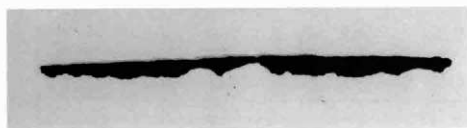








今井神社古墳南東方向出土の円筒埴輪



(左)今井神社古墳出土鉄刀

群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第158集
荒砥宮川遺跡
荒砥宮原遺跡

昭和55年度県営農場整備事業荒砥原部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

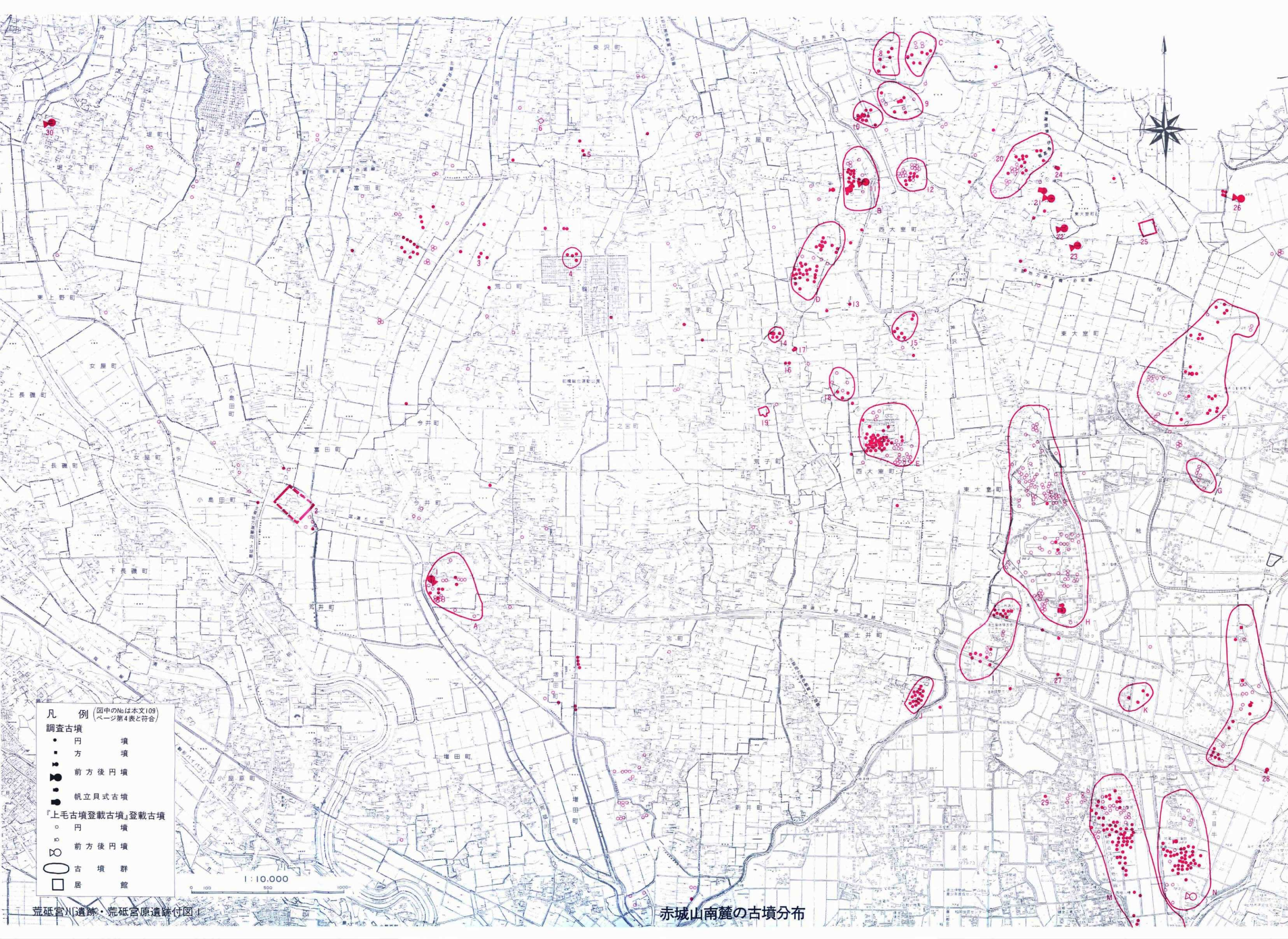


平成5年3月25日 印刷
平成5年3月27日 発行

編集・発行／群馬県教育委員会
〒371 前橋市大手町1丁目1番1号
電話 (0272) 23-1111(代表)

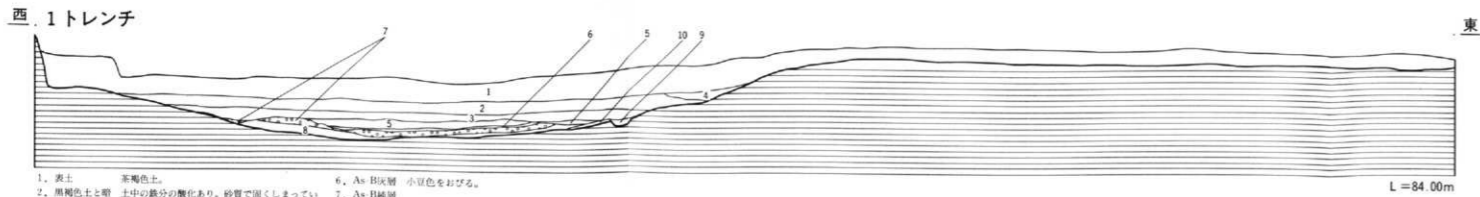
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社

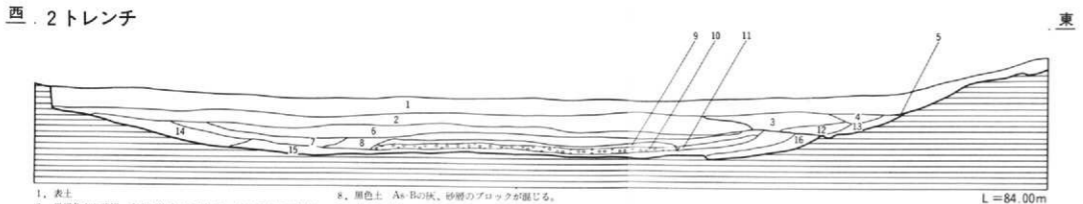


- 凡例 (図中のNoは本文109ページ第4表と符合)
- 調査古墳
 - 円墳
 - 方墳
 - 前方後円墳
 - 帆立貝式古墳
 - 『上毛古墳』『登載古墳』登載古墳
 - 円墳
 - 前方後円墳
 - 古墳群
 - 居館

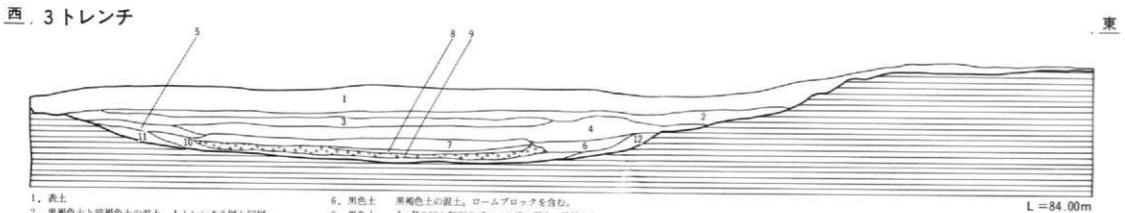
1:10,000



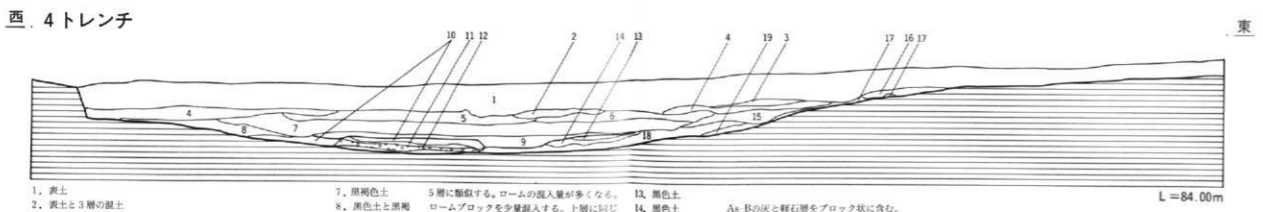
1. 表土 茶褐色土。
2. 黒褐色土と暗褐色土 土中の鉄分の酸化あり。砂質で固くしまっている。
3. 黒色土 上層と同様に土中の鉄分酸化があり。湿地を思わせる。As-Bの混入が多く砂質である。
4. 表土とロームと砂質の凝土
5. 黒色土 (粘性なし) とAs-B (軽石・灰) のブロック状の凝土
6. As-B灰層 小豆色をおびる。
7. As-B純層
8. 黒色土 やや固くしめる。あまり粘性はない。
9. 薄の埋没土 As-B降下後で凝地になる前のものである。
10. ロームと黒色土の凝土



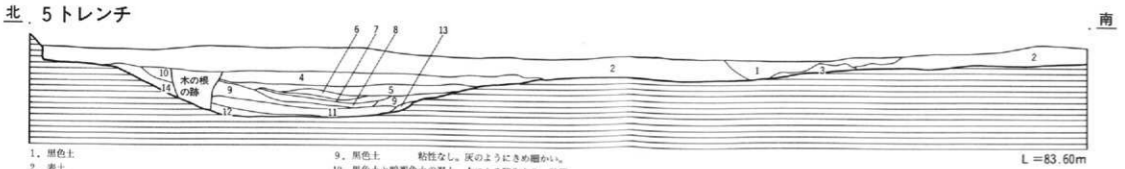
1. 表土
2. 黒褐色土と暗褐色土 土中の鉄分の酸化あり。砂質ではあるが同じ色の凝土層 しまっている。ロームブロックの混入がある。
3. 黒褐色土と暗褐色土の凝土 表土とロームブロックを混入する。
4. 黒褐色土と暗褐色土の凝土 3層に類似するが表土の混入を贈す。
5. 表土と黒色土の凝土
6. 黒色土 1 トレンチ3層と同層である。ロームブロックがわずかに混入する。
7. 黒色土 砂質。水の影響を受けている。(6層にやや類する)
8. 黒色土 As-Bの灰。砂質のブロックが凝る。
9. As-B灰層
10. As-B純層
11. 黒色土 As-Bの灰。砂質のブロック凝土。
12. 表土と黒色土の凝土 ロームを混入する。
13. ロームと表土との凝土
14. 黒色土 少し水の影響を受けている。
15. 黒色土 やや粘性。火山灰か。
16. ロームと茶褐色粘土層の凝土



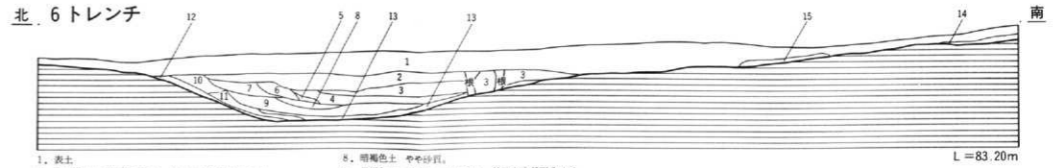
1. 表土
2. 黒褐色土と暗褐色土の凝土 1 トレンチ2層と同層。
3. 黒色土 1 トレンチ3層と同層でロームブロックをわずかに含む。
4. 黒色土 1 トレンチ3層に類似するロームブロックを多く混入する。
5. 4層と黒色土の凝土
6. 黒色土 黒褐色土の凝土。ロームブロックを含む。
7. 黒色土 As-Bの灰と軽石のブロック状に凝入。粘性なし。
8. As-B灰層
9. As-B軽石層
10. 黒色土 やや粘性。きめこまかい。火山灰か？
11. 黒色土 ロームを少量混入する。
12. 暗褐色土 粘性あり。



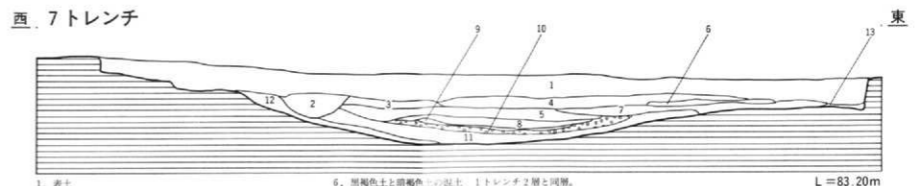
1. 表土
2. 表土と3層の凝土
3. 表土と4層の凝土
4. 黒褐色土と暗褐色土の凝土 ロームブロックを混入する。砂質。固くしめる。水性の堆積層。
5. 黒褐色土 水性の堆積層。ロームを少量混入する。鉄分の酸化。砂質で固くしめる。
6. 黒褐色土 5層に類似する。黒色土と砂の凝土がある。
7. 黒褐色土 5層に類似する。ロームの混入量が多くなる。
8. 黒色土と暗褐色土の凝土 砂を含むがやや粘性あり。水による酸化が若干ある。
9. 水性堆積の砂層 茶色味をおびる。
10. 黒色土 As-B灰と軽石の層のブロックを含む。
11. As-B灰層 小豆色をおびる。
12. As-Bの軽石層
13. 黒色土 5層に類似する。ロームの混入量が多くなる。
14. 黒色土 As-Bの灰と軽石のブロック状を含む。
15. 7層の黒褐色土と18層の黒色土の凝土
16. ロームと表土の凝土
17. ローム
18. 黒色土 やや粘性。きめこまかい。火山灰か？
19. 茶褐色土



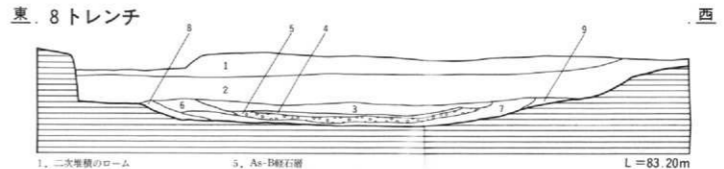
1. 黒色土
2. 表土
3. 汚れた二次堆積のローム
4. 黒褐色土と暗褐色土の凝土 1 トレンチ2層と同層。
5. 黒色土 1 トレンチ3層と同層。
6. 黒色土 砂質。酸化し茶色味をおびた砂を少量含む。
7. 暗褐色土 粘性。水による酸化あり。As-B降下後水がたまった時の水底か。
8. 黒色土 As-Bの灰と軽石のブロック状の層を含む。粘性なし。
9. 黒色土 粘性なし。灰のようにきめ細かい。
10. 黒色土と暗褐色土の凝土 水による酸化あり。砂質。
11. 黒褐色土と暗褐色土の凝土 砂を含むがやや粘性あり。水による酸化が若干ある。認められる。
12. 黒褐色土 酸化のため茶色味をおびた砂粒のブロック状を含む。
13. 黒褐色土とロームの凝土
14. 暗褐色土とロームの凝土 13層に茶褐色土を混入。



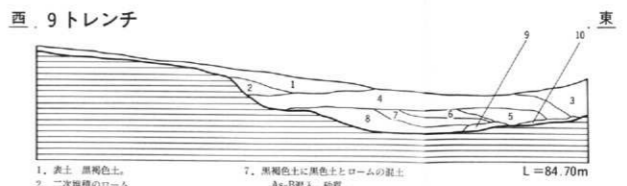
1. 表土
2. 黒褐色土と暗褐色土の凝土 1 トレンチ2層と同層。
3. 黒色土 1 トレンチ3層と同層。
4. 黒色土 As-Bの軽石ブロック含む。砂質。As-B降下時の底面。水による鉄分酸化有り。
5. 黒色土 やや砂質。固くしめる。
6. 黒色土に少量茶褐色土混入 As-Bを混入する。
7. 暗褐色土と黒色土の凝土 やや砂質。
8. 暗褐色土 やや砂質。
9. 黒褐色土 土粒が細かい。砂粒を少量混入する。
10. 黒褐色土と暗褐色土の凝土 粘性。
11. 暗褐色土 粘性。
12. 暗褐色土 粘性。
13. 暗褐色土 層の最上位に砂質を含む。
14. 茶褐色土
15. 暗褐色土



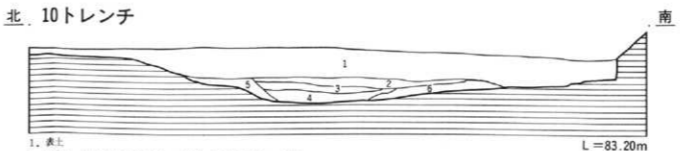
1. 表土
2. 黒褐色土と暗褐色土の凝土 暗褐色土。ローム。As-Bを混入する。
3. 黒褐色土と暗褐色土の凝土 1 トレンチ2層と同層。ロームを混入し。砂質を含む。
4. 暗褐色土と暗褐色土の凝土 1 トレンチ2層と同層。表土を多く混入。暗褐色土の凝土 砂も少量混入される。
5. 黒色土に暗褐色土 As-B混入。砂質。少し水の影響がある。暗褐色土の凝土。
6. 暗褐色土と暗褐色土の凝土 1 トレンチ2層と同層。
7. 黒色土 1 トレンチ3層にロームを混入。砂質を含む。
8. 黒色土 As-Bの軽石ブロック状を含む。
9. As-B灰層
10. As-B軽石層 (全体に砂状を混入)
11. 黒色土 きめ細かい。粘性はあまりない。
12. ロームと黒色土の凝土
13. 暗褐色土



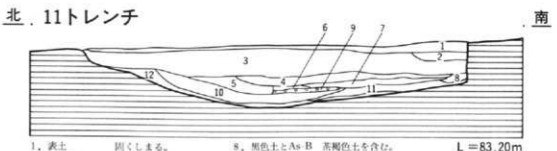
1. 二次堆積のローム
2. 表土と黒褐色土 やや砂質。
3. 黒色土 As-Bのブロックを混入する。表土も少量混入する。
4. As-B灰層
5. As-B軽石層
6. 黒色土 As-Bを含む砂質。
7. 黒色土 やや粘性。
8. 暗褐色土
9. 茶褐色土



1. 表土 暗褐色土。
2. 二次堆積のローム
3. 表土 しまりが無い。
4. 表土 少量の黒色土と砂質の暗褐色土を含む。
5. 表土と黒色土・茶褐色土の凝土
6. 黒色土 ロームを少量混入。As-Bを混入。水の影響。
7. 暗褐色土に黒色土とロームの凝土 As-B混入。砂質。
8. 黒色土に暗褐色土の凝土
9. 暗褐色土と暗褐色土の凝土
10. 茶褐色土



1. 表土
2. 黒色土 表土と暗褐色土の凝土。少量As-Bの軽石ブロック混入。水の影響を若干受ける。
3. 黒色土と暗褐色土の凝土 きめ細かい。さらさらとした土粒。
4. 黒色土と暗褐色土 3層に類似した土質。ローム少し混入する。
5. 黒色土 黒褐色土とロームの凝土。
6. 黒色土 黒褐色土に茶褐色土とロームの凝土。



1. 表土 固くしめる。
2. 黒褐色土 あまり粘性なし。
3. 暗褐色土 粘性はなく。やや砂質。
4. 黒色土と暗褐色土の凝土 As-Bを含む。
5. 黒色土の凝土 As-Bを多く含む。砂質。
6. As-B灰層
7. 黒色土 As-B多く含む。
8. 黒色土とAs-B 茶褐色土を含む。の凝土
9. As-B軽石層
10. 黒色土 砂粒を多く混入するが。土粒自体はきめ細かい。
11. 黒色土 黒褐色土を凝土し。やや粘性。
12. 暗褐色土